福　岡　市

市道田・飯盛線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ

吉武遺跡群Ⅰ

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第127集

1986

福岡市教育委員会

吉武遺跡群Ⅰ正誤表

頁	行	誤	正
7	6	暗茶褐色粘土	暗茶褐色粘質土
21	24	中に炭化物焼土ブロック	中に炭化物・焼土ブロック
24	5	2.76m(9.2)	2.76m(9.2尺)
24	8	高坏の坏部裏の胴部	高坏の坏部,
29	Fig.17		
30		Fig. 19	Fig. 18
39	16	高台付の脚部	高台付埦の脚部
67	18	いずれも器台である。形態からいって	形態からいって
81	2	ＳＤ10	ＳＤ10（Fig. 49）
〃	4	石斧（189）	石斧（188）
82	19	推定径0.4cmの孔が2穴が残っている	推定径0.4cmの孔が2ヶ所残っている
87	5	同研究室助手 田崎博氏	同研究室助手 田崎博之氏
88	No. 11	（内）黄反褐色	（内）黄灰褐色
〃	No. 13	（内）淡灰褐色	（内）淡灰褐色
89	No. 32	（外）暗反褐色	（外）暗灰褐色
〃	No. 35	淡反褐色	淡灰褐色
93	No. 144	（外）淡褐色（焼が付着）	（外）淡褐色（煤が付着）
94	No. 164	上部はススが付着	上部は煤が付着
95	No. 199	口縁内外面はヨコナラシ	口縁内外面はヨコナデ
〃	No. 201	胴外面ヨコナラ	胴外面ヨコナデ
96	No. 226	（外）赤味をおびた淡反褐色	（外）赤味をおびた淡灰褐色
98	No. 284	淡明褐色（燻が付着）	淡明褐色（煤が付着）

吉武遺跡群 I

市道田・飯盛線建設予定地内発掘調査報告 I

昭和61年3月

福岡市教育委員会

序　　文

近年，本市西南部地域の都市化の傾向が強まり，自然環境の変貌には目を見はるものがあります。これにともない文化財の発掘調査が数多く実施され，貴重な発見が相次ぎ，福岡市が古来より大陸との窓口として日本の歴史上，重要な地域であった事がわかって来ています。

この報告書は市道田・飯盛線建設に伴って発掘調査した結果の一部をまとめたもので，吉武遺跡群内の調査の一つでは最初の報告書にあたるものです。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり，研究資料としてご活用いただければ幸いです。又，調査に際してよせられた多くの方々のご協力に対し心から謝意を表する次第であります。

昭和61年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　　言

1．本報告書は1981年９月～1982年２月に実施した，市道田・飯盛線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の第１次調査の調査報告書である。

2．遺跡名称は福岡市文化財分布地図西部Ⅰより使用した。

3．遺構は呼称を全て記号化し，土壙→SX，掘立柱建物→SB，井戸→SE，溝・旧河川→SDとする。

4．本書に使用した地図は国土地理院発行の「福岡西南部（１/25000）」を，又航空写真は国土地理院撮影のものを使用した。

5．遺構の実測写真撮影は山崎龍雄が行なった。又，整理にあたっては，遺物の実測は山崎が行ない，遺物の写真撮影は白石公高，宮島成昭が行なった。製図は山崎，深堀博子，永井和子，植山令子が行なった。

6．付図２は二宮忠司氏より，飯盛圃場整備地区での第８・９区調査区の全体図の提供をうけた。

7．本書の執筆編集は，熊本大学大学院生明瀬真悟の協力を受け山崎が行なった。

本文目次

第1章　はじめに……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の体制……1
第2章　遺跡の位置と歴史的環境……2
　1．立地と歴史的環境……2
　2．吉武遺跡群の調査経過……2
第3章　調査の概要……6
　1．調査の方法……6
　2．調査の概要……6
第4章　調査の記録……8
　1．検出遺構……8
　2．出土遺物……38
第5章　おわりに……84

挿図目次

Fig. 1　吉武遺跡群周辺の遺跡（1/25000）……3
Fig. 2　吉武遺跡群各調査地点分布（1/10000）……4
Fig. 3　調査区域設定図（1/2000）……7
Fig. 4　SX01, 02, 04, 05, 07土壙（1/30, 1/40）……9
Fig. 5　SX06, 08, 09, 10土壙（1/40, 1/60）……11
Fig. 6　SX13～17土壙（1/40, 1/60）……13
Fig. 7　SX18～22, 27土壙（1/30, 1/40）……15
Fig. 8　SX23, 24, 28土壙（1/30, 1/60）……16
Fig. 9　SX30, 32, 34, 36～38土壙（1/40）……18
Fig. 10　SX40, 42～44, 48土壙（1/40）……19
Fig. 11　SX46～48, 50土壙（1/40, 1/60）……20
Fig. 12　SE31, 35（1/40）……22
Fig. 13　DII区Pit 3（1/20）……23
Fig. 14　SB01～06（1/100）……25
Fig. 15　SB07～12（1/100）……26
Fig. 16　SB13～15（1/100）……28

Fig. 17 SD02内検出1号杭列 (1/60) ……29
Fig. 18 SD04 (1/80) ……30
Fig. 19 SD02, 03, 12, 13 (1/80, 1/200) …… 折り込み
Fig. 20 SD05, 06, 07 (1/120) ……31
Fig. 21 SD03, 05, 06, 12土層図. (1/40) ……32
Fig. 22 SD08～11 (1/100) ……33
Fig. 23 SD14 (1/60) ……34
Fig. 24 SD15 (1/80) ……35
Fig. 25 SD18, 19 (1/100) ……36
Fig. 26 SD16, 17 (1/100) …… 折り込み
Fig. 27 A, B区北壁及び南壁土層図 (1/60) ……37
Fig. 28 SX04～08出土遺物 (1/3) ……40
Fig. 29 SX09～15出土遺物 (1/3) ……41
Fig. 30 SX14, 25出土玉類 (1/1) ……42
Fig. 31 SX16～20出土遺物 (1/3, 34は1/4, 41は1/1) ……44
Fig. 32 SX19出土遺物 (1/3) ……45
Fig. 33 SX21, 22出土遺物 (1/3) ……47
Fig. 34 SX23～30出土遺物 (1/3) ……49
Fig. 35 SX36出土遺物I (1/3, 75は1/4) ……51
Fig. 36 SX36出土遺物II (1/3) ……52
Fig. 37 SX36出土遺物III (1/3) ……53
Fig. 38 SX32～40出土遺物 (1/3) ……55
Fig. 39 SX46～48出土遺物 (1/3) ……56
Fig. 40 SX50出土遺物 (1/3) ……57
Fig. 41 SE31, 35出土遺物 (1/3, 127は1/4) ……58
Fig. 42 SE31, 掘立柱建物出土遺物 (1/3) ……59
Fig. 43 SD02出土遺物I (1/3, 1/4) ……61
Fig. 44 SD02出土遺物II (1/4) ……62
Fig. 45 SD02出土遺物III (1/3, 158は1/4) ……63
Fig. 46 SD02出土遺物IV (1/4) ……64
Fig. 47 SD02出土遺物V (1/3) ……65
Fig. 48 SD02出土遺物VI (1/3) ……66
Fig. 49 SD02, 05, 07出土遺物 (1/3) ……68

Fig. 50 SD03出土遺物（1/3, 1/4）……69
Fig. 51 SD05出土遺物Ⅰ（1/3）……72
Fig. 52 SD05出土遺物Ⅱ（1/3）……73
Fig. 53 SD05出土遺物Ⅲ（220. 221は1/3, 223～226は1/4）……74
Fig. 54 SD05出土遺物Ⅳ（1/3）……75
Fig. 55 SD05出土遺物Ⅴ（1/3）……77
Fig. 56 SD05出土遺物Ⅵ（1/4）……78
Fig. 57 SD05出土遺物Ⅶ（1/3, 276は1/4）……79
Fig. 58 SD07出土遺物（1/3）……80
Fig. 59 SD16～18出土遺物（1/3）……81
Fig. 60 Pit, 包含層, 表土層出土遺物（1/3）……82

図版目次

PL. 1 吉武地区周辺航空写真（昭和56年撮影）
PL. 2 (1) D～F調査区全景（東から） (2) E, F調査区全景（西から）
PL. 3 (1) BⅠ区遺構検出状況（西から） (2) BⅡ区遺構検出状況（西から）
PL. 4 (1) SX18, 19土壙（南から） (2) SX17, 20土壙（東から）
PL. 5 (1) SX14土壙（北から） (2) SX46～48土壙（東から）
PL. 6 (1) SX01土壙（西から） (2) SX02土壙（北から）
(3) SX05土壙（北から） (4) SX07土壙（南から）
PL. 7 (1) SX08土壙（南から） (2) SX09土壙（北から）
(3) SX10土壙（南から） (4) SX15土壙（北から）
PL. 8 (1) SX21, 27土壙（北から） (2) SX24土壙（南から）
(3) SX30土壙（南から） (4) SE31（南から）
PL. 9 (1) SX32土壙（北から） (2) SX34土壙（東から）
(3) SE35（東から） (4) SX36土壙（北から）
PL. 10 (1) SX37土壙（南から） (2) SX40土壙（北から）
(3) SX42土壙（西から） (4) SX43, 49土壙（北から）
PL. 11 (1) SX14土壙遺物出土状況 (2) SX20土壙遺物出土状況
(3) SX39土壙遺物出土状況 (4) DⅡ区Pit 3
PL. 12 (1) E, F区掘立柱建物検出状況（西から） (2) SB01（南から） (3) SB02（西から）
PL. 13 (1) SB03（南西から） (2) SB04（北東から）
(3) SB05（南から） (4) SB06（南から）

PL. 14 (1) SB07（東から） (2) SB08（東から）
(3) SB09（東から） (4) SB10（西から）
PL. 15 (1) B区掘立柱建物検出状況 (2) SB12（東から） (3) SB13（南から）
PL. 16 (1) SB14（南から） (2) SB15（南から）
(3) SB03Pit 3 柱根検出状況 (4) 同Pit 4 柱根検出状況
PL. 17 (1) SD02（東から） (2) SD02内 1 号杭列（南から） (3) SD02内 2 号杭列（南から）
PL. 18 (1) SD03（東から） (2) SD02（西から）
PL. 19 (1) SD05, 06, 07（南から） (2) SD05遺物出土状況 (3) SD05遺物出土状況
PL. 20 (1) SD16, 17（北東から） (2) SD18（南西から）
PL. 21 (1) SD04（南から） (2) SD08～11（南から）
(3) SD12（南から） (4) SD15（南東から）
PL. 22 (1) SD02土層断面（東から） (2) SD16土層断面（北から）
(3) SD02遺物出土状況 (4) SD07遺物出土状況
PL. 23 土壙出土遺物
PL. 24 土壙・井戸出土遺物
PL. 25 SX36出土遺物
PL. 26 SD02出土遺物 I
PL. 27 SD02出土遺物 II
PL. 28 SD02, 05出土遺物
PL. 29 SD05出土遺物
PL. 30 溝，包含層，表土出土遺物

表　目　次

表 1 掘立柱建物計測表……24
表 2 玉類計測表……42
表 3 出土遺構一覧表……86
表 4 土器観察表……88
表 5 土壙一覧表……98

付　　図

付図 1 調査区遺構配置図（1/200）
付図 2 D.～F区，及び 8 ・ 9 区遺構配置図（1/250）

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

昭和56（1981）年，福岡市土木局道路建設課より早良区大字田字花立932－2から西区大字飯盛字トイ927－1における市道田・飯盛線建設計画が文化課に提出された。申請地一帯は飯盛地区農業構造改善基盤整備事業に伴う圃場整備地区内で，昭和56年度より事業に伴って埋蔵文化財の発掘調査が行なわれており，弥生時代前期から中期迄の甕棺墓群・住居址群をはじめ，多くの貴重な遺構・遺物が発見されていた。その為，申請地における埋蔵文化財の有無の確認が事前に必要となった。

文化課では土木局と協議を行ない，用地買収が終了した時点で試掘調査を行なう事とした。試掘調査は用地買収が終了した昭和58年度工事地区について56年11月に実施した。その結果，58年度工事予定地区の約4.800㎡に埋蔵文化財の包蔵が認められた為，その発掘調査が必要となった。試掘成果をふまえた協議の結果，今回の調査区域の両側が昭和57年度圃場整備事業地域に含まれる事から，作業の工程上，圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査と同一時期に行なう方が望ましいという事で，昭和57年９月から調査を実施する事となった。発掘調査は昭和57年９月22日より58年２月12日迄行なった。発掘調査面積は幅20ｍ，長さ260ｍの5.200㎡である。

2．調査体制

今回の調査体制は以下のとおりである。

所在地　西区大字飯盛字トイ

調査期間　昭和57年９月22日～58年２月12日

調査委託者　福岡市土木局道路建設課

調査主体　福岡市教育委員会

調査担当　福岡市教育委員会文化部　文化課 埋蔵文化財第２係

調査責任　文化部文化課長 生田征生　第１係長 柳田純孝

調査担当者　岡嶋洋一，岸田隆（庶務担当）
二宮忠司，山崎龍雄（調査担当）

調査協力者　大原義雄，柴田大正，青柳弘子，井上ムツ子，井上和子，井上清子，海津静枝，倉光アヤ子，倉光千鶴子，倉光京子，小柳和子，斉藤トク，斉藤国子，清水文代，杉村文子，武本栄子，高木フジミ，筒井浩子，西嶋洋子，藤タケ，森山早苗，横溝恵美子，米嶋ハツネ，山口タツエ，山口富子，柴田多津子，森みえ子

資料整理　深堀雅基，明瀬慎吾，永井和子，植田令子，井上カツ代，能美須賀子，大田けい子，松本桂子，原田佳史子，脇坂冨士子，吉岡友子，当房純子

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

１．立地と歴史的環境 (Fig.1)

立　　地　今回の調査地が所在する吉武遺跡群は，福岡市の西部にある早良平野を南北に貫流して博多湾にそそぎ込む室見川中流の左岸，叶岳，飯盛山から派生する低丘陵（扇状地）の，標高20～30ｍの地点に立地する。遺跡から海岸迄の距離は，直線にして4.5kmを測り，徒歩で約１時間を要する距離で，それ程離れていない。室見川迄は500ｍの距離である。

吉武遺跡群が所在する低丘陵には飯盛山，西山から源を発する室見川の支流の日向川，竜谷川などの小河川がそれぞれ小谷を形成して流れ込む。北側に日向川が，南側を竜谷川が流れ，その日向川と竜谷川の谷にはさまれた地域が，吉武遺跡群の範囲である。遺跡の範囲は，最大南北約1.200ｍ，東西850ｍを測り，面積は約47万㎡と広大である。今回の調査地点は遺跡群の北側に立地する。

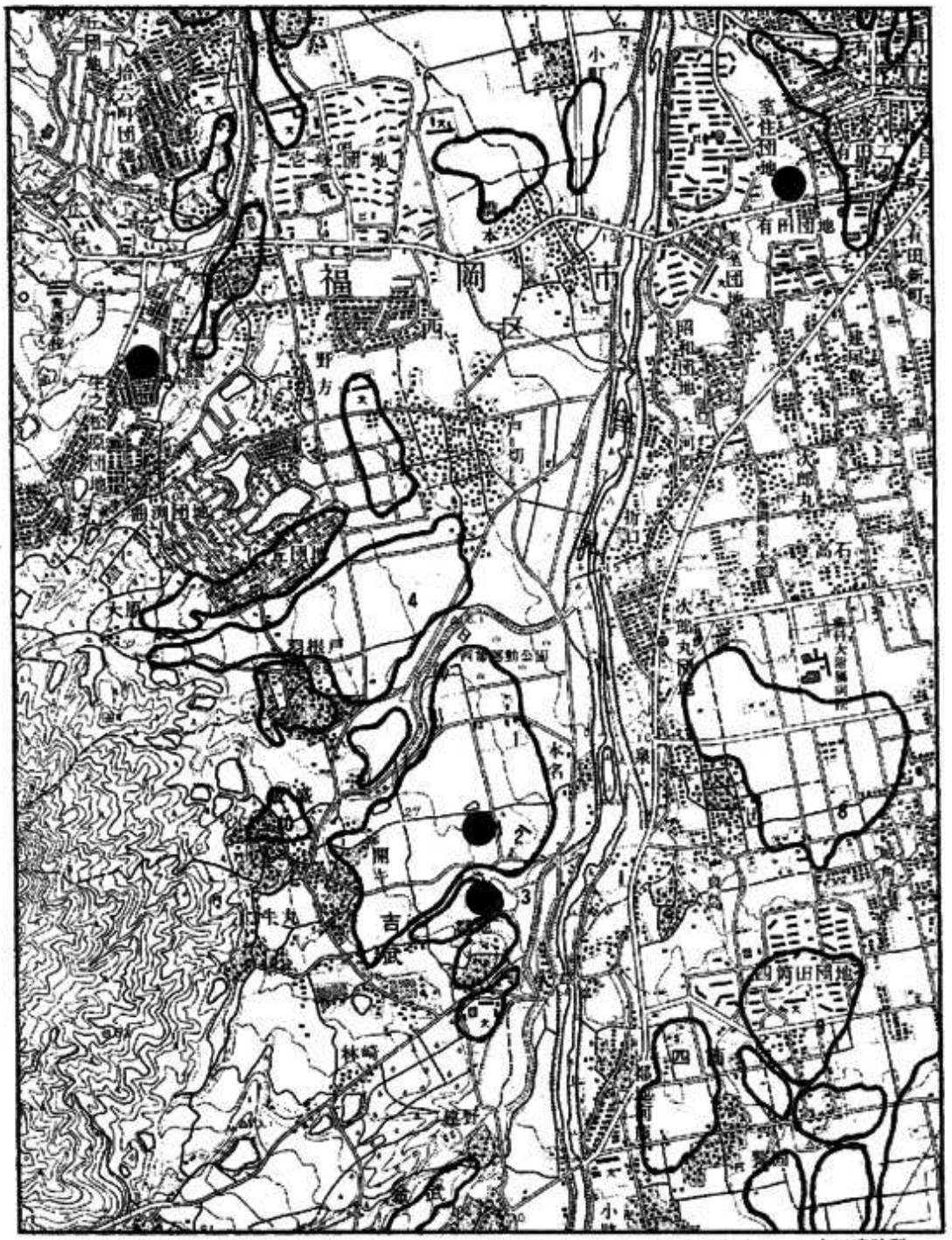
周辺の歴史的環境　吉武遺跡群が立地する早良平野は，東側を背振山が派生する山塊の油山と，西を同様に背振山から派生する飯盛山，叶岳，長垂山などの山塊で界された，南から北へ逆三角形状に広がって行く室見川の沖積作用で形成された平野である。規模は南北最大長約９km，東西最大長６kmを測り，弥生時代の伊都国が所在する西の糸島平野とほぼ同等の規模を持つ平野である。

吉武遺跡群周辺では，旧石器時代から，遺跡が確認されている。西北の羽根戸地区では，尖頭器が表採されており，又吉武遺跡群でも昭和60年度の圃場整備に伴う調査でナイフ型石器等が検出[註1]されている。縄文時代では室見川右岸の四箇遺跡[註2]，田村遺跡[註3]で後期の集落址が確認されている。弥生時代には，羽根戸原Ｃ遺跡群[註4]や，国史跡の野方遺跡[註5]がある。古墳時代では周辺山麓には，古墳時代後期の群集墳が，いくつかの群に分かれて多数分布している。吉武遺跡群周辺は羽根戸原Ｃ遺跡群，飯盛太田遺跡[註6]，石釧が出土した飯盛谷遺跡，高木遺跡群[註7]，羽根戸古墳群[註8]，金武古墳群[註9]など特に遺跡の集中密度が高い地域で，近年の市西南部への市街化の進行と共に開発による埋蔵文化財の調査が頻繁に行われ多大な成果を上げて来ている。これらの調査成果から，吉武遺跡群が，地域の中心的機能をもった遺跡である事が，判明してきている。

２．吉武遺跡群の調査の経過 (Fig.2)

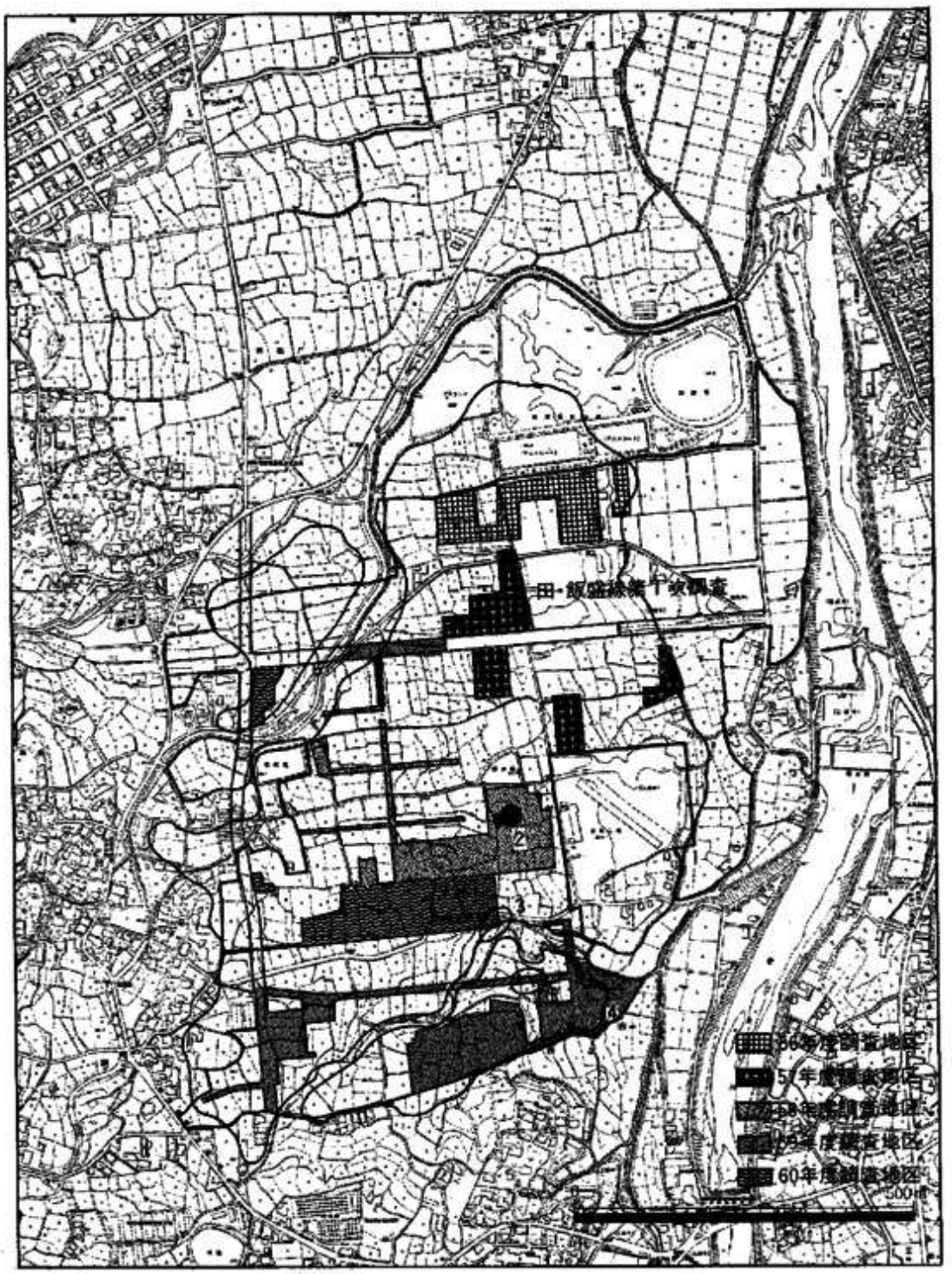
吉武遺跡群は昭和56年に始まった圃場整備事業に伴う調査から数えて，市道田・飯盛線に伴う調査と合わせて昭和60年度迄，７次の調査が行なわれている。調査総面積は90.768㎡を数える。各年度毎の調査概要は以下のとおりである。

昭和56年度調査　昭和56年度圃場整備事業に伴う調査である。工事で削平される４地点の調査を実施し，調査面積は12.000㎡である。弥生時代の甕棺墓，集落址，古墳時代集落址が検出



1.吉武遺跡群　2.樋渡古墳　3.吉武高木遺跡　4.羽根戸原C遺跡群　5.(史)野方遺跡　6.有田遺跡群
7.有田七田前遺跡　8.田村遺跡　9.四箇遺跡　10.飯盛谷遺跡　11.飯盛大田遺跡

Fig. 1　吉武遺跡群周辺の遺跡（1/25000）



1．吉武遺跡群　2．樋渡古墳　3．大石遺跡　4．高木遺跡群　5．吉武高木甕棺墓遺跡
6．飯盛大田遺跡　　Fig. 2 吉武遺跡群各調査地点分布（1/10000）

されている。

昭和57年度調査　昭和57年度は圃場整備に伴う調査と市道田・飯盛線建設に伴う調査を行った。圃場整備事業に伴う調査は、工事による削平部分及び、道路，水路部分の調査を行った。調査面積は，20.768㎡である。この調査では縄文時代後期初頭の貯蔵穴群が検出されている。市道田・飯盛線に伴う調査は，今回報告する調査である。

昭和58年度調査　昭和58年度圃場整備事業に伴う調査である。工事による削平部分及び，道路，水路部を中心に25.000㎡の部分を調査した。この調査では樋渡古墳が早良平野唯一の前方後円墳である事，その下に弥生時代中期後半の甕棺墓を埋葬する墳丘墓が存在した事が判った。墳丘墓内の甕棺からは，前漢鏡の重圏文星雲鏡など副葬品を伴っており，副葬品を持たない甕棺墓と明確に区分されている。

昭和59年度調査　昭和58年度末から実施した市道田・飯盛線建設に伴う調査と昭和59年度圃場整備事業に伴う調査がある。市道田・飯盛線に伴う調査は，調査面積は2.800㎡である。古墳時代の集落址，掘立柱建物等が検出されている。圃場整備事業に伴う調査は工事による削平部分を中心に調査面積は25.000㎡である。弥生時代中期を中心とする甕棺墓が約400基出土した。又，古墳時代後期の古墳が21基検出された。

昭和60年度調査　昭和60年度圃場整備事業に伴う調査である。工事による削平部分を中心に調査面積は25.000㎡である。弥生時代中期初頭の金海式甕棺墓群からは，細型銅剣が多数出土し，又古代末の瓦類，八稜鏡片が出土し，古代寺院存在の可能性を窮わせた。

註1　福岡市教育委員会『神松寺遺跡』1978年。

註2　公団住宅建設に先立って昭和50年より53年迄調査。

註3　市営住宅建設に先立って昭和55年度より調査中。

註4　昭和58年－59年度調査。

註5　昭和50年国史跡へ指定。

註6　田・飯盛線建設に伴う第3次調査地点。

註7　飯盛西地区圃場整備に伴って昭和59年度調査。

註8　昭和59年度に飯盛地区圃場整備に伴って調査。

註9　基園建設に伴って昭和60年度調査。

第３章　調査の概要

１．調査の方法 (Fig. 3)

今回の調査地域は，両側を飯盛地区圃場整備地内にはさまれており，将来的に圃場整備地区内調査地点との遺跡の連けいを計る必要がある。その為に圃場整備地区内に発掘調査の為に設定された，南北軸を磁北にとる50ｍグリッドのラインにのるように，市道田・飯盛線のセンターラインに50ｍ毎の調査杭を設定した。調査範囲は試掘成果をふまえた田･飯盛線内のセンターラインの基準杭№25～№39迄であり，幅20ｍ，長さ260ｍの範囲である。調査区は圃場整備地区の50ｍグリッドを基準に50ｍ毎に東からＡ～Ｆ区迄設定した。更に，各地区を道路のセンターラインを基準に南をＩ区，北をII区と小地区に分割した。調査に当たっては，各地区毎に遺構番号を設定したが，整理の段階では全区を統一し，通し番号をつけた。但しピット番号については未整理で各地区毎の番号である。土壙番号については，巻末の表に旧遺構番号を記載した。

２．調査の概要 (付図１，２，PL. ２，３)

今回の調査地点は吉武遺跡群の北側に位置し，標高は22～18ｍを測る地点にある。地形は西から東へ緩やかに低くなって行く。

調査は圃場整備事業に伴う工事と並行して行ったため，かなり労働安全衛生面で気をつかったが，事故なく怪我なく無事に調査を終了する事が出来た。発掘調査期間は57年９月22日から58年２月12日迄，約５ケ月要した。今回の調査ではSD02，SD05を中心に弥生時代中期から，古墳時代中期迄を中心とする遺物が，パンコンテナで約40箱程出土した。特に初期須恵器や朝鮮半島からの流れをくむ土器類がかなり出土しており，その出土は注目に値するものである。次に，各調査区の調査状況について述べる。

Ａ区　1.2～1.4ｍの盛土及び近代水田耕作土の下に，灰色砂粒から灰褐色シルトを主体とする地山があり，氾濫原的様相を示す地区である。土壙１基，溝状遺構を３条検出した。いずれも自然流路と考えられる。

Ｂ区　Ａ区と同じ土層堆積状況を示すが，Ａ区の氾濫原的様相とかわって黄褐色～明褐色粘質土が遺構面となる。水田開墾時に削平をかなり受けており，遺構の残りは良くない。主な検出遺構は土壙７基，掘立柱建物４棟，溝状遺構１条である。他にも柱穴として，しっかりしたピットは認められたが，調査区が狭く限られた範囲の為，建物としてまとめ得なかった。

Ｃ区　遺構面迄の堆積状況はＡ，Ｂ両区とほぼ同じであるが，近代水田面の下にもう２枚水田土壌が認められたが，平面プランとしては把握出来なかった。当地区では旧河川SD02と溝状遺構を３条検出した。SD02内には，２号杭列が認められた。この地区のSD02からは，遺物はあまり出土していない。集落の中心からややはずれたと考えられる。

D区　20cm前後の表土（耕作土）の下すぐに遺構面の黄褐色粘質土となる。又，場所によっては，砂礫層となるところがある。当地区ではSD02及び溝状遺構２条，ピットを検出した。ピットはいずれも小さく，又，覆土は暗茶褐色粘土を示すが，掘立柱建物としてはまとまりを得なかった。SD02からは弥生時代中期～後期を中心に多量の土器類が出土している。

E区，厚さ20cmの表土の下で，黄褐色～明褐色粘質シルトの遺構面となる。土壙26基，掘立柱建物７棟，溝状遺構７条，ピット群を検出した。SD05からは５世紀代を中心とする多量の土師器類，そしてSX14からは多数の滑石製臼玉が出土している。

F区，厚さ20～30cmの表土の下で，遺構面の暗灰褐色砂又は，明黄褐色粘質シルトとなる。当地区では，土壙10基，井戸２基，掘立柱建物４棟，溝状遺構１条が検出された。この地区で特に注目される事は，SX36に５世紀中頃を中心とする多量の土師器類が一括廃棄されており，その中に朝鮮系の土師器も混ざっていた事である。

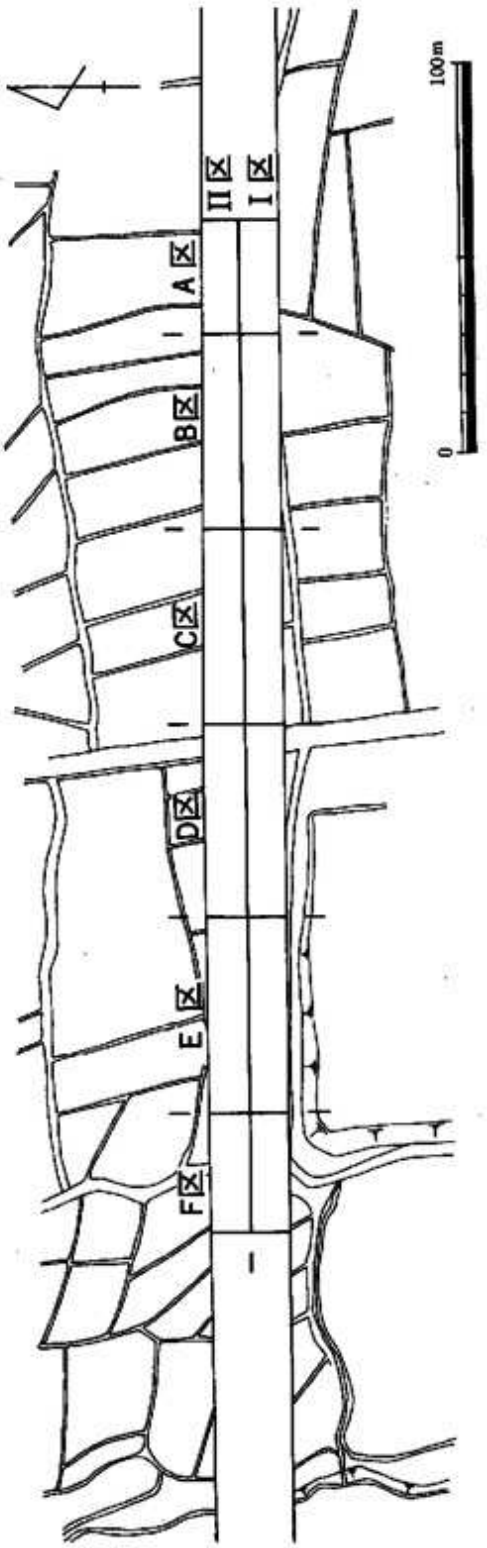


Fig. 3　調査区壊設定図（1/2000）

第4章　調査の記録

1．検出遺構

調査で検出された遺構は土壙45基，井戸2基，掘立柱建物15棟，溝状遺構18条である。時期的には，大半が古墳時代の遺構である。

土壙（SX）

全体で45基検出した。各地区の内訳は，A区1基，B区7基，D区1基，E区26基，F区10基である。SX12，29については欠番である。

SX01土壙（Fig. 4，PL. 6）

EI区で検出した。長さ1.7m，幅0.53m，深さ0.22mを測る，平面形は隅丸長方形を呈す土壙である。断面は逆台形状を呈す。覆土は大きく2層に分かれ，上層が黒褐色粘質土に，砂礫混り地山ブロック混入，下層が暗黄褐色粘質土に，砂礫と黒褐色粘質土ブロックを混入する。遺物は須恵器の細片がごく少量出土している。形態から見て，土壙墓と思われる。

SX02土壙（Fig. 4，PL6）

EI区で検出した。長さ1.06m，幅0.63m，深さ0.38mを測る。平面形は隅丸長方形，断面は逆台形を呈する土壙である。覆土は大きく3層に分かれる。上層が暗灰褐色粘質土に黄灰褐色地山ブロック混入土，中層は黒灰色シルト粘土に地山ブロック混入土，下層は暗灰色粘土に地山ブロックの混入土で，全体に木炭粒を含んでいる。遺物は時期不明の細片が6点出土したのみである。

SX03土壙

EII区で検出した。非常に残りが悪く図示してない。遺物は古墳時代土師器の細片が10点出土している。

SX04土壙（Fig. 4）

EII区で検出した。長さ3.3m，幅1.93mを測る不定形の土壙である。深さが0.07mと浅く地山の落ち込みの可能性もある。遺物は少ないが，古墳時代の土師器や須恵器の細片が出土している。

SX05土壙（Fig. 4，PL5）

EII区で検出した。長さ1.85m，幅1.4m，深さ0.23mを測る，平面形は楕円形を呈する土壙である。覆土は暗茶褐色粘質土に黄褐色粘質土地山ブロック又は黒褐色粘質土の混入土である。遺物は弥生時代後期から古墳時代土師器迄，ビニール袋2袋程出土した。

SX06土壙（Fig. 5）

EII区で検出した。長さ3.22m，幅1.42m，深さ0.3mを測る。平面形は不整楕円形を呈する土

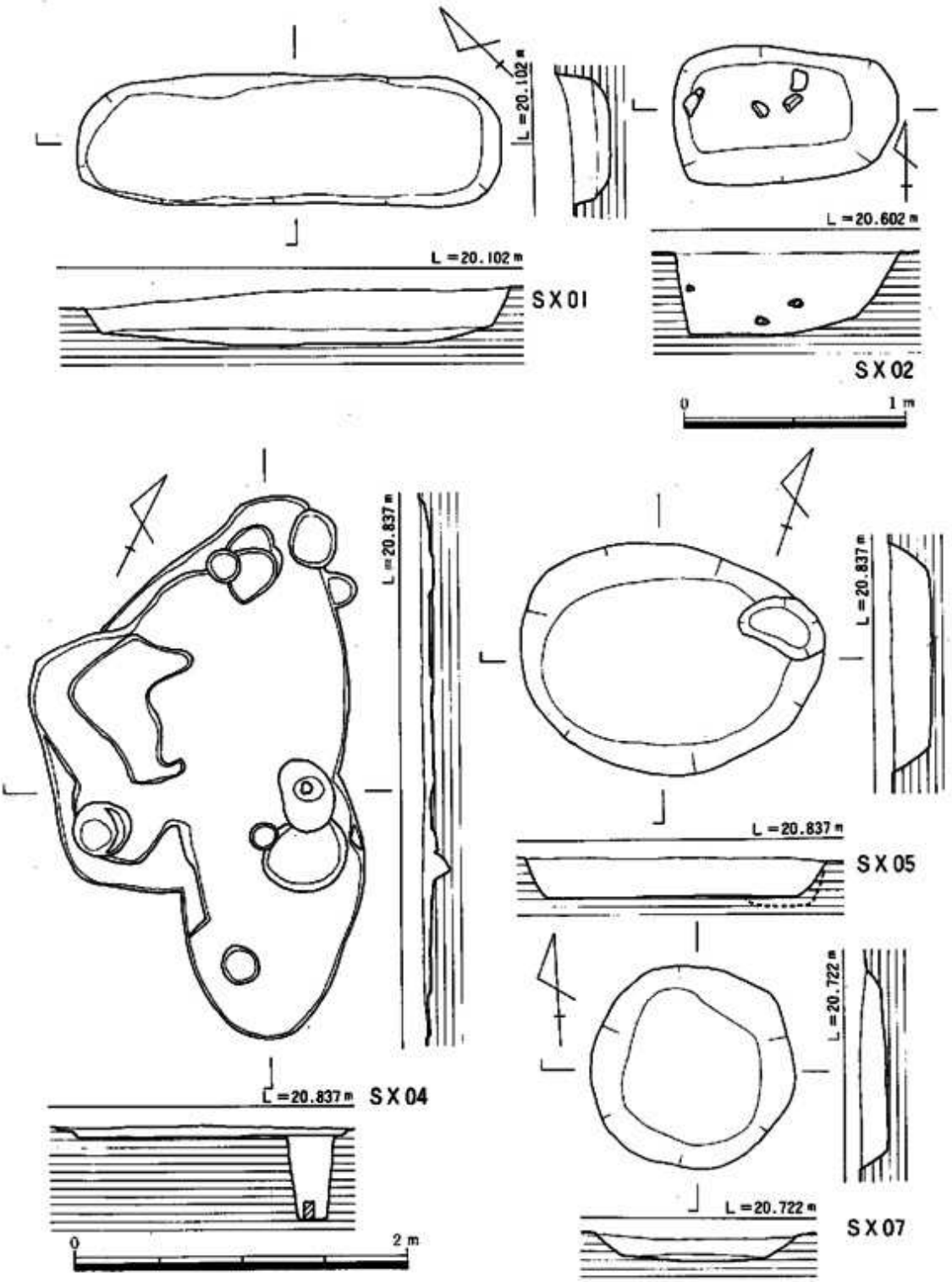


Fig. 4　SX01, 02, 04, 05, 07, 土壙 (1/30, 1/40)

壙である。覆土は黒褐色粘質土に黄褐色地山粘質土ブロック混入土で,木炭粒が含まれる。遺物は弥生時代後期土器片や，古墳時代の土師器片が，ビニール袋２袋程出土した。

SX07土壙（Fig. 4，ＰＬ６）

ＥⅡ区で検出した。長径1.25m，短径1.23m，深さ0.13mを測る円形の土壙である。覆土は黒褐色粘質土に黄褐色地山ブロックを混入する。遺物は弥生時代後期土器片や古墳時代の土師器片がある。量としては圧倒的に古墳時代土師器が多い。

SX08土壙（Fig. 5，ＰＬ７）

ＥⅡ区で検出した。SX06に切られ，SB03と重復する。長径1.93m，短径1.73m，深さ0.15mを測る，不整円形の土壙である。床面にはピットが掘り込まれる。覆土は黒褐色粘質土に黄褐色地山粒子を混入する。中からは弥生時代後期土器片や古墳時代の土師器，須恵器片が出土しているが，細片がほとんどである。

SX09土壙（Fig. 5，ＰＬ７）

ＥⅡ区の圃場整備地区との境界地で検出した。全体の2／3程が圃場整備地区内に入っている。長径2.9m，短径2.35m，深さ0.17mを測る，平面形は不整隅丸長方形を呈する土壙である。覆土は，黒灰褐色粘質土に黄褐色地山ブロックを混入したもので，中に多量の炭化物，焼土ブロックが入っていた。焼土，炭化物は大きく２ケ所に集中していた。中からは古墳時代の土師器がビニール袋２袋程出土した。

SX10土壙（Fig. 5，ＰＬ７）

ＥⅠ区で検出した。長径1.12m，短径1.06m，深さ0.85mを測る平面円形の土壙である。底面は上面に比べて，逆円錐形にすぼまる。底面に向って，拳大の転石が落ち込んでいた。覆土は大きく２層で，上層が暗灰褐色粘質土に黄褐色粘質土混入土，下層が黒灰色粘質土である。遺物は弥生時代後期土器片や古墳時代の土師器がある。

SX11土壙

圃場整備地区内で検出された。本報告書では路線内の遺構を対象とするため，記述しない。

SX13土壙（Fig. 6）

ＥⅠ区で検出した。長径1.0m，短径0.78m，深さ0.14mを測る，平面形は隅丸長方形を呈す土壙である。床面には直径20cm，深さ15cm程のピットが１ケ見られた。性格用途は不明，出土土遺物はなかった。

SX14土壙（Fig. 6，ＰＬ５）

ＥⅡ区で検出した。SD07を切る，長さ5.58m，幅1.05m，深さ0.22mを測る断面は皿状を呈する細長い土壙である。覆土は黒灰褐色又は，暗灰褐色粘質シルトであり，中に炭化物，焼土ブロックなどが混入していた。遺構内より，弥生時代から古墳時代迄の土器片及び，滑石製の臼玉が１ケ所にまとまって48個出土している。滑石製臼玉の出土から，当遺構で何らかの

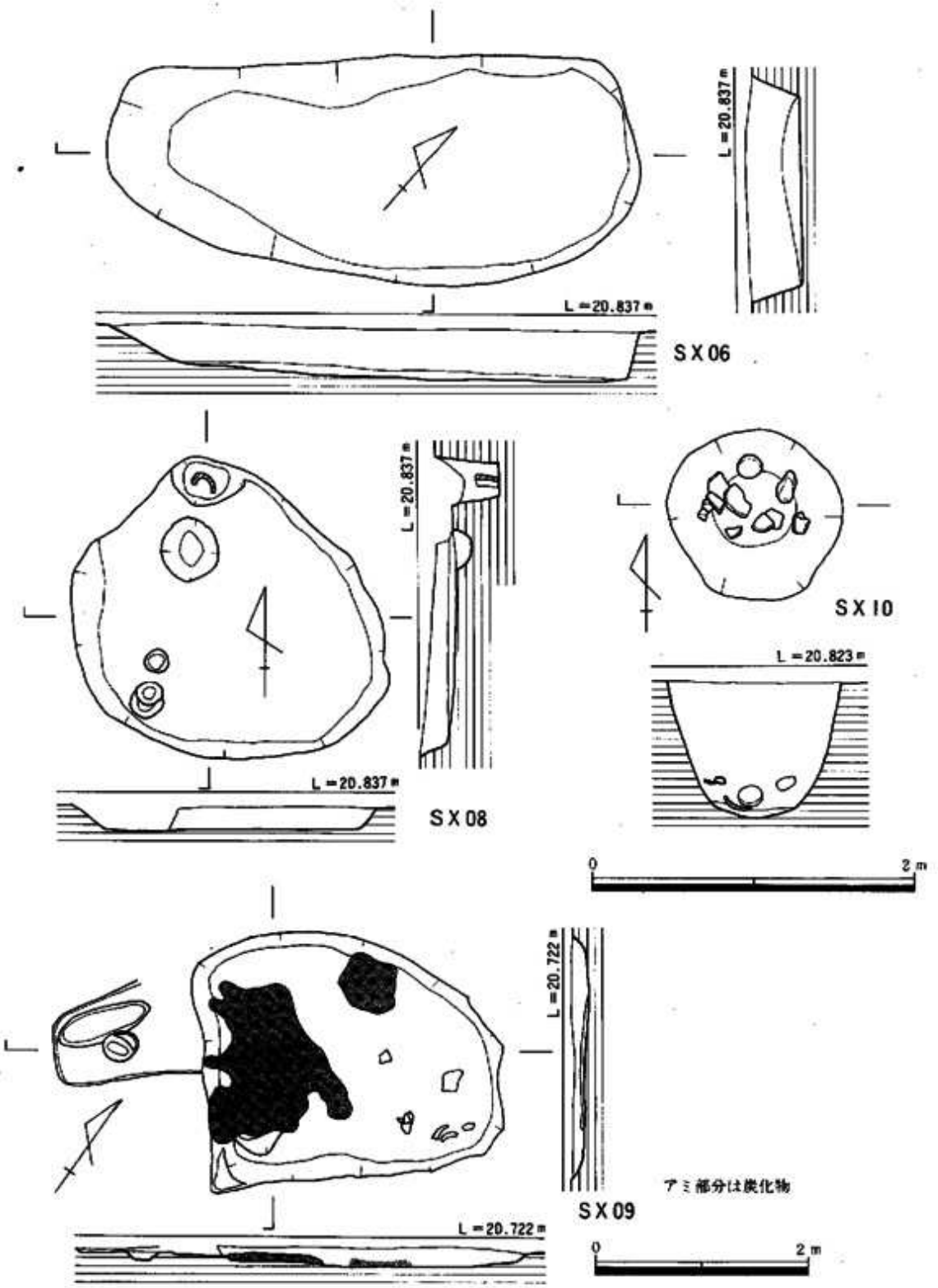


Fig. 5 SX06, 08, 09, 10, 土壙 (1/40, 1/60)

祭祀が行なわれた事が考えられる。

SX15土壙（Fig. 6，PL6）

EII区で検出した。SX28に切り込む長さ1.44m，幅0.85m，深さ0.12mを測る隅丸長方形の土壙である。底面はほぼ水平で，断面は逆台形を呈する。遺物は弥生式土器片や，古墳時代の土師器片が出土しているが，量はそれ程多くない。

SX16土壙（Fig. 6）

EII区で検出した。SX17・22を切る。長径1.83m，短径1.13m，幅0.26mを測る，平面形は不整楕円形を呈する土壙である。断面形は船底形を呈す。覆土は黒褐色粘質で灰や炭化物，焼土などを含んでいる。出土遺物は古墳時代の土師器が多く，須恵器は細片が1点ある。

SX17土壙（Fig. 6，PL4）

EII区で検出した。長径3.5m，短径2.5m，深さ0.44mを測る，平面形が不整楕円形を呈する土壙である。土層観察によればSD05より古い。覆土は大きく2層に分けられる。上層は暗茶褐色粘質土（鉄分混り），下層は黒褐色粘質土（炭化物混り）である。遺物は弥生式土器や古墳時代の土師器，須恵器，砥石迄出土している。量としては土師器が圧倒的に多い。

SX18土壙（Fig. 7，PL4）

EII区のSD05の東側で検出した。長さ3.3m，幅2.73m，深さ0.06mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。SX19と切り合い，又，SD9・10を切るなどして底面はかなり凹凸が激しく，又遺構の残りは悪い。遺物は土師器のみで，すべてが細片である。

SX19土壙（Fig. 7，PL4）

EII区で検出した。SX18やSD7と切り合う為全体の平面形状ははっきりしないが，現状では長さ2.42m，幅1.95m，深さ0.07mを測る不整方形の土壙である。遺構の残りは悪い。遺物は弥生時代中期土器片，古墳時代の土師器や砥石が出土している。

SX20土壙（Fig. 7，PL4）

EII区で検出した。SD05，SX17を切る土壙である。長さ4.23m，幅2.9m，深さ0.77mを測る。平面形は隅丸三角形を呈する土壙である。覆土は黒褐色粘質土を主体とし，下層に植物の枝などを含んでいる。遺物は弥生式土器片や，古墳時代の須恵器片が出土している。又特記すべきものとして，2連の耳環がある。

SX21土壙（Fig. 7，PL8）

EII区で検出した。SX27と切り合い，SX27との先後関係は不明。長さ2.1m，幅1.6m，深さ0.28mを測る隅丸長方形の土壙である。覆土は黒褐色粘質土を主体とし，中に炭化物，焼土ブロックを混入する。遺物は弥生時代土器片や古墳時代土師器片が出土した。

SX22土壙（Fig. 7）

EII区で検出した。長さ2.47m，幅1.88m，深さ0.23mを測る隅丸長方形の土壙で，SX21

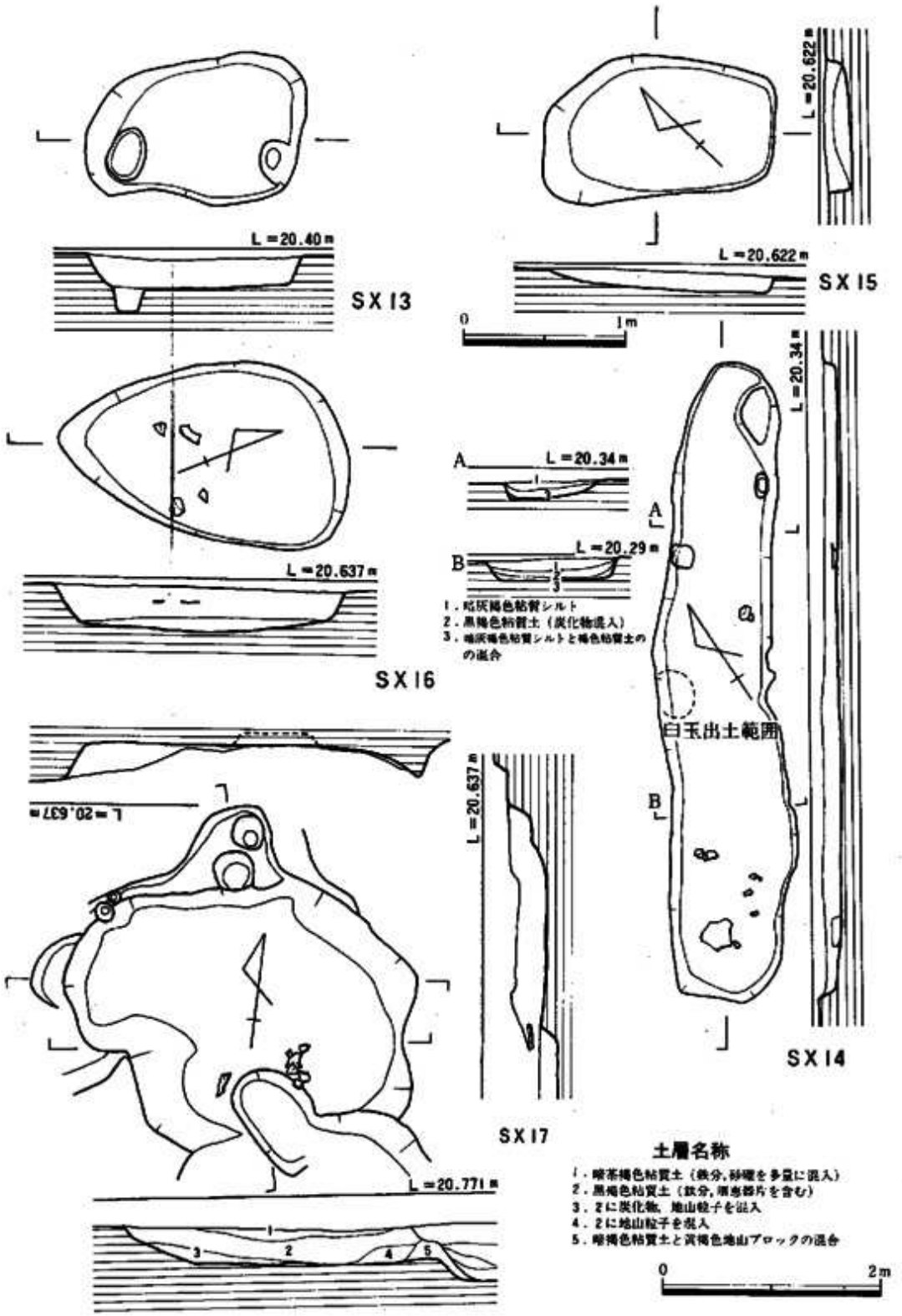


Fig. 6　SX13~17土壙（1/40, 1/60）

に切られる，覆土は黒褐色粘質土で，遺物は弥生式土器片や古墳時代の土師器片がある。

SX23土壙（Fig. 7）

ＥⅡ区で検出した。長さは1.2m，幅1.1m，深さ0.13mを測る平面形は隅丸方形を呈する土壙である。南側が削平により消滅する。覆土中より古墳時代土師器片が出土している。

SX24土壙（Fig. 7，ＰＬ8）

ＥⅡ区で検出した。SX20土壙に切られる。長さ1.55m，幅0.59m，深さ0.28mを測り，平面形は隅丸長方形を呈する土壙である。覆土は大きく２層に分かれる。上層は黒褐色粘質土，下層は淡黒褐色粘質土に黒褐色地山ブロックを混入している。遺物は弥生式土器片や，古墳時代土師器の細片が数点出しているのみである。

SX25土壙

ＥⅡ区で検出したが，明確な遺構として把握出来なかった。滑石製臼玉が１ケ出土した。

SX26土壙

図示していないがＥⅡ区で検出した。１辺0.83m，深さ0.07mを測る平面形は隅丸方形の土壙である。削平を受けたためか，遺構の残りは悪い。古墳時代の土師器片が少量出土した。

SX27土壙（Fig. 7，ＰＬ8）

SX21と切り合うため規模は不明。幅は1.47m，深さは0.25mを測る，床面はほぼ水平である。覆土中には炭化物を含む。中から古墳時代土師器片が出土している。

SX28土壙（Fig. 8）

ＥⅡ区で検出した。長さ3.65m，幅3.4m，深さ0.1mを測る，平面形は隅丸長方形を呈する土壙である。SX16，22に切られる。遺物は弥生時代後期土器片や古墳時代土師器，須恵器片が，ビニール袋４袋程出土している。

SX30土壙（Fig. 9，ＰＬ8）

ＦＩ区で検出した。SB10，11と重複する。長さ2.06m，幅1.38m，深さ0.38mを測る平面形は楕円形を呈する土壙である。覆土は３層に分かれ，第１層，黄褐色粘質土と茶褐色粘質土の混入，第２層，黒褐色粘質土に黄褐色粘質土少量混入，第３層，黒褐色粘質土に黄褐色地山ブロック混入である。部分的に炭化物（灰）が集中する部分が見られた。弥生時代中期の甕の破片や古墳時代の須恵器の坏蓋などが出土した。

SX32号土壙（Fig. 9，ＰＬ9）

ＦＩ区で検出した。直径1.08m，深さ0.63mを測る，平面形は円形の土壙である。断面形は逆台形状を呈する。覆土は暗灰褐色砂質土であり，遺物は古墳時代の須恵器の杯身が出土している。

SX33土壙（Fig. 9，ＰＬ8）

ＦＩ区で検出した。長さ0.9m，幅0.75m，深さ0.24mを測る，平面形は隅丸長方形を呈する

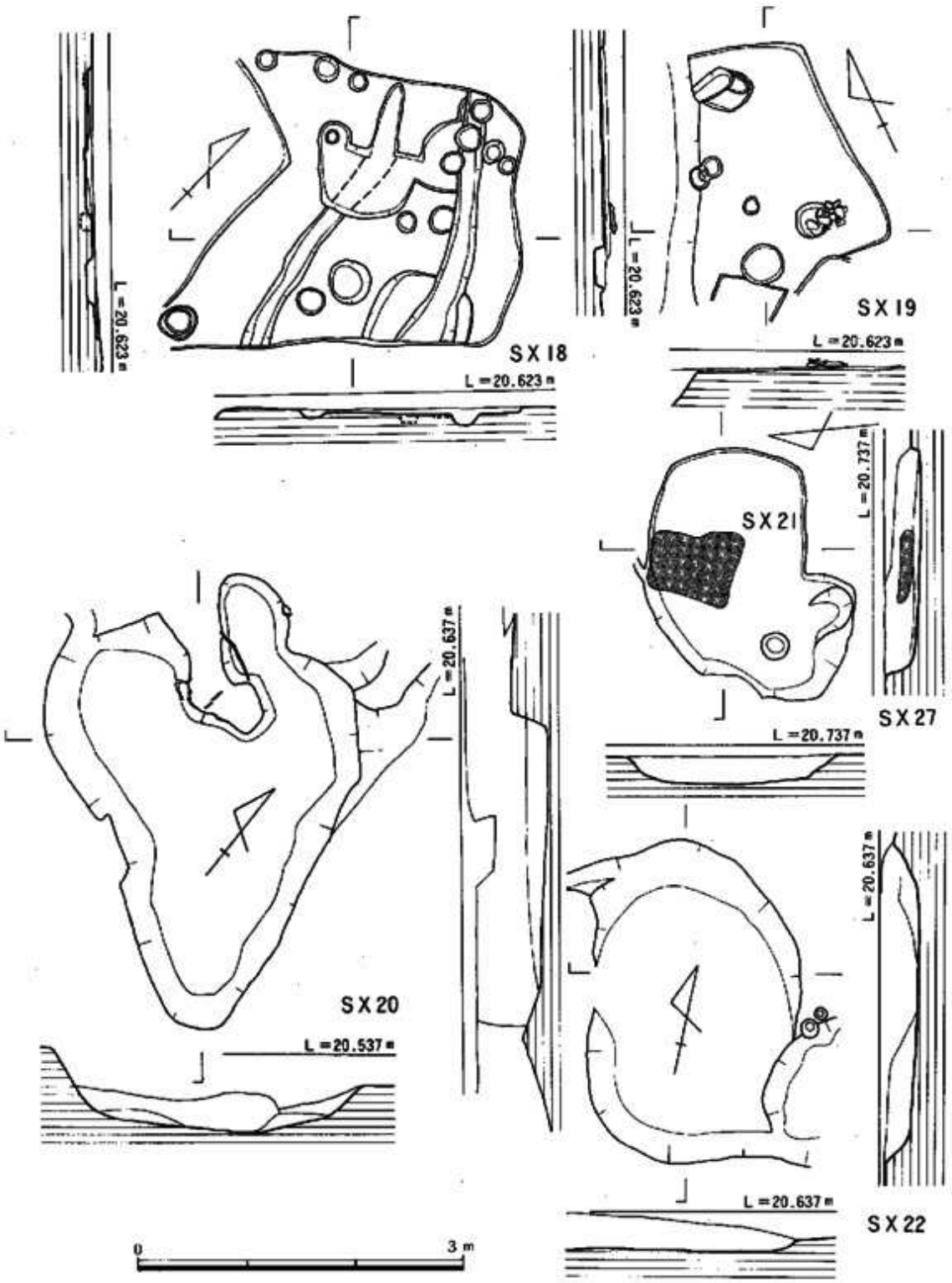


Fig. 7　SX18～22, 27土壙 (1/30, 1/40)　アミ部分は炭化物

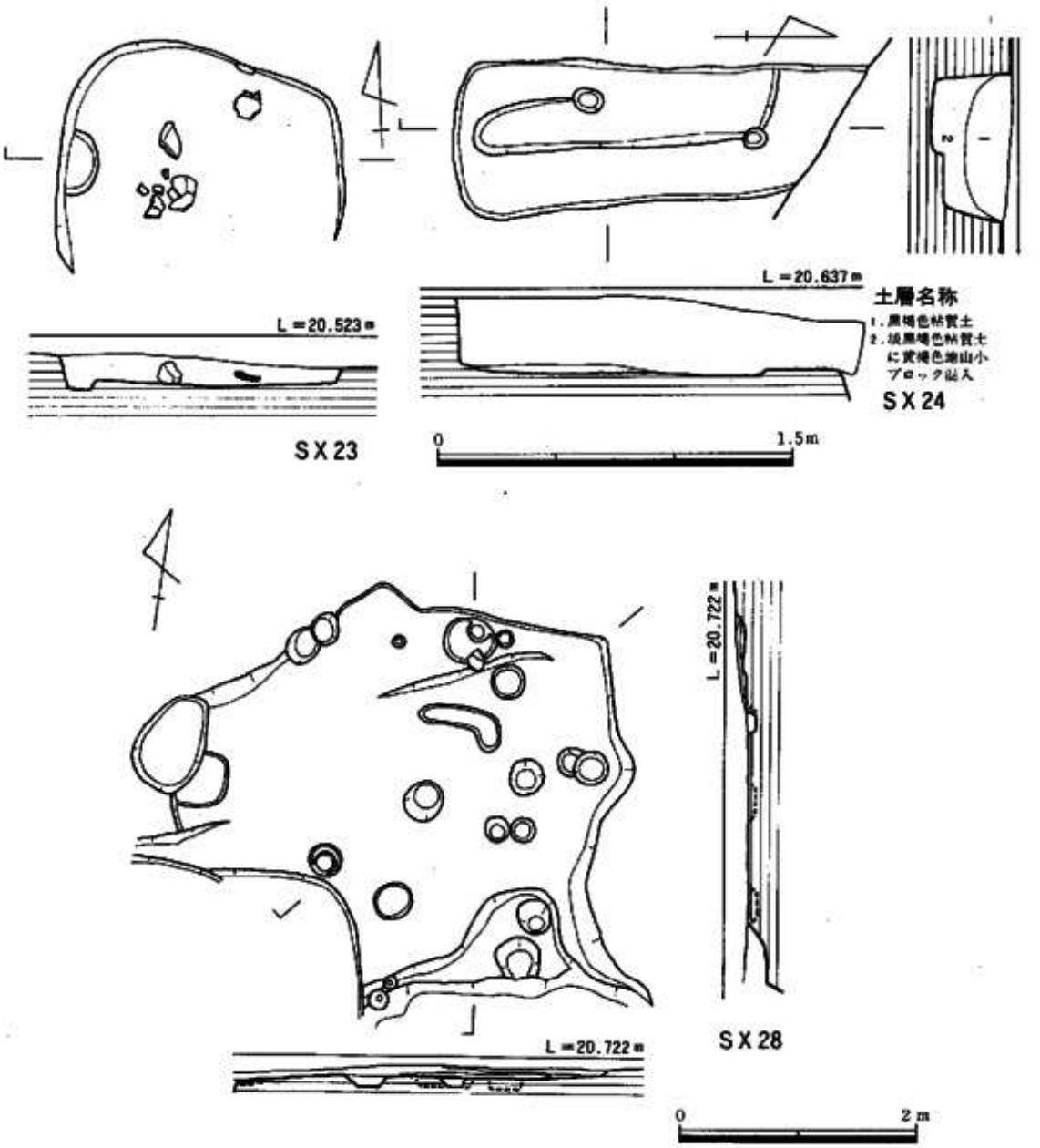


Fig. 8　SX23, 24, 28土壙（1/30, 1/60）

土壙である。底面に直径22cm，深さ10cmのPitが1ケ見られた。覆土は暗灰褐色粘質土に黒灰色粘質土を混入する。古墳時代の土師器，須恵器片が少量出土した。

SX34土壙（Fig. 9，PL 9）

FII区で検出した。長さ1.45m，幅0.8m，深さ0.15mを測り，長軸方向を略北に取る。平面形は隅丸長方形を呈する土壙である。断面は浅い皿状を呈する。底面は一部Pitで切られる，弥生式土器や古墳時代の土師器が，細片で少数出土している。

SX36土壙（Fig. 9，PL9）

FII区で検出した。長径3.0m，短径2.33m，深さ0.2mを測る不整楕円形の土壙である。底面はほぼ水平で，皿状を呈する。覆土は5層に分けられる。第1層，暗褐色砂混り粘質土，第2層，明褐色地山粘土ブロック，第3層，黄褐色粘質土に炭化物混入，第4層，明褐色地山ブロックに炭化物混入，第5層，黒褐色炭化物混り粘質土である。この土壙からは多量の土師器が出土している。出土状態は大きく東西の2ヶ所に集中している。完形品は少なく，土器溜め穴的な性格と考えられる。

SX37土壙（Fig. 9，PL10）

FII区で検出した。長径1.44m，短径1.3m，深さ0.1mを測る，平面形は不整円形を呈する土壙である。削平のため壁面の残りは悪い。底面は浅い皿状を呈し，中央がやや深くなる。出土遺物はない。

SX38土壙（Fig. 9）

FII区で検出した。長軸を略北西に置く。長さ2.3m，幅0.95m，深さ0.16mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する土壙である。底面はほぼ水平で，北側隅と南側隅はピットに切られる。遺物は弥生式土器や，古墳時代土師器が出土している。いずれも細片である。

SX39土壙

FII区で検出した。削平がひどく，残りも悪いので図示していない。古墳時代の土師器や須恵器が小量出土している。

SX40土壙（Fig. 10，PL10）

FII区で検出した。SX35に切られ全様は判らないが，現在長さ1.80m，幅0.85m，深さ0.2mを測る平面形は隅丸長方形を呈すと思われる土壙である。底面は2段掘りである。覆土は淡黒褐色砂が主体である。弥生後期の甕や壺が出土しているが，遺物量は少ない。

SX41土壙

FI区で検出した。図示していないが，長さ0.85m，幅0.83m，深さ0.15mを測る，平面形は隅丸方形を呈する土壙である。底面はピットが切り込み凹凸が激しい。　ピット内に柱根が残る事から掘立柱建物の柱穴の可能性がある。覆土は上層で暗灰褐色粘質土に明褐色地山ブロック混入，下層で明黄褐色地山粘土ブロックに灰色粘質砂を混入する。土師器がやや多く出土しているが，細片が大半である。

SX42土壙（Fig. 10，PL10）

DII区のSD02内で検出した。長径2.13m，短径1.83m，深さ0.62mを測る平面形は楕円形を呈する土壙である。底面はほぼ楕円形で，断面は逆台形を呈する。SD02との先後関係は不明，土師器片が少量出土している。

SX43土壙（Fig. 10，PL10）

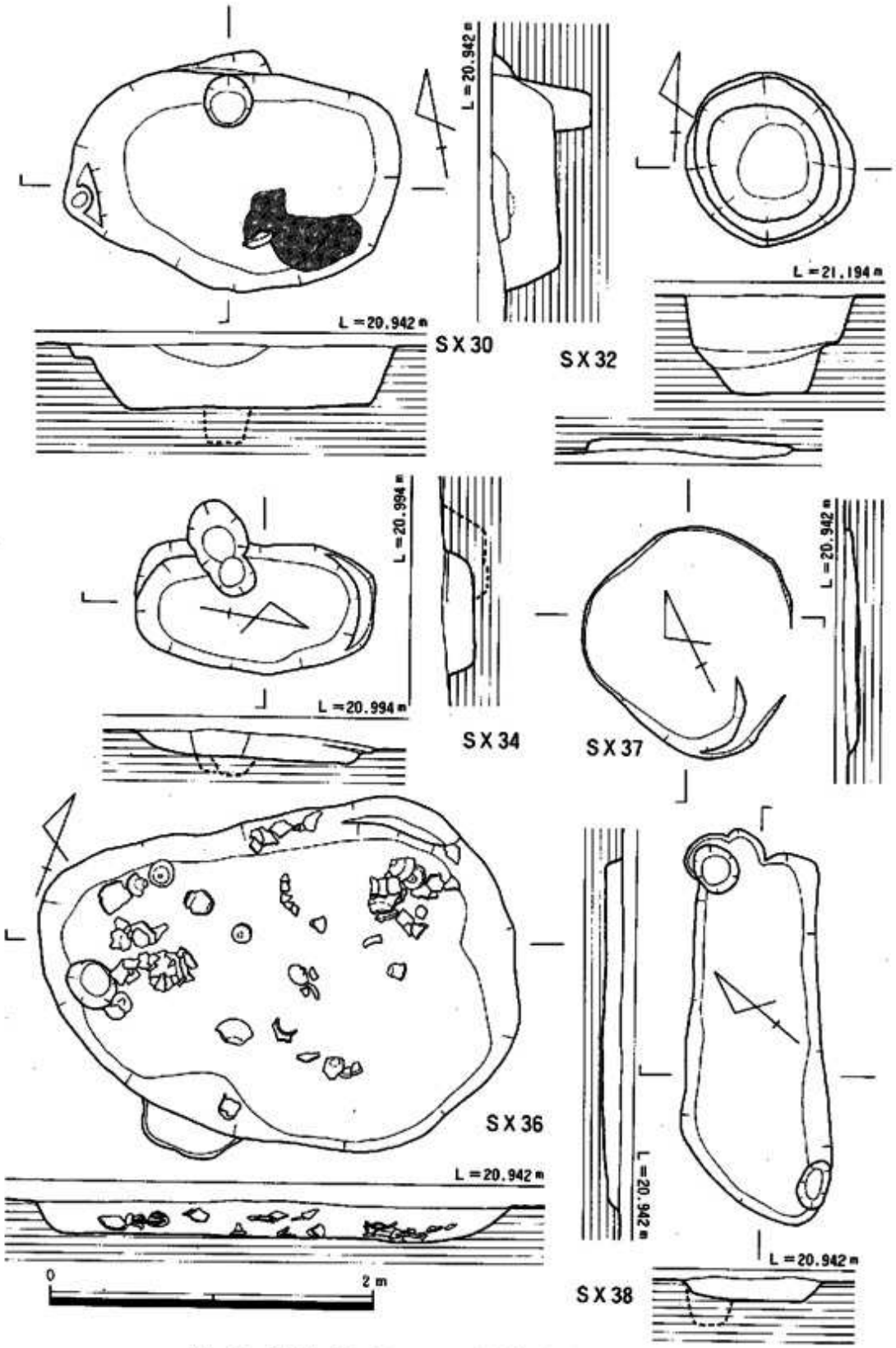


Fig. 9　SX30, 32, 34, 36～38土壙 (1/40)　アミ部分は灰・炭化物

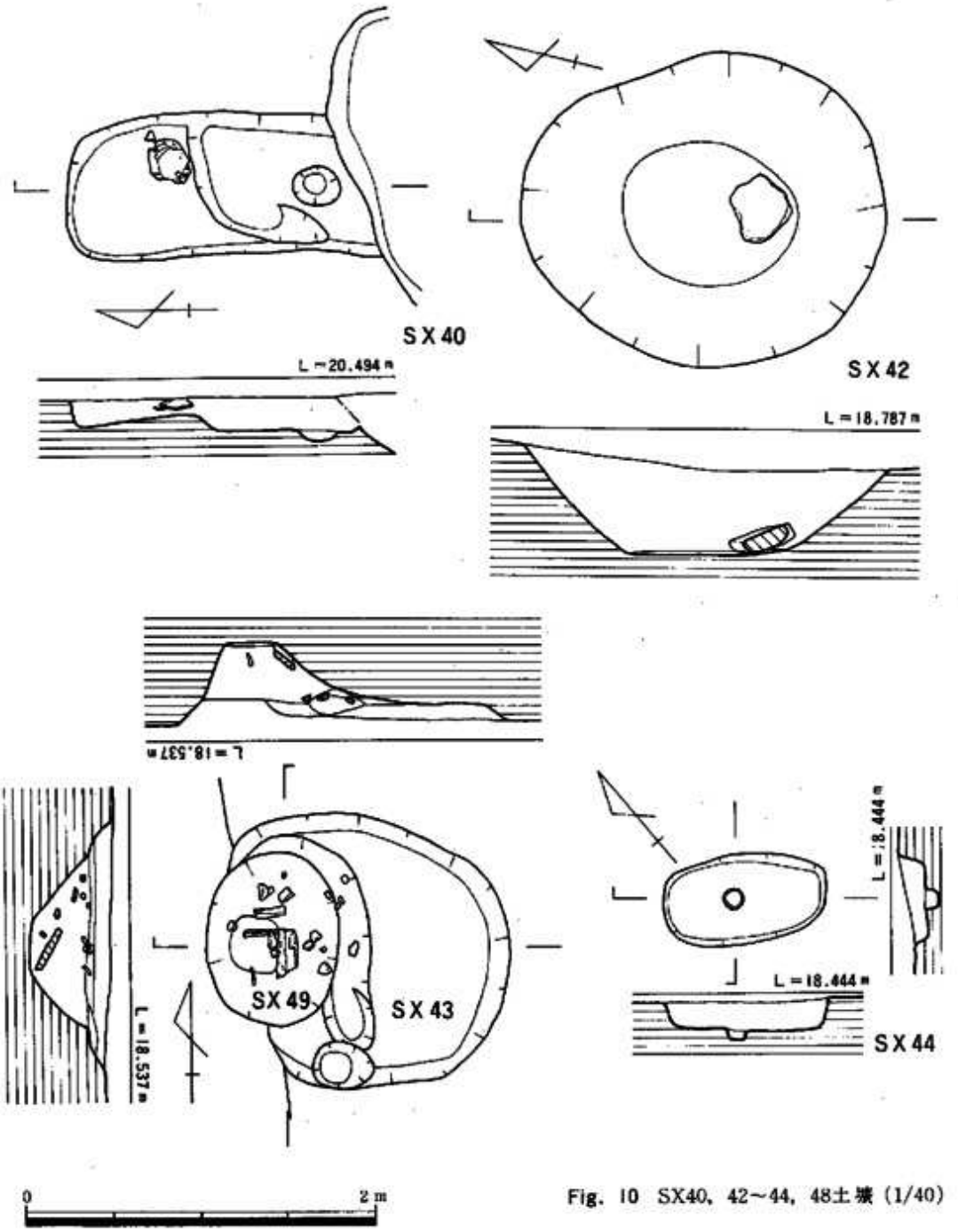


Fig. 10 SX40, 42～44, 48土壙 (1/40)

B I 区で検出した。SX48に切られる為，全様は明らかでない。現存規模で長径1.37m，短径1.1m，深さ 0.1mを測る平面形は楕円形を呈すると思われる土壙である。底面は浅くほぼ水平で，断面は皿状を呈する。覆土は黒褐色粘質土に地山ブロック混りである。遺物の出土は少

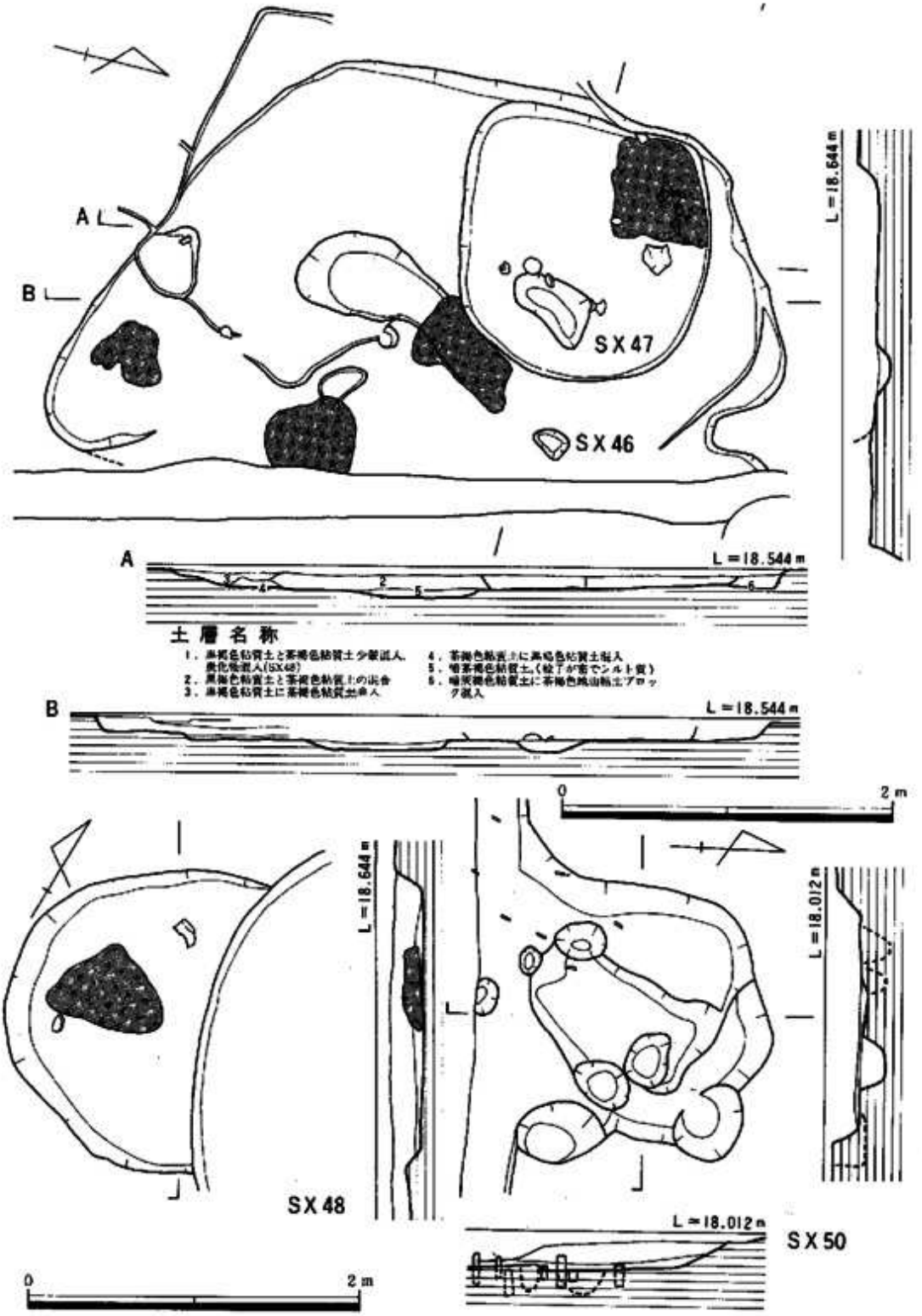


Fig. 11　SX46～48, 50土壙（1/40, 1/60）アミは灰・炭化物

ないが，大半が古墳時代の土師器であり，細片が多い。

SX44土壙（Fig. 10）

ＢＩ区で検出した。図示していないが長さ0.98m，幅0.86m，深さ0.27mを測る，平面形は隅丸方形を呈する土壙である。底面は2段掘りとなり，1段目迄の深さは7cm，2段目は長径0.75m，短径0.58m，深さ0.20mと楕円形状に深くなる。覆土は上下2層に分かれ，上層が暗茶褐色粘質土，下層が黒褐色粘質土で，上下両層とも黄褐色地山ブロック，炭化物を混入する。出土遺物はなかった。

SX45土壙（Fig. 10）

ＢＩ区で検出した。長さ0.95m，幅0.53m，深さ0.18mを測る，平面形は隅丸長方形を呈する土壙である。底面は水平で，中央に直径12cm，深さ7cmのピットがある。覆土は黒褐色粘質土，又は暗茶褐色粘質土である。中から土器の細片が1点出土しているが，時期は不明。

SX46土壙（Fig. 11，PL 5）

ＢＩ区で検出した。SX47，48と切り合い，長さ6.14m，幅3.65m，深さ0.25mを測る平面形が不整楕円形を呈する土壙である。底面はほぼ水平であるが，部分的に皿状の落ち込みが見られる。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし，一部に灰・炭化物の集中が見られた。覆土中より古墳時代土師器，須恵器片が出土している。

SX47土壙（Fig. 11，PL5）

ＢＩ区で検出した。SX46，48を切る土壙である。長径2.4m，短径2.3m，深さ0.21mを測り，平面形が隅丸方形を呈する。底面は浅くほぼ水平で皿状を呈す。遺物は弥生時代土器片や古墳時代の土師器片などが出土している。

SX48土壙（Fig. 11，PL 5）

ＢＩ区で検出した。SX47に切られ全様は判らないが，現存長2.1m，幅1.77m，深さ0.2mを測る。平面形が不整楕円形を呈する土壙である。底面はやや中央が深くなる。覆土は暗茶褐色粘質土を主体とし，中に炭化物　焼土ブロックが含まれる。古墳時代の土師器がビニール袋1袋程出土した。いずれも細片である。

SX49土壙（Fig. 10，PL10）

ＢＩ区で検出した。SX43を切る土壙である。確認規模で長径1.44m，短径0.97m，深さ0.49mを測り，平面形は楕円形を呈する。覆土は黒褐色粘質土に暗茶褐色粘質土ブロックを含む。土壙内には小礫が流れ込み，又底面に近い部分では，板材が見られた。少数ではあるが古墳時代土師器の細片が出土している。

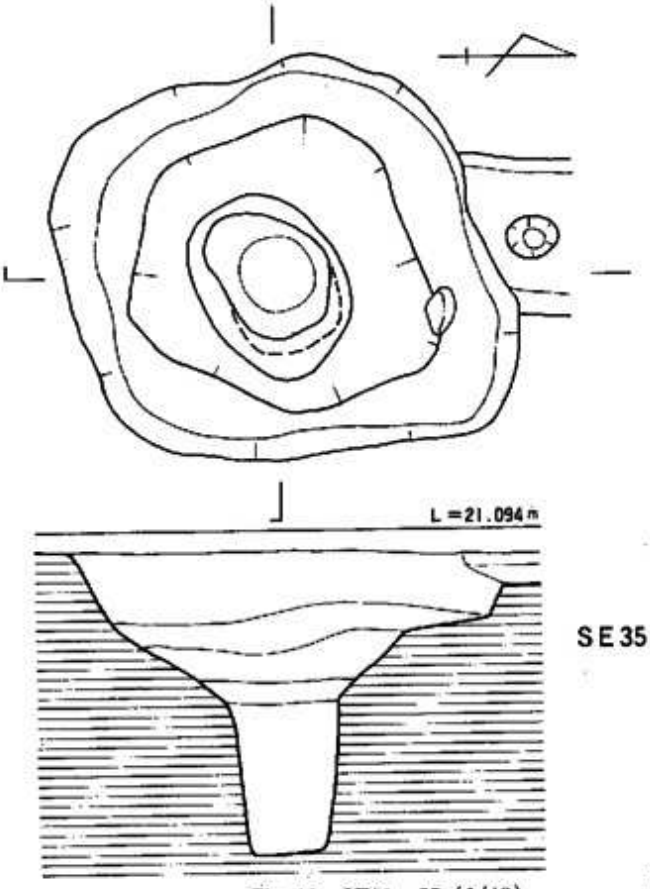
SX50土壙（Fig. 11）

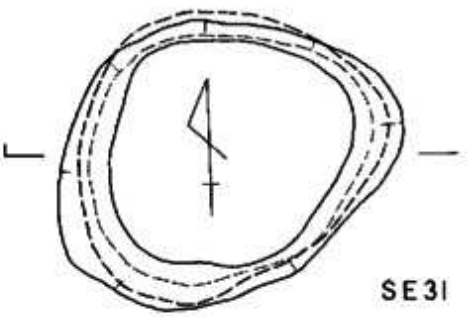
ＡＩ区のSD17の東側の調査区南側の境界地で検出した。境界地にかかる為，全様は判らないが，現存長1.8m，幅1.48m，深さ0.16mを測る。平面形は不整円形を呈する土壙である。底

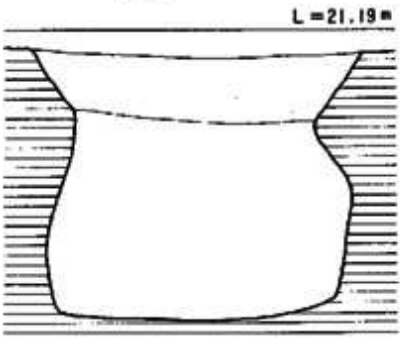
面は更に１段落ち込み，凹凸が激しい。底面内には幅５cm，厚さ１cmの板状の杭列が２列に並んで認められた。杭の現存長は13～18cm程で残りはあまり良くない。樹種については不明。覆土は暗黒青灰色粘質砂である。遺物は弥生式土器や古墳時代の土師器が出土するが，いずれもかなり磨滅し細片が多い。

井戸（SE）

Ｆ区で２基検出した。いずれも深さは２ｍ未満でそれ程深くない。番号は土壙番号との通し番号である。







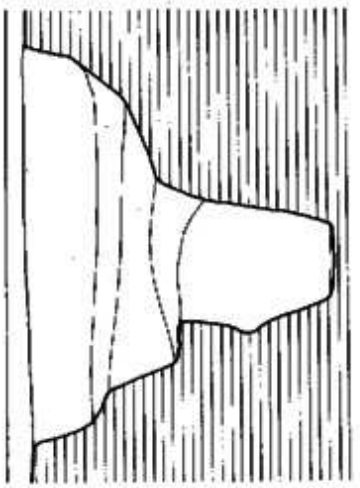


Fig.12 SE31，35（1/40）

SE31（Fig. 12, PL 8）

長径1.87m，短径1.4m，深さ1.38mを測り，平面形は楕円形を呈する。壁面は地表から深さ約1m前後のあたりで中窄みし，そのあたりが吃水線と考えられる。井戸埋土は大きく3層に分かれる。上層が茶褐色砂混り土（鉄分を混入する）。中層が黒灰色粘土（炭化物，植物の種子を含む）。下層が青灰色粘土である。埋土より弥生時代から古墳時代にかけての土器片，砥石，種子類が出土した。特に初期須恵器類が多く出土している。

SE35（Fig. 12, PL 9）

SX40を切る二段掘りの井戸である。井戸掘り方上面は長径2.5m，短径2.2mを測り平面形は隅丸方形を呈する。井筒部は上面で直径0.7m，短径0.55mを測り，平面形は底面で円形である。井戸底迄の深さは上面より，1.55mを測る。埋土は大きく3つに分ける事ができる。上層は暗灰褐色砂質土や，暗茶褐色粘質土，中層は黒褐色粘質土，下層は黒色砂混り粘土である。埋土からは弥生中期から古墳時代迄の土器片を含むが，量はビニール3袋程でそれ程多くない。

DII区Pit3（Fig. 13, PL11）

DII区で検出した。長径35cm，短径30cm，深さ16cmを測り上面及び，底面とも平面略円形を呈するPitである。中から弥生後期の甕形土器が破壊された状態で1個出土した。当初小児甕棺と考えたが，甕棺墓として明確な墓壙を把らえられず，甕棺墓としての可能性は少ない。

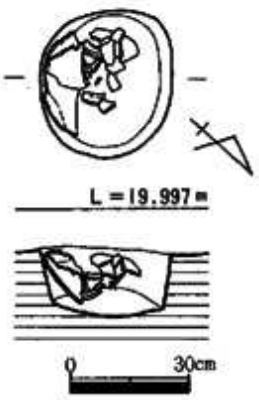


Fig. 13 DII区Pit 3 (1/20)

掘立柱建物（SB）（PL12,~16）

全体で15棟検出した。旧河川SD02を挟んで西側のE，F区で11棟，東側のB区で4棟検出している。建物の規模の内訳は，2間×3間が1棟，2間×2間が5棟，2間×1間が5棟，1間×1間が3棟である。

SB01建物（Fig. 14, PL12）

EII区で検出したSB15と重複する2間×2間の総柱の建物である。主軸方位をN36°30'Wに取り，桁行全長3.9m(13尺)，梁行全長3.68m（12.3尺）を測る。柱穴の直径は27～28cm，深さ26～45cmで比較的大きくしっかりしている。柱穴中より土師器の細片が数点出土しているだけである。

SB02建物（Fig . 14, PL12）

EI区で検出した2間×1間の建物で梁行中央に束柱を持つ。2間×2間の総柱の建物とも考え，柱穴の精査を行ったが，検出しえなかった。主軸方位をN45°Eに取り，桁行全長3.09m

(10.3尺)，梁行全長3.15m(10.5尺)を測る。柱穴の直径は25～38cm，深さ7～40cmを測る。出土遺物はほとんどなかった。

SB03建物（Fig. 14，PL13）

E II区で検出した。SX04と重複する2間×1間のいびつな側柱の建物で中央に深さ10cmの束柱を持つ。桁行全長2.52cm(8.4尺)，梁行全長2.76m(9.2)を測り，主軸方位をN53°30'Eに取る。柱穴は直径22～45cm，深さ9～56cmで側柱はいずれも深くしっかりしている。柱穴中には長さ5～15cm，幅4～15cmの柱根が残る。樹種については同定を行っていず不明。柱穴中より土師器の高坏の坏部褒の胴部，褒の胴部の細片が3点程出土している。

SB04建物（Fig. 14，PL13）

E II区で検出した1間×1間の建物で，SB06と柱穴が重複する。桁行全長3.15m(10.5尺)，梁行全長2.7m(9尺)を測り，主軸方位をN45°Wに取る。柱穴は直径43～53cm，深さ35～57cmでいずれも大きく深く，しっかりしている。柱痕径は13～15cmである。柱穴中より弥生後期の器台の細片から土師器の細片が数点出土している。

SB05建物（Fig. 14，PL13）

E II区で検出した。SX05，SB11と重複する2間×1間の側柱の建物である。桁行全長3.8m(12.7尺)，梁行全長3.3m(11尺)を測り，主軸方位をN43°Wに取る。柱穴の直径は30～75cm，深さは22～44cm測る。柱穴中より5世紀代と思われる土師器の高坏の細片，褒の細片が若干出土しているだけである。

表1　掘立柱建物計測表

	規模	桁行(m)		梁行(m)		主軸方位	床面積(m²)	柱穴状態					備考
		全長/尺	柱間寸法/尺	全長/尺	柱間寸法/尺			Pit数	深さ	深さ	短径	柱根径	
1	2×2	3.9 (13)	6.8:6.2	3.68(12.3)	5.8:6.4	N36°30'W	14.24	9	25～45	27～48	23～38	13～15	
2	2×1	3.09(10.3)	5:5.3	3.15(10.5)	10.5	N45°E	9.73	7	7～40	25～38	18～37	12～15	
3	2×1	2.52(8.4)	4.2:4.2	2.76	9.2	N53°30'	7.07	7	9～56	22～45	20～38	7～15	柱根残る
4	1×1	3.15(10.5)	10.5	2.7 (9)	9	N45°W	8.5	4	35～57	43～53	38～45	15	
5	2×1	3.8 (12.7)	5.5:7.2	3.3 (11)	11	N73°W	12.54	6	22～44	30～75	30～67	18～22	
6	1×1	2.55(8.5)	8.5	2.25(7.5)	7.5	N3°W	5.74	4	20～50	35～70	30～48	13～20	
7	2×2	3.6 (12)	6:6	3.6 (12)	6.2:5.8	N29°30'E	12.96	9	5～26	19～60	16～46	12～23	
8	2×2	3.7 (12.3)	5.3:7	3.6 (12)	6.2:5.2	N66°30'W	13.32	8	5～23	23～44	20～35	8～14	
9	2×2	3.6 (12)	6:6	3.45(11.5)	6:5.5	N58°30'E	12.42	9	7～64	27～43	23～35	13～15	
10	1×1	1.8 (6)	6	1.65(5.5)	5.5	N84°E	2.97	3	61～68	34～47	27～43	13～20	
11	3×2	5.55(18.5)	6:6.5:6	5.1 (17)	8.5:8.5	N34°30'W	28.31	12	5～36	30～58	28～50	10～14	
12	2×2	3.0 (10)	5:5	2.85(9.5)	4.2:5.3	N71°30'E	8.98	9	5～30	25～38	24～36	13～15	
13	2×1	3.15(10.5)	5.5:5	2.7 (9)	9	N16°W	8.51	6	17～44	35～43	32～40	13～20	
14	2×1	3.00(10)	5:5	3.6 (12)	12	N82°E	11.85	6	12～32	18～40	17～35	12～15	

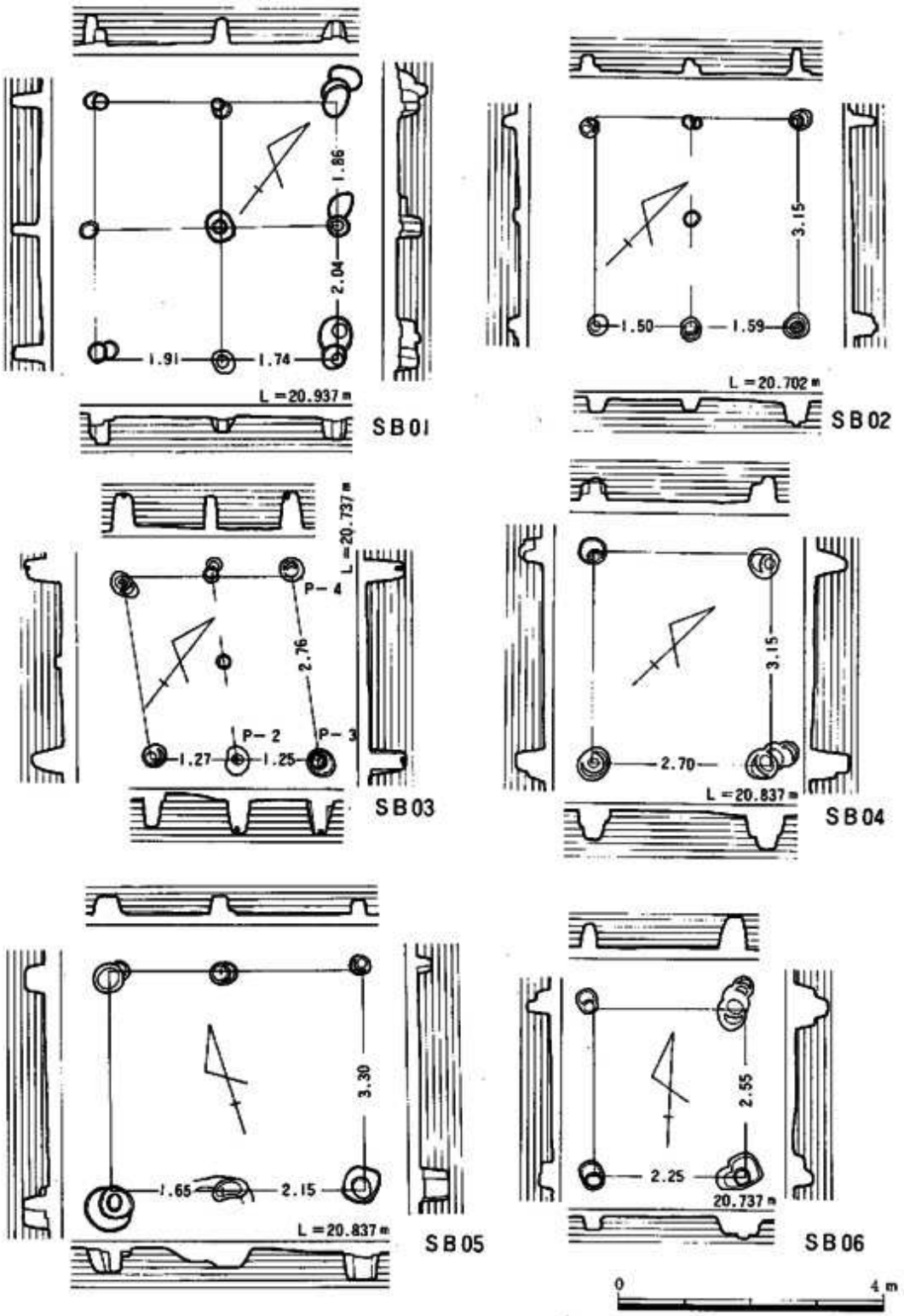


Fig. 14 SB01~06 (1/100)

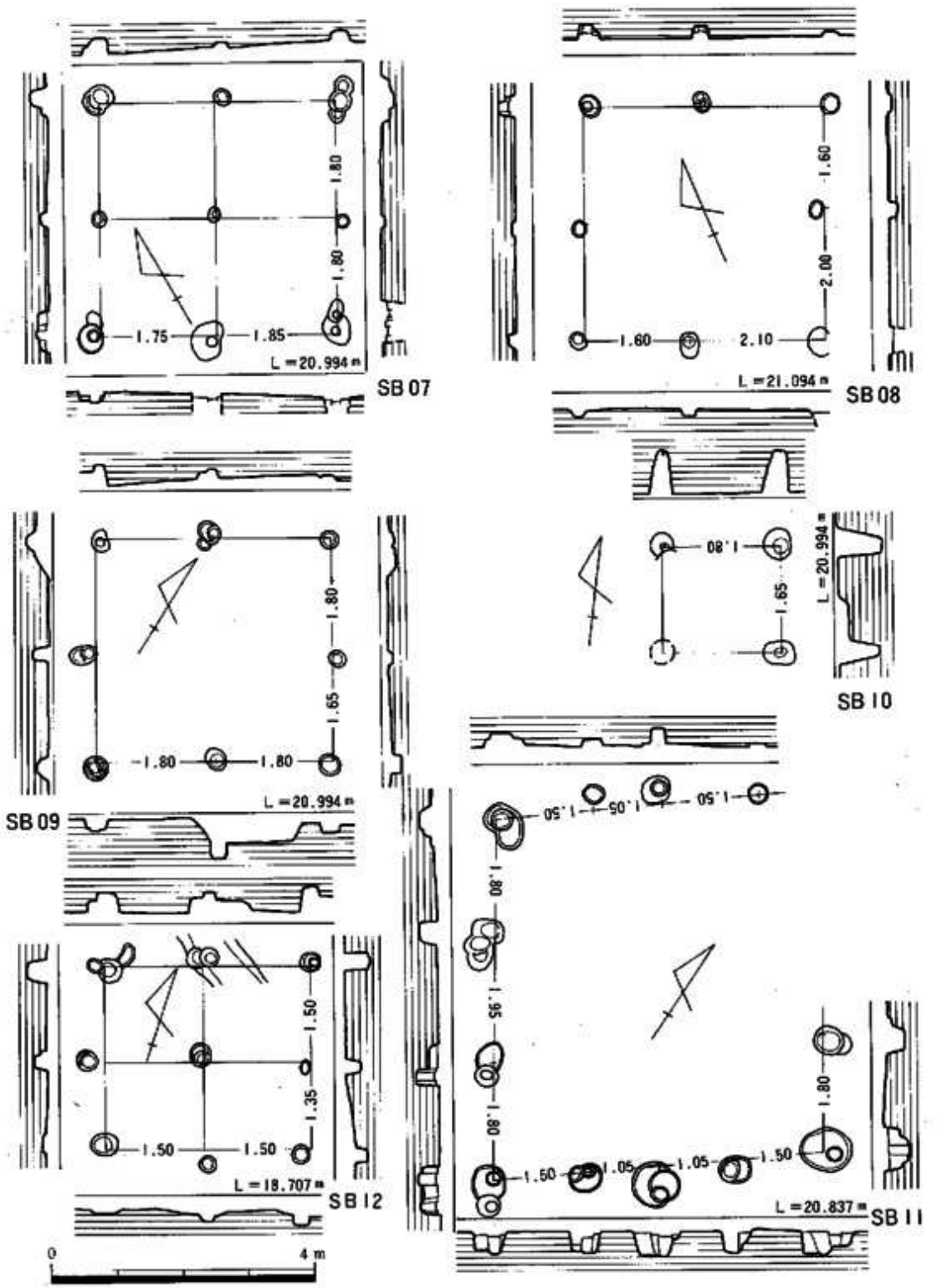


Fig. 15 SB07~12 (1/100)

SB06建物（Fig. 14, PL13）

ＥⅡ区で検出した，1間×1間の建物である。桁行全長2.55m（8.5尺），梁行全長2.25m（7.5尺）を測り，主軸方位をＮ３°Ｗに取る。柱穴の直径は35～70cm，深さ20～50cmを測り全体に深く，しっかりしている。柱痕径は13～15cmを測る。柱穴中より土師器の細片が数点出土している。

SB07建物（Fig. 15, PL14）

ＥⅠ区からＦⅠ区にかけての圃場整備地域との境界地で検出した。２間×２間の総柱の建物で桁行全長3.6m（12尺），梁行全長3.6m（12尺）を測る。主軸方位はＮ29°30′Ｗに取る。柱穴の直径は19～60cm，深さ５～26cmを測る。柱穴の深さは浅く，かなり削平を受けている。柱穴中より土師器の細片が数点出土している。

SB08建物（Fig. 15, PL14）

ＦⅠ区の圃場整備地区の境界地で検出した２間×２間の側柱の建物である。中央に東柱は検出できなかった。削平の結果，消滅した事が考えられる。桁行全長3.7m（12.3尺），梁行全長3.6m（12尺）を測り，主軸方位をＮ66°30′Ｗに取る。柱穴の直径は23～44cm，深さ５～23cmを測るが，いずれも小さく浅い。柱痕径は15cm位である。出土遺物はなかった。

SB09建物（Fig. 15, PL14）

ＦⅡ区で検出した。SX30と重複する２間×２間の建物である。桁行全長3.6m（12尺），梁行全長3.45m（11.5尺）を測り，主軸方位をＮ58°30′Ｅに取る。柱穴の直径は27～43cm，深さ７～64cmを測り，柱穴の大きさにばらつきがある。柱穴より時期不明の土器の細片が１点出土している。

SB10建物（Fig. 15, PL14）

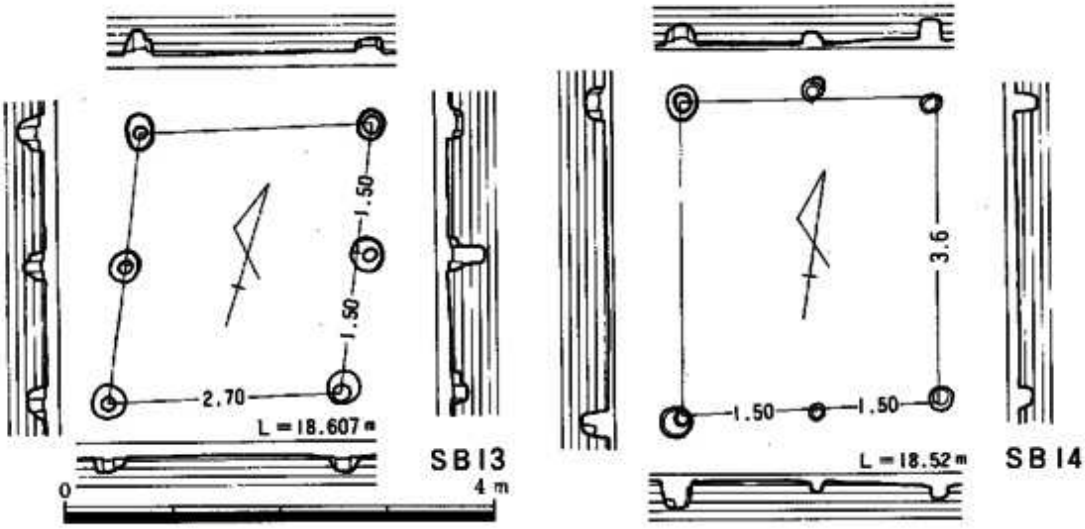
ＦⅡ区で検出した。SX30を切り，１間×１間の建物で桁行全長1.8m（６尺），梁行全長1.65m（5.5尺）を測る。主軸方位はＮ84°Ｅに取る。柱穴の直径は34～47cm，深さ61～68cmを測り柱穴は深くしっかりする。一部柱根が残る。規模から見て古墳時代後期の４本の主柱穴を持つ竪穴住居址が削平された可能性もある。出土遺物はない。

SB11建物（Fig. 15, PL15）

ＥⅡ区の圃場整備地との境界で検出した。SB01に切られる，２間×３間の側柱の建物である。主軸方位をＮ34°30′Ｗに取り，桁行全長5.53m（18.5尺），梁行全長5.1m（17尺）を測る。梁間には間柱が入り，柱の並びは，やや不揃いである。柱穴の直径は38～58cm，深さは４cm～36cmを測る，北側の柱は削平の為か残りが悪い。柱穴中より土器片が若干出土している。

SB12建物（Fig. 15, PL15）

ＢⅡ区で検出した。２間×２間の総柱の建物である。桁行全長3.0m（10尺），梁行全長2.85m（9.5尺）を測り，主軸方位をＮ71°30′Ｅに取る。柱穴の直径は25～38cm，深さは５～30cmを測る。出土遺物はなかった。



SB13建物（Fig. 16, PL15）

B II区で検出した。2間×1間の側柱だけの建物である。桁行全長3.15m（10.5尺），梁行全長2.7m（9尺）を測り，主軸方位をN16°Wに取る。柱穴の直径は35～43cm，深さ17～44cm，柱痕径は12～15cmを測る。出土遺物はなかった。

SB14建物（Fig. 16, PL16）

B II区で検出した。2間×1間の側柱だけの建物である。桁行全長3.0m（10尺），梁行全長3.6m（12尺）を測り，主軸方位をN82°Eに取る。建物の形態は西側にやや開き気味になる。柱穴の直径は18～40cm，深さは12～30cm，柱痕径は12～15cmを測る。出土遺物はなかった。

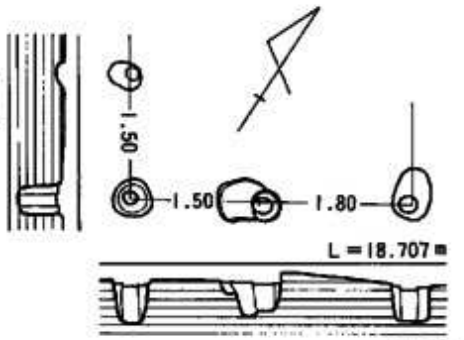


Fig. 16 SB13～15 (1/100)

SB15建物（Fig. 16, PL16）

B II区北側境界地で検出したため，全体の形状は明らかでない。SD15を切る2間×1間以上の建物である。柱穴の直径は32～50cm，深さは12～50cmを測り，柱穴としては比較的大きく，しっかりしている。

溝状遺構（SD）

今回の調査では，全部で18条検出した。遺構番号は昭和56年の圃場整備地区の調査で検出された旧河川2条にSD01，02と名称をつけており，今回検出された旧河川がその時調査された旧河川SD02とつながる為，番号付けをSD02より始めた。SD01は56年調査の旧河川である。

SD02（Fig. 19, PL17, 22）

E区からC区にかけて，南西側から北東方向に緩やかに蛇行する旧河川である。規模は幅が14～19m，深さが0.7mを測り，幅の割には浅い。E区でSD05がC区でSD03が切り込む。平面

観察からいずれもSD02がある程度埋没した段階に切り込んでいる。底面は中央がやや深くなるが，所々たまり状の落ち込みがあり，流木が見られた。堆積土は大きく３層に分かれる。第Ⅰ層は１～３，７～９層迄，第Ⅱ層は４～６，10～14層，第Ⅲ層は15～19層迄である。川幅が広いため，谷水田等の可能性も考えて土層観察を行ったが，明確な水田土壌は確認出来なかった。Ｄ区からＣ区の旧河川内に２列の杭列が見られた。杭はいずれも直径が大きくても５cm，長さ30cm程度でそれほどしっかりしたものでない。遺物は主にⅠ，Ⅱ層で大量に出土した。特に北岸周辺に集中出土しており，北側台地部の集落から廃棄または流れ込んだものと考えられる。弥生時代中期から古墳時代迄の遺物が出土しているが，特に弥生時代後期初め頃のものが多く，完形のものも多い。又Ⅱ，Ⅲ層より木器又は，植物の種子等も出土した。

１号杭列（Fig. 17）　Ｄ区で検出した。杭は全部で48本検出した。杭の直径は２～５cmで，長さ６～35cmでそれ程大きくしっかりしたものでない。水の流れに直交するように設置されている。残りが悪いので性格がはっきり断定できないが，柵状のものであろうか。

２号杭列　Ｃ区で検出した。杭は全部で16本検出した。杭の直径は3～5cmで，長さ９～29cmを測り，それ程大きくしっかりしたものでない。流れに直交するように杭列は２列平行に設置されている。１号杭列と同じようなものであろうか。

SD03（Fig. 19，PL18）

Ｄ区で検出した。SD02の堆積土中に切り込む溝である。ＳＤ02との合流点から北西へ延び，圃場整備区域内でSD05と合流する溝である。調査範囲内では長さ25m分検出した。幅3.1m，深さ0.95mを測り断面は緩やかな浦鉾状を呈する。堆積土は８層に細分できるが，大きくは３層に分ける事ができる。上層は１～３層で暗茶褐色粘質土から灰褐色シルト又は暗灰褐色砂である。中層は4.5層で暗灰褐色砂礫又は暗青灰色砂混り粘質土。下層は6～８層で暗灰褐色粘土から黒色粘土となる。下層の８層中には流木や植物遺物が多量に検出され，木器なども数点確認された。

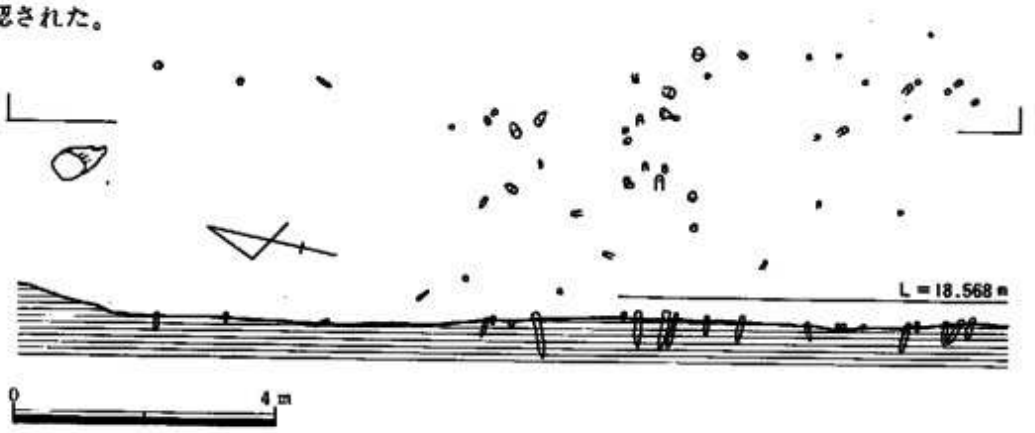


Fig. 17　SD02内検出１号杭列（1/60）

遺物は弥生式土器片，古墳時代，土師器片，砥石，木製の鍬など出土しているが量はそれ程多くない。

SD04（Fig. 18, PL21）

D区で検出した。南西方向から北西方向へ鍵型に伸びる溝である。削平によるものか，残りは余り良くない。調査区で確認した長さは19mである。溝は幅0.4～0.5m，深さ0.2m前後である。断面形は逆台形を呈する。覆土からの遺物の出土は少なく，いずれも細片である。

SD05（Fig. 20, 21, PL19）

E区で検出した。SD02から北へ逆に延び圃場整備地区の第9区でSD03と交わる溝である。北側II区でSD06と07と切り合うそれぞれの溝の先後関係はS D06→05→07とSD06が一番古い。更に土層図の観察によれば，SD05，6の層の下に溝状の落ち込みが見られ，それをSD05下層溝とする。調査区で確認したSD05の長さは20mである。溝幅は土層図から見れば2.4～2.6m，深さ0.5～0.6mを測る。溝の断面は逆台形又は，浅い皿状を示す。溝の覆土は大きく3層に分ける事ができる。上層は黒褐色粘質土を主体とし，砂礫を混える事もある。中層は黒褐色粘質土又は暗茶褐色粘質土を主体とし，黄褐色地山ブロックや炭化物を含む。下層は暗茶褐色粘質土又は，暗灰褐色粘質土を主体とする。遺物は特に中層より集中して出土しており，又炭化物が集中する灰層が見られ，その灰層中に多量の土師器や植物の種子が含まれていた。完形のものも見られた。

SD05下層溝は覆土が黒灰色砂から暗灰褐色砂礫である。その中から弥生時代中期から後期迄の鉄分が付着する

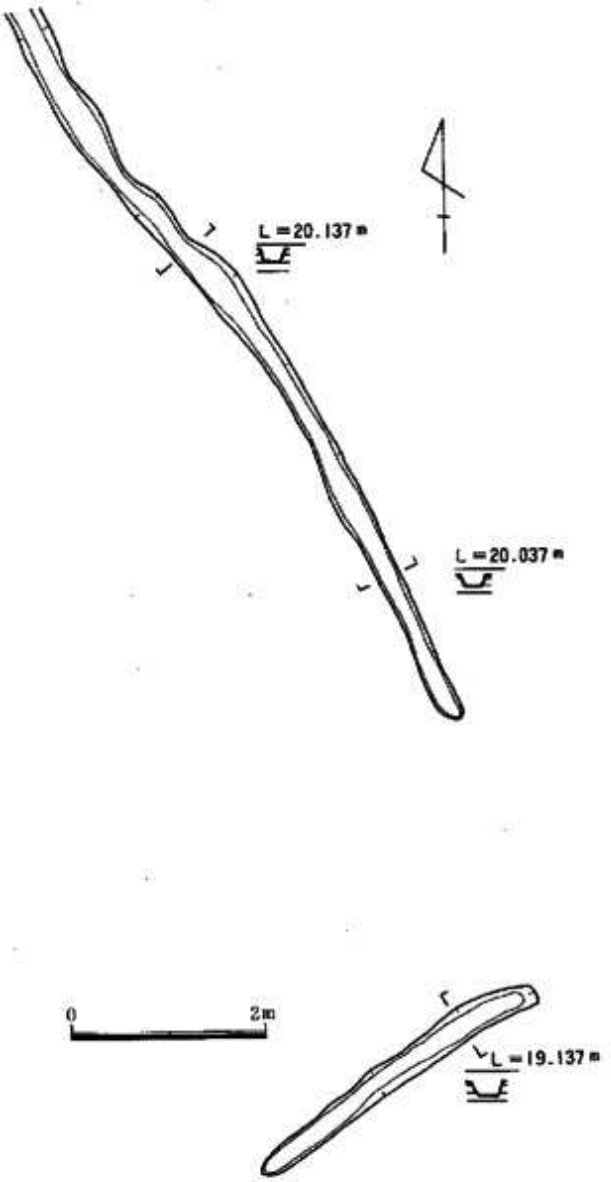
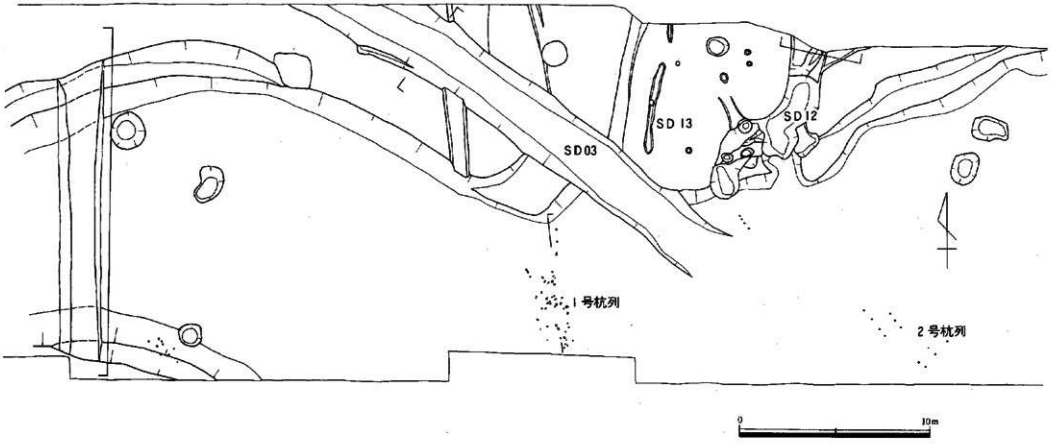
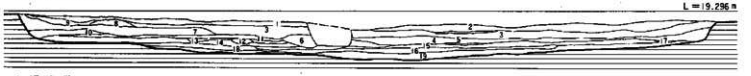


Fig. 19 SD04 (1/80)



SD02 土層図



土 層 名 称

1．暗灰褐色粘質土（暗く細密、土器砂粒入）
2．枝緑灰色砂質り粘質シルト
3．緑灰褐色粘質シルト（やや細砂を含む部分が実際する。）
4．暗緑灰色砂質り粘質シルト
5．黒灰色細砂
6．褐色砂（中砂である，粗緑灰色粘質シルト）
7．緑灰色砂質り粘質シルト（部分的に褐色粗砂を含む）
8．淡灰褐色砂（やや細分を含む）
9．緑灰色粘質細砂混り（シルトに近い）
10．7 よりややくらい
11．黒灰色粘質シルト
12．黒褐色粘質土
13．淡黒褐色粘質土に黄灰色細砂粒入
14．淡灰黄褐色砂に黒褐色粘質土混入（やや砂質で砂粒、炭本などを多く含む）
15．赤灰色粘質シルト
16．黒灰色砂質り粘土（砂粒を含む）
17．黒灰色粘砂
18．暗黄灰褐色粗砂礫
19．暗灰褐色砂礫混り粘質シルト

Fig. 19 SD02, 03, 12, 13 (1/200, 1/80)

磨滅の著しい土器片が出土している。

SD06(Fig. 20, 21, PL19)

南東から北西へ斜めに延びる溝で，EII区で検出した。EI区ではSD05と重複するため，全様は知りえないが，土層断面から判断すれば0.9～1.6mになり，I区では幅が広くなる。深さは0.55～0.77mで，断面形は浅いU字形又は，V字形，逆台形と不揃いである。覆土は上層が暗青灰色粘質シルト又は砂混り土，下層は暗灰褐色砂又は，暗青灰色砂となる。遺物の出土は少なく又，すべて細片である。

SD07(Fig. 20, PL19, 22)

EII区で検出した。SD05を切り，やや蛇行しながら南から北北東へ延びる小溝である。南側はSD05と重複し消滅する。土壙SX 14・18・19と切り合う。切り合関係では，SD10より新しくSX14よりは古い。溝の規模は幅0.4～0.75m，深さは0.3～0.4mを測り，断面形は逆台形を呈する。溝の覆土は単純であり，暗灰褐色粘質シルトを主体とする。出土遺物は，それ程多くない。古墳時代の土師器や玄武岩製の石斧の破片が出土している。

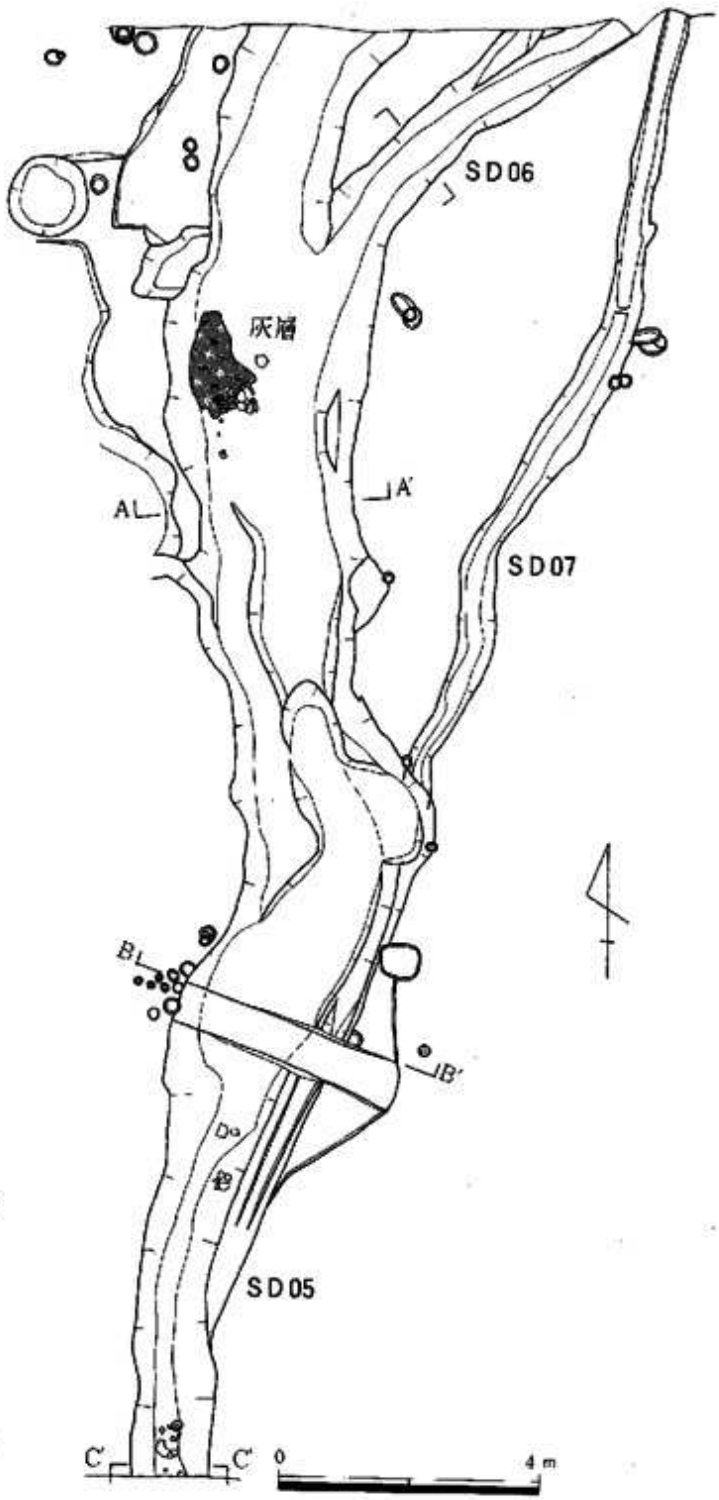
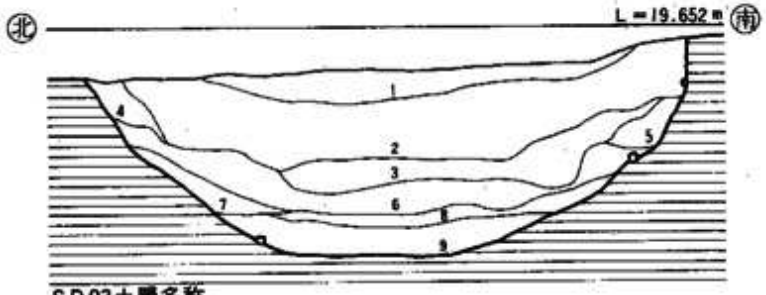
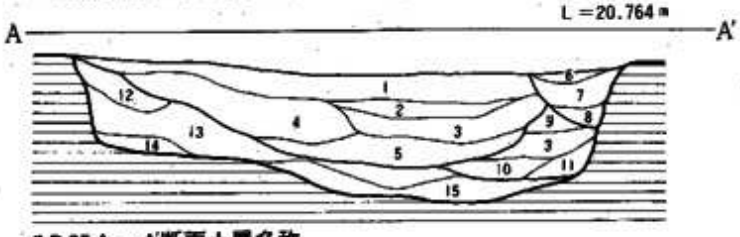


Fig. 20 SD05, 06, 07 (1/100)



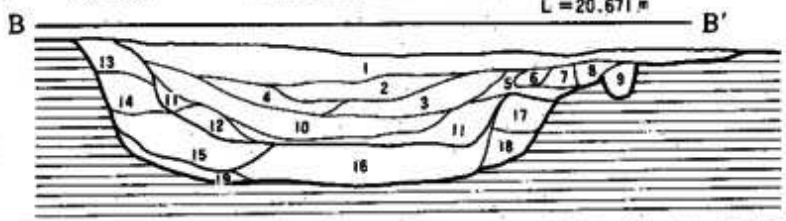
SD03土層名称

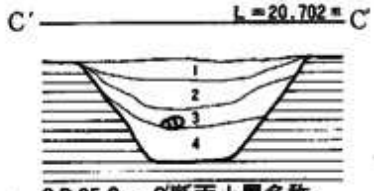
1．暗茶褐色粘質土(小礫混り．遺物を少量含む．硬い)
2．灰褐色シルト．(やや細砂混りパサパサし，粘性ナシ．鉄分が上から沈着する．)
3．暗灰色砂(部分的にレンズ状に粘砂を含む)
4．淡褐色砂礫混り土(やや灰色をおびる)
5．暗灰褐色砂礫混り粘質土
6．暗青灰色砂混り粘質土(粘砂を多く含む．)
7．暗灰褐色粘土(軟)
8．暗灰褐色粘土と黒色粘土の混合
9．黒色粘土．(鉄分を含み，植物遺体を多く含む．)



SD05A～A'断面土層名称

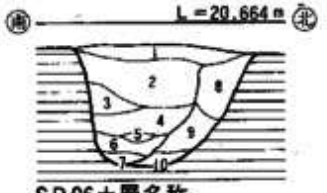
1．茶褐色砂混り土(鉄分を含む．パサパサする．粒子はやや細く硬い)
2．1よりくらく，硬く緻密
3．暗茶褐色粘土
4．黒褐粘質土(地山ブロック炭化物を多く含む．硬い)
5．淡黒色粘土(炭化物，地山粒子を含む)
6．褐色砂混り粘土(鉄分を多く含む)
7．褐色粘質土．(黄褐色地山ブロック混入鉄分を混入)
8．暗褐色粘土．黄褐色地山ブロック混入
9．暗褐色粘質土
10．暗灰褐色粘土(やや砂質)
11．暗灰褐色砂混質粘土(黄褐色地山ブロック混入)
12．淡灰褐色粘質シルト
13．やや粘をおびた灰色シルト(粘質はない鉄分をやや含む．)
14．灰色砂礫(4～5cmの円礫を含む)
15．暗灰色砂礫(4～5cmの円礫を含む)





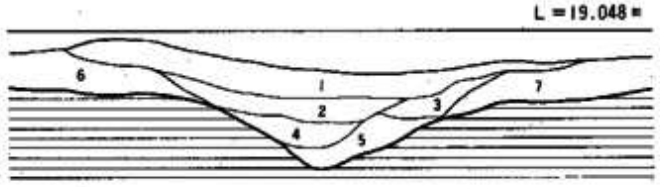
SD05C～C'断面土層名称

1．褐色粘質土．(鉄分が沈着する．)
2．黒灰色粘質土(砂礫混り)
3．黒灰色粘土(遺物を多量に混入)
4．暗灰色．粗砂礫



SD06土層名称

1．暗灰色砂混り土(やや粘質．暗く鉄分を含む．)
2．暗灰色砂(やや粘質)
3．2に灰色地山ブロックを少量含む．
4．暗灰褐色砂(軟)
5．淡色砂
6．4よりやや明るい．黄灰褐色砂
7．4に灰褐色粘砂(黄褐色地山粒子混入)
8．淡黄灰色．粘質シルト地山と同じ成分
9．淡灰褐色粘砂
10．8に黄褐色地山．粘土ブロック混入



SD12土層名称

1．暗灰褐色粘質土と茶褐色砂の混合
2．黒灰褐色粘質土(灰色砂ブロック混入)
3．黒灰色粘質シルト(硬く緻密)
4．黒灰褐色粘土(砂質鉄分含む)
5．黒灰褐色粘質土(砂混り．下層は砂礫)
6．暗灰褐色粘質土(暗黄褐色砂礫鉄分を含みふみをおびる)
7．暗灰褐色粘質土(礫を多く含む)

SD05B～B'断面土層名称

1．灰褐色粘質土(鉄分．砂礫を少量含む)
2．黒褐色　粘質土　(炭化物，土器片混入．粘性強い)
3．暗灰褐色粘土
4．黒褐色粘質土(炭化物混入)
5．暗灰褐色粘質土
6．灰褐色粘質土に黄灰色地山ブロック混入
7．暗灰褐色粘質土
8．淡灰褐色シルト質粘質土
9．明灰褐色粘質シルト
10．黒褐色粘土．炭化物，土器片を多く混入する．5C代の遺物
11．暗褐色粘土に黒褐色，粘土砂子混入
12．灰褐色粘質シルト
13．黄灰褐色粘質シルトブロックと灰褐色粘質土の混入
14．黄灰褐色粘質シルト
15．暗黄灰色粘質シルト
16．灰褐色粘砂，砂礫
17．淡黄灰色粘質シルト，鉄分含む
18．ふみをおびた青灰色細砂
19．暗黄褐色砂礫混り粘土

Fig. 21　SD03, 05, 06, 12土層図 (1/40)

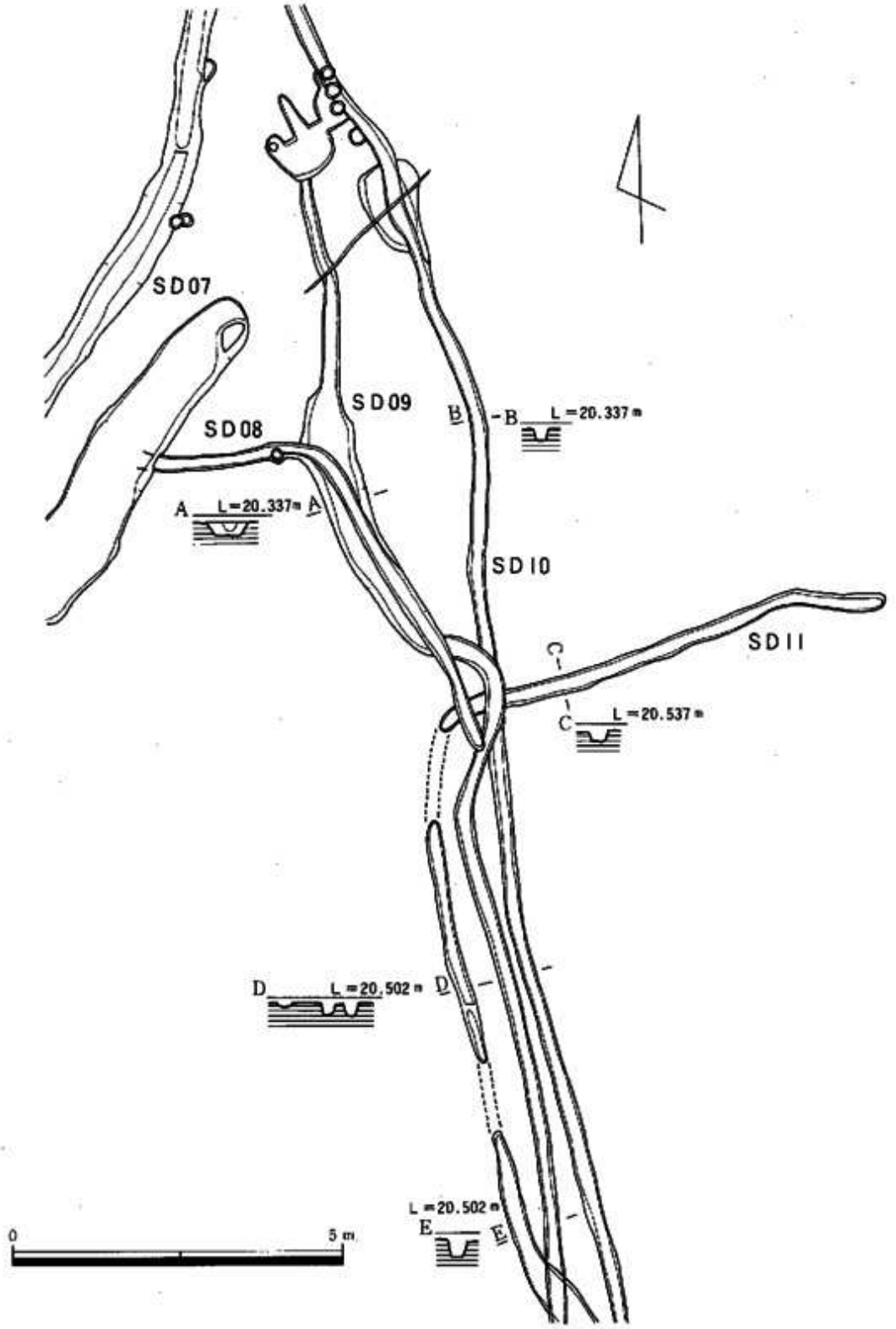


Fig. 22 SD08~11 (1/100)

SD08（Fig. 22, PL21）

ＥⅡ区のSD05の東側で検出した。「く」の字状を呈する小溝である。西端はSD07, SX14に切られ消滅，南端は削平により消滅する。溝の規模は幅0.2m，深さ0.1mを測り，覆土は暗暗灰褐色粘質シルトである。覆土中より弥生式土器片や古墳時代土師器片が出土している。

SD09（Fig. 22, PL21）

ＥⅡで検出した。南々東から北北西へ，蛇行気味に延びる溝でSD08, 10, 11と重複し，北端はSX18で切られ消滅し，南端は南側境界地付近で消滅する。規模は幅0.25～0.63m深さ８～23cmを測り，浅い。覆土は暗灰褐色粘質シルトである。覆土中より弥生時代後期土器片や古墳時代の土師器片が出土した。細片がほとんどある。

SD10（Fig. 22, PL21）

Ｅ区で検出した。南々東から北北西に延びる小溝である。SX18, に切られ，SD11と重複する。規模は幅0.2～0.3m，深さ0.1～0.2mを測る。覆土は黒褐色粘質土と茶褐色粘質土の混合土である。遺物は弥生式土器片や古墳時代の土師器片が出土しているが細片がほとんどである。

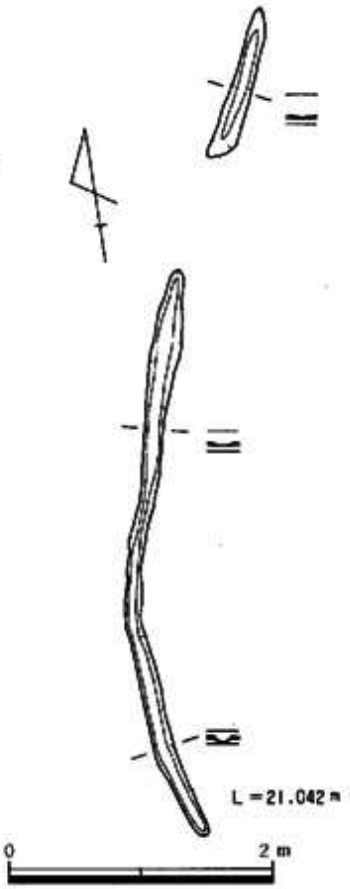


Fig. 23 SD14 (1/60)

SD11（Fig. 22, PL21）

Ｅ区で検出した。南から東へ鍵形に伸びる小溝である。遺構の残りは悪く，部分的に遺構がとぎれる。SD08, 09に切られる。規模は，幅0.3～0.5m，深さは0.12～0.15mを測る。覆土は暗灰褐色粘質シルトである。覆土中より土師器の細片が出土している。

SD12（Fig. 19, PL20）

ＣⅡ区で検出した。略北に延びる溝でSD02の埋土中に切り込んでおり，SD02より新しい時期のものである。確認長7.7m，幅1.6～1.75m，深さ0.43～0.51mを測る。底面は溜り状の土壙が見られ凹凸が激しい。覆土は大きくは３層に分かれる。上層（１層），暗灰褐色粘質土と茶褐色砂の混合，中層(2･3層)，黒灰褐色粘質土を主体とするもの，下層(4･5層)，黒灰褐色砂混り粘土である。覆土中からの遺物の出土はなかった。

SD13（Fig. 19）

ＣⅡ区で検出した。確認長4.9m，幅0.36m，深さ5cmを測る小溝で，覆土から見て近代の溝である。

SD14（Fig. 23, PL21）

FII区で検出した。略南北方向に延びる小溝である。確認長は9.5m、幅は0.2～0.3m、深さは5cmを測る。覆土は黒褐色砂混り土で，出土遺物はなかった。

SD15（Fig. 24, PL21）

BII区で検出した。北側境界より南東に延びる溝で，SB15と重複する。先後関係はSB15が新しい。調査区での確認長は9.6mを測る。溝幅は0.5～0.9m，深さは0.2mである。断面形は逆台形を呈する。覆土は粒子が細かい暗茶褐色粘質土で硬く鉄分が沈殿している。遺物は弥生式土器片や古墳時代の土師器片が少量であるが出土している。

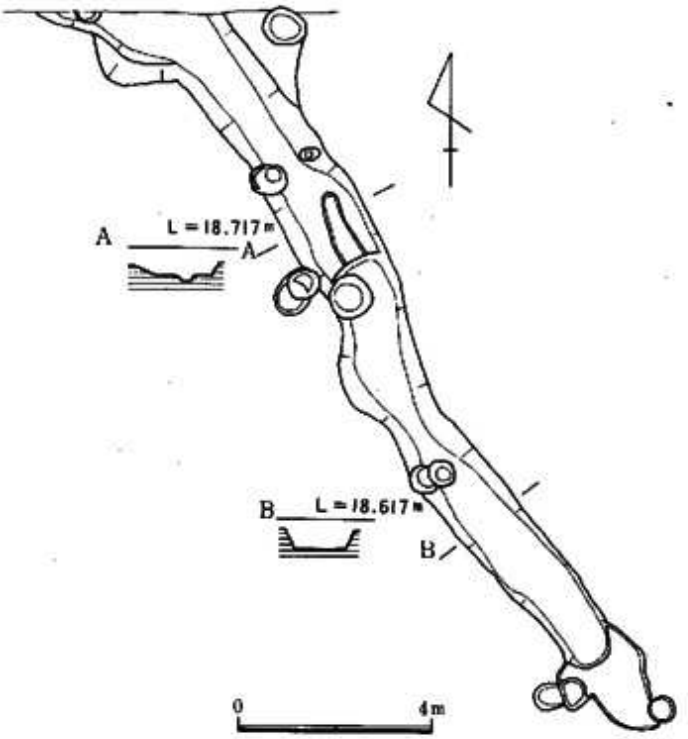


Fig. 24 SD15 (1/80)

SD16（Fig. 26, 27, PL20, 22）

A区とB区の境界地で検出した。南西から北東方向へ延びる溝である。南側境界地でSD17と重複する。土層断面図の観察によれば，SD16がSD17を切るようである。溝幅は3～4m，深さは0.7mを測り，断面は逆台形を呈する。覆土は大きく2層に分けられる。上層は1～3層で，暗灰褐色から淡黒青灰色粘質土である。下層は4～5層，暗灰褐色～淡黒灰色粘土である。この溝の東側では，地山が砂礫の氾濫原状を呈し，台地縁辺をめぐる溝と考えられる。堆積土中に流木等が見られ，つねに水が流れていた状況を示す。遺物は古墳時代の土師器などが出土しているが細片がほとんどである。

SD17（Fig. 26, 27, PL20）

SD16と重複する溝である。幅2.5m、深さ0.28mを測る。溝断面は浅い逆台形を呈する。溝の覆土は，上層が暗茶褐色粘質土，下層が黒灰色砂礫となる。覆土中からの遺物には，弥生時代から古墳時代の須恵器迄がある。

SD18（Fig. 25, 27, PL20）

A区で検出した。南西から北東へ延びる溝である。幅は0.7～1.5m，深さ0.2～0.13mを測る幅の割には浅い溝である。覆土は大きく3層に分ける事が出来る。第1層は1～5層，第2層は6～8層，第3層は9～13層迄である。遺物は弥生式土器片や古墳時代土師器，須恵器片

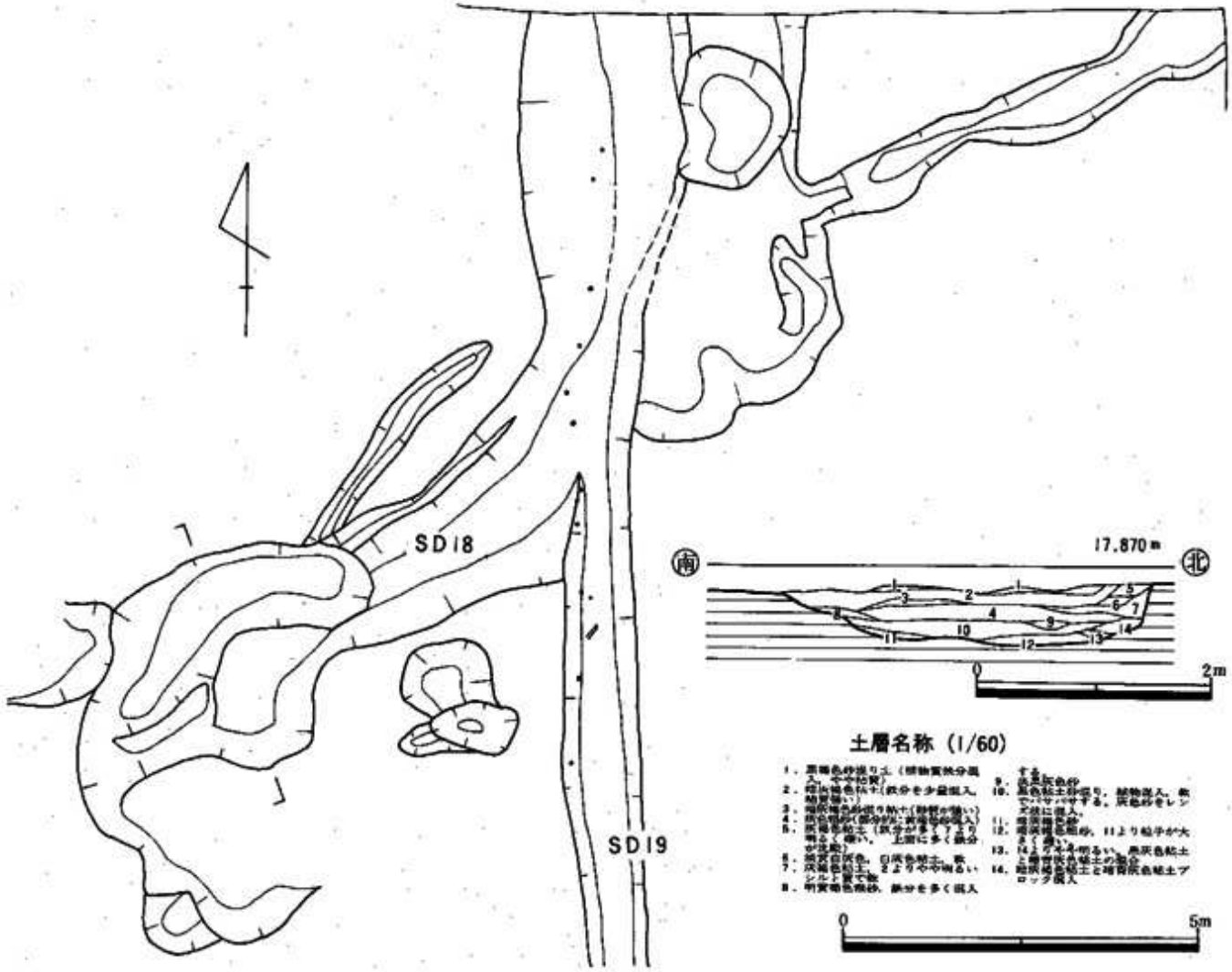


Fig. 25 SD18, 19 (1/100)

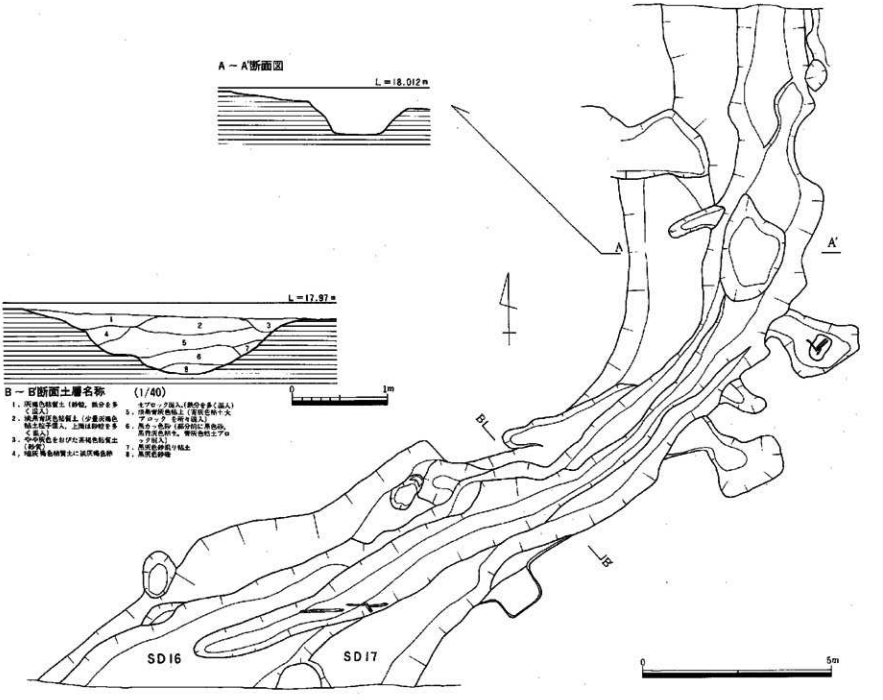
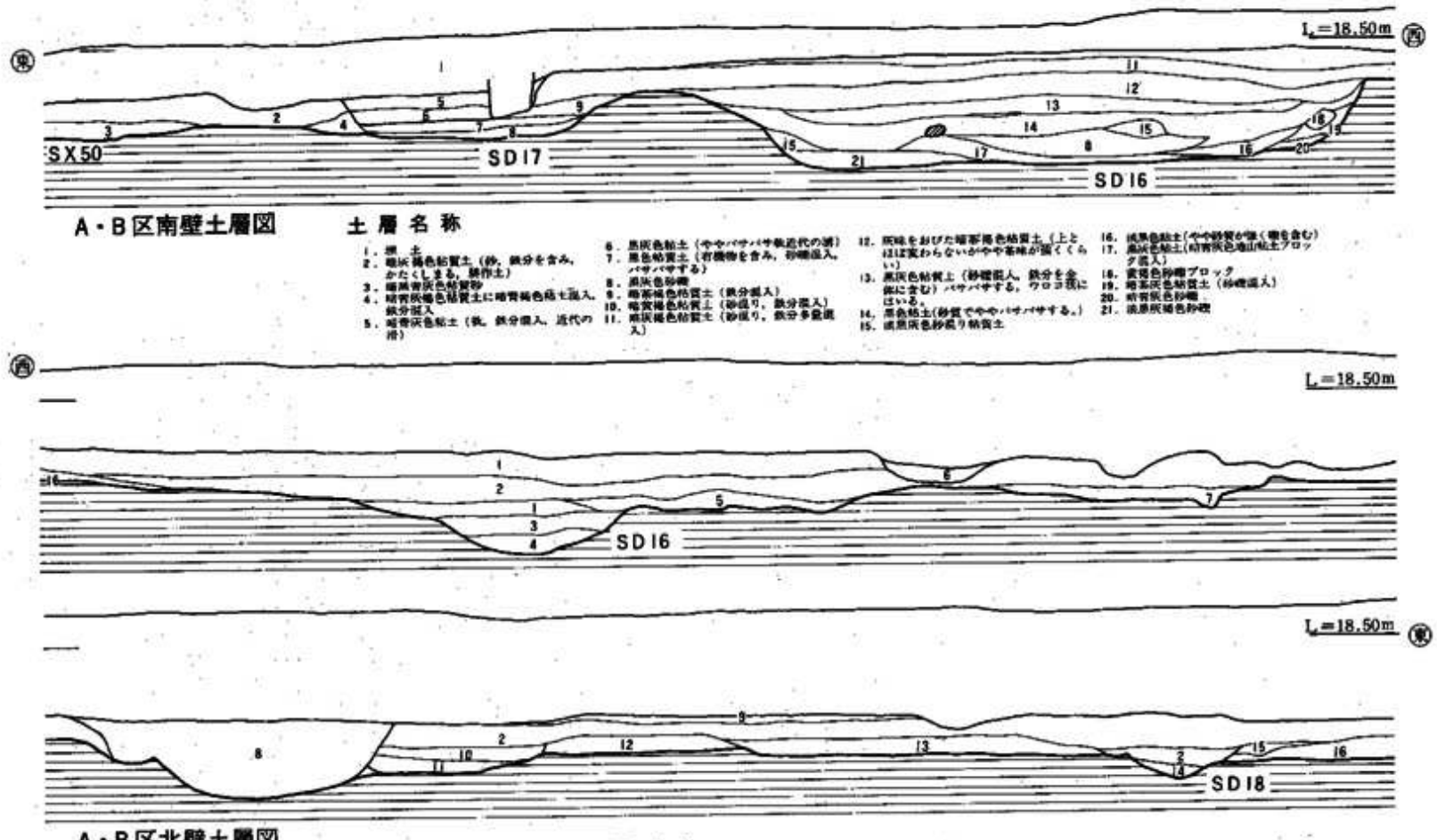


Fig. 26 SD16, 17 (1/100)



A・B区南壁土層図

土層名称

1. 表土
2. 暗灰褐色粘質土（砂，鉄分を含み，かたくしまる，耕作土）
3. 暗黒青灰色砂質砂
4. 暗青灰褐色粘質土に暗青褐色粘土混入，鉄分混入
5. 暗青灰色粘土（砂，鉄分混入，近代の溝）
6. 黒灰色粘土（ややパサパサ感近代の溝）
7. 黒色粘質土（有機物を含み，砂礫混入，パサパサする）
8. 黒灰色砂礫
9. 暗茶褐色粘質土（鉄分混入）
10. 暗黄褐色粘質土（砂混り，鉄分混入）
11. 黒灰褐色粘質土（砂混り，鉄分多量混入）
12. 灰味をおびた暗茶褐色粘質土（上とほぼ変わらないがやや茶味が強くくらい）
13. 黒灰色粘質土（砂礫混入，鉄分を含有にに含む）パサパサする，ウロコ状にはいる。
14. 黒色粘土（砂質でややパサパサする。）
15. 淡黒灰色砂混り粘質土
16. 淡黒色粘土（やや砂質が強く礫を含む）
17. 黒灰色粘土（暗青灰色地山粘土ブロック混入）
18. 黄褐色砂礫ブロック
19. 暗茶灰色粘質土（砂礫混入）
20. 暗青灰色砂礫
21. 淡黒灰褐色砂礫

A・B区北壁土層図

土層名称

1. 暗茶褐色礫混り粘質土（鉄分を多く含む）
2. 暗茶褐色粘質土（砂礫混り，硬く鉄分を多く含む）
3. 暗茶褐色粘土，シルト質植物を含む
4. 淡黒色砂礫青味をおびる
5. 明茶褐色砂礫混り土
6. 黒灰色粘土
7. 暗灰褐色砂礫混り土
8. 現代水路の 撹乱
9. やや暗い黄褐色粘質土（鉄分を多く含む）
10. 黒褐色砂質土（粘性をもち，やや砂粒を含む）
11. 黒灰色砂礫
12. やや青味を持った淡灰色砂礫礫
13. 灰色砂に明黄褐色粘土混入）
14. 暗灰褐色砂礫
15. 暗茶褐色土（砂混りで鉄分をやや含む）
16. 灰色砂（鉄分をやや含む）

Fig. 27　A，B区北壁及び南壁土層図（1/60）

が出土する。量はビニール袋3袋程で，それ程多くない。底面や形状も不規則である事から，自然水路の可能性が強い。

SD19 (Fig. 25)

SD18を切る，南北方向に延びる溝である。埋土，出土遺物から見て近代のものである。幅1.1~2.1m，深さ0.7mを測り，断面形は逆台形である。溝内に直径5cm前後の杭列が一列に並んで検出された。

2．出土遺物

土壙出土遺物 (Fig. 28~40, PL23~25)

SX04 土壙 (Fig. 28)

土師器

埦（1） 復元口径14.4cmを測る。胴部はやや膨み，口縁部はやや内傾する。全体に磨滅が著しいが胴内面はヘラケズリを施す。

高坏（2） 坏部の小片である。復元口径19.3cmを測る。口縁部が斜め外方に延びる器形である。

SX06土壙 (Fig. 28)

土師器

甕（3，4） 3は口縁部片，4は底部片である。3は復元口径12.2cmを測り，口縁部はやや外へ開く。4は平底気味の底部を持つ，胴内面はヘラケズリを施す。4は覆土中，3は床面より出土した。

高坏（5） 杯部の小片で口縁部を欠くため口径は不明。口縁部は内湾気味に外に開く。

SX07 土壙 (Fig. 28)

弥生式土器

器台（6） 口縁部片で復元口径10.8cmを測る。器表面は磨滅が著しいが，外面はナナメハケを施す。床面より出土したが，流れ込みであろう。

鉢（9） 復元口径19.2cmを測り，口縁部が「く」字状に外へ開く器形である。

土師器

鉢（7） 復元口径12.0cmを測る。口縁部は「く」字状に短く外反し，口縁端部を丸くおさめる。

漢式系土器

鉢（8） 軟質の鉢で，復元口径12.0cmを測る。丸く張った胴部から大きく外湾する口縁部を持つ。口縁端部は強いナデ調整により凹む。器形的に見て三雲遺跡寺ノ口II－17地区出土の[註10]

硬質の鉢に類似する。

SX08 土壙（Fig. 28）

土師器

鉢（10, 11） 10は復元口径10.3cmを測る。口縁部は「く」字状に短く外反し，内面に稜線を形成する。11は平底の底部片であり，全様は判らないが，底部の形態から漢式系土器の平底鉢の可能性がある。

高坏（12） 脚部小片で復元脚端径11.0cmを測る。筒部はエンタシス状にややふくらみ，脚裾部は筒部から内湾気味に開き，端部を丸くおさめる。

SX09 土壙（Fig. 29）

土師器

甕（13, 14） いずれも口縁部片で復元口径は13が16.6cm，14が15.4cmを測る。口縁部は胴部から「く」字状に強く外反し，内面に稜を有す。

高坏（15～19） 15, 18は坏部, 16, 17, 19は脚部片である。坏部はいずれも体部下位が屈折し，強い段を形成する。口縁部は内湾気味に軽く外反する。坏部は口径の割りに，深さが5.5～6.5cmと深い。脚部は2種類に分かれる。15，18は大きく広く，端部が更に「く」字状に軽く外反する。17は内面に段を形成する。脚が短く大きく開くので高台付 の脚部の可能性もある。15と16，18と19は同一個体の可能性がある。

SX10 土壙（Fig. 29）

土師器

壺（20） 完形品である。口縁部が内傾し，口縁端部を鋭くおさめる。床面より出土。

SX14 土壙（Fig. 29，表2）

土師器

甕（21） 口縁部小片で復元口径11.8cmを測る。口縁部は胴部からやや外開きに直立する。

高坏（22, 23） いづれも脚部片で，脚端径は復元で12.6cm，13.7cmを測る。坏部との接合部分は22が直径4.4cm，23が2.7cmと23がやや狭い。脚裾部はいずれも稜を形成して外方へ強く屈折し，端部を丸くおさめる。23は床面出土。

手捏土器（24） 復元現存高2.2cmを測る。内外面全体に指調整痕が強く残る。

百済土器

坏（25, 26） 24は完形で口径12.9cm，25は復元口径14.2cmを測る。いずれも底部は平底で，体部は底部から内湾気味に開く。口縁部は直立し，口縁部をやや内傾気味に平坦におさめる。口縁内面には段を有す。24は体内外面下部へラケズリのち，指ナデ調整を施す。25は焼成が悪い。千葉県大森第2遺跡出土のものに類例がある。[註1]

玉類（Fig. 30，表2）

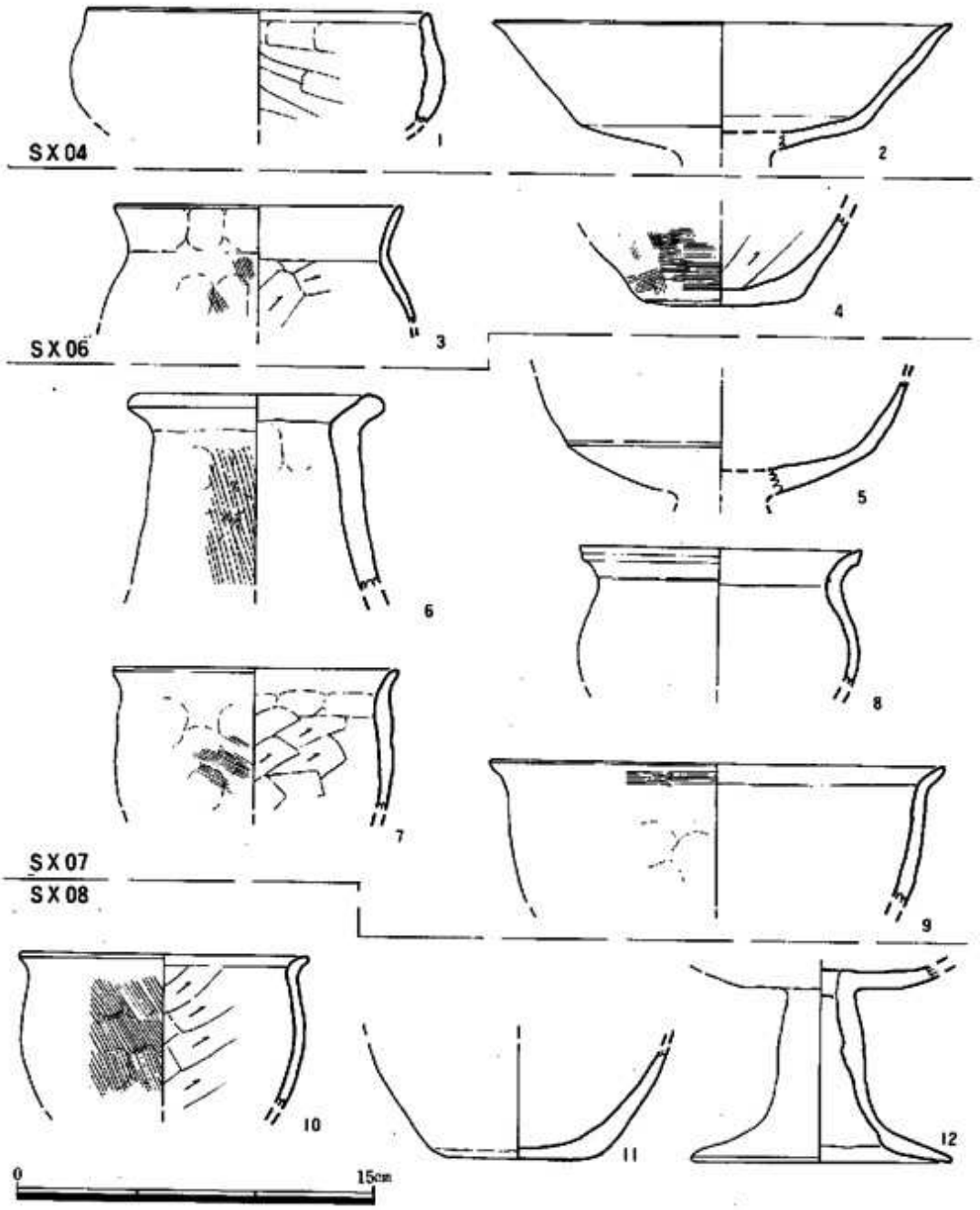


Fig. 28　SX04～08出土遺物（1/3）

滑石製臼玉　全部で48個出土した。覆土中からの出土である。大きさから2種類に分かれる。大型のものは側面を算盤玉状に作り出している。

SX15土壙（Fig. 29）

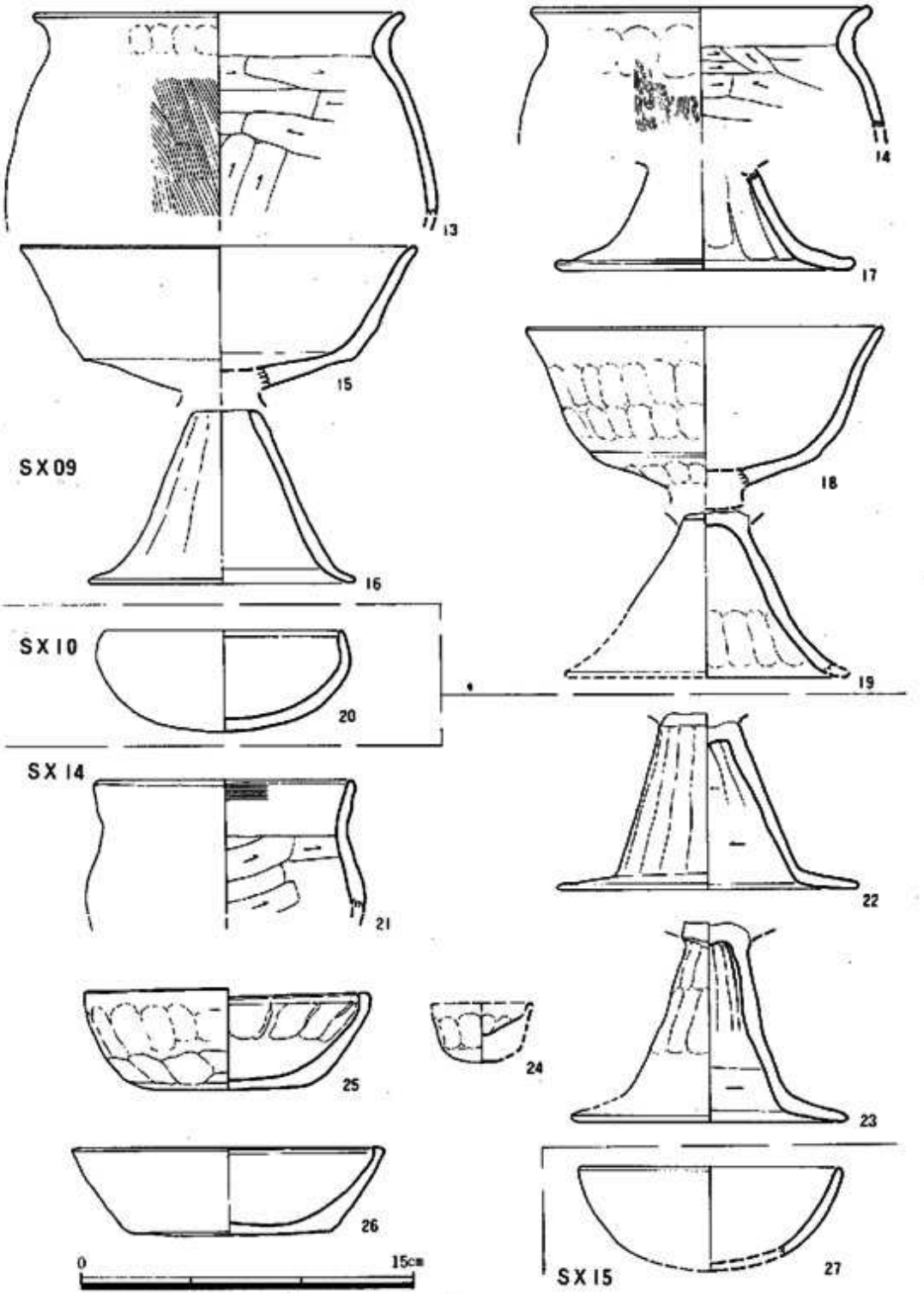


Fig. 29　SX09～15出土遺物 (1/3)

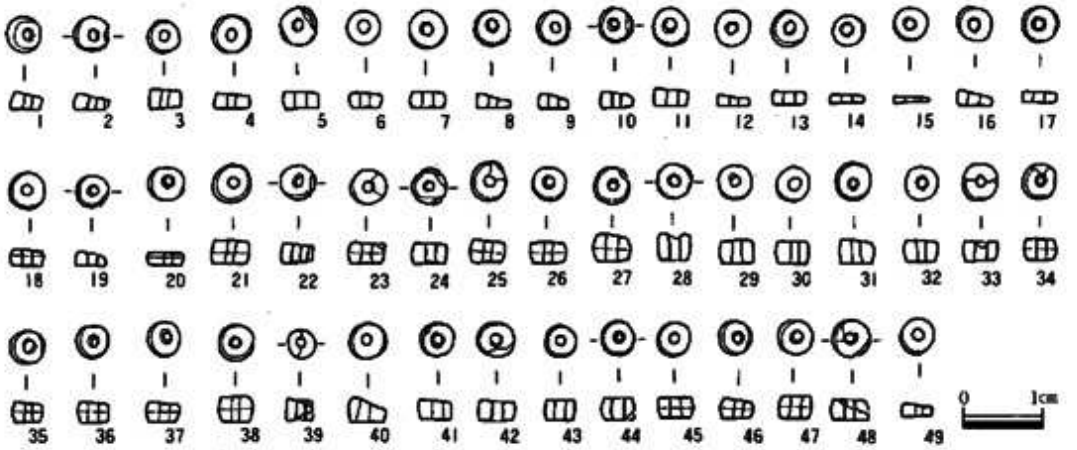


Fig. 30 SX14, 25出土玉類 (1/1)

(mm)

No.	種類	長径	短径	高さ	孔径	色調	材質	備考
1	白玉	4.0	3.5	2.5	1.0	灰褐色	滑石	
2	〃	4.5	4.0	2.0	1.0	〃	〃	一部欠失
3	〃	4.0	3.5	2.5	1.0	〃	〃	
4	〃	4.5	4.0	2.0	1.0	〃	〃	
5	〃	4.5		2.0	1.5	〃	〃	一部欠失
6	〃	4.0		2.0	1.0	〃	〃	
7	〃	4.6	4.5	2.0	1.5	〃	〃	
8	〃	4.5	4.2	2.0	1.0	〃	〃	
9	〃	4.0	3.9	2.0	1.2	〃	〃	
10	〃	4.0		2.0	1.0	〃	〃	一部欠失
11	〃	4.5	4.2	2.0	1.4	〃	〃	
12	〃	4.2		1.3	1.1	〃	〃	
13	〃	4.2	4.0	1.8	1.5	〃	〃	
14	〃	4.0	3.8	1.0	1.5	〃	〃	
15	〃	4.5	4.0	0.8	1.3	〃	〃	
16	〃	4.2	4.0	1.8	1.3	〃	〃	
17	〃	4.3	4.0	1.2	1.5	〃	〃	
18	〃	4.2	4.0	2.0	1.3	〃	〃	
19	〃	4.0	3.8	1.8	1.5	〃	〃	一部欠失
20	〃	4.5	4.0	1.5	1.1	〃	〃	
21	〃	4.2		3.0	1.1	〃	〃	
22	〃	4.2	4.0	2.6	1.2	〃	〃	一部欠失
23	〃	4.5	4.0	3.0	1.1	〃	〃	〃
24	〃	4.0		2.8	1.5	〃	〃	〃
25	〃	4.5	4.0	2.9	1.2	〃	〃	〃

(mm)

No.	種類	長径	短径	高さ	孔径	色調	材質	備考
26	白玉	4.2	4.0	2.5	1.2	灰褐色	滑石	
27	〃	4.2	4.0	3.5	1.5	〃	〃	一部欠失
28	〃	4.4	4.1	3.2	1.4	〃	〃	〃
29	〃	4.2	4.0	2.9	1.2	〃	〃	
30	〃	4.4	4.0	2.8	1.2	〃	〃	
31	〃	4.3	4.2	3.0	1.0	〃	〃	
32	〃	4.0		2.5	1.2	〃	〃	
33	〃	4.2	4.0	2.5	1.5	〃	〃	一部欠失
34	〃	4.0	3.8	2.6	1.2	〃	〃	〃
35	〃	4.0	3.7	2.5	1.0	〃	〃	
36	〃	3.9	3.6	2.6	1.2	〃	〃	
37	〃	4.0	3.8	2.6	1.2	〃	〃	
38	〃	3.8		3.0	1.0	〃	〃	
39	〃	3.6		2.8	1.0	〃	〃	一部欠失
40	〃	4.4	4.2	3.0	1.3	〃	〃	
41	〃	4.1	4.0	2.4	1.3	〃	〃	
42	〃	4.2	4.0	2.4	1.3	〃	〃	一部欠失
43	〃	3.6		2.5	1.3	〃	〃	
44	〃	3.8	3.5	2.8	1.2	〃	〃	一部欠失
45	〃	4.2	4.0	2.5	1.5	〃	〃	
46	〃	4.0	3.5	2.6	1.2	〃	〃	
47	〃	4.3	3.8	3.0	1.2	〃	〃	
48	〃	4.7	4.3	2.8	1.2	〃	〃	一部欠失
49	〃	4.0	3.8	1.8	1.1	〃	〃	SX25出土

表2 玉類計測表

土師器

埦（27）　口縁部小片で復元口径12.0cmを測る。全体に丸く，口端部も丸くおさめる。

SX16土壙（Fig. 31）

土師器

埦（28～31）　それぞれ復元口径13.5cm，12.2cm，12.9cm，14.6cmを測る。28，30，31は口径の割には底が深く，28，30の口縁部は底部から湾曲しながら直立する。29の口縁部は内傾する。31は如意形に軽く外反する。

鉢（32）　口縁部を欠失する為，全体の形状は不明だが，形態・規模から鉢とした。

SX17土壙（Fig. 31）

須恵器

高坏（33）　坏部片で，復元口径12.0cmを測る。口縁部のたちあがりは内傾が著しく，口縁端部を平坦におさめる。体部下半にはかき目を施す。脚部には4ヶ所に方形の透しがある。

石器

砥石（34）　最大長25.1cm，最大幅8.7cm，最大厚6.2cmを測る。石質は砂岩で色調は暗灰色を呈する。左側辺は破損するが上面，右側面を砥面として利用している。底面は粗割調整の痕跡が残る。

SX19土壙（Fig. 32）

土師器

壺（43，46）　43は大きく開く口縁部を持つと思われる大型壺の胴部片である。46は口縁部片で復元口径10.8cm，胴部最大径13.4cmを測る。口縁部が胴部から軽く外反する器形である。

甕（44，47）　44は口縁部片で復元口径15.8cmを測る。口縁部が胴頸部からやや開き気味に直立し，口端部を丸くおさめる器形である。47は底部片でやや平底気味を呈する。

鉢（48）　「く」字状に外反する口縁部を持つ器形である。

漢式系土器

壺（42）　軟質のもので復元完形である。口径17.2cm，器形15.5cmを測る。底部は平底気味で，胴部は下膨れする。口縁部は「く」字状に外へ開く。大阪の一須賀27号墳出土[註12]のものと縄席文の叩きの有無を除けば器形的に類似する。

鉢（45）　軟質のもので深鉢型土器である。復元口径17.2cm，器高15.5cmを測る。胴部は砲弾形を呈し，口縁部は「く」字状に短く外折する。口縁内外面には指おさえ痕が明瞭に残る。長原遺跡SE01出土[註13]のものに類似例がある。

石器

砥石（49）　破片で現存長7.8cm，最大幅8.4cm，最大厚3.1cmを測る。石質はやや目の粗の砂岩である。上下両小口，右側辺は欠損する。左側辺は粗い調整面を残すが，下面は丁寧な調整

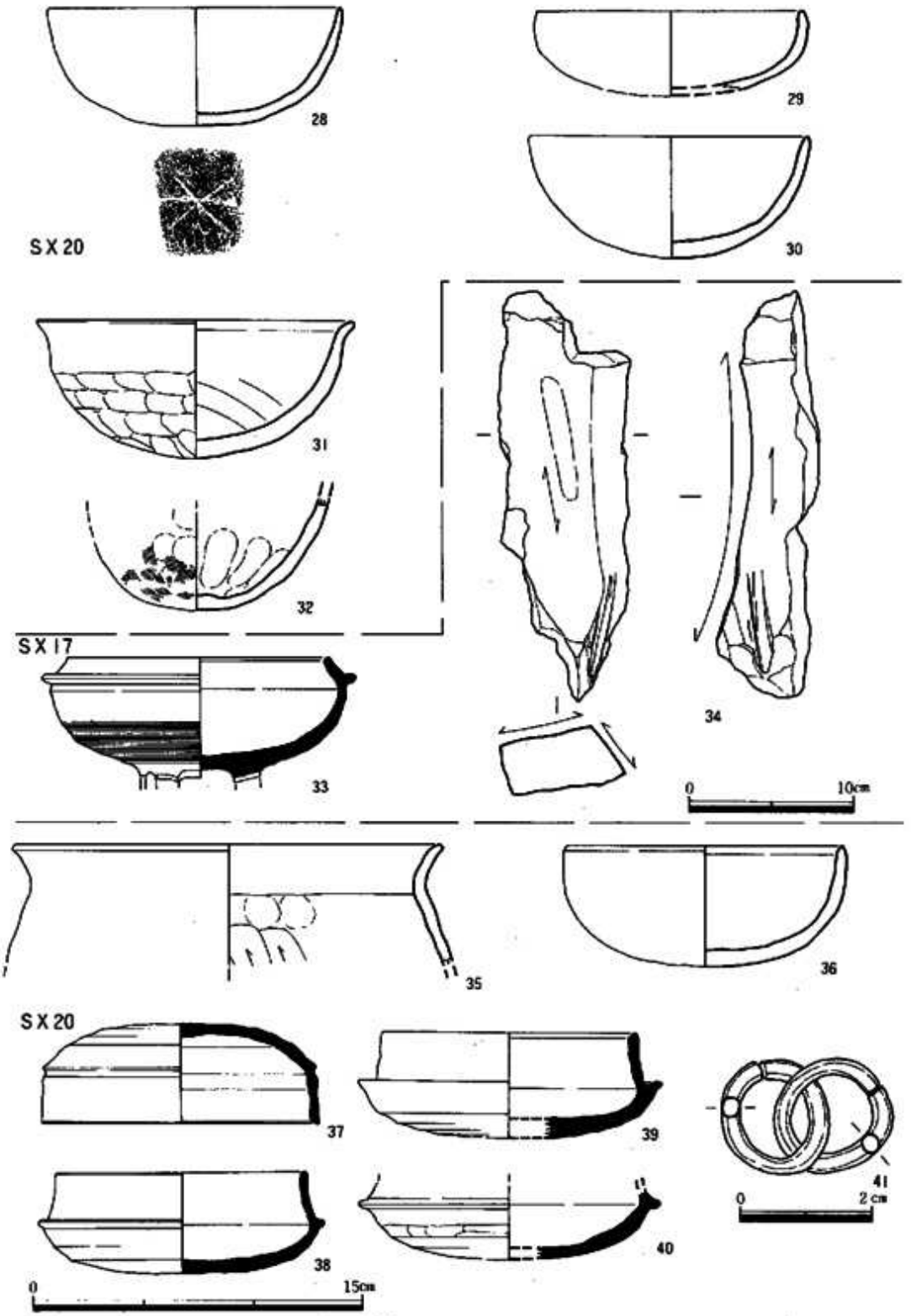


Fig. 31 SX16~20出土遺物 (1/3, 34は1/4, 41は1/1)

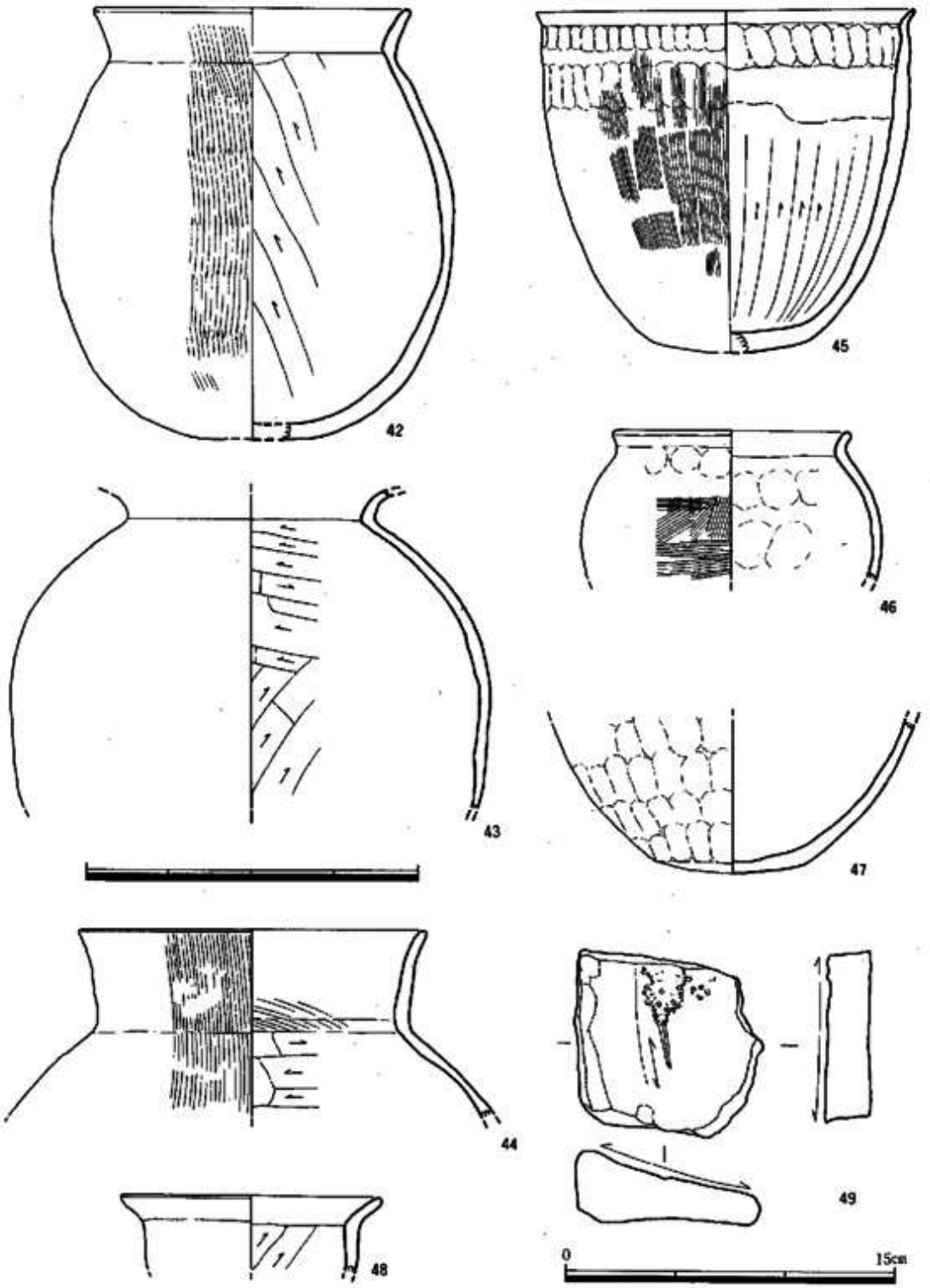


Fig. 32 SX19出土遺物 (1/3)

を施す。砥面として使用は上面のみである。

SX20土壙（Fig. 31）

土師器

甕（35）　口縁部片で復元口径19.8cmを測る。口縁部は胴部から軽く外反する。

埦（36）　復元口径12.6cmを測る丸底の埦で，口縁部は直立し端部を尖り気味におさめる。

須恵器

坏蓋（37）　復元口径12.6cmを測る。天井部は平坦で口縁部の境に稜を有す。口端部内面には軽い段を有する。天井部2／3に回転ヘラケズリを施す。ロクロ回転は逆時計廻りである。

坏身（38～40）　いずれも口縁部小片である。復元口径は38が11.2cm，39が11.6cmを測る。40は口縁端部は欠失する為不明。いずれも口縁部のたちあがりは内傾するが，高さは2.2～2.4cmと高い。底部は平坦で，2／3迄回転ヘラケズリを施す。40は回転ヘラケズリに手持ちヘラケズリを加える。

装身具（Fig. 31）

耳環（41）　2連の環で，環の直径は1.7～1.9cm，太さは3㎜と小さく細い。青銅製のものと思われる。

SX21土壙（Fig. 33）

土師器

甕（50）　胴部から口縁部にかけての小片で，復元口径は18.8cmを測る。しまりのある頸部から「く」字状に外折する口縁部を持つ器形である。

壺（51）　復元完形で，口径10.1cm，器高14.9cmを測り，最大胴径は胴部中央にある。口縁部は内湾気味に外方へ開く。器壁は薄くもろい。磨滅がひどく内外面共調整は不明。

高坏（52，53）　52は復元完形，53は口縁部片である。52は口径14.8cm，器高12.1cmを測る。体部下半に段を持ち口縁部は内湾気味に外へ開くが，口端部は軽く外反する。53は52よりも大型で口縁部が外反する器形である。

SX22土壙（Fig. 33）

土師器

鉢（54，55）　54は復元口径17.0cmを測る。口縁部は直立気味の胴部からやや外方へ開く器形である。55は復元口径21.6cm，器高18.9cmを測る大型の深鉢である。口径の割に器高が低く，胴部最大径が上半部にある。口縁部は胴部から「く」字状に外反する。例を見ない器形で朝鮮半島系土器の流れをくむものの可能性がある。

SX23土壙（Fig. 34）

土師器

鉢（56）　口縁部を欠失するが大きさ器形から鉢とした。

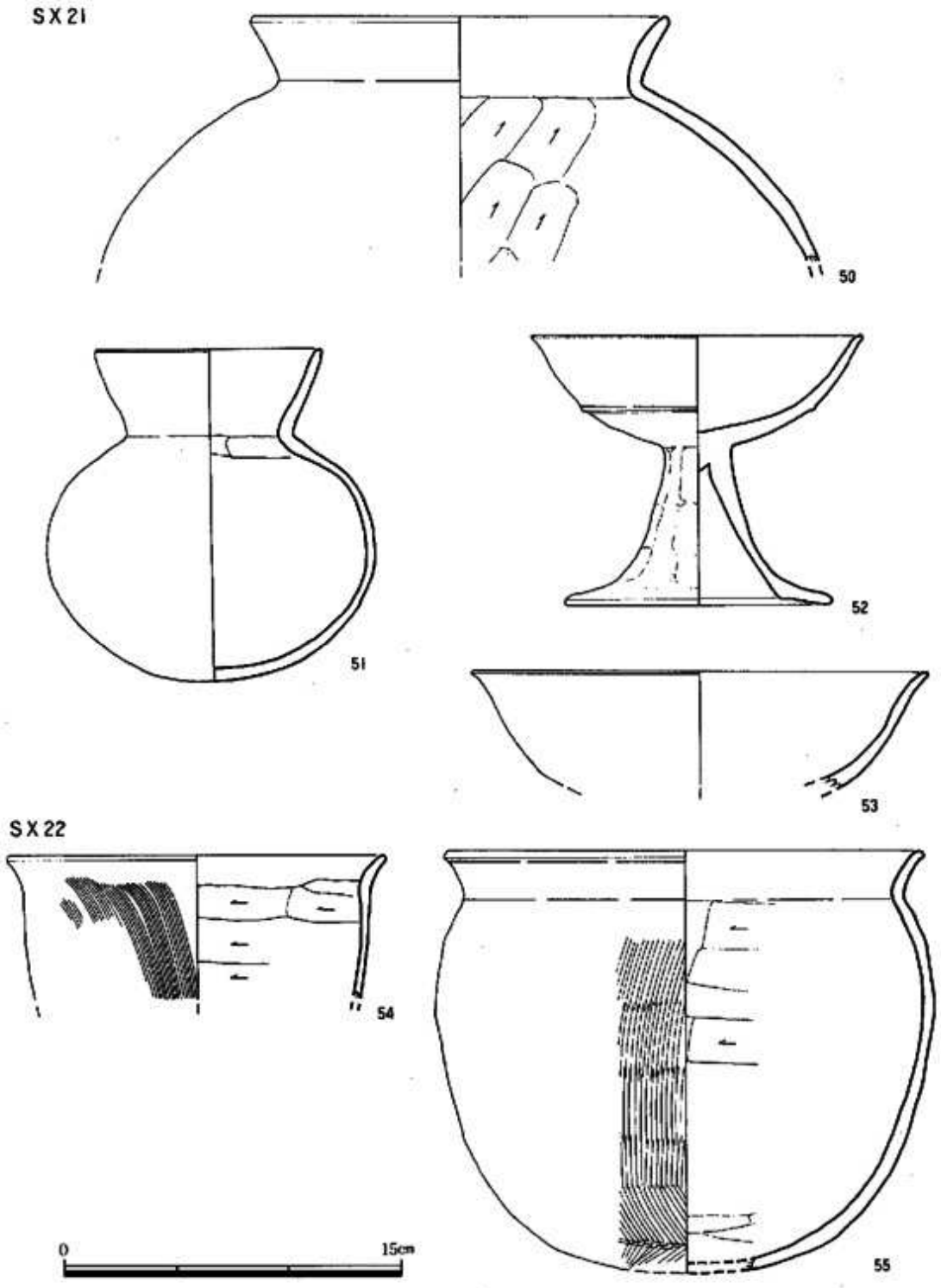


Fig. 33 SX21, 22出土遺物 (1/3)

甕（58）　胴底部片である。底部は丸底である。胴部最大径は26.1cmを測る。

高坏（57）　脚端部を欠失する。口径18.2cmを測り，杯と底が深い器形である。体部下半に段を有し，口縁部は内湾気味にのび，口端部を軽く外反させる。

SX26土壙（Fig. 34）

漢式系土器

盤（59）　底部は中窪みの平底で胴部が膨み，口縁部が直立すると思われる器形である。胴部最大径は復元で25.2cmを測る。外面は格子目叩きを施し，赤色顔料が部分的に残る。内面にはあて具痕が胴部上半に残る。

SX28土壙（Fig. 34）

須恵器

高坏（60）　復元口径12.6cmを測る。底部は丸味を持ち，たちあがりは内傾する。底部1／2迄はかき目が施される。坏身とも考えられるが，かき目調整から高坏とした。

SX30土壙（Fig. 34）

弥生式土器

甕（62）　復元口径24.0cmを測り，口縁部は逆L字型を呈する。

須恵器

坏蓋（61）　復元口径12.8cm。口縁部は天井部の境に明確な稜を形成し，直立する。口縁端部には凹線がめぐる。天井部3／4迄は回転ヘラケズリ，ロクロ回転は順時計回りである。

SX32土壙（Fig. 38）

須恵器

坏身（94）　口端部を欠失する小片で，受部は水平に作り出し，たちあがりは内傾気味に直立する。外底部2／3は回転ヘラケズリで，ロクロ回転は逆時計回りである。

SX35土壙（Fig. 38）

土師器

甑（95）　復元口径23.8cmを測る。口縁部から胴部の形態，大きさから甑とした。

SX36土壙（Fig. 35）

土師器

小型丸底壺（63）　完形品である。口径7.4cm，器高8.2cmを測り，胴部最大径は上半部にある。口縁部は胴部より斜め外方へ開き，端部を丸くおさめる。

壺（64～66）　口径はそれぞれ12.8cm，13.3cm，13.4cmを測る。64，66はほぼ完形である，

壺（75，76）　75は復元口径23.0cmを測る大型の壺で，口縁部中央に段を有し，二重口縁の面影を残す。76も大型壺で復元口径17.7cmを測る。しまった頸部から大きく外反する口縁部を持つ。

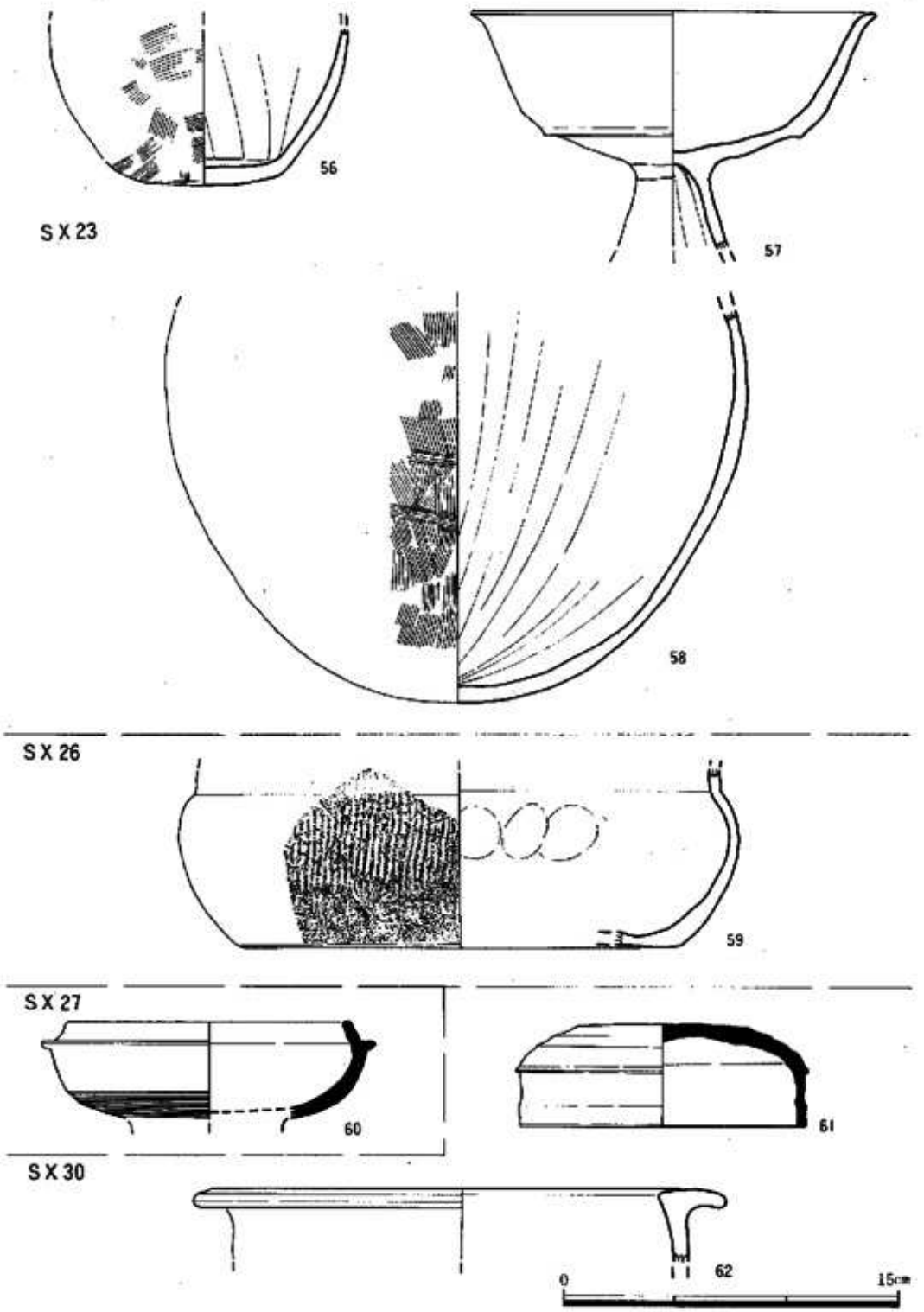


Fig. 34 SX23～30出土遺物 (1/3)

甕（77，79，80）　77，79は肩がやや張り口縁部が「く」字状に強く外反する器形である。復元口径は18.4cm，15.4cmを測る。80は復元口径24.0cm，最大胴径23.0cmを測る。やや直立気味の胴部から，口縁部は「く」字状に短く外反し，口縁端部を「コ」字状におさめる。

甑（78）　底部片で直径2.2cmの孔が，外方から焼成後穿れている。底部には粗痕が残る。

高坏（81～93）　坏部片，脚部片がそれぞれ破片で出土した。完形に近いものは81，84だけである。坏部片はいずれも体部下半に段を有するもので，ほぼ同一の器形であるが，口縁部が直立するもの，わずかに外反するものというわずかな差がある。復元口径は81が17.0cm，82が17.0cm，84が16.6cm，85が15.6cm，86が18.4cm，87が17.0cmを測る。脚部は大きくラッパ状に開くもの（88）脚裾部が「く」字状に外折し，端部を水平に作り出すもの（83，84，88～93）の大きく2類に分かれ，後者については更に裾端部が内湾気味のもの（83，92），裾部が軽く外反するもの（84，89，90，93）の2類に細分出来る。82と83は大きさから同一個体の可能性がある。

漢式系土器

鉢（69，70　71～74）　いずれも軟質の深鉢型土器である。69　70は口縁部片で復元口径11.0cm，11.7cmを測る。丸味を持った胴部から口縁部が「く」字状に強く外折する器形である。70の口縁直下には沈線がめぐる。71～75は底部片でいずれも平底である。胴部は内湾気味に直立する。69，70のような口縁部を持つ器形であろう。底部は大型と小型の2種類に分かれる。大型は71で底径8.7cm，小型は72～74で7.2cm，7.0cm，6.0cmを測る。71は底部がやや中窪み，底部と胴部の境はヘラナデ調整である。72は胴外面に叩きの痕跡がかすかに残り，底部との境にヘラケズリを加える。73は型作りによるもので内底面は丸く，胎土に金雲母を含む。74は底部との境はヘラナデを加える。

SX38土壙（Fig. 38）

土師器

高坏（96，97）　96は復元口径15.8cmを測る坏部片で，体部下位に段を有し，口縁部は軽く外反する。97の脚部は大きく外方に開き，脚端部を水平に作り出している。

SX39土壙（Fig. 38）

土師器

高坏（98）　脚部片で，筒部はエンタシス状にややふくらみを持ち，裾部は「く」字状に外折する。

須恵器

台付壺（99）　口径11.5cm，器高17.2cm，脚径14.8cmを測る復元完形品である。胴部最大径を上半部に持ち，口縁が直立する短頸壺にラッパ状に大きく開く高台が付く。高台端部は端状におさめる。胴部から高台部上半には静止ヘラケズリを，口縁部にはヘラ描文様が施される。

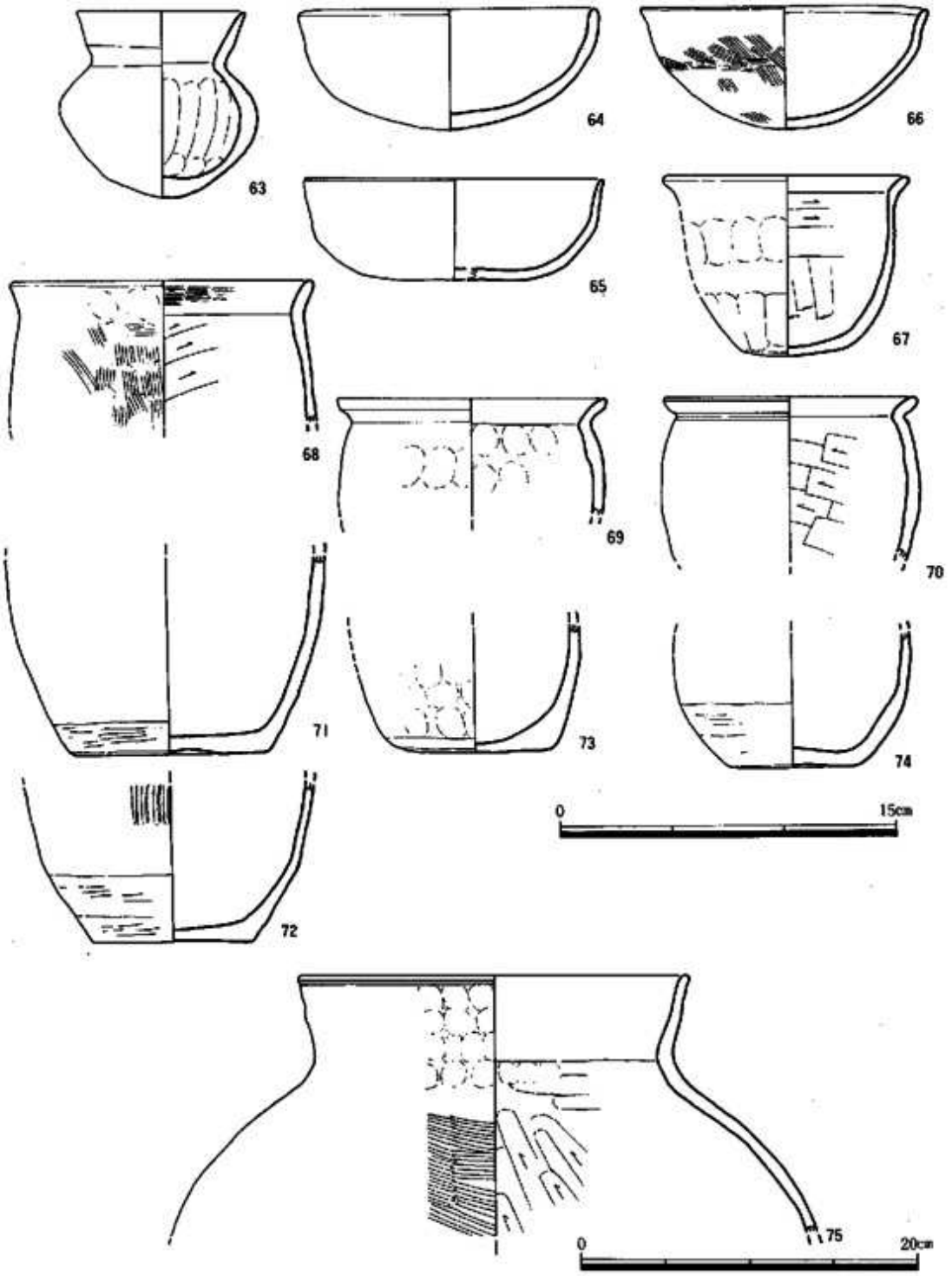


Fig. 35 SX36出土遺物 I (1/3, 75は1/4)

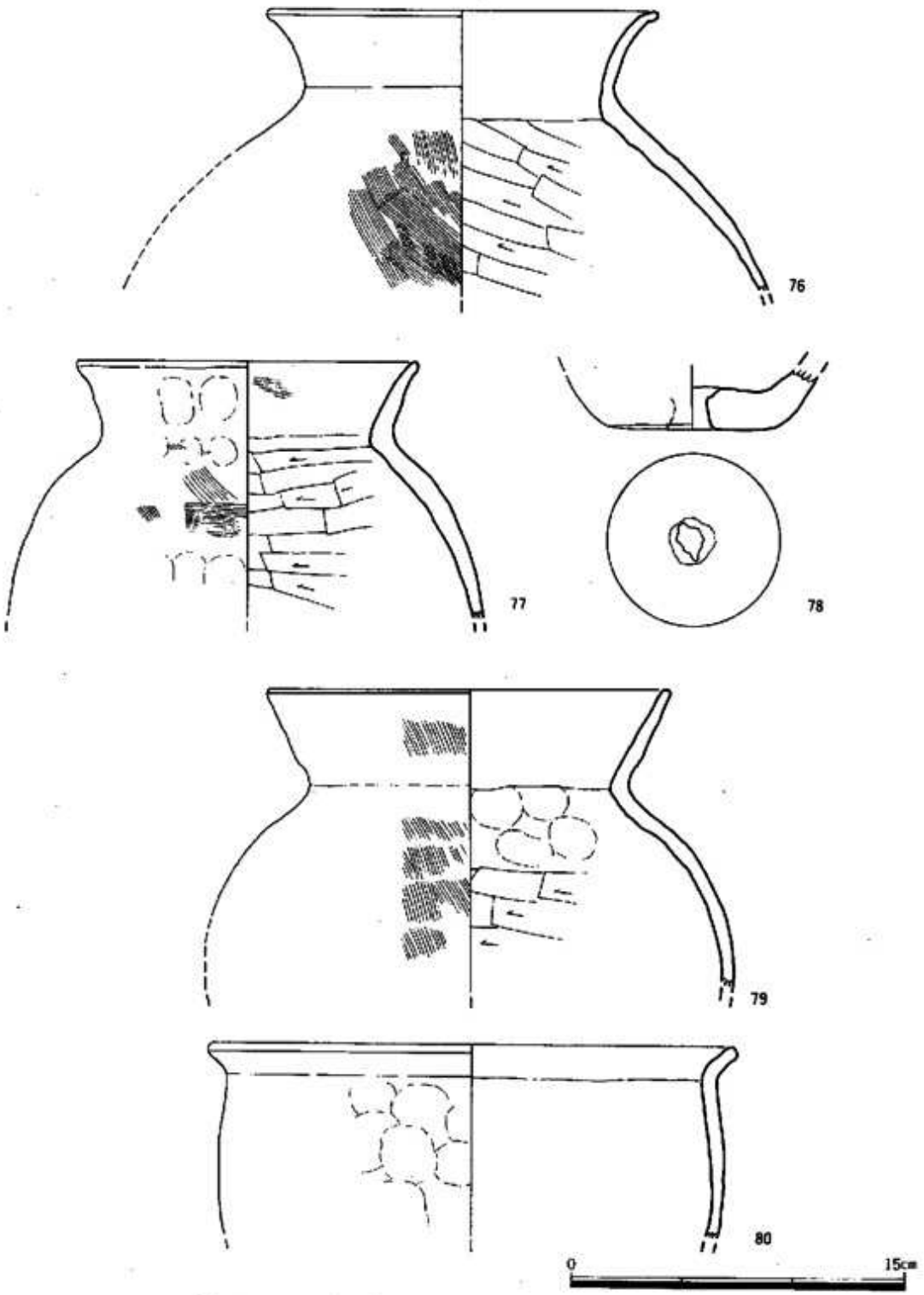


Fig. 36 SX36出土遺物II (1/3)

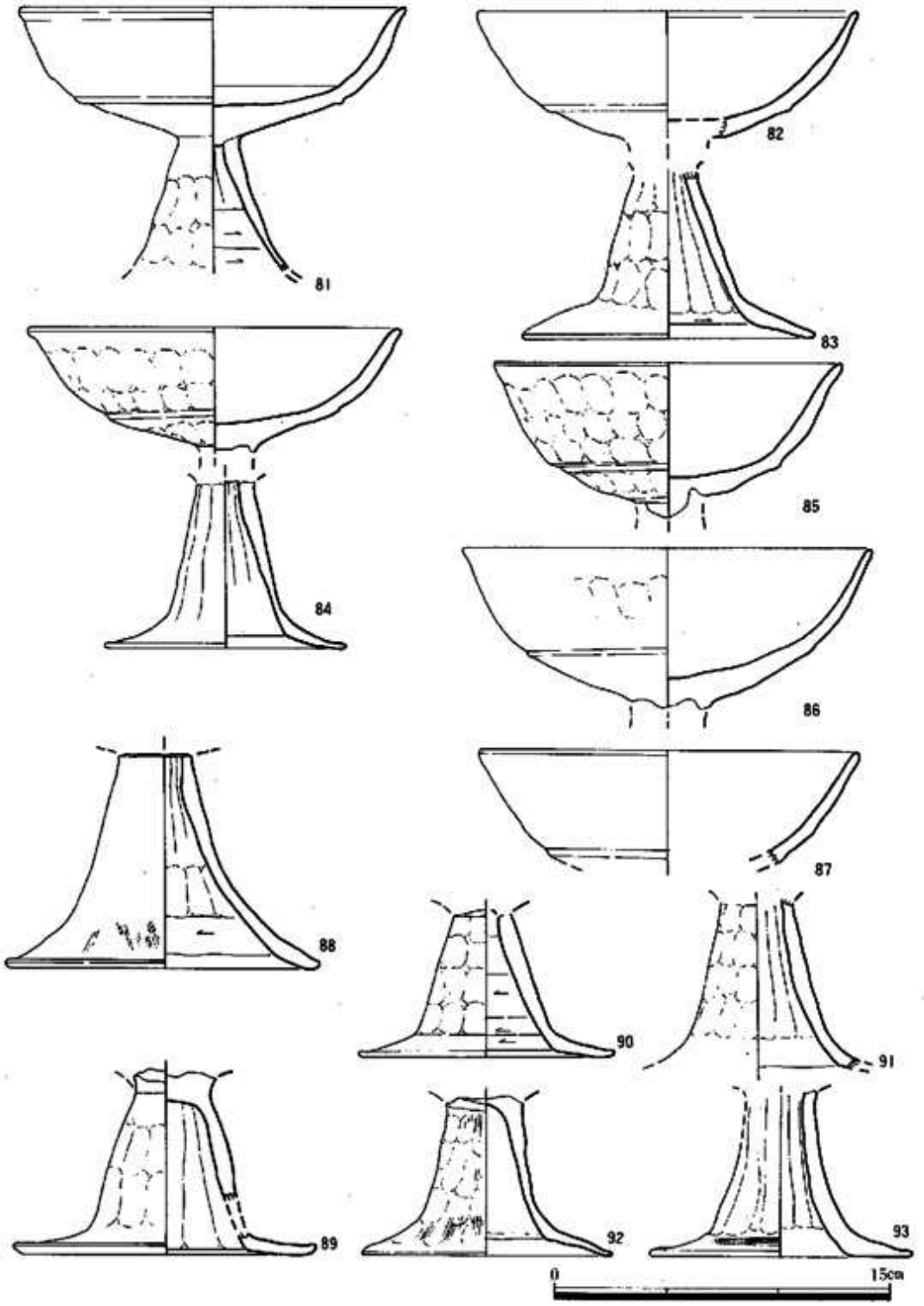


Fig. 37　SX36出土遺物III (1/3)

SX40土壙（Fig. 38）

弥生式土器

壺（100） 胴部片で最大胴径20.7cmを測る。胴部は扁平な算盤玉状を呈し，底部はやや不安定な平底である。

甕（101） 復元口径12.6cm，器高18.8cmを測る。長胴の丸味を持った胴部で，最大胴径は中央やや上半にある。口縁部は短く外反し，端部を水平に作り出す。

SX46土壙（Fig. 39）

土師器

高坏（102，103） 102は坏部片，103は復元完形である。102は復元口径16.8cmを測り口径の割に深さがある。103は口縁部が短く直立する皿状の浅い坏にラッパ状に外に開く脚を持つ器形である。器形的には身近に類例が見られず，大阪府の野中古墳[註14]，八尾南遺跡[註15]の中に類似例がある。

漢式系土器

甕（104） 口縁部片で復元口径15.7cmを測る。口縁部は外方へ開き，口縁端部は強いナデにより凹線がめぐる。胴部には5～6本単位のヨコ平の平行叩きを施す。焼成は良好で須恵器に近い。

SX47土壙（Fig. 39）

土師器

埦（105～107） 105，106は口縁部片，107は完形に近い。口径は105，106が復元で13.0cm，12.2cm，107が14.5cmを測る。107は他に比べ大きく底も深い。口縁部は如意形に軽く外方へ開き，体外面は淡青灰色をおびる。

壺（108），外方へ大きく開く器形の口縁部片である。復元口径17.2cmを測る。

高坏（110，111） 111は復元口径14.4cmを測る坏部小片である。体部下半に段を有す。口縁部は内湾気味に大きく広がり，口端部を軽く外反させる。111は脚部片である。脚裾部は明確な稜線を持って「く」字状に屈折する。

器台（112） 復元口径20.2cmを測る器形である。体部中央に1条の三角突帯がめぐり口端部は丸くおさめる。

漢式系土器

甕（109，113） 109は軟質の長胴を呈すと思われる甕である。復元口径20.5cmを測り，口縁は大きく外湾して開く。口端部直下に粗いハケ目を，胴部には横方向の平行叩きを施す。土師器の可能性もある。113は平底気味の底部片で，底部は中窪む。外面には縄席文様の叩きを施し，内面にはあて具痕が残る。焼成は良好で硬質である。

SX48土壙（Fig. 39）

土師器

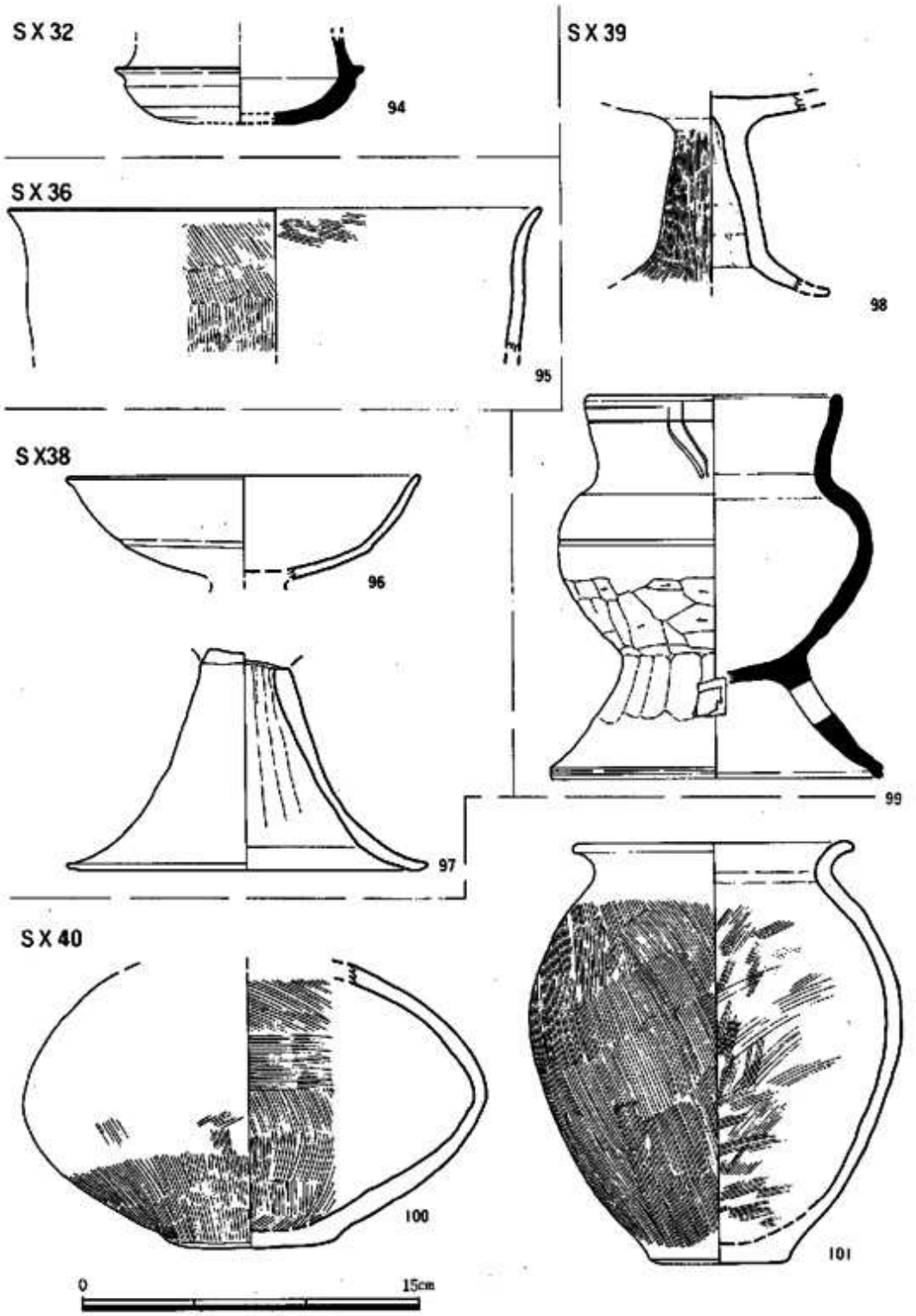


Fig. 38 SX32～40出土遺物(1/3)

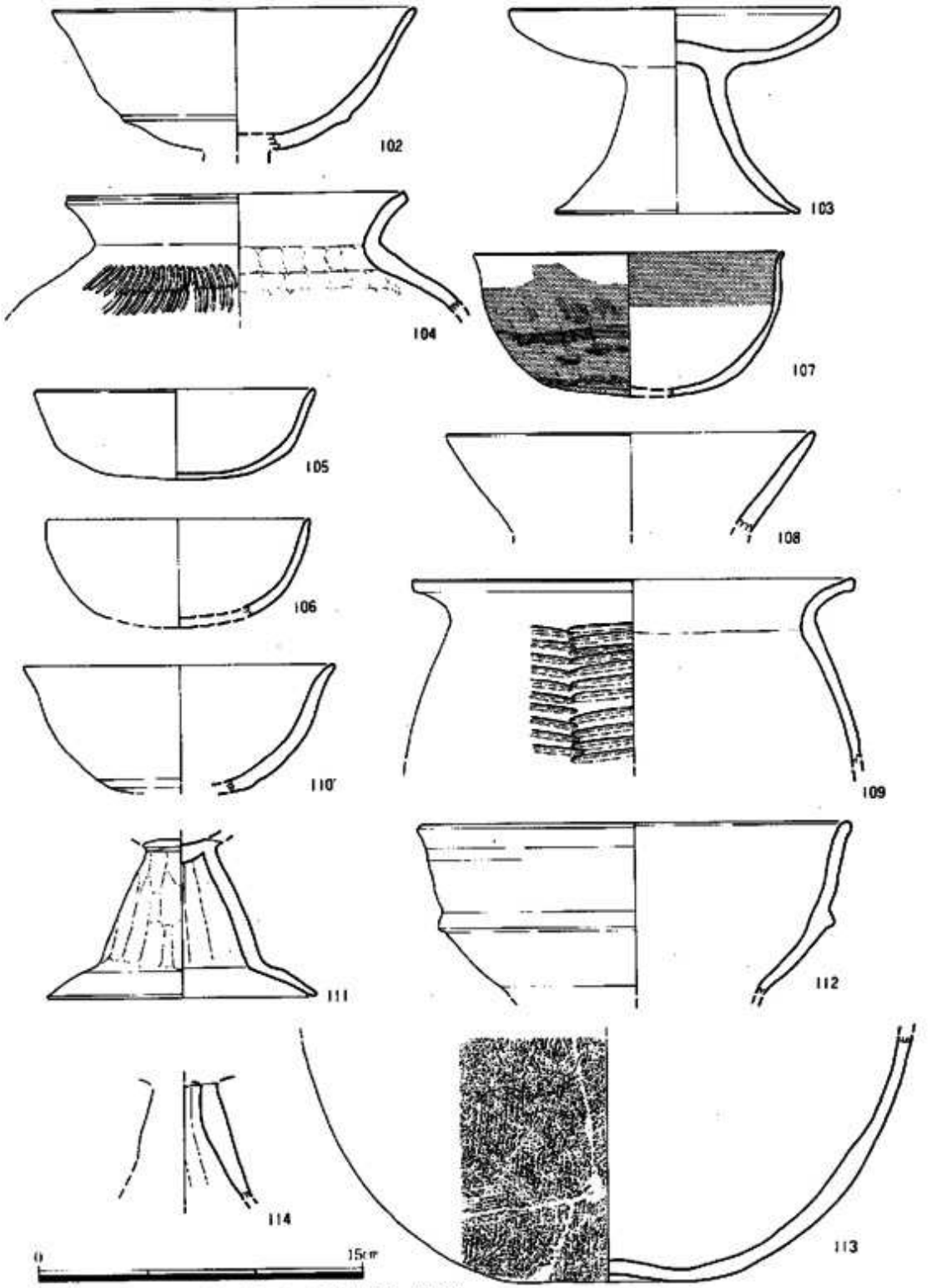


Fig. 39 SX46－48出土遺物 (1/3)

高坏（114），脚部片である。筒部がややふくらむ器形である。

SX50土壙（Fig. 40）

土師器

甕（115）　肩部片である。口縁部はやや開き気味に直立するようである。胴部外面はハケ目，内面はヘラケズリ仕上である。

把手（117）　牛角形を呈する把手である。長さ7.2cm，幅3.4cm，直径3.0cmを測り，上面にヘラによる切り込みが入る。指調整仕上である。漢式系土器の可能性がある。

漢式土器

鉢（116）　軟質で深鉢型土器の底部片である。外面にはタテ，ヨコの平行叩きが合わせて施されている。内面には指ナデ調整痕が残る。

井戸出土遺物

SE31（Fig. 41，42，PL25）

土師器

埦（118，119）　118は復元口径14.0cm，119は復元口径13.3cmを測る。調整は119が内外面ナ

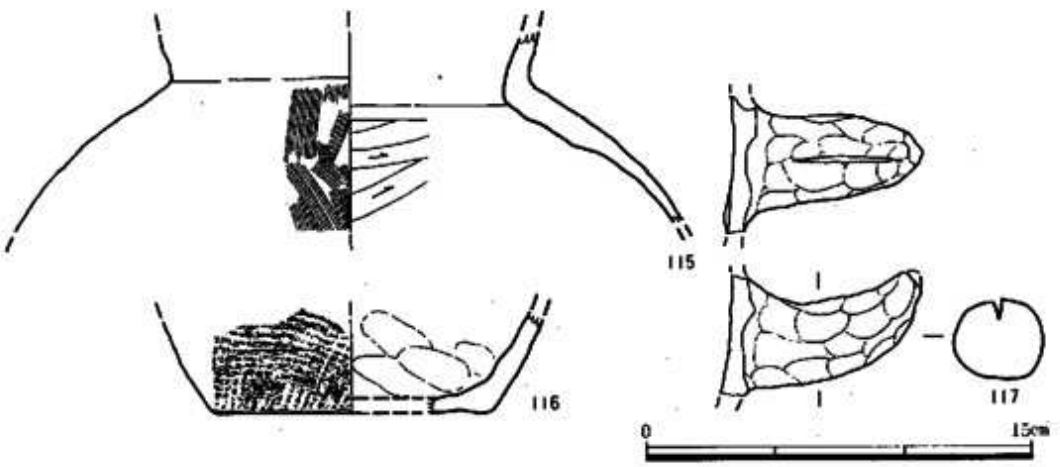


Fig. 40　SX50 出土遺物（1/3）

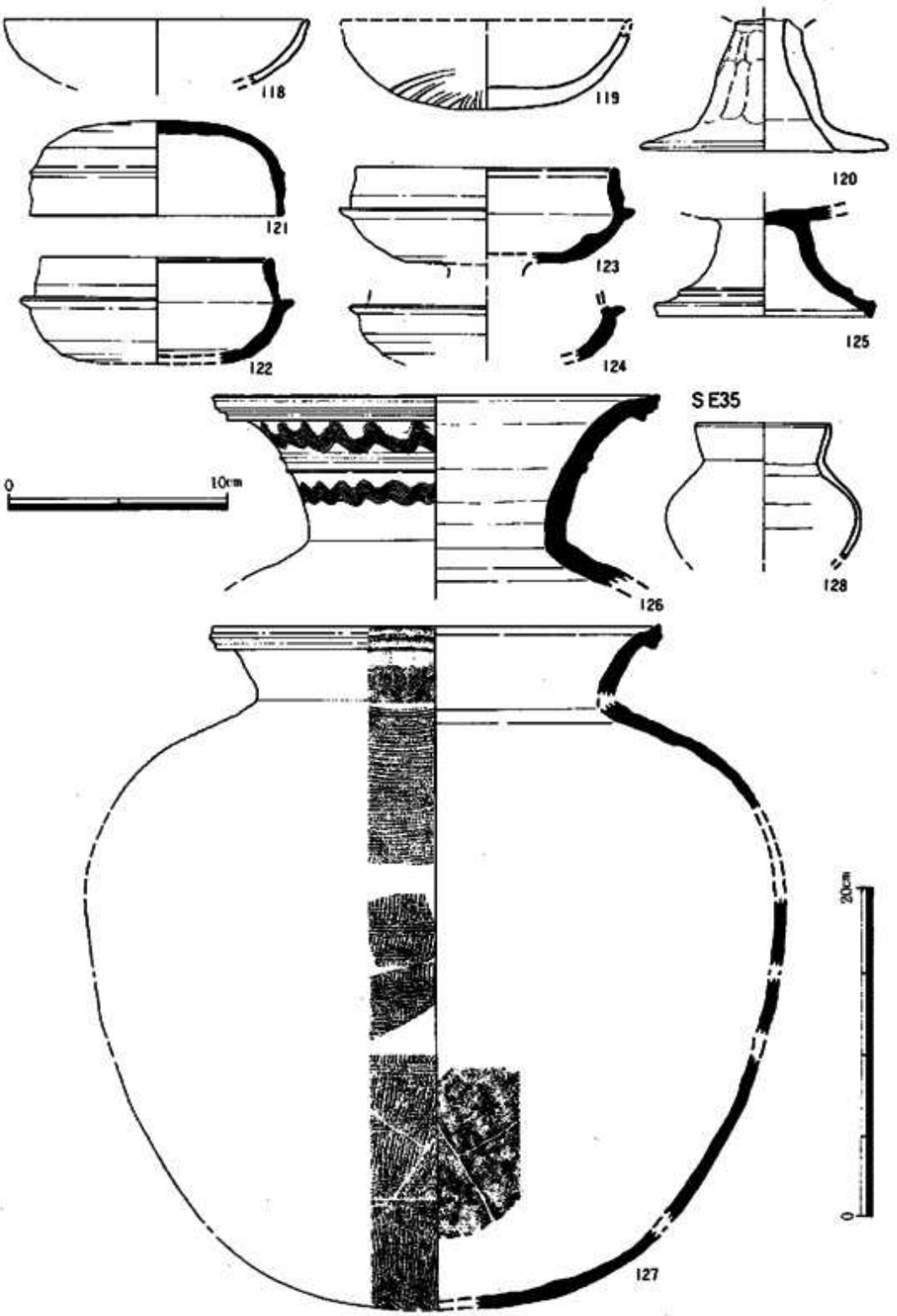


Fig. 41　SE31, 35出土遺物 (1/3, 1/4)

デ，119は外底部から胴部にかけて不整方向の粗いハケ目を施す。いずれも覆土下層より出土した。

高坏（120）　覆土下層より出土した脚部片である。脚裾部は「く」字状に屈折して水平に延びる。端部は丸くおさまる。内面はヘラケズリ，外面は指ナデ仕上である。

須恵器

坏（121，122）　121は坏蓋，122は坏身である。復元口径は121が11.6cm，122が10.6cmを測り，法量から見てセット関係にあると考えられる。いずれも口縁部のかえり，立ち上りが直又は直立に近く，端部を121は平坦に，122は段を持っておさめている。121の天井部2／3迄，122は体部1／2迄回転ヘラケズリである。ロクロ回転は逆時計回りである。いずれも上層より出土した。

高坏（123～125）　小片であるため，全様はとらえられないが，123，124は高坏の坏部片と考えられる。123は復元口径12.0cmを測る。たちあがりは，123が直立気味，124がやや内傾すると思われる。125は脚部片で，脚端部は逆「く」字状に直立しておさめる。底径は9.8cmを測る。いずれも覆土上層より出土した。

甕（126，127）　126は復元口径20.4cmを測る。口頸部は大きく外反し，口端部直下に三角の突帯が，頸部中央に2条の三角突帯が巡り，その上下に波状文が施される。上層より出土した。127は小片より復元したものである。復元口径27.2cmを測り肩がはる器形である。口端部を上方につまみ上げ，口縁直下には一条の三角突帯をめぐらす。肩部外面には平行叩きのち溝の深

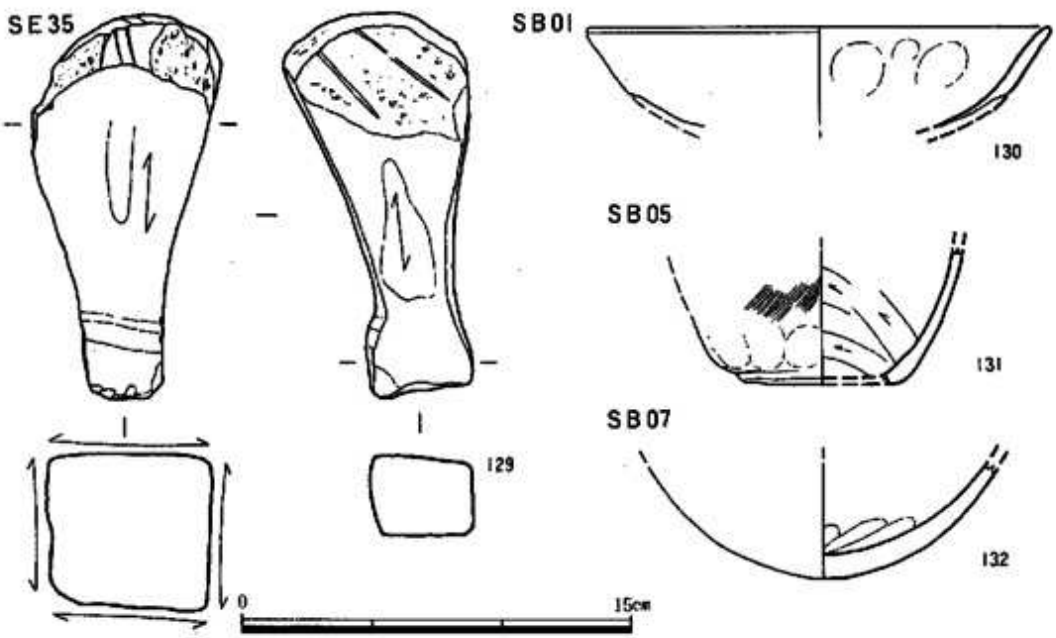


Fig. 42　SE31，掘立柱建物出土遺物（1/3）

いかき目を加え，体部には平行叩きを加え，2～3cm間隔で5～6条単位の沈線をめぐらす。内面は同心円叩きを加えた後スリ消す。

石器（Fig. 42）

砥石（129），最大長15.0cm，最大幅6.9cm，最小径3.0cm，最大厚7.1cmを測り，完形である。砂岩製で4面を砥面として利用している。上端部分には粗割後の敲打調整痕が残る。大きさから見て手持ち砥石であろうか。

自然遺物

多数の種子が，出土しているが，種類の同定は行っていない。

SE35（Fig. 41，PL25）

土師器

壺（128）　復元口径6.3cm，最大胴径9.0cmを測る。口縁端部を少しつまみあげる。胴部内面が，ヨコヘラケズリ調整の他はヨコナデ調整である。器壁は薄く，硬く，焼成は良好である。井戸底より出土した。

掘立柱建物出土遺物

各柱穴より少量ずつ出土しているが，細片が多く，図示しえない。130はSB01，131はSB05，132はSB07より出土した。

土師器

高坏（130）　復元口径17.8cmを測る口縁部片である。小片の為全体の器形は判らないが，体部下半に段を有し，口縁部が大きく開く器形であろう。

鉢（131）　底部小片である。平底の底部から胴部が内湾気味に開く器形である。胴部と底部の境界に軽い段を有す。

132は丸底の底部である。小片の為器種は不明，甕の底部片と思われる。

溝出土遺物（Fig. 43～59，PL26～30）

SD02（Fig. 43～49）

D区の北側岸沿い部分を中心に弥生時代中期から古墳時代にかけての，多量の遺物が出土した。第Ⅰ層は古墳時代，第Ⅱ層は弥生時代後期の土器が出土している。出土量としては弥生式土器が圧倒的に多い。器種としては，弥生時代では甕，壺，器台，高坏，鉢，石器がある。又，古墳時代の遺物としては土師器，甕，高坏，壺，甑，須恵器の坏などがある。又，川底より流木に混じって多量の種子などが出土した。種子については種の同定を行ってはいない。

弥生式土器

甕（133～146）　133，134は口縁部が「く」字状に開く小型壺で，いずれも完形である。口

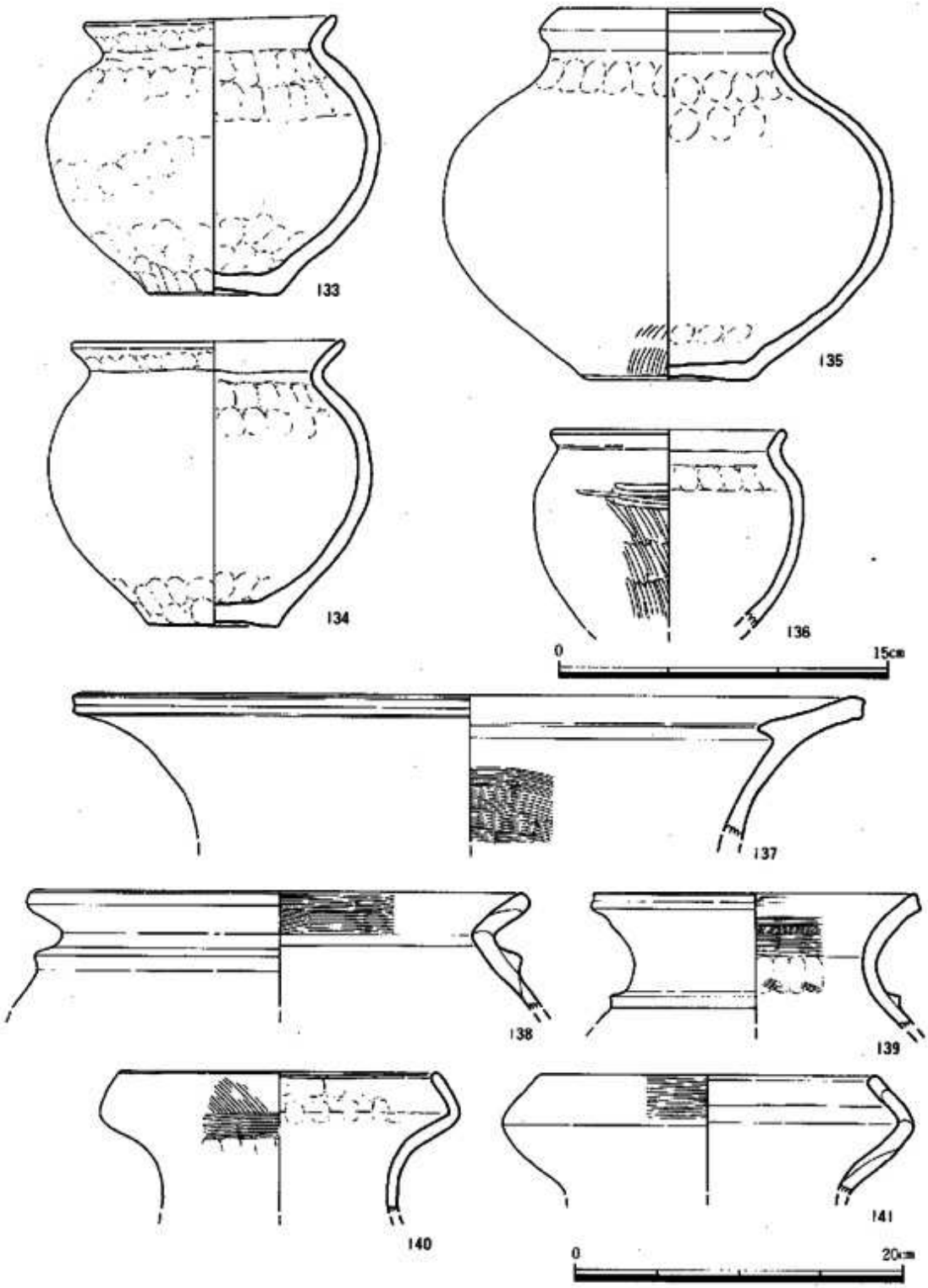


Fig.43 SD02出土遺物Ⅰ (1/3, 1/4)

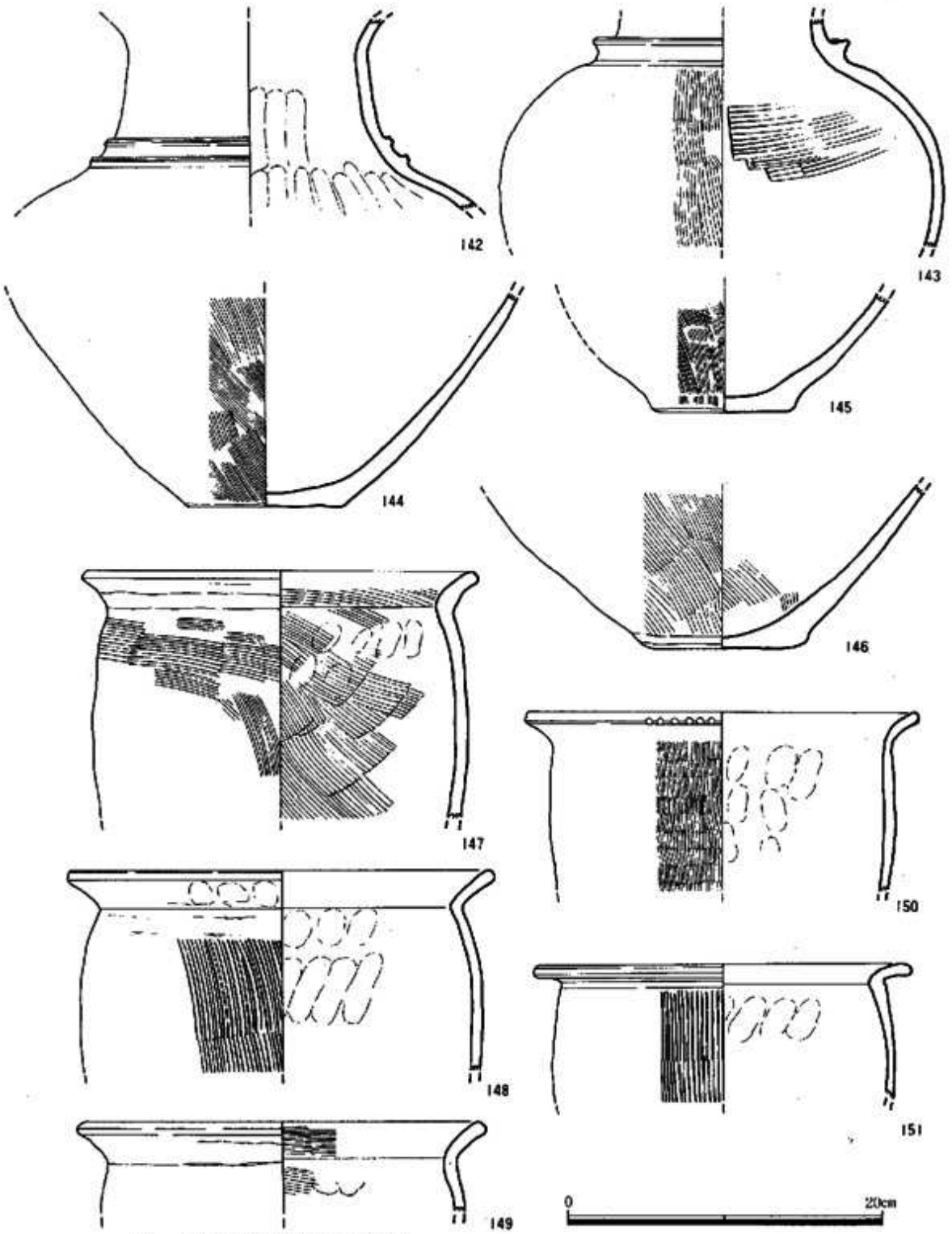


Fig. 44 SD02出土遺物II (1/4)

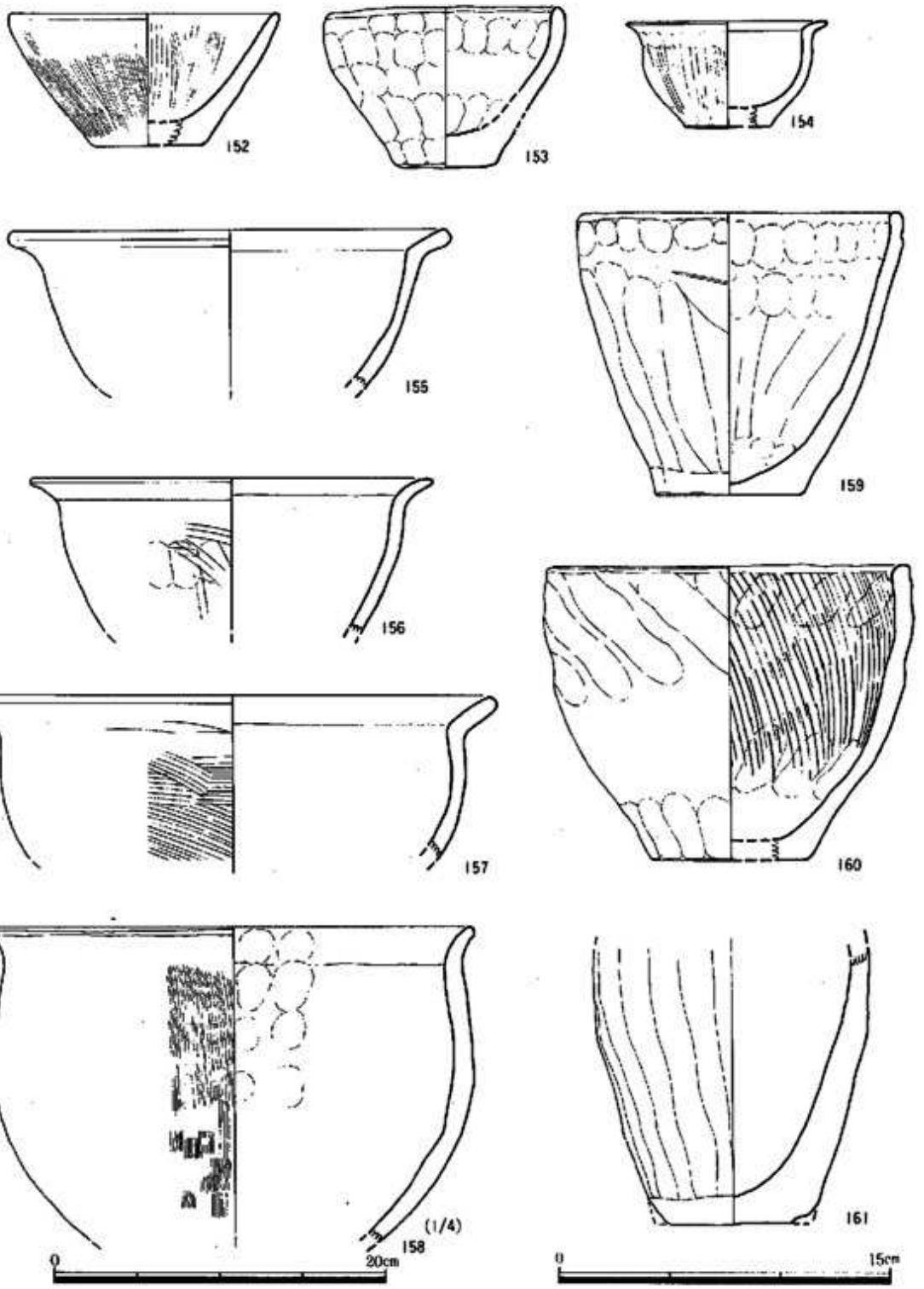


Fig. 45 SD02出土遺物III (1/3、158は1/4)

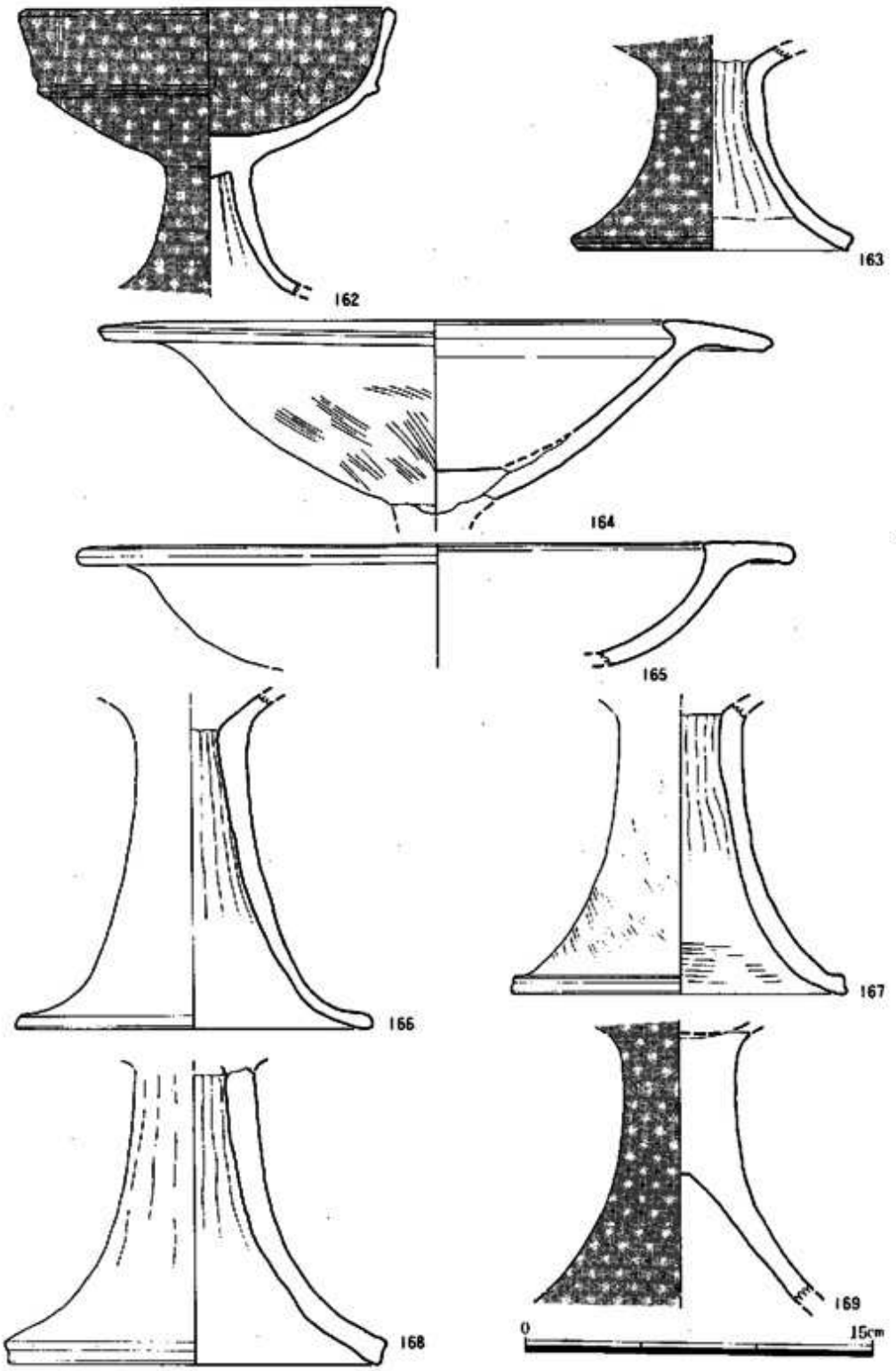


Fig. 46 SD02出土遺物Ⅳ (1/3)

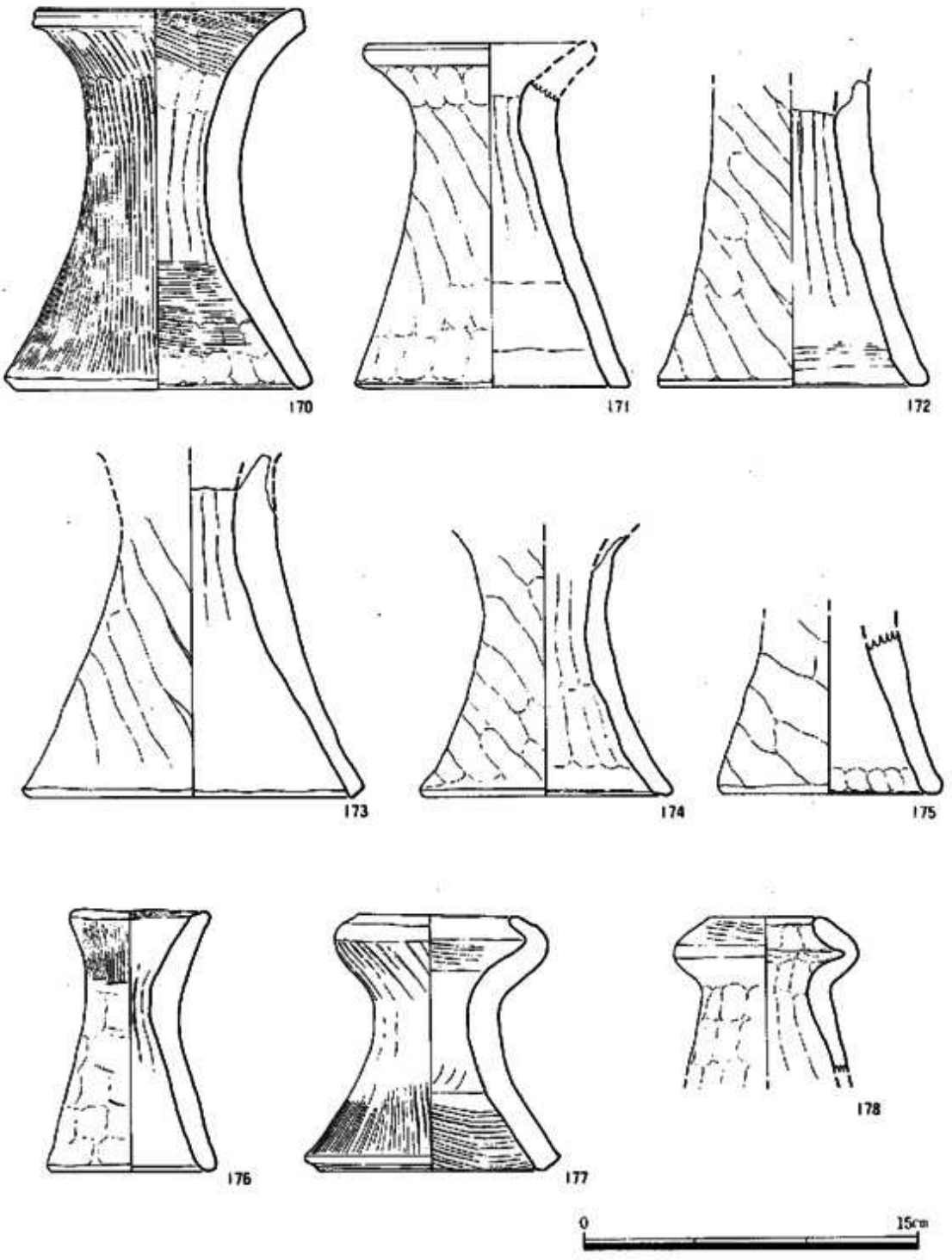


Fig. 47 SD02出土遺物V (1/3)

径は11.6cm，12.4cmを測る。135は胴部が扁球気味の袋状口縁壺である。復元口径は9.7cm，最大胴径20.6cmを測る。136は復元口径10.8cmを測る口縁部が短く外に開く小型壺である。137は内傾する鋤先状口縁のもので，復元口径は48.0cmを測る。138は「く」字状に外折する口縁を持つもので，口縁直下に一条の三角突帯がめぐる。139は復元口径19.4cmを測る。口縁端部に強いナデによる浅い凹線がめぐり，頸部に一条の三角突帯をめぐらす。140，141は大型の袋状口縁壺である。142は口頸部片で，頸部に2条の「コ」字状の突帯を，143は胴部片で頸部に台形状の突帯を一条めぐらす。144～146は壺の底部片で底径は8.4～10.0cmを測る。

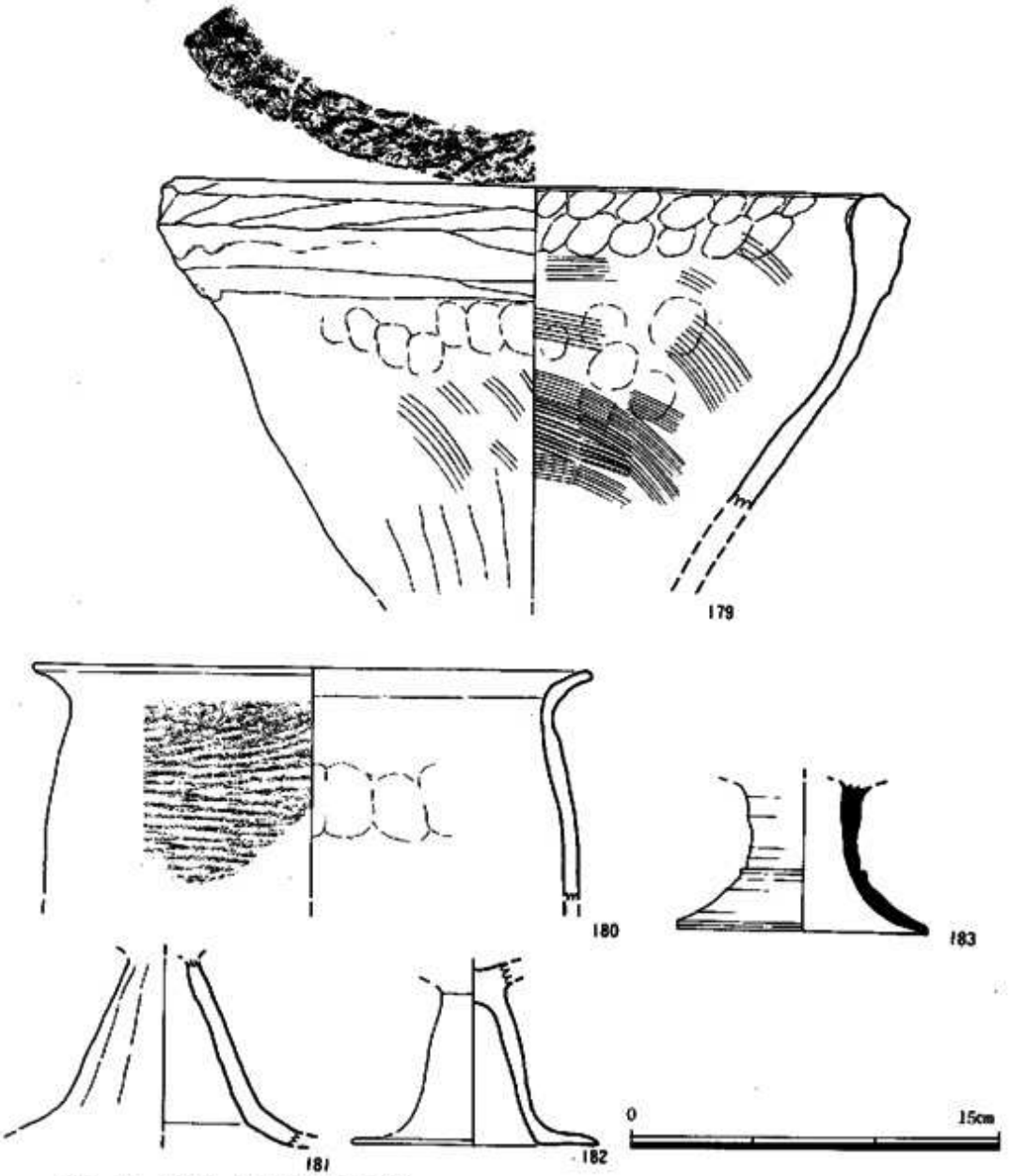


Fig. 48 SD02 出土遺物Ⅵ (1/3)

甕（147～151）　147～149は「く」字状口縁を持つものである。150は大きく「く」字状に外反する口縁で，口端部には刻目を施す。151は逆L字型口縁をもつ器形である。

鉢（152～161，179）　152は復元口径12.2cmを測る斜め外方へ開く器形である。154は口径10.2cmを測り，口縁部が直立する器形である。154は復元口径9.2cmを測り，口縁部が「く」字状に内側に稜を形成して外折する器形である。155～157は復元口径19.6cm，17.8cm，23.4cmを測る大型の鉢で，口縁部はいずれも「く」字状に外折する。158は全体に丸っこい深鉢型の器形である。復元口径は28.4cmを測り大きい。口縁部は如意形に軽く外反する。159～161は直立する口縁を持つ深鉢型の器形である。159は口径14.6cmを測り，外面はヘラナデ仕上である。口縁部には指調整痕が明瞭に残る。160は復元口径16.6cmを測り，口縁部外面による成形の指調整と思われる。中指と薬指痕跡が明確に残っていた。161は159と同様外面をヘラナデで丁寧な仕上を行う。161より器形はやや細い。179は復元口径29.6cmを測る大型の深鉢で他に類例を見ないものである。作りは粗雑で口縁部は著しく肥厚し，内面には指頭圧痕，口縁端部には貝殻腹縁による刻目が付く。体外面下半はヘラナデ，内面はハケナデである。外面には煤が厚く付着する。いずれも黒色粘質土層より出土。

高坏（162～169）　162は復元口径15.6cmを測り坏部の体部下半部に1条の三角突帯がめぐる。坏部内外面には赤色顔料が残る。164は脚部片で脚端部に1条の凹線がめぐる。164，165は，いずれも鋤先状口縁を持つものである。166～169は，大型の高坏の脚部片である。

器台（170～178）　いずれも器台である形態からいって4種類に分類できる。Ⅰ類は上下の開きがほぼ同一のもの。Ⅱ類は頸部の締りが強くて高い位置にあるもの。Ⅲ類は上下の開きは，ほぼ同一であるが，Ⅰ類に比べて小型のもの，Ⅳ類のように小型で器高が低く，口縁部が袋状をなすものである。Ⅰ類には170があり，Ⅱ類には171～173がある。Ⅲ類には174，175があり，Ⅳ類には177，178がある。

土師器

甕（180）　長胴の甕であろう。口縁部片で復元口径22.6cmを測るしまりのない頸部から軽く「く」字状に外反する口縁を持つ。体外面には横の平行叩が施される。

高坏（181，182）　いずれも脚部片である。181は脚部が大きく開く器形である。182はエンタシス状にややふくらみを持った筒部から脚裾部を水平に作り出す器形である。

須恵器

高坏（183）　183は，坏部小片である。受部はほぼ水平に作り出す。脚部片で，筒部下位に一条の三角突帯をめぐらす。他に図示していないが，他に坏部の細片がある。

石器

石斧（184，185，187）　いずれも今山産の玄武岩の大型蛤刃石斧の欠損品である。184は現存長7.9cm，最大幅7.2cmを測る。185は現存長7.5cm，最大幅7.5cmを測る。187は小片で現存長5.0

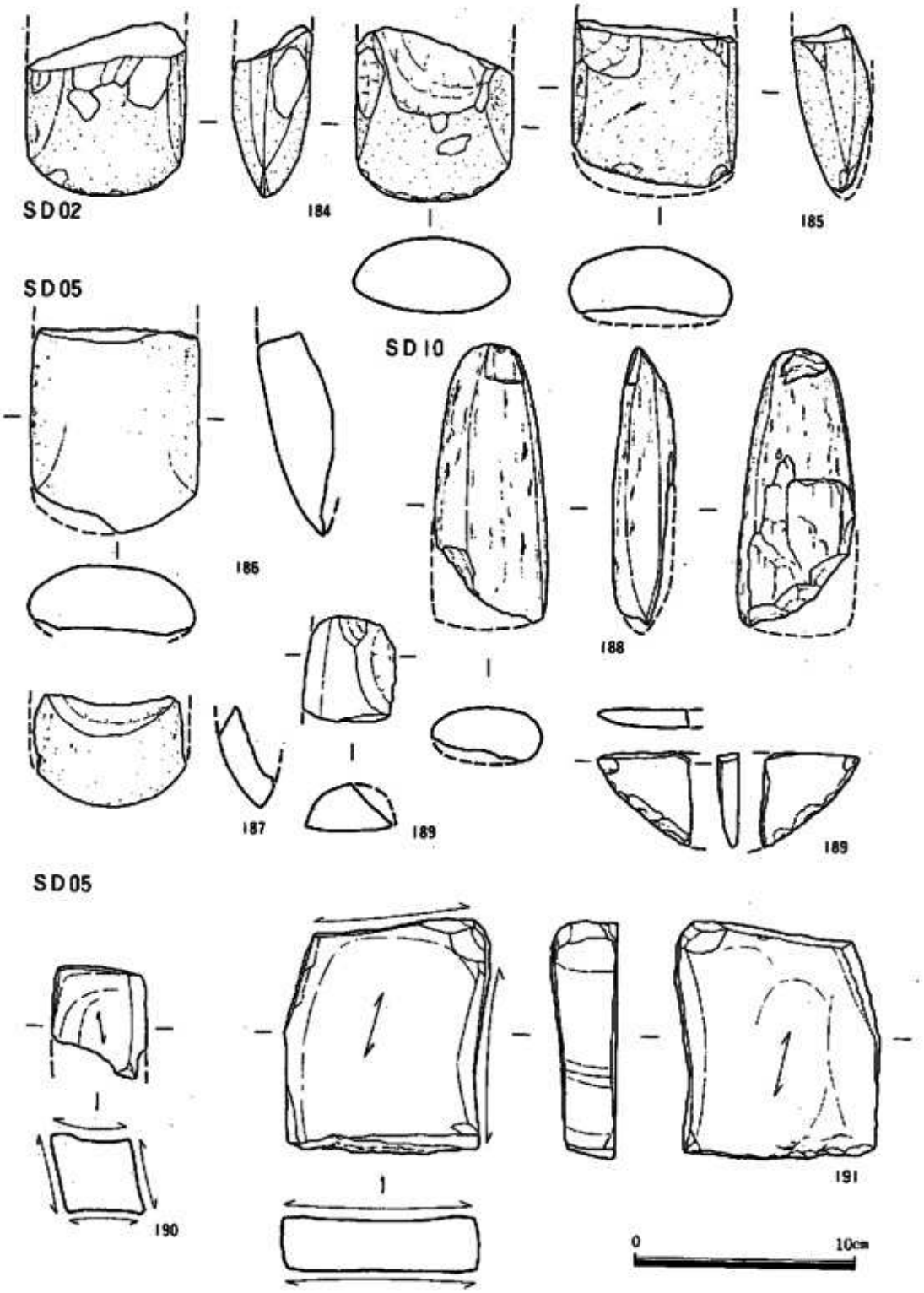


Fig. 49 SD02, 05, 07出土遺物 (1/3)

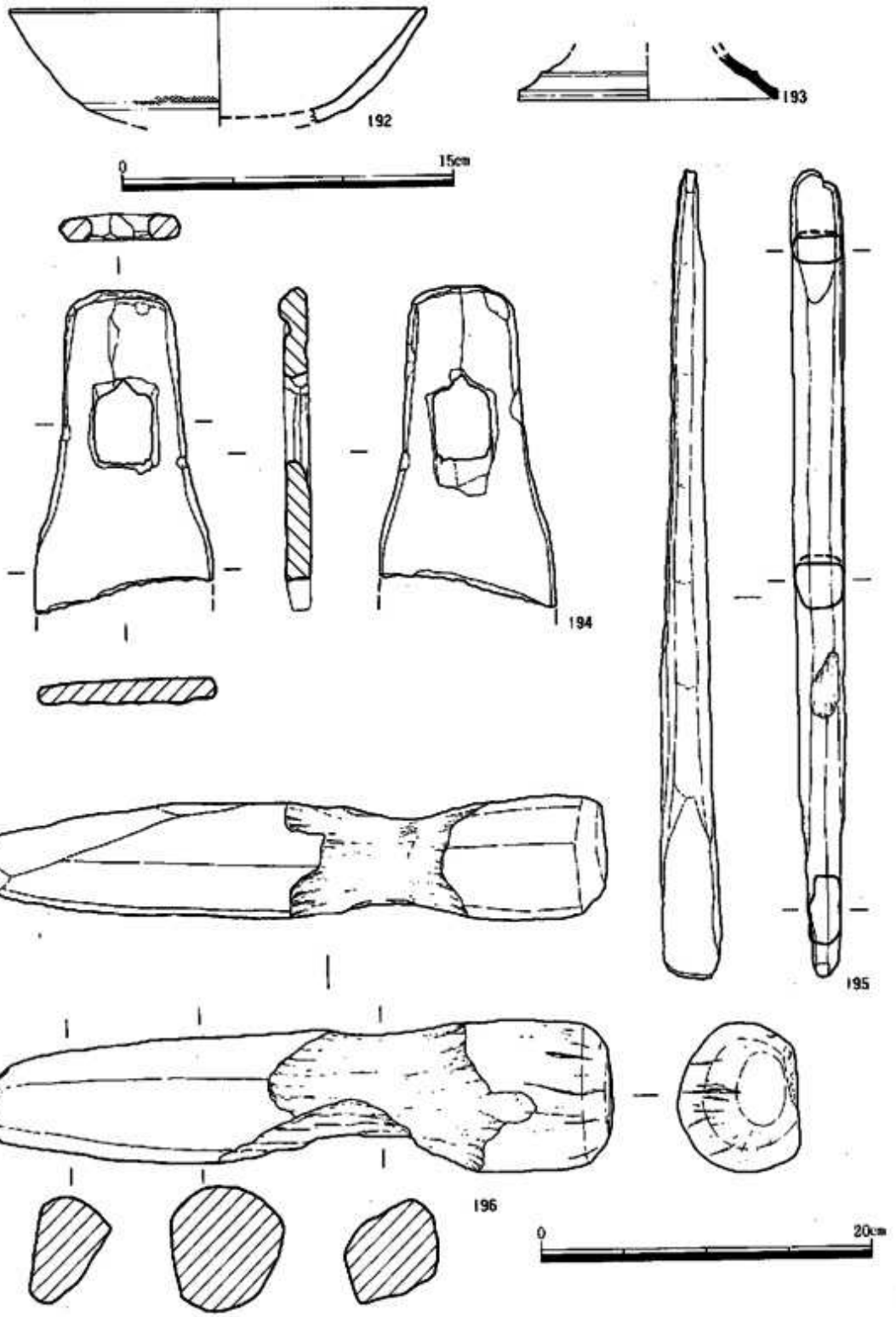


Fig.50 SD03出土遺物 (1/3, 1/4)。

cm，最大幅6.9cmを測る。

石庖丁（189）　未製品である。刃部は剥離痕が残る。現存長4.4cm，最大幅4.3cm，最大厚0.9cmを測る。

その他に石鏃の未製品の破片が出土している。

自然遺物

植物の種子が黒褐色粘土層や川底の落ち込みから多量に出土した。種類については分析を行っていず不明。

SD03（Fig.50，PL30）

遺物量はそれ程多くない。主な遺物として土師器の高坏や須恵器片，砥石，木鍬などがある。

土師器

高坏（192）　口縁部片で復元口径18.8cmを測る。体部下半に段を有し，口縁が内湾気味に大きく開く器形である。段の部分にナナメハケが残る。

須恵器

高坏（193）　脚部片のみで，脚端径11.8cmを測る。裾部には一条の三角突帯がめぐり，口縁端部を嘴状におさめる。

木器

鍬（195）鍬の柄部で歯を欠失する。現存最大長19.5cm，最大幅10.7cm，最大厚1.5cmを測る。柄穴は長辺4.2cm，短辺3.5cmを測る長方形である。各側辺は面取りを行う。又，上下両面はケズリ仕上である。全体に磨滅が著しい。

不明木器（195，196）　195は現存長さ49.0cm，最大幅3.5cmを測る断面が隅丸方形の，細長い木器である。一方の先端を両側辺より楔状に削り出している。各側辺は削り仕上である。木製農工具の柄の可能性がある。196は，最大長38.6cm，最大幅9.1cmを測る一端が槌状，一端が楔状を呈する木器である。中央は粗削りによってえぐっている。楔状部分と槌部は削りによって作り出される。

SD05（Fig．49,51～57，PL28～29）

中層より古墳時代中期頃の土師器や，朝鮮半島の流れをくむと思われる土師器類や，初期須恵器などが多量に出土している。時期的にはほぼ同一時期で，器種としては一通り出土している。完形のものも少なからずある。

土師器

壺（197～205，209～215）　いずれも小型～中型の壺である。197はやや肩がはる胴部に二重口縁気味の口縁がつくもので，口縁端部はやや外反する。胴部下半には煤が付着している。胎土は精良，焼成は良好である。198は口縁部を欠失するだけである。197と同様に二重口縁気味の口縁を持つ器形であるが，197に比べて胎土，焼成とも良くない。199は口縁に比べて胴部が大きくふく

れる器形で，口縁部がやや斜めに開く器形である。外面下半には煤が付着する。200は胴部片で，丸っこい胴部を持つタイプである。口縁部は不明。201は扁球形の胴部にほぼ直立する口縁部がつく器形である。202は口縁部片であるが，ほぼ201と器形のものと思われる。203は胴部に肩部を有する器形で，長く外へ開く口縁部を持つ器形である。204は扁球形の胴部に，外方へわずかに開く短い口縁部を持つ器形である。底部は若干平底気味である。205は胴部片で胴外面は細いハケ目を施す。209はやや肩が張る胴部から肥厚した口縁部が，開き気味に直立する器形である。210は頸部から内湾気味に開く口縁部を持つものである。213はしまりのない頸部から「く」字状に外反する口縁部を持つものである。214，215は「く」字状口縁であるが，口縁はやや内湾する。211，212はいずれもしまりのない頸部から「く」字状に短く外反する口縁を持つ器形である。

鉢型土器（206，207）　206は最大胴径10.3cmを測る。胴部上面には直径1.0cmを測る孔が穿たれる。207は復元胴部最大径9.4cmを測り，胴部最大径を中央よりやや下に持つ器形である。

甕（216～225）　216，217，219はいずれも頸部はしまり，口縁部は「く」字状を呈し，口縁端部がやや外へ開く器形である。内面はヨコヘラケズリ。218は「く」字状口縁であるが口縁部は大きく開き，先端が肥厚する。220は「く」字状口縁であるが，口縁部は内湾気味に開き，肥厚する。221は「く」字状口縁であるが，口縁部はやや内湾し端部は凹む。222は卵形の胴部に大きく開く「く」字状口縁を有するもので，口縁端部は外反し水平に作り出す。222は223とほぼ同一器形だが，口縁部の外反がやや弱い。224は球形の胴部に二重口縁が付く器形である。壺の可能性を残す。225は球形の胴部片である。頸部の具合から224と同タイプであろう。

高坏（227～243）　坏部片と，脚部片がある。全様を復元しえるものはなかった。坏部は形態から4分類できる。Ⅰ類は体部下半に段を有し，口縁部が内湾気味に開き，口縁端部が外反するものである。更に身の深さで2つに細分できる。Ⅱ類は体部下半に段を有すが，口縁部が外湾気味に大きく開くもの。坏の深さは深い。Ⅲ類は体部下半に段を有すが口縁部が内湾気味に開くもの。器壁は他と比べ全体に厚い。Ⅳ類は須恵器の器形に似るもので坏の可能性もある。Ⅰ類は227～230，Ⅱ類は231，232，Ⅲ類は233，Ⅳ類は234である。脚部は脚裾部の形態から大きく3分類できる。Ⅰ類は235で大きく開き，脚裾端部がやや外反するもの，Ⅱ類は236～242でで脚裾が内面に稜を形成して外折する。Ⅲ類は243で外湾気味に大きく開き端部を嘴状におさめるものである。又，239と243にはヘラ描きの刻文が見られた。243については色調が淡灰褐色を呈し，胎土焼成がやや異なる。

埦（244～248）　大きくは口縁部が直立するもの，外反するものの2種類に分かれる。口縁部が直立するものには244～246がある。244は復元口径11.0cmを測り平底気味のものである。245は復元口径13.0cmを測り底部はやや尖り気味，246は復元口径12.8cmを測り，体外面下半はヘラケズリを加える。口縁部が外反するものは247，248がある。いずれも丸底の底部である。復元

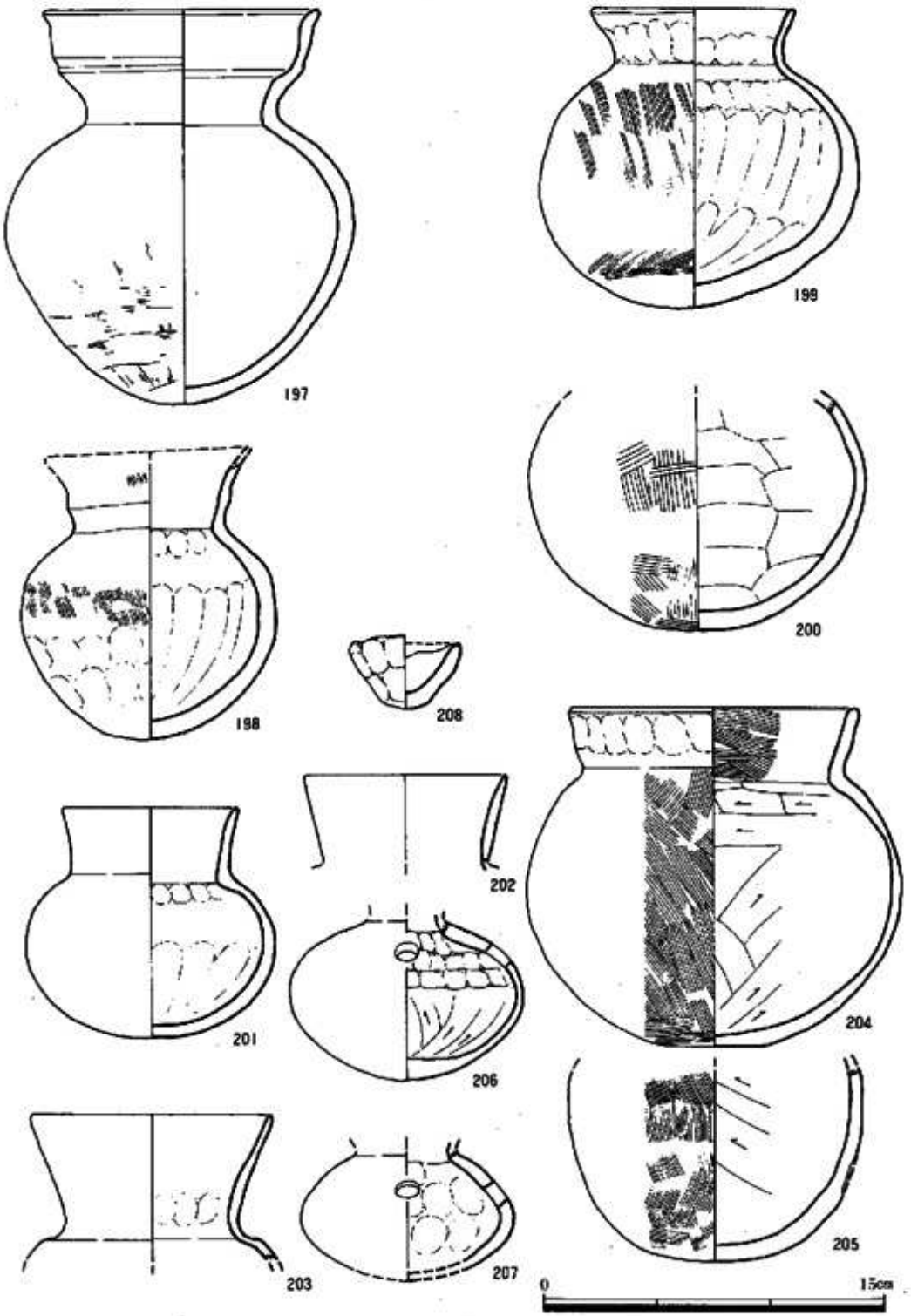


Fig. 51 SD05出土遺物I (1/3)

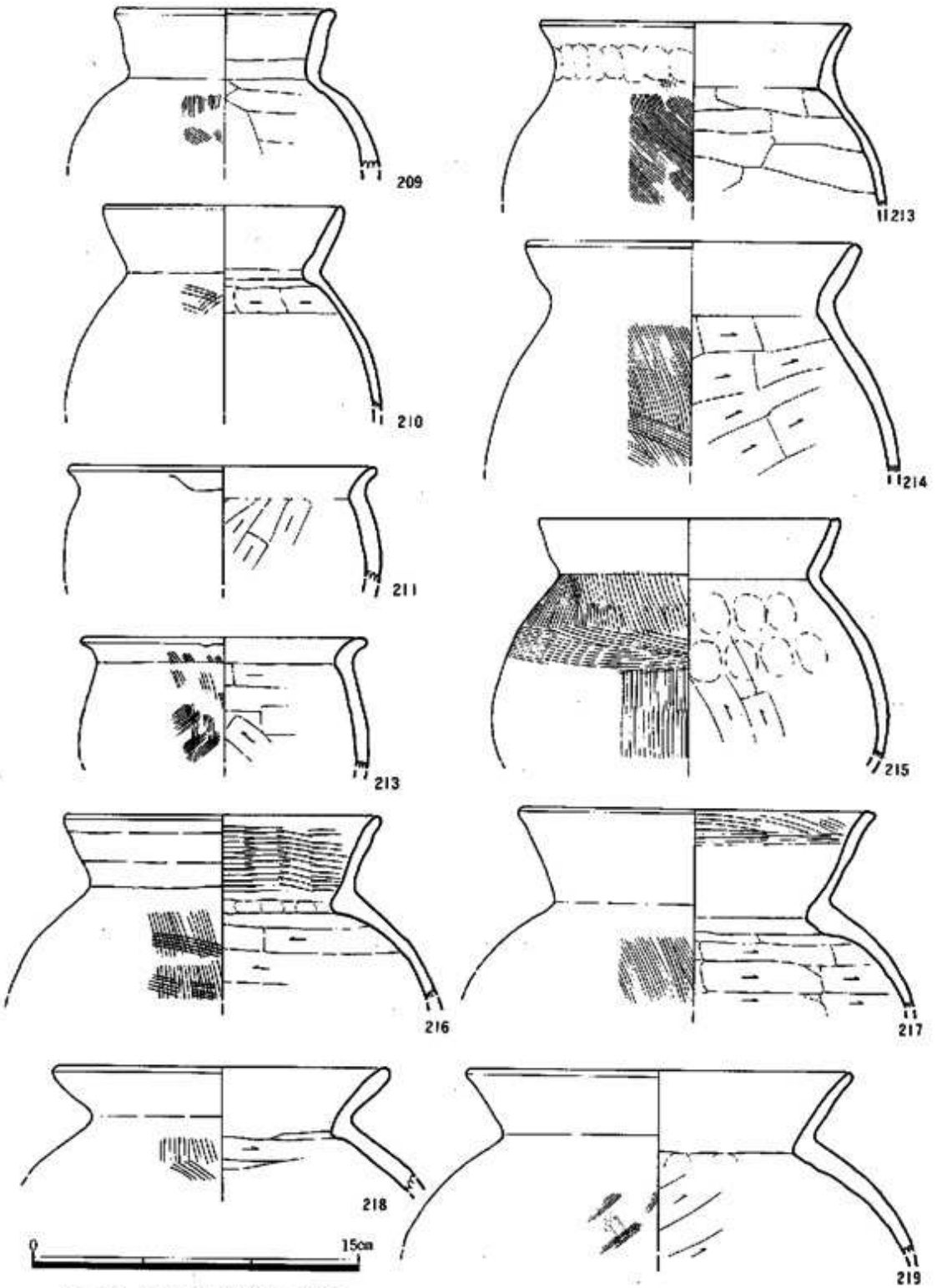


Fig.52 SD05出土遺物II (1/3)

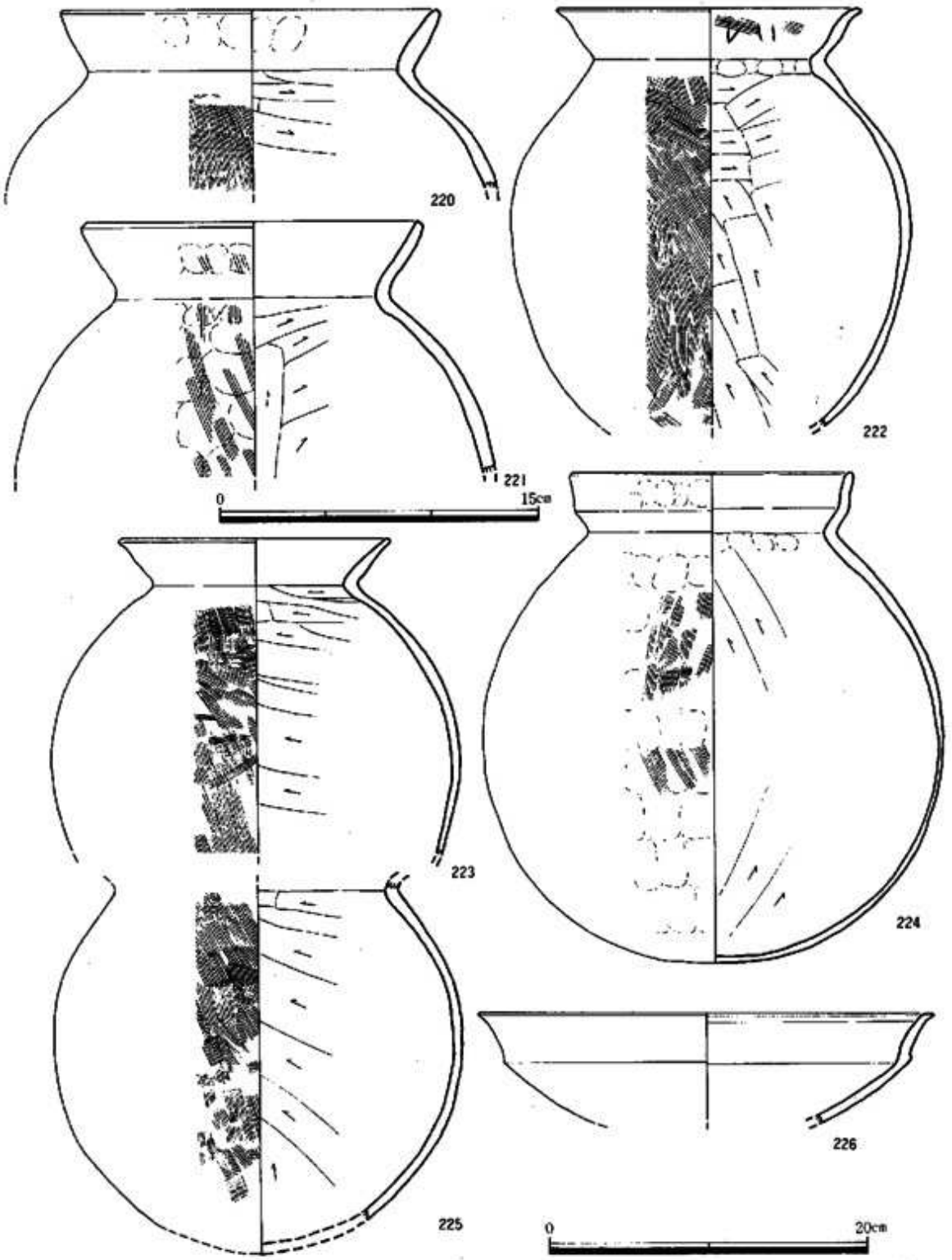


Fig. 53 SD05出土遺物III（220, 221は1/3, 222～226は1/4）

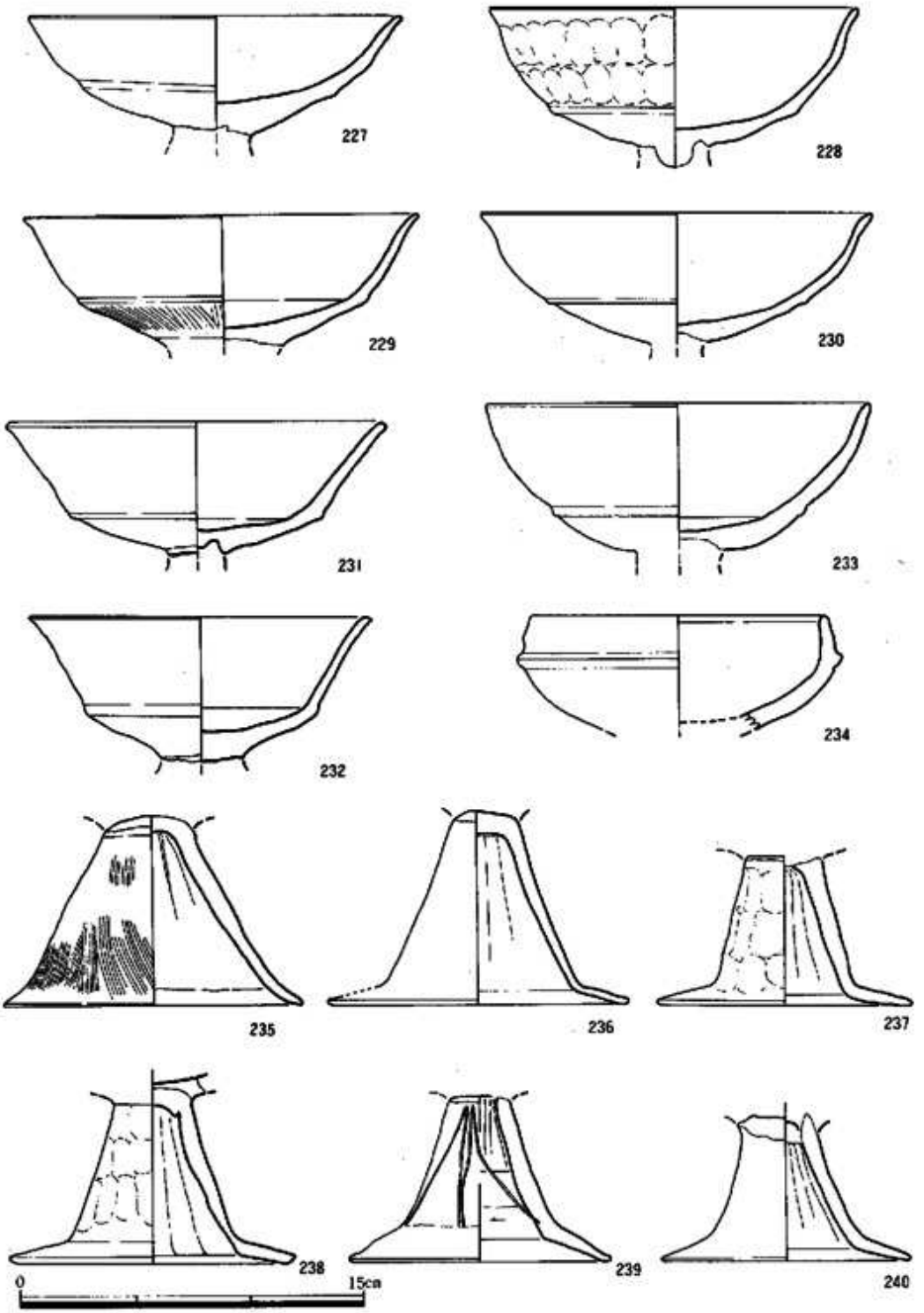


Fig. 54 SD05出土遺物Ⅳ (1/3)

口径は247が14.0cm，248が10.6cmを測る。

鉢（249～252）　249は復元口径26.8cmを測る大型の鉢である。口縁部は肥厚し，外反気味に大きく開く。250は復元口径15.8cmを測り口縁部が軽く稜を形成して外反する。内面にはヘラによる線刻が入る。251，252は軽く稜を形成して「く」字状に外反する短い口縁が付くものである。体内面はヘラケズリ，外面は細い刷毛目を加える。復元口径はそれぞれ12.2cm，10.2cmである。

漢式系土器

坏（253，254）　253は口縁部を欠失するが平底の底部から体部が内湾気味に立ち上るものである。外面には刷毛目を施す。254は復元口径11.8cm，器高6.0cmを測る。口縁端部は直立する。体内外面とも指調整痕が残る。土師器の可能性もあるが，器形から漢式系土器の範疇に入れた。

鉢（255，256）　255は口縁部が「く」字状に外反するが，口縁端部は調整による浅い凹線がめぐる。体内外面に部分的に煤が付着する。256は復元口径10.2cmを測る深鉢型の器形である。内傾気味の胴部から口縁が短く直立するもので，口縁端部は尖り気味におさめる。長原遺跡井戸SF301出土のものに類例がある。[註13]

甕（259～263）　いずれも軟質である。259は頸部に稜がつき口縁部が直立気味に途中より外折する器形である。口縁端部は尖る。口縁部に2～3条の沈線がめぐる。外面はタテ又はナナメの平行叩きを加え，内面はヘラケズリ。260はわずかに肩の張る胴部から口縁部が大きく外湾し，口縁端部を水平に作り出す器形で，端部は調整により凹む。胴部にはタテの平行叩きを加える。261はややしまる頸部から大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみあげる。262は復元口径17.8cmを測り胴部最大径が上半にある。口縁は「く」字状に短く外反し，口縁端部には調整による浅い凹線がめぐる。263は平底を呈する底部片である。ナナメの平行叩きが施される。

甑（257，258）　259は復元で口径31.4cm，器高27.0cmを測る。「く」字状に外反する口縁を持ち，底部は平底を呈する器形である。両側に1対の上面に切り込みを行った牛角状の把手が付く。底部には直径約1.8cmの孔を中心にして長さ3.2～3.6cm，幅0.6～1.1cmの蒸気孔を推定で11ヶ穿っている。調整は胴外面は粗い刷毛，内面はタテヘラケズリである。260は復元口径29.0cm，器高27.3cmを測る。「く」字状口縁を持つが，口縁端部は平坦におさめる。胴部には1対のほぼ水平につき出す把手が付く。底部には推定で7個の蒸気孔が穿たれる。調整は胴外面がタテハケ，底部との境はヘラナデ，内面がヘラケズリである。

須恵器

坏身（264，265）　264は復元口径12.3cmを測る。水平に作り出された受部から口縁部が内傾気味に直立し，口縁端部を平坦に作り出している。265は口縁部を欠失するがほぼ同様の器形である。

高坏（266～269）　266は口径8.2cmを測る境型の高坏で断面台形を呈する把手が付く。体部上

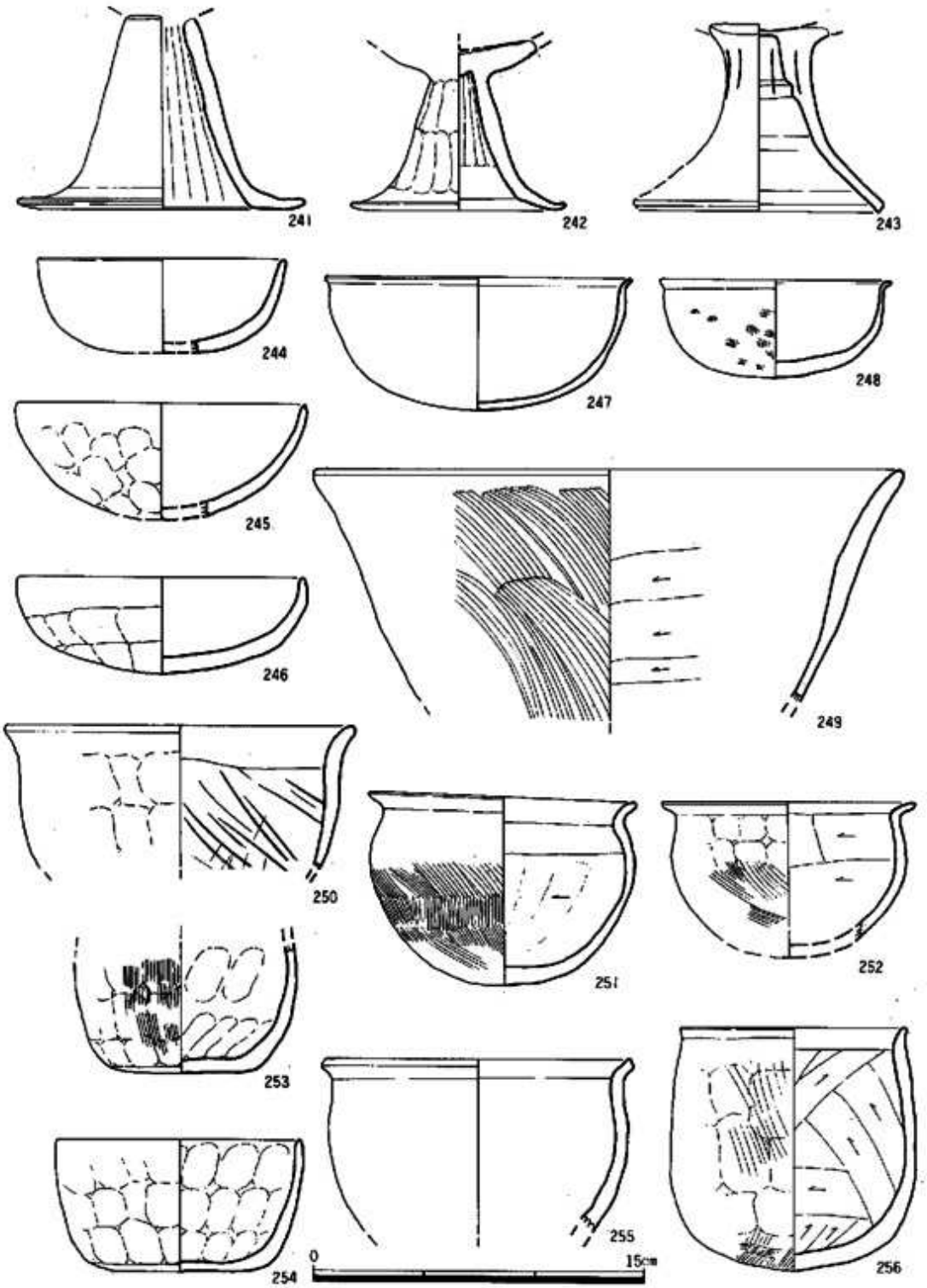


Fig. 55 SD05出土遺物V (1/3)

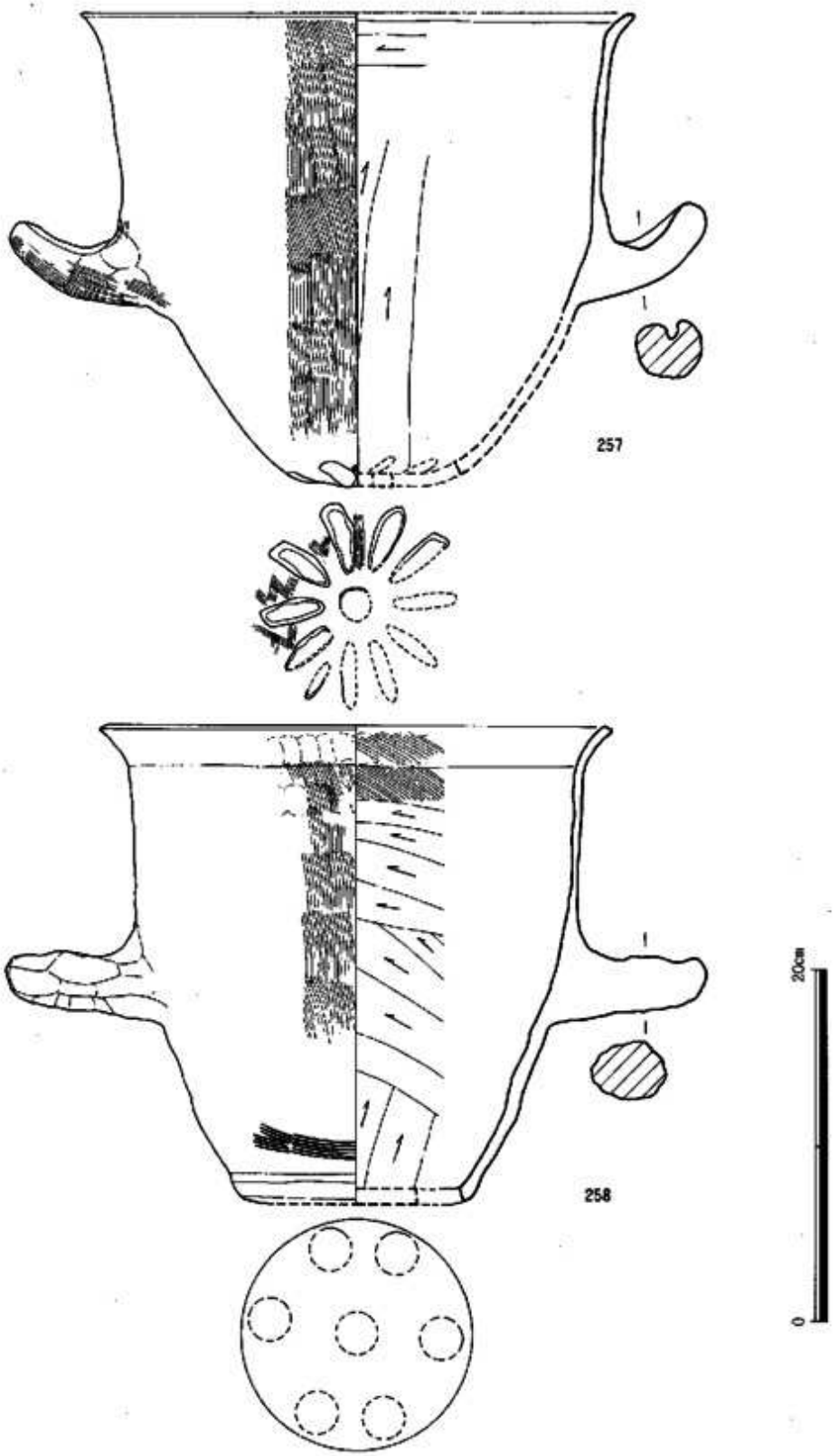


Fig. 56 · SD05出土遺物Ⅵ (1/4)

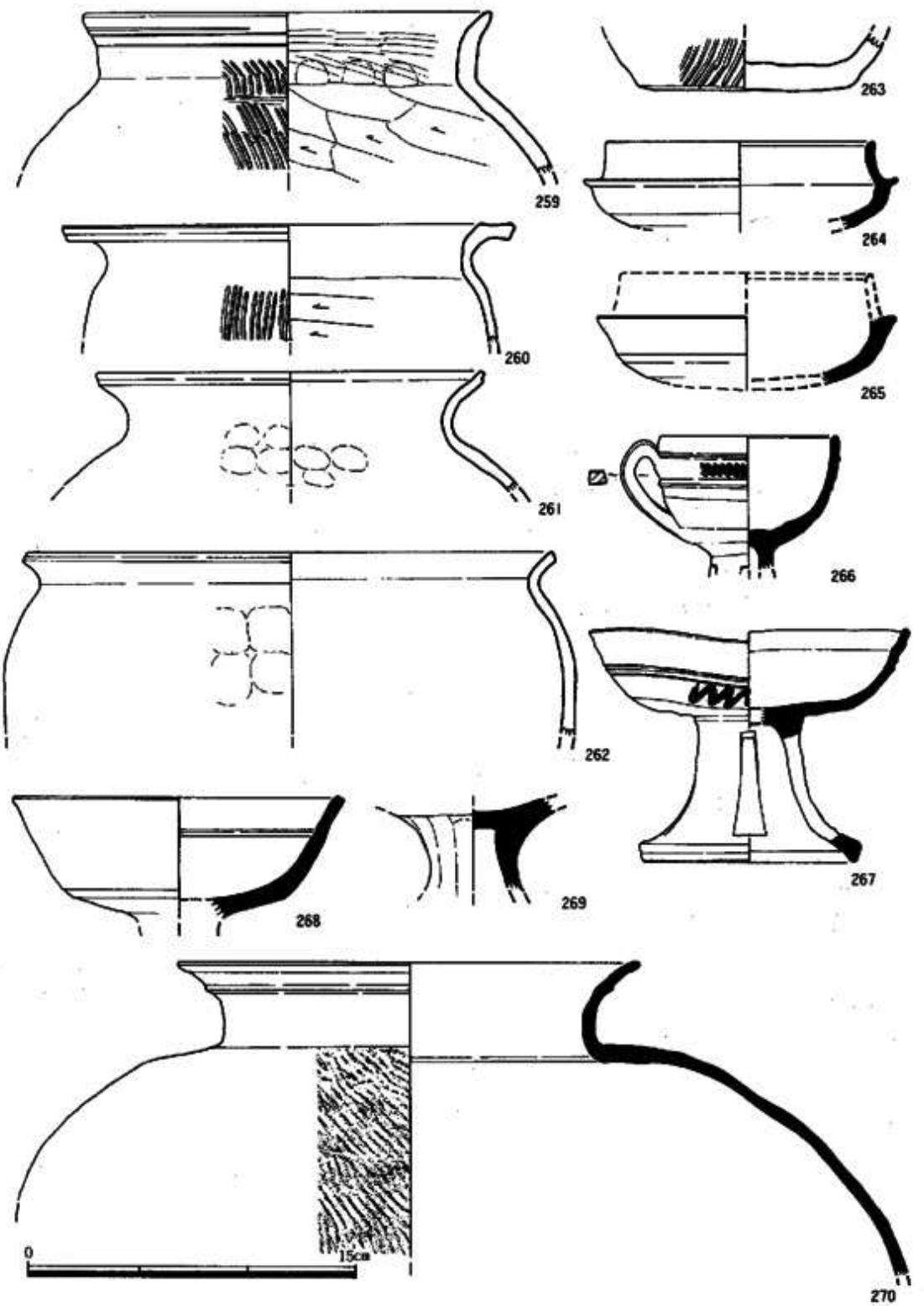


Fig.57 SD05出土遺物Ⅷ (1/3, 270は1/4)

半には三角突帯が2条巡り，その間には櫛描波状文が施される。267は復元口径14.8cm，器高10.7cmを測る。全体に焼きひずみがひどい。坏部は一条の三角突帯によって口縁と体部が区別され、脚部には4ケ所に長台形の透し窓が切られている。脚端部は嘴状におさめる。268は坏部小片である体部上半に屈折稜を形成して外へ開く。内面に一条の沈線がめぐり，又自然釉がかかる。体部下半はヘラケズリを行う。269は脚部片である。全体にナデ仕上。

甕（270）　大型の甕である。復元口径21.4cmを測り，全体に器壁が薄くシャープである。肩が張る胴部から，大きく外反する口縁部を持ち，口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部には1条の三角突帯がめぐる。

石器（Fig. 49）

石斧（186）　今山産の玄武岩製石斧の刃部片で現存長9.3cm，最大厚3.0cmを測る。

砥石（190，191）　190は現存長4.8cm，最大幅4.3cm，最大厚3.5cmを測り，下端が欠損する。使用面は4面である。191は現存長10.6cm，最大幅9.0cm，最大厚3.0cmを測り，下端が欠損するが，上下両面，右側面，上端面を砥石として使用している。石質はいずれも砂岩だが，190は粒子は細い。色調は190が明白褐色，191が淡灰褐色である。

不明石器（188）　玄武岩製で現存長4.8cm，最大幅4.1cm，最大厚2.2cmを測る。上下両端，右側面は欠損，それ以外は研磨調整を加える。色調は灰色を呈す。

SD05下層溝（Fig. 53）

弥生式土器

高坏（226）　復元口径28.4cmを測る弥生時代後期の大型の高坏である。口縁部は明確な屈折稜を形成して外反する。器表面は磨滅がひどい。

SD07（Fig. 58）

遺物は少なく，しかも細片で図示しえるものは少ない。

土師器

高坏（271，272）　271は復元口径17.6cmを測る口縁部片で，口縁部が外反気味に大きく開く器形である。272は逆「く」字状に大きく開く脚部片である。

石製品

紡錘車（273）　直径4.6cm，厚さ1.1cmを測り，平面形は円形，側面形は台形を呈する。中央に直径5mmの心棒通しの孔が穿たれてい

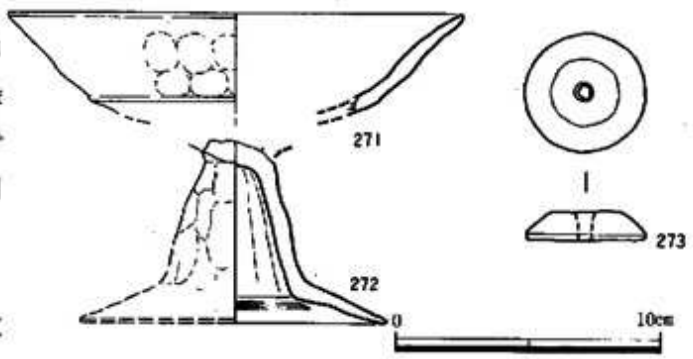


Fig. 58　SD07出土遺物（1/3）

る。側辺は丁寧なケズリによって仕上げられる。

SD10

石器

石斧（189） 現存長12.7cm，最大幅5.1cmを測る蛇紋岩製の乳棒状の石斧である。縄文時代のものであろう。

SD16（Fig. 59）

漢式系土器

鉢（274） 軟質の深鉢型土器である。復元口径14.4cmを測る。直立する胴部から短く外反する口縁部を持つ器形である。口縁端部に調整による浅い凹線がめぐる。

その他器種不明276がある。瓦質で外面に縄蓆文叩きが施される。朝鮮半島産の可能性がある。

須恵器

坏蓋（275） 天井部と口縁部の境に稜を有する器形である。天井部には鋸歯文が施される。有蓋高坏の蓋であろう。

277は器種不明，三条の三角突帯の間に櫛描きによる波状文が施される。

SD17（Fig. 59）

瓦質土器

把手（278） 断面形は円形と呈し，各縁辺は指調整。朝鮮半島産の可能性がある。

SD18

土師器（279） 牛角形を呈す把手である。現存長6.4cmを測る。上面にはヘラによる切り込みが入る。さし込み式の把手である。

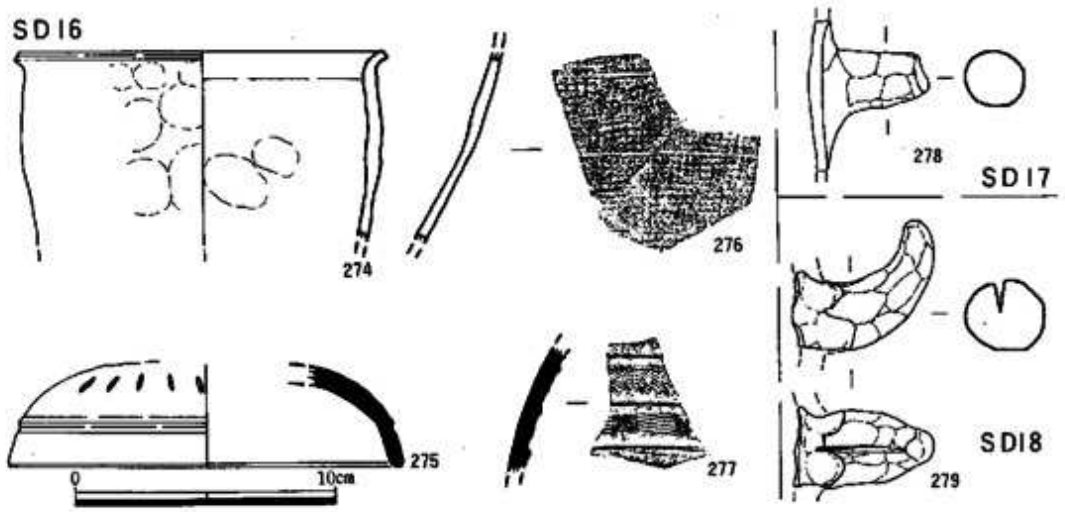
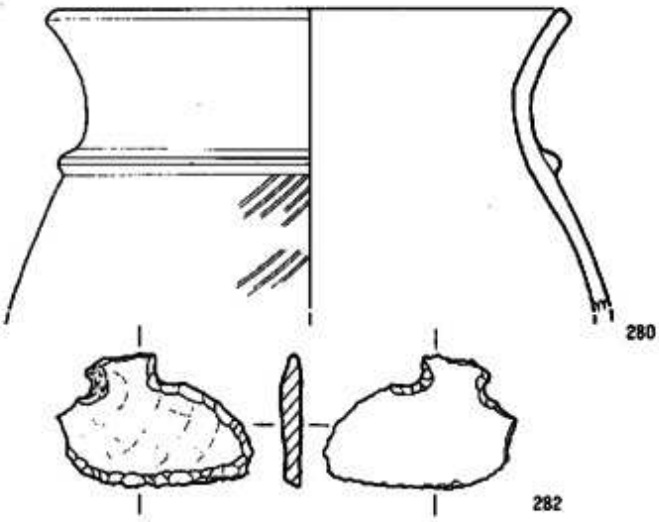


Fig. 59 SD16～18出土遺物（1/3）



60　Pit，包含層，表土層出土遺物（1/3）

Pit出土遺物（Fig. 60, PL30）

各Pitから少量ずつ遺物が出土しているが，細片が多く図示しうるものは少ない。

弥生式土器

壺（280）　D区Pit 3より出土した。復元口径19.6cmを測るややしまりのない頸部から外へ開く口縁を持つもので，頸部に台形状突帯を1条めぐらす。

土師器

鉢（281）　底部片で，平底気味である。底部から胴部にかけて全面に刷毛目を施す。

石器

石匙（282）　F区のピットより出土。全長7.4cm，最大幅5.1cm，最大厚0.8cmを測る，サヌカイトの剝片を利用して成形したものである。二次調整は主に片側に施される。全体に風化が著しい。縄文時代のものであろう。

石庖丁（283）　E区のPitより出土。破片で石質は輝緑凝灰岩である。現存長2.6cm、最大幅2.6cm，最大厚0.3cmを測る。両欠損面に推定径0.4cmの孔が2穴が残っている。

包含層，表採遺物（Fig. 60, PL60）

土師器

埦（284）　やや平底気味の底部から丸味を持ち口縁部はやや外方へ直立する器形である。端部は丸くおさめる。E区出土。

須恵器

把手（286）　現存長7.5cm，最大幅3.2cm，最大厚5mmを測る偏平な把手で高台か埦につくものであろう。F区出土。

瓦器

埦（285）　底部に低い高台が付き，口縁部が体部中央で軽く稜を形成して直立する埦である。C区包含層出土。

土製品

土錘（287）　平面が円形，断面は楕円形を呈するが，上下両端は平坦に成形されている。直径3.6cm，厚さ2.5cm，孔径0.6cmを測る。

石器（叩石）

叩石（288）　最大長6.0cm，最大幅4.5cm，最大厚3.4cmを測る楕円形を呈するものである。石質は石英である。使用痕が上下両端に見られるが，特に下端部にその痕跡が著しい。

註10　福岡県教育委員会『三雲遺跡Ⅳ』1983年

註11　酒井清治「千葉県大森第２遺跡出土の百済土器」『古文化談叢第15集』九州古文化研究会

註12　福岡澄男「一須賀古墳群の外来系土器」『摂河泉文化資料第10号』北村文庫会

註13　九州大学大学院生今津啓子氏のご教示による。

註14　北野耕平『河内平野野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究報告第二冊　1976

註15　八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』　1981年

第5章　おわりに

以上調査の概要について述べたが，今回の調査報告区域は，吉武遺跡群面積約47万㎡中の5.200㎡とわずか1/100，昭和60年現在約８万３千㎡という広大な圃場整備に伴う調査面積に比べたら1/15にしかすぎないという事，圃場整備に伴う調査の整理が充分に進んでいないという現状から，今回の調査地点だけで吉武遺跡群の性格付けを行う事は，はなはだ困難であるといわざるを得ない。以上の理由からここでは，調査報告の若干のまとめと，今回の調査で気付いた点について若干の感想を述べてみたいと思う。今回の調査でのまとめは以下のとおりである。

（１）　今回の調査で検出した遺構は土壙45基，井戸２基，掘立柱建物15棟，溝状遺構18条である。

（２）　遺構の年代は大きく２時期が考えられる。Ⅰ期は弥生時代後期，Ⅱ期は５世紀中頃から後半迄の時期である。Ⅰ期の遺構は少なくＤⅡ区Pit３とSX40のみである。SX40は算盤玉の胴部を持つ壺型土器等から弥生時代後期末葉頃と考えられる。Ⅱ期についてはSD03，05やその他の土壙の時期である。土師器だけを出土するもの（SX36）や初期須恵器を伴うもの（SX17，20）があり，切り合い等から考えて，多少の先後関係があると考えられる。

（３）　土壙，掘立柱建物の分布は大きく２ケ所に分けられる。１ケ所はSD05の西側，もう１ケ所はＢ区の部分である。特に掘立柱建物については，SD05の西側に11棟確認されており，井戸の検出と合わせて同溝の西側が集落の中心部分と考えられる。

（４）　掘立柱建物の柱穴からは遺物の出土量は少ないが，土師器片しか出土しない。

（５）　旧河川SD02については中層より弥生時代後期前半を中心とする多量の遺物が出土しているが，その埋没時期については，圃場整備区域の調査から須恵器を含む土壙が埋土上に切り込む事から５世紀の段階にはかなり埋没していた事が考えられる。ただSD05がSD02にそそぎ込むような痕跡を示す事から，中央部分に浅い流れがあったと思われる。

（６）　土壙の性格については大部分が不明であるが，SX01，24，38については形態から土壙墓，SX36については土器溜め，SX14については多数の滑石製臼玉の出土や，手捏土器の出土から祭祀に関連するものと考えられる。SX14から５ｍ程離れたSD05の中からも多量の灰と一緒に小型丸底壺などの土器が出土している。

（７）　SX36やSD05を中心とする遺構から朝鮮半島系の軟質土器の流れを組む漢式系土器が器種的にまとまってかなり出土している事である。漢式系土器については北九州でもいくつかの遺跡で出土例はあるが，いずれもその出土量は少ない。

（８）　SD05の埋没時期についてはSX20に切られる事から，その埋没終了時期を押さえる事が出来る。SX20出土の須恵器は陶邑編年による第Ⅰ型式の３又は４段階に相当する。

（９）　今回出土した初期須恵器はSD05，SX20，36，SE31などから出土している。器形的には

SX20，SE31出土の坏蓋の身は第Ⅰ型式の３又は４段階に相当する。又SD05の甕は口縁部の作りなどは，甘木小田茶臼山古墳出土の甕に類似する。その甕は小隈窯産のものである。[註16]

今回の調査ではさまざまな問題点を指摘する事が出来るが，この中で特に問題となる２点について問題を指摘して見たいと思う。まず第１点は掘立柱建物群の時期の問題であり，第２点は漢式系土器の問題である。

掘立柱建物の時期について

今回の調査区とその両側の８，９区では掘立柱建物を合せて67棟検出している。内訳はE・F区11棟，８区33棟，９区23棟である。両側の８，９区の整理が進んでいない為，全体の詳細な検討は出来ないが，８区についてはSD02を境にして北側の掘立柱建物は土師器を主に出土し，南側の掘立柱建物は須恵器を主に出土するという具合に分けられるようである。まだ時期については南側の建物群で小田富士雄氏編年による須恵Ⅱ，Ⅲ期（６世紀代）に位置づけられ，その中で建物の方向，出土遺物，切合関係から数時期の建物群が想定出来る。この８区では同時期の竪穴住居址は検出されていない。９区については23棟検出されているが[註17]，内15棟はSD05の西側で検出されている。掘立柱建物については主軸方向，出土遺物，切合関係などから３～４期の建物群が考えられる。E，F区は11棟であるが主軸の方向，切合関係から大きく４期が考えられる。[註17] Ⅰ期はSB01，02，03，04，09，Ⅱ期はSB05，07，08，Ⅲ期はSB06，SB10，Ⅳ期はSB11である。切合関係はSB01がSB11を切っており又，SB10がSX30を切り，SB06がSB04を切るなどの関係がある。それらの関係からⅠ期はⅣ期より新しく又，SX30から出土の須恵器がTK208に相当すると考えられる事からSB10は５世紀後半以降と考えられる。又E，F区と９区を含む地区では，同時期に当然存在してもよいと思われる竪穴住居址が１棟しか検出されていない。しかしそれも四隅にベッド状遺構を持ち，主柱穴が2本という事から新しくとも5世紀中頃迄を下らないと考えられるものである事から，掘立柱建物群に伴う竪穴住居址はないものと考えられる。竪穴住居址から掘立柱建物への転換期は，近畿地方では大阪の大園遺跡，八尾市の八尾南遺跡などで知られているように一部では５世紀代に遡上るとされている。八尾南遺跡の例によれば建物の規模は２間×２間のものが一般的でその形態は１辺５ｍを越えないものと考えられている。大園遺跡についても１辺4.3m以下のものが大半であり，集落の構造や建物の床面積から考えても，竪穴式住居址で構成された集落と基本的に同じと考えられると報告している。福岡市周辺では有田遺跡群の調査[註19]でも判明しつつあるように，竪穴住居址から掘立柱建物への移行は早くても７世紀と言われているが[註18]，今回の調査ではそれが一部５世紀代に先行する可能性を指摘するものであろう。しかし今回の調査地点から南へ約400m離れた調査地区を昭和60年に調査したが，その地点では６世紀代の竪穴住居址が60棟余りも検出されており[註20]，同遺跡群内で必ずしも格一的様相を示す事はなさそうである。本調査区の掘立柱建物群の成立年代や性格付けはより全体の整理が進んだ今後の課題としておきたい。

漢式系土器について

漢式系土器は三国時代の朝鮮半島における陶質土器や軟質土器に酷似する土器群で，研究者から漢式系土器[註21]，韓式土器，漢式系土師器[註22]，漢韓式土器[註23]等と呼ばれ研究を進められて来たものである。この種の土器群は近畿地方特に大阪湾沿岸の河内平野の遺跡[註24]で数多く発見されており，北九州地方での発見例は少ないとされて来た。福岡市では原深町遺跡[註25]，有田遺跡[註26]，西新町遺跡[註27]，比恵遺跡[註28]，原遺跡[註29]，などで若干の出土例があるだけである。今回の調査では各遺構から良好な資料がまとまって出土した。各遺構からの出土は表3のとおりである。器種には鉢，甕，甑，坏，盤，把手などがあり，合せて30点出土している。また他にはSD02の180などは漢式系土器の可能性がある。器種の中では鉢が13点と一番多い。鉢は45・256をのぞいてすべて平底鉢と考えられる。口縁部片は8や69タイプ，68タイプ，255タイプ，274タイプの4つに分けられるが，いずれも近畿地方例と異なるのは，叩きを施されずナデ調整という事である。この特徴は他器種にも見られ42の壺などは一須賀古墳群11号墳[註30]出土の縄蓆文叩の壺形土器に類似するが，この土器は外面はタテハケ調整である。SD05出土の甑257は把手に漢式系土器の一つの大きな特徴であるヘラによる切り込みを持つが，これも外面はタテハケである。しかし叩きを施されたものがまったくないわけでなく，59の格子目叩き，103の平行叩き，113の縄蓆文叩きなど

表3　出土遺構一覧表

遺構名	遺構の種類	器種								合計
		鉢	甕	甑	坏	盤	把手	壺	不明	
SX 07	土坡	1								1
SX 14	〃				2					2
SX 19	〃	1						1		2
SX 26	〃					1				1
SX 36	〃	6								6
SX 46	〃		1							1
SX 47	〃		2							2
SX 50	〃	1								1
SD 02	旧河川		1							1
SD 05	溝	3	4	2	1					10
SD 16	〃	1							1	2
SD 18	〃						1			1

があり，ナデ調整のものも合せて3種類の調整方法が存在する。これが器種による差なのか，近畿でいう漢式系土器の影響を受けて成立した土師器なのか，漢式系土器の中の調整の一つの型式なのかは類例の増加を待って今後の課題としたい。またこれらの漢式系土器の時期であるが，ほぼ5世紀後半代におさまるが，その中[註31]でSX36出土のものが初期須恵器を伴わず一番古い可能性があるであろう。SD05出土のものは共伴須恵器から5世紀後半代に位置づけられるであろう。SX14出土の坏は千葉県大森第2遺跡[註32]に類例があり5世紀後半代に位置づけられている。今回の調査では北九州地域での初めての器種にもまとまった量の出土をみたが，今後吉武遺跡群の整理が進めば，更に多くの資料が予想され，漢式系土器の研究にとって一つの画期的遺跡となるであろう。

さいごに

諸般の事情から，種子の同定や，杭材などの鑑定が出来ず，又遺物についてもページ数の都合から充分にのせる事が出来ず，残念に思います。はなはだまとまりのない報告書となりましたが，何かのお役に立てれば幸いです。なお漢式系土器については九州大学文学部考古学研究室西谷正先生，同研究室助手田崎博氏，同大学院生小原哲氏，郭鍾詰氏，今津啓子氏に様々なご教示とご指導，資料の提供を受けました。記して感謝の意を表します。

註16　三辻利一，杉直樹「北九州の初期須恵器の胎土分析」　『古文化談叢第16集』1986年

註17　昭和57年度実績報告による。

註18　八尾南遺跡調査会編『八尾南遺跡』1981年

註19　昭和50年度より調査　報告書は現在第７集迄刊行されている。

註20　福岡市埋蔵文化財課技術吏員下村智氏の御教示による。

註21　福岡澄男「近畿地方における三国時代朝鮮系土器の流入とその影響」
第１回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料　1983年

註22　阿部嗣治氏「東大阪市出土の漢式系土器について」　東大阪市遺跡調査会年報　1979年

註23　竹谷俊夫「漢式系土師器について」　『古留遺跡出土の初期須恵器と漢式系土師器』
埋蔵文化財天理教団　1983年

註24　『堀堂遺跡Ⅳ』によれば５世紀代のカマドを持った住居址から軟質の縄席文タタキ目土器などが出土しており，これから出土例が増加する可能性が充分ある。

註25　福岡市教育委員会　『原深町遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集

註26　福岡市教育委員会　『有田・小田部第２集』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集　1982年

註27　福岡市教育委員会　『福岡市高速鉄道関係調査報告Ⅱ西新町遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集　1982年

註28　比恵第７，８次調査で出土。九州大学大学院生今津啓子氏の御教示による。

註29　昭和56年度調査，格子目叩の土器片

註30　福岡澄男「一須賀古墳群の外来系土器」　『栖河泉文化資料第10号』　北村文庫会

註31　大阪府文化財センター上林史郎氏によれば城山遺跡（長原遺跡）のものは外面刷毛目調整で土師器に近く，久宝寺遺跡のものは叩調整で硬質で須恵器に近い。一般的にはむしろ刷毛目調整が主流を占めるという事である。

註32　酒井清治「千葉市大森第２遺跡出土の百済土器」　『古文化談叢第15集』
九州古文化研究会

表4．土　器　観　察　表

(1)

遺構名	No.	種　類	器　種	器　部	法　量（cm）	手　法　の　特　徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
S X04	1	土師器	壺	口縁部片	復元口径14.0cm	外面は摩滅し調整不明。 内面はヘラケズリ。	精　良	普通	(内)淡赤橙色 (外)淡黄褐色	
	2	〃	高　坏	口縁部片	復元口径19.3cm (やや正確でない)	内外面ともヨコナデだが摩滅がひどい。	1～3mm 砂粒を含む。	〃	明橙色～ 明黄褐色	
S X06	3	〃	甕	口縁部片	復元口径12.2cm	胴外面ナナメハケ、口縁は横撫が残り、胴内面はナナメヘラケズリ。	精　良	良好	(外)明褐色 (内)明褐色	
	4	〃	〃	甕部片のみ	復元底径6.6cm	胴外面はヨコ又はタテハケ、 内面はヘラケズリ。	砂粒をやや含む。	普通	淡褐色	床　面
	5	〃	高　坏	坏片		摩滅がひどく調整不明。	精　良	〃	(外)明淡赤褐色 (内)淡黄褐色	
S X07	6	弥　生	器　台	口縁部片	復元口径10.8cm	外面はナナメハケとなり摩滅がひどい。 内面上部に指おさえ痕が残る。	砂粒を多く含む。	〃	淡黄褐色	床　面
	7	土師器	壺	口縁部片	復元口径13.4cm 最大胴径13.6cm	外面は摩滅がひどいがナナメハケが残る。内面はナナメヘラケズリ。	雲母粒や赤褐片を含む。	良好	(外)暗褐色 (内)黒褐色	上　層
	8	須式系土器	鉢	口縁部片	復元口径11.8cm 最大胴径11.9cm	内外面ともナデ仕上。	1～3mm 砂粒混入	普通	暗灰褐色	〃
	9	弥　生	〃	坏片	復元口径19.2cm	外面は口縁直下にヨコハケ、口縁部は弱い二次焼成を受ける。内外面ともナデ。	2～3mm 石英粒を含む。	普通	(外)やや赤ばんだ淡赤褐色 (内)暗褐色	〃
S X08	10	土師器	〃	坏片	復元口径12.3cm	外面はナナメハケ、内面はナナメヘラケズリ。	砂粒1～2mmを多く含む。	良好	(外)黒褐色 (内)黒灰褐色	
	11	〃	〃	底部片	復元底径6.0cm	かなり摩滅するが内外面ともナデ調整と思われる。	1～3mmの粒を多く含む。	〃	(外)黒褐色 (内)黄灰褐色	床　面
	12	〃	高　坏	脚部片	復元脚径11.0cm	裾部内面にしぼり痕が残り、内面はヘラケズリ、外面は摩滅が激しいが、ナデ調整であろう。	1～2mm 砂粒を含む。	普通	淡黄褐色	
S X09	13	〃	壺	口縁部片	復元口径16.6cm	口縁内外面ヨコナデ、胴部内面はタテ又はナナメヘラケズリ、外面はタテ又はナナメハケ、(10本単位)	1～3mm 石英粒を混入	良好	(外)淡明褐色 (内)(淡灰褐色	体　面・
	14	〃	〃	口縁部片	復元口径15.4cm	口縁部内外面共ナデ、胴内面はヨコ又はナナメヘラケズリ、胴外面はタテ又はナナメのハケ。	細砂粒を含む。	普通	淡黄褐色 内面はやや赤味をおびる。	
	15	〃	高　坏	口縁坏部	復元口径17.8cm	坏部内面は、丁寧なナデ、外面はヨコナデ。	精　良	良好	明赤褐色	床　面
	16	〃	〃	脚部のみ	脚裾径12.1cm	内面はナデ、胴部に指圧痕が残る。 外面はヨコナデ、表面は摩滅する。	1～2mm 砂粒混入	〃	淡灰褐色	〃
	17	〃	〃	脚部底片	復元脚端径 13.4cm	底部はヨコヘラケズリのちナデ仕上。 外面はタテヘラケズリのちナデ。	雲母粒を含む。	〃	明橙色	
	18	〃	〃	口縁部片	復元口径18.1cm	坏部は内外面、口縁部のみヨコナデ、器面剥離は摩滅する。	精　良	〃	淡明灰褐色	
	19	〃	〃	脚部のみ	復元底径12.8cm	脚部内面はナデ、外面はヨコナデかなり摩滅する。	〃	〃	明橙色	床　面
S X10	20	〃	鉢	完　形	口径長10.8cm 〃 短10.4cm 器高　4.6cm	内面は丁寧なナデ、外面は摩滅が著しい。調整は不明。	〃	〃	(外)明赤褐色 (内)暗赤褐色 (ややくすむ)	
S X14	21	〃	甕	口縁部片	復元口径11.8cm	口縁内面は上方ヨコハケ、下方はナデ、胴内面はヘラケズリ。	1～5mm 砂粒	〃	(外)灰色 (内)淡灰褐色	
	22	〃	高　坏	脚部のみ	脚裾径13.7cm	脚部外面はタテヘラケズリのちナデ。 内面はヨコヘラケズリ。	1～3mm 砂粒を含む。	〃	淡赤褐色	
	23	〃	〃	脚部のみ	復元脚径13.0cm	脚部内面はヘラケズリ、裾部は内外面ナデ、内面は指ナデ。	精　良	〃	(外)暗褐色 (内)黒褐色	床　面
	24	〃	手担土器			内外面共指ナデ。	〃	普通	やや黄味をおびた灰褐色	〃
	25	須式系土器	坏	完　形	口径12.9cm 器高 4.55cm	体外部上半はヨコナデ、下半はヘラケズリのちナデ、内面はヘラ状工具によるナデ痕跡あり。	石英粒をやや含む。	良好	青灰色	やや焼きひずむ
	26	〃	〃	復元完形	復元口径14.2cm 器高4.0cm	ナデ、かなり器表面は摩滅する。	1～3mm 砂粒混入	〃	淡灰褐色	

遺構名	No.	種類	器種	器部	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SX15	27	土師器	埦	口縁⅓片	復元口径12.0cm	磨滅がひどく調整は不明	砂粒をやや含む	普通	暗褐色～ 明黄褐色	
SX16	28	〃	〃	⅓存	復元口径13.5cm 器高 5.4cm	内外面ナデ仕上、外底部に「×」のヘラ記号あり	1mm内外の砂粒を少量を含む	良好	(外)淡赤褐色 (内)暗灰褐色	
	29	〃	〃	口縁⅓片	復元口径12.2cm	磨滅がひどく調整は不明。	砂粒を若干含む	ややあまい	淡い褐色	
	30	〃	〃	口縁部⅓を欠失	口径12.9cm 器高 5.6cm	内外面ともナデ仕上、磨滅がかなりひどい。	精良	良好	ややあかみをおびた淡灰褐色	
	31	〃	〃	復元完形	復元口径14.6cm	内面は丁寧なナデ、外面上半はヨコナデ、下半はヘラケズリ。	1mm内外の砂粒含む	良好	淡灰褐色 部分的に黒変	
	32	〃	鉢	底部小片		内底部は指ナデ、外面はタテ又はナナメの細いハケ。	1mm内外の砂粒を含む	〃	(外)暗灰褐色 スス付着 (内)明橙色	形態は推定
SX17	33	須恵器	有蓋高杯	坏部片	復元口径12.0cm 受部径14.4cm	内面から外面上半はヨコナデ、外面下半はカキ目を施す、脚部は透しが入る。	細砂粒含む	〃	やや淡い灰色	
SX20	35	土師器	甕	口縁部片	復元口径19.8cm	口縁部内面から外面にはナデ又はヨコナデ、胴部内面はタテヘラケズリ。	砂粒をやや含む	普通	淡灰褐色 (器色がややうすい)	ド　層
	36	〃	埦	口縁部⅓残	復元口径12.6cm	丁寧なナデ仕上	精良	〃	暗褐色で部分的に黒変する	
	37	須恵器	坏　蓋	蓋	復元口径12.6cm 器高 4.6cm	天井部外面は回転ヘラケズリ、口縁部外面から内面はヨコナデ	〃	良好 堅緻	(外)暗青灰色 (内)淡灰褐色	ロクロ回転は逆時計回り
	38	〃	坏　身	⅓片	復元口径11.5cm 受部径13.0cm 器高 4.6cm	外底部は回転ヘラケズリ、体部外面から内底部はヨコナデ。	〃	〃	暗青灰色	ロクロ回転は逆時計回り
	39	〃	〃	⅓片	復元口径10.2cm 受部径13.8cm 器高 4.9cm	外底部は回転ヘラケズリ、体部外面から内底部はヨコナデ。	〃	〃	青灰色	ロクロ回転は時計回り
	40	〃	〃	受部片	受部径13.8cm	外底部は回転ヘラケズリ、体部下半は静止ヘラケズリ、内面はヨコナデ。	〃	良好	淡青灰色	
SX19	42	韓式系土器	壺	復元完形	復元口径14.4cm 器高19.6cm	口縁部内面はナデ、胴部内面はナナメヘラケズリ、胴部外面はタテハケ	1～2mm砂粒含む	〃	淡黄褐色 (内は淡灰褐色)	
	43	土師器	〃	胴頸部片	復元最大径 28.8cm	口縁部内面から胴部外面はナデ仕上、胴部内面はヨコ又はナナメヘラケズリ	1～5mm砂粒含む	〃	(内)くすんだ黄褐色 (外)淡褐色 (一部黒変あり)	床　面
	44	〃	甕	口縁部片	復元口径15.8cm	口縁部内面はナデ、胴部にはナナメハケ、胴内面はヨコヘラケズリ、外面はタテハケ。	1～2mm砂粒を多く含む	〃	淡黄褐色	
	45	韓式系土器	深　鉢	復元完形 全体の⅓残存	復元口径17.2cm 器高15.5cm	口縁部は粘土帯接合痕が残り段調整痕あり、内面はタテヘラケズリ、外面はタテハケ。	1～6mm砂粒を多く含む	〃	淡褐色	床　面
	46	土師器	壺	口縁部⅓片	復元胴径13.6cm 口径10.8cm	口縁部内外面、胴部内面はナデ、胴部中位から下部はタテ又はナナメハケ。	1～2mm砂粒を少量含む	〃	(外)暗灰褐色 (赤色味が強く一部黒色化する)(内)は暗褐色	床　面
	47	〃	甕	底部⅓残	底径 7.0cm	内外面共かなり磨滅するが、ナデ仕上であろう。	1～2mm砂粒を含む	〃	淡黄褐色 (外面は暗灰褐色スス付着)	
	48	土師器	鉢	口縁部⅓残	復元口径11.9cm	外面に磨滅が著しい、口縁部内面はヨコナデ、胴内面はナナメヘラケズリ。	1～3mm砂の粒含む	普通	(外)暗灰褐色 (内)黒褐色	
SX21	50	〃	甕	口縁⅓片のみ	復元口径18.8cm	口縁部内面から胴部外面はナデ仕上、胴部内面はナナメヘラケズリ。	1～3mm石英粒含む	良好	淡灰黄褐色 内面は灰黄褐色	
	51	〃	壺	復元完形	復元口径10.1cm 復元器高14.9cm 胴　径14.6cm	内外面とも磨滅がひどく調整は不明。	砂粒を少し含む	普通	明橙色～ 明褐色	
	52	〃	高　杯	復元完形	復元口径14.8cm 底　径12.0cm 器　高12.1cm	坏部内面から外面はヨコナデ、脚部外面はヨコナデ、内面はヨコヘラケズリ。	〃	良好	明橙色	
	53	〃	〃	坏部片	復元口径20.6cm	坏部内面はナデ、外面は磨滅が著しい	精良	普通	明橙色	
SX22	54	〃	鉢	口縁⅓のみ	復元口径17.0cm	外面は8本単位のナナメハケ、内面はヨコヘラケズリ。	1～2mmの砂粒を含む	良好	やや暗い褐色 (スス付着する)	
	55	〃	〃	⅓残存	復元口径21.6cm 器高18.9cm	口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はタテ又はナナメハケ、胴内はヨコ又はナナメヘラケズリ。	1～5mm砂粒 (石英粒を含む)	〃	明灰褐色 外面は一部黒変する	

遺構名	No.	種類	器種	器部	法量（cm）	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
S X23	56	土師器	鉢	底部½片		外面はナナメハケ、内面はタテヘラケズリ。	砂粒を多く含む。	普通	(外)褐色 (内)淡黄褐色	
	57	〃	高坏	坏部片	口径18.2cm	内外面共ヨコナデ、かなり磨滅する。	精良	良好	淡明橙色	床面
	58	〃	鉢	底部片		胴内面は下から上へのナデ仕上。外面はタテ又はナナメの細いハケをナデ消す。	1～5mm砂粒を混入。	〃	(外)暗灰褐色で一部黒斑あり。 (内)黒灰色（煤が付着）	
S X26	59	擦文系土器	甕	胴部½片	復元胴径25.3cm 底径19.8cm	胴外面に条目叩き、内面はナデであて具痕あり。	1～3mm石英粒を含む。	普通	(外)褐色 (内)淡い黄土色	
S X28	60	須恵器	高坏	坏部	復元口径12.6cm 受部径14.8cm	内底部から体部外面上半迄ヨコナデ。体外面下部はカキ目。	砂粒を少量含む。	〃	(外)青灰色 (内)暗灰色	床面
S X30	61	〃	坏蓋	½存	復元口径12.8cm 器高4cm	天井部3/4は回転ヘラケズリ。天井部下半から天井部内面はヨコナデ。	精良	良好	ややくすんだ青灰色	ロクロ回転へ順時計回り
	62	弥生	甕	口縁½片	復元口径24.0cm	器表面はかなり磨滅、ナデか。	小砂粒を含む。	〃	淡黄褐色	
S X36	63	土師器	小型丸底壷	完形	口径7.4cm 器高8.2cm 最大胴径8.7cm	外面は器表面が磨滅し不明、口内面は指ナデ仕上か。	1～2mm石英粒多量混入。	普通	(外)淡黄褐色 (内)明橙色	
	64	〃	椀	ほぼ完形	口径13.4cm 器高5.35cm	口縁内外面はヨコナデ、内底面と体部外面はヘラナデ。	〃	良好	赤褐色部分的に黒化する。	
	65	〃	〃		復元口径13.3cm 器高4.5cm	内面はナデ、外面は磨滅がひどく調整不明。	精良	ややあまい	淡黄褐色	上層
	66	〃	〃	完形	口径12.8cm 器高5.4cm	内底面はヘラナデ、外面はナナメ又はヨコのハケをナデ消し。	2～3mmの石英粒を含む。	良好	淡褐色	
	67	〃	鉢		復元口径11.0cm	外面はナデ仕上。内面は底部が工具によるナデ、胴部がヨコヘラケズリ。	1mm内外の砂粒を多く含む。	〃	暗褐色 部分的黒褐色	
	68	〃	〃	口縁部½片	復元口径13.4cm 最大胴径13.6cm	口縁内外面ナデ、胴内面はナナメヘラケズリ、外面はタテ又はナナメのハケ。	細砂粒と金雲母を含む。	〃	(外)暗褐色 (内)黒褐色	上層
	69	擦文系土器	〃	口縁部½	復元口径11.3cm 最大胴径11.5cm	口縁内外面はヨコナデ、胴外面は磨滅、内面はヨコヘラケズリ。	砂粒を多く混入。	普通	(外)褐色 (内)暗褐色	床面
	70	〃	〃	口縁部½片	復元口径12.0cm	内外面共ナデ仕上、指おさえ痕が残る。	1～3mm砂粒混入。	良好	(外)暗灰褐色 (内)灰褐色	
	71	〃	〃	底部片	底径8.8cm	胴外面はナデ、底部との境はヘラナデ、内面はナデ。	1～3mm砂粒が多く混入。	〃	(外)暗褐色 (内)灰褐色 (褐色味が強い)	
	72	〃	〃	底部片	底径7.2cm	胴外面はナデでタテの刻目がかすかに残る。底部との境はヘラケズリ。内面はナデ。	砂粒を多く含む。	〃	(外)暗褐色 (内)淡灰褐色	
	73	〃	〃	底部片	復元口径6.8cm	内外面ともナデ仕上。底部との境ヘラケズリ。	1～2mm細砂粒混入。	〃	(内外)暗褐色	
	74	〃	〃	底部片	復元底径6.0cm	内外面ともナデ、底部との境ヘラナデ。	精良	〃	(外)暗褐色 （煤が付着） (内)淡明褐色	
	75	土師器	壷	口縁部	復元口径13.2cm	口縁内外面はナデ、胴内面はナナメヘラケズリ、胴外面はヨコハケ（8本単位）	砂粒を多く含む。	普通	(外)明黄褐色 (内)淡灰褐色	
	76	〃	〃	口縁部片	復元口径17.7cm	口縁内外面ヨコナデ、胴外面はタテ又はナナメハケ(10～12本単位)、内面ヘラケズリ。	精良	良好	(外)やや暗い褐色 (内)褐色	
	77	〃	甕	口縁½片	復元口径18.4cm	口縁内外面ナデ、胴外面はハケのちナデ、内面はナナメ又はヨコヘラケズリ。	砂粒を少量含む。	良好	(外)褐色 (内)明褐色	
	78	〃	甑	底部片	孔径2.1cm 復元底径7.8cm	器表面は磨滅し調整不明。	1～5mm石英粒を含む。	普通	(外)淡黄褐色 (内)淡黒灰色	
	79	〃	甕	口縁部	復元口径15.4cm	口縁内面から頸部はナデ、胴内面はヨコヘラケズリ、口縁外面はハケのちナデ、胴部はハケ。	細砂粒を含む。	〃	暗灰褐色 (褐色味が強い)	
	80	〃	〃	口縁部½片	復元口径24.0cm 最大胴径23.0cm	内外面ナデ仕上。	細砂粒を含む。	普通	(外)淡灰褐色 (内)黒灰色	
	81	〃	高坏	脚部欠失	口径16.6cm 坏径16.2cm	坏部内外面丁寧なナデ、脚内部はヘラケズリ、外面はナデ。	金雲母片を含む。	良好	くすんだ赤褐色	

遺構名	No.	種類	器種	器部	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
S X35	82	土師器	高杯	杯部のみ	復元口径17.0cm	内外面ヨコナデ。	砂粒をやや含む	良好	明褐色	
	83	〃	〃	脚部のみ	復元脚径推定13.2cm	脚部外面ナデ、内面はヘラケズリ。	2～4mmの石英粒多く含む。	〃	淡赤褐色	
	84	〃	〃	復元変形	復元口径16.5cm	杯部ヨコナデ、脚部外面ヘラミガキ、内面は摩滅し調整不明。	金雲母片を含む。	〃	くすんだ赤褐色	
	85	〃	〃	杯部のみ	口径15.6cm	内外面ヨコナデ。	やや砂粒を多く含む。	〃	暗茶褐色、部分的に赤褐色	
	86	〃	〃	杯部のみ	復元口径18.4cm	内外面ともヨコナデ、やや摩滅する。	1～5mm砂粒を多く含む。	〃	淡赤褐色	
	87	〃	〃	杯部のみ	復元口径17.0cm	内外面ヨコナデ、杯部下半の段にナデメハケ。	1～2mmの石英片、赤色粒子を含む。	〃	明橙色	
	88	〃	〃	脚部のみ	脚端径14.0cm	外面はナデで脚端にナデメハケ、内面下半ヘラケズリ、上半はナデ。	5mm内外の石英粒を多く含む。	普通	淡赤褐色	
	89	〃	〃	脚部のみ	復元脚端径13.4cm	外面はナデ、脚部内面はヘラケズリ、脚内面はナデ。	石粒をやや含む。	良好	(外)明褐色(やや赤味をおびる)(内)褐色	床面
	90	〃	〃	脚部のみ	脚端径11.4cm	外面から脚内面ナデ、脚部内面はヨコヘラケズリ。	1～2mm砂粒含む。	〃	明褐色	
	91	〃	〃	脚部のみ		外面はナデ仕上、内面はヘラケズリ。	微砂を含む(含雲母片等)	〃	明褐色	
	92	〃	〃	脚部のみ	復元脚端径11.2cm	外面はナデのちタテ又はナナメハケ、脚部内側はヘラケズリ。	砂粒をやや含む。	〃	明褐色	
	93	〃	〃	脚部のみ	復元脚端径11.7cm	外側はタテヘラケズリのちナデ、内面はヨコヘラケズリ。	緻密	〃	明赤褐色	
S X32	94	須恵器	坏身	½片	受部径11.2cm	外底部回転糸切ヘラケズリ、その他はヨコナデ。	〃	普通	(外)やや暗い青灰色(内)淡青灰色	ろくろ反転途時計回り
S X35	95	土師器	甕	口縁½片	復元口径23.8cm	外面はタテ又はナナメハケ、口縁部内面はナナメハケ、頸内面はナデ。	〃	良好	(外)淡赤味をおびた灰褐色(内)淡い肌色	
S X38	96	〃	高杯	杯部½片	復元口径15.8cm	磨滅がひどく調整不明。	1～2mm砂粒を含む。	普通	淡褐色	
	97	〃	〃	脚部片	復元底径16.0cm	外面は磨滅し調整不明、内面はヘラケズリ。	金雲母を含む。	〃	明褐色	
S X39	98	〃	〃	底部のみ		外面は細いタテハケ、内面は上半がヘラケズリ。	1～2mm砂粒を多く含む。	〃	やや白っぽい明黄褐色	
	99	須恵器	台付壺	復元完形	復元口径11.5cm 脚径14.6cm 器高17.2cm	体下半は静止ヘラケズリ、底外面はタテヘラケズリ、その他はヨコナデ。	緻密	良好 堅緻	淡青灰色	
S X40	100	弥生	壺	胴部片	最大胴径20.7cm	胴部外面上半丁寧なナデ、下半タテハケ、内面はタテ、ナナメ、ヨコのハケ。	〃	良好	淡黄灰褐色	
	101	〃	甕	½残存	復元口径12.6cm 現存高18.8cm 最大胴径16.6cm	口縁内外面はヨコナデ、胴外面はナナメハケ(10本)、内面はナナメ又はヨコハケ。	砂粒を多く含む。	〃	淡褐色、外はススが付着。	
S X46	102	土師器	高杯	口縁部½片	復元口径16.8cm	内外面とも丁寧なナデ。	1～3mm砂粒を少量含む。	〃	明橙色で部分的に黒灰色	
S X47	103	〃	〃	口縁部½欠失	復元口径15.2cm 器高9.5cm	全体ナデ仕上。磨滅が著しい。	緻密	やや あまい	明橙色	
	104	瓦質土器	鉢	口縁部½	復元口径15.7cm	口縁内外面ナデ、胴外面はタテの平行ミガキ(5本単位)。	1～5mm砂粒含む。	良好	(外)淡灰褐色(内)暗灰褐色	須恵質の土器
	105	土師器	坩	口縁½弱	復元口径13.0cm 器高4.2cm	内外面ともヨコナデ。	1～2mm砂粒含む。	〃	(外)明橙色(内)黒灰色味をおびる。	
	106	〃	〃	口縁部½片	復元口径12.0cm 器高5.1cm	内外面ともナデ。	砂粒を多く含む。	普通	淡褐色	
	107	〃	〃	復元完形	口径14.5cm 器高6.7cm	内底から口縁外面はナデ、外面下半はヨコハケのちナデ。	1～4mm砂粒含む。	良好	赤みをおびた黒灰褐色	

遺構名	No.	種 類	器 種	部 位	法 量 (cm)	手 法 の 特 徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
S X47	108	土師器	壺	口縁部片	復元口径17.2cm	内外面ナデ。	砂粒をやや含む。(金雲母)	普通	褐色	
	109	後式系土器	甕	口縁部	復元口径20.5cm	口縁外面から胴部内面ナデ。胴部外面はヨコ平行叩き。	1～2mm砂粒、雲母片を含む。	良好	淡褐色	
	110	土師器	高 坏	坏部片	復元口径14.6cm	ナデが器表面はかなり摩滅する。	砂粒を含む。	普通	淡褐色	
	111	〃	〃	脚部のみ	復元脚端径12.4cm	外面ヘラケズリのちナデ。脚部ナデ、裾部内面ヘラケズリ。	1～2mm砂粒混入	良好	淡灰褐色	
	112	〃	器 台	口縁部片	復元口径16.8cm	内外面ともナデ。	精 良	〃	明褐色	
	113	後式系土師	壺	底部片		内面はあて具痕が残る。外面は縦方向ナデ。	1～2mm砂粒混入	普通	(外)淡明褐色 (内)淡黄褐色	
S X48	114	土師器	高 坏	脚部片		外面はナデ、内面はヘラケズリ。	1～3mmの砂粒を多く混入。	良好	ややくすんだ淡褐色	
S X50	115	〃	壺	口頸部片		口縁内外面はナデ、胴部外面はタテ又はナナメハケ、内面はナナメヘラケズリ。	砂粒を多く混入する。	普通	(外)黒褐色 (内)暗褐色	
	116	後式系土器	鉢	底部片	復元底径11.0cm	外面はタテ又はナナメの平行叩き。内面は指ナデ。	砂粒をやや含む。	〃	暗褐色	
	117	土師器		把 手	現存長7.3cm	胴部体上部にヘラによる切り込み。	石英粒を含む。	良好	淡明褐色	
S E31	118	〃	鉢	口縁部片	復元口径14.0cm	内外面ナデ	砂粒を多く含む。	〃	こげ茶色	上 層
	119	〃	〃	底部片		外底部は粗いハケ、内面は摩滅し調整不明。	精 良	普通	(外)淡白灰褐色 (内)明橙色	〃
	120	〃	高 坏	脚部片のみ	脚端径11.4cm	外面は指ナデ、脚内外面はヨコナデ、内面はヨコヘラケズリ。	細砂粒を含む。	良好	淡褐色	下 層
	121	須恵器	坏 蓋		口径11.5cm 器高 4.4cm	天井部回転ヘラケズリ、口縁内外面はヨコナデ。	精 良	〃	淡青灰色	ろくろ回転は逆時計回り
	122	〃	坏 身	口縁部片	復元口径10.6cm 受部径12.5cm 器高4.9cm	内面から体外部上半部ヨコナデ。外底部は回転ヘラケズリ。	砂粒を少量含む	良好 堅緻	青灰色	上 層
	123	〃	高 坏	口縁部片	復元口径12.0cm 受部径13.6cm	内外面ともヨコナデ。	細砂粒を含む。	〃	淡灰色	〃
	124	〃	〃	受部部片	受部径12.6cm	内面ヨコナデ、体部上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ。	砂粒を少量含む。	〃	淡青灰色	〃
	125	〃	〃	脚部片	復元脚端径9.8cm	内外面ヨコナデ。	精 良	〃	ややくらい灰色	〃
	126	〃	壺	口縁部片	復元口径20.4cm	内外面ヨコナデ、2条の凹線施文。	〃	良好	暗青灰色	
	127	〃	〃		復元口径27.2cm	口縁内外面ナデ。体部内面同心円かきナラシ消し、外面や行叩きにカキ目を施える。	良い粉末状の粒子を含む。砂粒を含むが極少。	やや不良	灰色	上 層
S E35	128	土師器	壺	底現存	復元口径6.3cm 最大胴径9.0cm	口縁内外面及び胴部外面ヨコナデ。内面ヨコヘラケズリ。	精 良	良好 堅緻	(外)明橙色 (内)黒灰色	井戸底
S B01	130	〃	高 坏	坏部片	復元口径18.0cm	内面ヨコナデ、外面は摩滅し調整不明。	砂粒(1mm前後)をやや含む。	普通	明褐色	
S B05	131	〃	鉢	底部片のみ	復元底径6.2cm	外面はナナメの粗いハケ、内面はナナメヘラケズリ。	1～3mm砂粒を多く含む	〃	(外)暗褐色 (内)淡褐色	
S B07	132	〃	甕	底部のみ		内面はヘラナデ、外面は丁寧なナデ。	砂粒を少量含む。	良好	やや粗い茨城粘土色で部分的にススがつき黒褐色	
S D02	133	鉢 生	壺	完 形	口径11.6cm 底径 6.1cm 器高12.4cm	口縁外面から胴内面迄指ナデ、胴外面タテヘラ磨き痕を残す。底部絞りナデ痕が残る。	精 良	〃	明灰褐色	黒色粘質土層
	134	〃	〃	〃	口径12.4cm 底径 5.8cm 器高13.4cm	口縁内外面ヨコナデ胴部内面粗ナデ、胴部外面はヘラ磨き痕が残る。。	1～2mmの石英粒を含む	〃	やや暗い黄褐色土	〃

遺構名	No.	種類	器種	器部	法量 (cm)	手法の特長	胎土	焼成	色調	備考
SD02	135	弥生	壺	½片	復元口径29.0cm 器高16.9cm 復元最大胴径20.6cm	口縁外面から胴外面ヨコナデ、底部との境ナナメハケ。外底部ナデ。胴内面はナデ。	精良	普通	淡明橙色	上層
	136	〃	〃	½片	復元口径10.8cm 最大胴径12.5cm	口縁内外面ナデ。胴部内外面ヘラミガキ。	〃	良好	明褐色	下層
	137	〃	〃	口縁½片	復元口径48.0cm	口縁内外面は板状工具によるヨコナデ、ヨコ又はナナメハケ。	1～5mm 砂粒を含む	〃	明黄褐色～暗褐色	黒灰色粘土
	138	〃	〃	口縁部分	復元口径30.4cm	口縁部外面は板状工具によるヨコナデ胴部はナデ。口縁内面はヨコ又はナナメハケ、内面はナデ。	1～8mm 砂粒を含む	〃	淡褐色 (灰色味をおびる)	下層
	139	〃	〃	口縁½片	復元口径19.6cm	外面はナデ、口縁内面はヨコ又はナナメハケ胴部内面はナデ。	1～3mm 砂粒を含む。	〃	淡黄褐色	〃
	140	〃	〃	口縁部片	復元口径19.5cm	口縁外面ヨコハケ、下半はナデ、内面はヨコナデ。	砂粒を少量含む	〃	淡褐色 淡暗褐色	〃
	141	〃	〃	〃	復元口径20.5cm	口頸部外面丁寧なナデ、端部ヨコナデ内面はヘラ研磨、及び指ナデ。	砂粒を多く含む	〃	暗褐色～黒褐色	〃
	142	〃	〃	頸部片		頸部外面ナデ、胴部外面タテ又はナナメハケ、頸部内面はナデ仕上、内面はヨコハケ。	1～2mm 砂粒少量含む	〃	(外)赤みがかった淡褐色 (内)灰褐色	上層
	143	〃	〃	頸胴部片	復元最大胴径 28.2cm	頸部外面ナデ、胴部外面タテ又はナナメハケ、胴部内面はナデ仕上、内面ヨコハ	1～6mm 石英粒を含む	〃	(外)暗灰褐色 (内)黒灰色	〃
	144	〃	〃	底部片	底径10.0cm	胴部外面はナナメの細い刷毛、内面は丁寧なナデ。	砂粒を多く含む	〃	(外)淡褐色(焼ガ付着) (内)明褐色	
	145	〃	〃	〃	底径 9.0cm 最大高 7.6cm	胴外面はナナメの細い刷毛。内面はナデ、外底部は稲模の痕跡残る。	1～3mmの砂粒を含む	〃	淡褐色(内面はやや暗い)	上層
	146	〃	〃	〃	底径10.4cm	胴外面はナナメの細いハケ(7本単位)内面は細いハケのちナデ、外底部はナデ	1mm内外の砂粒を少量含む	〃	(外)ススが付着し黒褐色 (内)淡褐色	下層
	147	〃	甕	口縁部片	復元口径25.2cm	口縁外面はヨコナデ、内面はナナメハケ、胴部上半は粗いヨコハケ(10～11本)下半は縦ナデ,内面はナナメの細いハケ。	1～2mm 砂粒を含む	〃	(外)黄褐色～黒褐色 (内)淡褐色	〃
	148	〃	〃	口縁部½片	復元口径27.2cm	口縁内外面ヨコナデ、胴外面タテ又はナナメハケ(8本単位)、内面はナデ、指圧痕が残る。	1～5mm 砂粒を多く含む	〃	淡褐色	〃
	149	〃	〃	口縁½片	復元口径16.0cm	口縁外面はナデ、内面はヨコナデ。胴部外面はナデ,内面はナナメハケ。	1～3mm 砂粒を含む	〃	やや暗い褐色	
	150	〃	〃	口縁部½片	復元口径25.0cm	口縁内外面ナデ、端部刻目あり、胴外面は細いタテハケ、内面は指ナデ。	〃	〃	ススが厚く付着(外)	上層
	151	〃	〃	口縁部片		口縁内外面ヨコナデ、胴外面は粗いタテハケ、内面ナデ。			ススが厚く付着(外)	下層
	152	〃	鉢	復元完形	口径12.0cm 器高 6.1cm	内面はナデのちハケ、口縁外面はナデ外面はタテハケ。	砂粒を多く含む	良好	(外)やや暗い褐色 (内)褐色	〃
	153	〃	〃	〃	口径10.2cm 器高 7.3cm	内外面共荒ナデ、底部はナデ仕上。	1mm～1cmの砂粒が多く含む	〃	淡褐色 部分的に黒変する	〃
	154	〃	〃	〃	復元口径 9.2cm 器高 4.8cm	内面から口縁外面ナデ、外面はタテハケをナデ消す。外底部はナデ。	精良	〃	暗灰褐色 部分的に黒変	黒褐色粘土
	155	〃	〃	口縁½片	復元口径22.0cm	内外面共ナデ、かなり磨滅する。	1～5mm 砂粒を含む	普通	淡褐色	上層
	156	〃	〃	口縁½片	復元口径18.2cm	内面から口縁外面はナデ、胴部外面は部分的にナナメハケ。	精良	良好	(外)黒灰褐色から灰黄褐色 (内)灰黄褐色	下層 黒灰色粘土
	157	〃	〃	口縁½片	復元口径23.5cm	口縁内外面ヨコナデ、胴部内面はナデ外面はナナメ又はヨコハケ。	1～4mm 砂粒混入	〃	淡褐色	下層
	158	〃	〃	口縁部片	復元口径29.0cm 胴径28.8cm	口縁内外面、胴部内面上半ナデ、内面下半は板状工具によるナデ、胴部外面はタテハケ	砂粒を多く含む (石英粒を多く含む)	〃	淡褐色	〃
	159	〃	〃	復元完形	口径14.6cm 高さ12.7～12.8cm	口縁内外面は指圧痕が残る、胴外面はヘラナデ。内面はヘラナデ、内底部は指ナデ。	粗砂を含む。	〃	(外)淡褐色～黒褐色 (内)黒褐色(焼成によるものか)	〃
	160	〃	〃	½片	復元口径 7.2cm 復元高13.3cm 復元口径16.6cm	口縁部外面指おさえ痕あり、胴外面はナデ内面はナナメの細いハケ。	精良	良好	外面灰褐色で部分的に煤が付着し黒色を呈す	〃

遺構名	No.	種類	器種	器部	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
S D 82	161	弥生	鉢	底部	復元底径 7.0cm	胴外面タテヘラナデ、内面は丁寧なナデ外底部は粗なナデ。	1～2mmの石英粒を少量含む	良好	(外)淡褐色(一部黒変する) (内)明褐色	下層
	162	〃	高坏	脚裾欠失	復元口径16.3cm	杯部内外面ヨコナデ(赤色顔料を塗布)底部外面はナラ、内面はヘラケズリ。	1～2mm砂粒を多く含む	普通	(外)赤褐色(赤色顔料を塗布) (内)明褐色	〃
	163	〃	〃	脚部片	脚立径11.8cm	脚部外面はヘラ研磨、内面はしぼり痕が残る。	精良	良好	(外)赤褐色(丹塗) (内)灰褐色	黒灰色粘土
	164	〃	〃	坏部片	口径29.4cm	口縁部丁寧なナラ。坏部内外面横ナデ外面はナナメハケのちタテナデ。	1～5mm石英粒を多く混入	〃	やや(すんだ褐色外面上部はスヌスが付着	下層
	165	〃	〃	坏部底片	復元口径31.2cm	内外面磨滅し調整不明。	1～4mm砂粒混入	普通	明橙色	上層
	166	〃	〃	脚部片	脚端径15.4cm	内外面共磨滅がひどく調整不明、しぼり痕あり。	砂粒を多く含む	〃	淡灰褐色(やや黄味をおびる)	〃
	167	〃	〃	〃	復元脚端径9.7	外面はナナメハケ、脚裾内面はヨコハケ、脚部はナデ、しぼり痕あり。	1～2mm砂粒少量含む	良好	暗灰褐色	下層黒灰色粘土
	168	〃	〃	〃	復元脚端径16.2cm	外面はタテ方向のナデ、脚外面はナデ内面はヨコナデ、しぼり痕あり。	1～2mm石英粒子含む	〃	淡褐色	
	169	〃	〃	〃		外面はヘラ研磨、丹塗り、内面はナデ仕上。	1～2mm砂粒少量含む	〃	(外)赤褐色(丹塗り) (内)淡褐色	上層
	170	〃	器台	完形	口径11.2cm 脚高14.2cm	口縁端部ナラ、外面はタテハケ、内面はしぼり痕残り、口縁内面はナナメハケ内面下半はヨコハケ。	1～2mmの石英粒子をやや含む	〃	明黄灰褐色	黒色粘土層
	171	〃	〃	ほぼ完形	口径11.2cm 現容高15.5cm 底径12.3～12.8cm	外面にしぼり痕が残り、内外面共ナデ仕上。	〃	〃	明灰褐色	黒灰色粘土
	172	〃	〃	口縁部欠失	底径12.2cm	しぼり痕が残り、外面はナデ、内面は底部がヨコハケ。	1～5mm程度の砂粒を含む	〃	(外)淡褐色(一部黒褐色) (内)淡褐色	
	173	〃	〃	〃	復元底径10.1cm	内外面共ナラ、しぼり痕、指おさえ痕が残る。	1～2mm砂粒を少量含む	〃	(外)淡褐色 (内)褐色	上層
	174	〃	〃	〃	復元底径11.4cm	内面しぼり痕が残り、外面は指調整痕が残り、脚端部はナデ。	1～3mm石英粒を含む	〃	暗褐色	〃
	175	〃	〃	底部片	復元底径10.1cm	内面はナデ、外面は指調整痕が残る。	1～2mm石英粒を含む	〃	(外)淡褐色 (内)褐色	〃
	176	〃	〃	完形	口径 6.7cm 器高11.8cm 底径 7.5cm	外面は上半にタテハケ、下半はナデ、口縁内面はヨコハケ、内面はしぼり痕が残る。	1～3mmの石英粒を含む	〃	灰褐色(一部黒変する)	下層
	177	〃	〃	〃	底部底径12.0cm 頂径11.5cm 器高 11.6cm	口縁内外面ヨコナデ、外面は上半がナナメハケ下半は粗いタテハケ、内面は上半が粗いヨコハケ、中央がヘラナデ、下半がヨコナナメハケ。	1～2mmの砂(石英)粒を含む	〃	淡褐色	黒色粘土層
	178	〃	〃	口縁部のみ	口径 4.4cm	口縁外面はナナメハケ、内外面はナデ	〃	〃	淡明褐色	下層
	179	〃	鉢	底部欠失	復元口径30.8cm	口縁外面はヘラケズリ、内面は指オサエ外面は下半が粗ナラ、中央がナナメハケ下半がヘラナラ、内面は粗いナナメハケ	砂粒を少量含む	〃	(外)淡黄色(一部スヌスが付着) (内)黒灰色	〃
	180	土師器	甕	口縁部	復元口径23.0cm	内面から口縁外面ナデ、胴部外面はヨコの平行叩き。	〃	やや粗い	明橙色	
	181	〃	高坏	脚部		外面はタテヘラケズリのちナデ。脚部内面はナデ、内面はヘラケズリ。	砂粒を多く含む	良好	(外)淡茶褐色 (内)明橙色	下層 黒色粘土
	182	〃	〃	〃	復元脚端径 10.2cm	外面は指ナデ、脚内外面横ナデ、内面はヘラケズリ。	砂粒をやや含む	〃	淡黄褐色	上層
	183	須恵器	〃	脚部底片	復元脚端径 10.3cm	外面はヨコナデ、内面は指ナデ。	〃	〃	淡青灰色	〃
SD03	192	土師器	〃	口縁底片	復元口径19.0cm	内外面共ナデ、外底縁部にナナメハケ	1mm細砂粒を含む	普通	淡明橙色	〃
	193	須恵器	〃	底部底片	底 径11.8cm	内外面共ヨコナデ。	精 良	良好	淡青灰色	〃
SD05	197	土師器	壺	完形	口 径12.2cm 器 高12.4cm	口縁内外面から胴部外面上半ヨコナデ下半はタテハケのち粗ナデ、内面は調整不明。	〃	〃	明赤褐色	

遺構名	№	種類	器種	部位	法量（cm）	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SD05	198	土師器	小型丸底壺	口縁部をのぞいて完形	復元口径 9.0cm 器 高13.0cm 最大胴径11.2cm	口縁内面はナデ、外面は横ナデ、タテハケが残る。胴外面はタテハケ内面はヘラケズリ。	1～2mmの石英粒子を含む	普通	黄灰褐色	中 層
	199	〃	壺	完 形	口 径 9.0cm 器 高13.2cm	口縁内外面はヨコナデ、胴外面はナナメハケ、内面はヘラケズリ。	1～5mmの石英雲母片を含む	〃	(外)灰褐色 (内)茶褐色	上 層
	200	〃	〃	胴部片	最大胴径14.8cm	胴外面はタテ又はナナメハケ、内面はヘラケズリか。	雲母を含む	良好	(外)黒褐色 (煤が付着) (内)暗褐色	灰 層
	201	〃	小型丸底壺	½現存	復元口径 7.8cm 器 高10.2cm 最大胴径11.0cm	口縁内外面、胴外面ヨコナデ、胴内面指ナデ。	1～2mmの砂粒を含む	〃	明赤褐色	上 層
	202	〃	壺	口縁部	復元口径 9.0cm	口縁内外面ヨコナデ。	精 良	普通	白灰色	中 層
	203	〃	〃	口縁部½片	復元口径10.6cm	口縁内外面ヨコナデ、かなり磨滅する	1～2mm砂粒を多く含む	やや あまい	明るい褐色	
	204	〃	〃	復元完形	復元口径12.8cm 復 元 高15.0cm	口縁外面ナデ、内面、ヨコハケ、頸部外面ナナメハケ（10本単位）、胴内面、ヨコ又はナナメヘラケズリ。	砂粒を少量含む	良好	(外)淡こげ茶色 (内)淡黄褐色	中 層 黒褐色粘土
	205	〃	〃	底部½片	最大胴径13.0cm	胴部外面はタテ又はナナメハケ、内面はナナメヘラケズリ。	細砂粒を含む	普通	(外)淡暗褐色 (内)淡明褐色	中 層
	206	〃	坩	一部欠失	胴 部 径10.3cm	胴外面、丁寧なナデ仕上、内面上半はナデ調整、下半ヘラケズリ。	良好であるが1mm前後の石英粒子等を少量含む	良好	明橙色、部分的に2次焼成を受け黒化している	
	207	〃	〃	胴部片½	復元胴径 9.4cm	胴外面は磨滅し調整不明。内面は指ナデ調整。	精 良	普通	明赤褐色	中 層 黒褐色粘土
	208	〃	手捏土器	口縁部一部欠失	口 径 4.9cm	指調整。	細砂粒を含む	良好	淡灰褐色	
	209	〃	壺	口縁部片	復元口径10.2cm	口縁内外面ヨコナデ、胴外面タテ、又はナナメハケ内面ヘラケズリ。	石英粒子を少量含む	〃	淡灰色、部分的に黒色をおびるススが付着	
	210	〃	〃	口縁部片	復元口径11.2cm	口縁内外面ヨコナデ胴外面はナナメハケのちナデ消し、内面はヨコヘラケズリ。	1～3mm石英粒を含む	〃	(外)黒褐色 (煤が付着) (内)明褐色	上 層
	211	〃	〃	口縁½片	復元口径14.2cm	口縁部内外面ヨコナデ、胴外面ナデ胴内面ナナメハケ。	砂粒を多く含む	〃	(外)黒褐色 (内)暗褐色	下 層
	212	〃	〃	口縁部½	復元口径13.2cm	口縁内外面ナデ、胴外面はタテ又はナナメハケ内面はヘラケズリ。	〃	普通	(外)褐色 (内)暗褐色	砂 層
	213	〃	〃	口縁部½片	復元口径14.6cm	口縁内外面ヨコナデ、胴外面はナナメハケ、内面はヨコヘラケズリ。	1～2mm内外の砂粒を含む	良好	淡褐色、外面は2次焼成の煤が付着	中 層
	214	〃	〃	口縁½片	復元口径15.6cm	口縁内外面ヨコナデ、胴部外面はナナメハケ内面はヘラケズリ。	砂粒を多く含む	普通	褐色	〃
	215	〃	〃	口縁½片	復元口径14.0cm 最大胴径18.4cm	口縁内外面ヨコナデ、胴外面はタテ又はヨコナナメハケ、内面はヘラケズリ。	〃	〃	(外)黒褐色 (一部に煤が付着) (内)褐色	
	216	〃	甕	口縁部片	復元口径14.6cm	口縁外面ヨコナデ、内面はヨコハケ胴外面はヨコ又はナナメハケ、内面ヘラケズリ。	1～5mm砂粒を含む	良好	淡黄褐色	
	217	〃	〃	〃	復元口径16.5cm	口縁内外面ヨコナデ、胴外面タテ又はナナメハケ内面はヘラケズリ。	1～2mm砂粒を少量含む	〃	(外)暗灰褐色 (煤が付着) (内)灰褐色	
	218	〃	〃	〃	復元口径15.5cm	口縁内外面ヨコナデ、胴外面ナナメハケ、内面ナナメヘラケズリ。	石英粒を含む	〃	淡明赤褐色	下 層 黒褐色粘土
	219	〃	〃	口縁½片	復元口径17.8cm	口縁内外面ナデ、胴外面ナナメハケ内面ヨコヘラケズリ。	砂粒を多く含む	普通	褐色味をおびた明橙色	〃
	220	〃	〃	口縁½片	復元口径17.7cm	口縁内外面、ヨコナデ、胴部外面タテ又はナナメハケナデ消し胴内面ヘラケズリ。	〃	〃	褐色（外面はやや汚れる）	
	221	〃	〃	口縁½片	復元口径16.0cm	口縁内外面、ヨコナデ、胴部外面タテ又はナナメハケナラシ、胴内面ヘラケズリ。	1～6mm砂粒混入	〃	(外)灰褐色 (内)暗褐色	
	222	〃	〃	底部欠失	復元口径19.0cm 最大胴径25.0cm	口縁外面ヨコナデ、内面ナナメハケ胴部外面ナナメハケ、内面タテ又はナナメヘラケズリ。	砂粒を多く含む	普通	淡褐色	
	223	〃	〃	口縁部片	復元口径16.9cm 最大胴径25.4cm	口縁内外面ヨコナデ、胴外面ナナメハケ内面ヨコヘラケズリ。	1～6mm砂粒を少量含む	良好	(外)褐色 (大半煤が付着) (内)黒褐色	

遺構名	No	種類	器種	部位	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
	224	土師器	甕	completed	復元口径17.7cm 最大径径26.7cm 器高25.85cm	口縁内外面ナデ、胴部外面ナナメハケ 胴部内面はタテヘラケズり。	1～3mm砂粒を含む	普通	(外)淡褐色 (一部黒変する) (内)灰褐色	
	225	〃	〃	胴部片	復元胴径25.5cm	胴部外面はナナメ又はタテハケ、内面ヨコ又はナナメヘラケズり。	1～6mm 石英粒を含む	〃	(外)暗褐色 (内)淡黒色	灰層
	226	弥生	高坏	坏部	復元口径28.4cm	内面はヨコナデ、外面は磨滅し調整不明。	1～2cm 石英粒を含む	〃	(外)赤味をおびた淡灰褐色 (内)灰褐色	底
	227	土師器	高坏	〃	復元口径16.8cm	内外面共ヨコナデ。	1～3mm 砂粒を含む	〃	明橙色	
	22	〃	〃	〃	復元口径16.2cm	内外面ともナデ。	砂粒を少し含む	やや あまい	肌色、内面はやや赤味が強い	中層
	229	〃	〃	〃	復元口径17.3cm	内面から体部上半はヨコナデ、下半はタテハケ。	1mm大砂粒混入	普通	明橙色	
	230	〃	〃	坏部片	復元口径17.2cm	内外面共ヨコナデ。	精良	良好	暗褐色	セク4下層
	231	〃	〃	坏部片のみ	復元口径16.5cm	内外面共ナデ。	少し砂粒を含む	普通	明橙色	下層
	232	〃	〃	坏部	復元口径15.0cm	内外面共ヨコナデ。	1～2mm 砂粒を含む	〃	(外)褐色 (内)明橙色	上層
	233	〃	〃	〃	復元口径16.8cm	内外面共ヨコナデ。	1～6mm 石英粒を含む	良好	明橙色 外面は黒変する	
S	234	〃	〃	口縁部片	復元口径12.8cm	内外面共ヨコナデ。	砂粒を少量含む	普通	明橙色	下層
	235	〃	〃	脚部	脚端径13.0cm	外面はナナメ又はタテハケ、内面はヨコヘラケズり、脚内面はナナデ。	〃	〃	明橙色	〃
	236	〃	〃	脚部片のみ	復元脚端径 13.2cm	脚外面から脚内面は赤ナデ、脚部内面はヨコヘラケズり。	石英粒を少し含む	良好	赤みおびた黄褐色(内面は一部暗灰色)	〃
D	237	〃	〃	脚部	復元脚端径 11.2cm	脚外面から脚内面迄はナデ、脚部内面はヨコヘラケズり。	1～6mm 砂粒含む	〃	明褐色	〃
	238	〃	〃	〃	復元脚端径 12.5cm	脚外面から脚内面迄はナデ、脚部内面はヨコヘラケズり。	1～2mm砂粒 少量含む	〃	淡灰褐色	中層
	239	〃	〃	〃	脚端径11.6cm	脚部外面は丁寧なナデ、脚部内面はヨコヘラケズり。	〃	〃	明橙色	上層
05	240	〃	〃	〃	脚端径11.0cm	脚部外面はナデ、内面は磨滅し調整は不明	〃	普通	〃	〃
	241	〃	〃	脚部のみ	復元脚端径 13.0cm	脚外面は磨滅し調整不明、内面はヨコヘラケズり	1～3mm 砂粒を含む	〃	淡灰褐色	中層
	242	〃	〃		復元脚端径 9.6cm	脚外面はヘラケズりのちナデ、内面はヨコヘラケズり。	1～3mm 砂粒含む	〃	褐色やや暗い	下層
	243	〃	〃	在部片脚を欠失	復元底径11.4cm	内外面共ヨコナデ。	精良	良好	淡灰褐色(灰味が強い)	
	244	〃	鉢	口縁片	復元口径11.2cm 器高4.3cm	内外面共ナデ。	赤色粒を少し含む	やや あまい	淡肌色	
	245	〃	〃	口縁片	復元口径13.0cm	内面は丁寧なナデ、外面はナデ。	砂粒を多く含む	普通	(外)明褐色 (内)明赤褐色	
	246	〃	〃	復元完形 (器欠損)	復元口径13.0cm 器高4.4cm	内面から口縁部外面上半ヨコナデ、外面下半ヘラケズり。	赤色粒子(チャート)を多く含む	〃	やや赤味をおびた	下層
	247	〃	〃	坏部存	復元口径14.0cm 器高5.0cm	内外面共丁寧なナデ。	精良	良好	明赤褐色	
	248	〃	〃	坏部存	復元口径10.6cm 器高4.5cm	内面から口縁部外面迄ヨコナデ、体部内面から底部ナナメハケ目。	〃	〃	(外)明赤褐色 (黒色を呈す)	下層
	249	〃	体	口縁部	復元口径26.8cm	体外面にナナメハケ、内面はヨコヘラケズり	砂粒を多く含む	普通	明橙色	

遺構名	No.	種類	器種	器部	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
S D05	250	土師器	甕	口縁部片 1/6のみ	復元口径15.8cm	口縁内外面共ナデ、胴外面はナデ、内面はヘラケズリ	砂粒を少量含む	普通	淡い紅色	中層
	251	〃	〃	1/6現存	復元口径12.2cm 器高 8.8cm	口縁内面ヨコナデ、外面ナデ、胴外面はナナメハケ胴内面はヨコヘラケズリのちナデ	1～2mm 砂粒を含む	良好	(外)暗褐色(全体にススが付着) (内)淡褐色	
	252	〃	〃	口縁1/6片	復元口径11.6cm	口縁内外面ナデ、胴外面上部1/3は赤ナデ、以下はナナメハケ、体内面はヘラケズリ	〃		(外)暗灰褐色(ススが付着) (内)黒灰褐色(スス)	中層
	253	須式系土器	〃	底部片	底径 6.5cm	胴外面は粗ナデのちハケ、胴内面粗ナデ、外面はヘラナデ	1～3mm 砂粒を含む		(外)黒青灰色 (内)淡灰褐色	
	254	〃	坏	1/6現存	復元口径11.0cm 器高 6.0cm	内外面全体ナデ	1～6mm 石英粒を含む		(外)黒褐色 (内)明橙色	
	255	〃	鉢	1/4のみ	復元口径14.2cm	全体に煤が付着し調整不明	小砂粒を少し含む		(外)暗灰褐色 (内)淡褐色	底面
	256	〃	〃	1/6弱現存	復元口径10.2cm 器高11.0cm	口縁内外面ナデ、胴外面ナナメの粗いハケ内面はナナメヘラケズリ	砂粒を多く含む		明褐色、外面やや部分的に黒い	下層
	257	〃	甕	復元完形	復元口径31.4cm 器高27.0cm	胴部外面タテ又はナナメハケ、底平は指頭痕のちハケ、内面は口縁部がナデ胴部がヘラケズリ	砂粒を少し含む	普通	淡褐色	中層
	258	〃	〃	復元完形全体で1/4程	復元口径29.0cm 復元底径13.0cm 復元器高27.25cm	口縁外面ナデ胴外面1/3はタタハケ、下1/3はナデ、底部の周に粗いヨコハケの下はヘラナデ口縁内面はナナメハケ、胴内面はヘラケズリ	〃	良好	(外)灰褐色 (内)黒灰色	
	259	〃	壺	口縁1/6片	復元口径18.8cm	口縁外面ナデ、胴外面はナナメの平行叩き口縁内面はヨコ又はナナメハケ	砂粒を特に石英をやや含む		明褐色	上層
	260	〃	〃	口縁部1/6片	復元口径20.8cm	口縁内外面ヨコナデ、胴外面はタタの平行叩き、内面はヨコヘラケズリ	精良	普通	明褐色(外はススが付着)	中層
	261	〃	〃	口縁部1/6片	復元口径17.8cm	外面は全体にナデ内面は口縁がヨコナデ胴部はナデ	1～2mm 砂粒を多く含む	やや あまい	(外)淡褐色 (内)淡黄褐色	下層
	262	〃	〃	口縁1/6弱で口部にやや歪開	復元口径24.4cm	内外面共ナデ	精良	普通	(外)ピンク色をおびた褐色 (内)褐色	下層
	263	〃	〃	底部片	底径 9.8cm	外面はナナメの平行叩き、内外底部はナデ	細砂粒を含む	良好	淡褐色	上層
	264	精製器	坏身	口縁部	復元口径12.3cm 受部径14.4cm	内面から体外部1/3迄はヨコナデ、下はヘラケズリ	精良	〃	暗青灰色	
	265	〃	〃	口縁1/6片	受部最大径13.4cm	内面はヨコナデ、体外面上半がヨコナデ下半はヘラケズリ	〃	良好 堅緻	(外)やや暗い灰色 (内)灰色	
	266	〃	高坏	坏部	口径 8.2cm	内面はヨコナデ外面上部1/3はヨコナデ、下部1/3はヘラナデ	〃	良好	くすんだ淡赤褐色	中層
	267	〃	〃	復元完形	復元口径14.8cm 器高10.7cm	坏内面はヨコナデ外面は口縁部がナデ下半1/3がヘラケズリ、調部内外面ヨコナデ	〃	良好 堅緻	淡青灰色	上層
	268	〃	〃	坏部1/6片	復元口径15.0cm	内面から外面1/3はヨコナデ、下部1/3はヘラケズリ	微砂粒を含む	良好	(外)黒灰色(釉がかかる) (内)灰褐色	上層
	269	〃	〃	脚部片		内外面ともヨコナデ、坏内面に自然釉がかかる	精良	〃	淡青灰色	
	270	須恵器	壺	口縁部1/6片	復元口径21.4cm	口縁内外面ヨコナデ、胴部外面は5本単位のナナメの平行叩き、内面はナデ	〃	良好 堅緻	青灰色(自然釉がかる)	中層
S D07	271	土師器	高坏	口縁1/6片	復元口径17.6cm	摩滅がひどく調整不明	1～2mm 砂粒をやや含む	普通	(外)明黄褐色 (内)明黄褐色	
	272	〃	〃	1/6現存	復元口径11.8cm	胴外面は粗ナデ、底内面はヨコナデのちナナメハケ内面はヘラケズリ	砂粒を少量含む	良好	淡黄褐色	
S D16	274	須式系土器	鉢	口縁1/6片	復元口径14.2cm	口縁内外面、胴部外面はナデ、胴部内面はヘラナデ	1～2mm 砂粒を多く含む	〃	(外)黒褐色 (内)こげ茶色	中層
	275	須恵器	有蓋高坏	蓋	復元口径15.2cm	内外面共ヨコナデ	精良	〃	(外)暗灰褐色 (内)淡灰青色	下層
	276	瓦質土器				外面に小さい格子目叩きで、沈線が入る。	〃		淡青灰色	中層

(1)

遺構名	No.	種類	器種	器部	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SD16	277	須恵器				内外面ナデ。	精良	良好	くすんだ赤褐色	下層
SD17	278	瓦質土器		把手		指調整。	〃	普通	暗青灰色	
SD18	279	土師器		〃	現在長 5.5cm	指頭整きし込み式。	1～2mm 砂粒を少量を含む	〃	明るい肌色	
P－3	280	弥生	壺	口縁部片	復元口径20.2cm	内面から口縁外面は磨滅かひどく調整不明。肩部はナナメハケ	1～3mm 砂粒含む	ややあまい	淡灰褐色(やや黄味をおびる)	D II 区
P－1	281	土師器	鉢	底部片	底径 7.9cm	磨部外面はタテ又はナナメハケ外底部はナナメハケ。	砂粒を多く含む	普通	(外)黒灰色 (内)淡灰褐色	E 区
表採	284	〃	壺	口縁部片	復元口径11.0cm 器高4.25cm	内面から口縁外面はナデ、体部下半はヘラケズリのちナデ、外底部はナデ。	1mm内砂粒含む	良好	淡明褐色 (煤が付着)	C 区
〃	285	瓦器	高台付塊	底部片	復元高台径 7.0cm	内面上半はヘラ研磨、内底部はナデ外面はナデ。	精良	〃	灰色	C 区
〃	286	須恵器		把手	現存長 7.5cm 最大幅 3.2cm	内外面共指ナデ調整。	1～2mmの石英粒含む	〃	〃	F 区

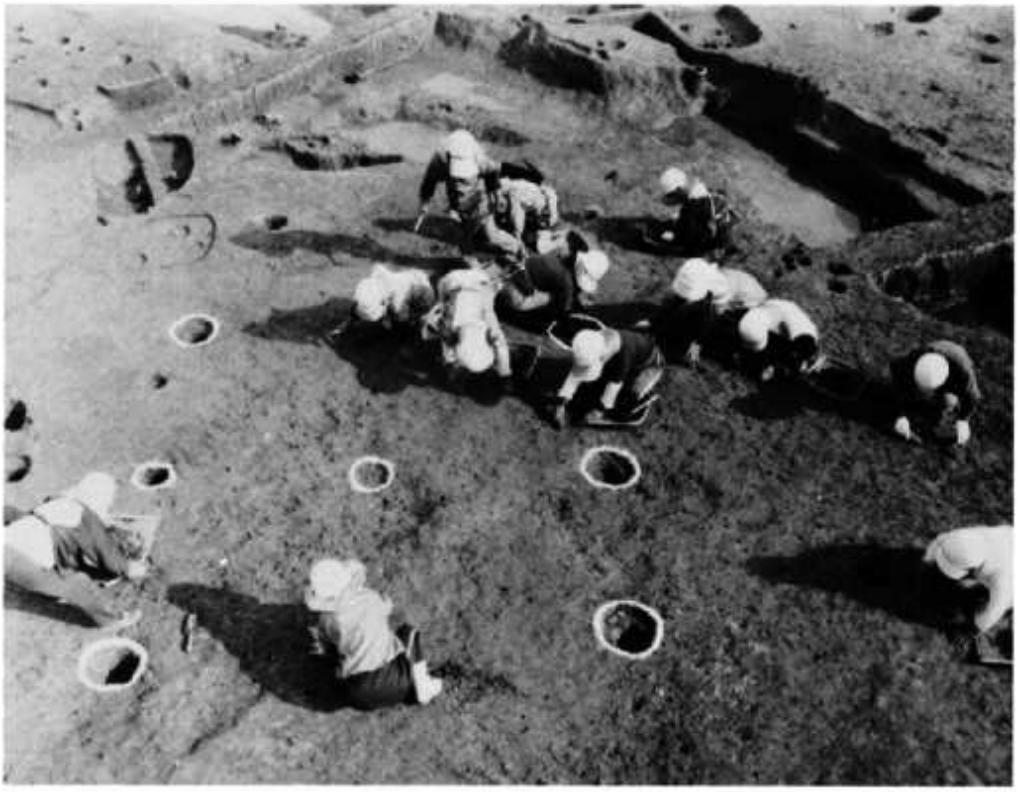
表5. 土壙(SX) 一覧表

(1)

土壙番号	平面形	規模(m) 長径×短径×深さ	出土遺物	備考 埋土、その他	旧遺構番号	地区	Fig.番号
1	隅丸長方形	1.7×0.53×0.23	須恵器の細片。	土壙墓か。	SX01	E I 区	Fig. 4
2	隅丸長方形	1.06×0.63×0.38	土師器の細片が6点。	炭化物や小礫を含む。 堆積状況はレンズ状堆積。	SX02	E I 区	Fig. 4
3	隅丸方形	0.97×0.94×0.03	平底気味の土師器・鉢。	削平がひどい。 ピット状の落込みあり。	SX03	E II 区	
4	不定形	3.3×1.93×0.07	土師器の高坏・坏部片。 須恵器の細片、量は少ない。	削平がひどく、床面は凹凸がある。 SB03の柱穴が切り込む。	SX04	E II 区	Fig. 4
5	楕円形	1.85×1.4×0.23	弥生後期土器片。 土師器・高坏。	覆土中には小礫、炭化物を含む。 SB05が切り込む。	SX05	E II 区	Fig. 4
6	不整楕円形	3.32×1.42×0.3	弥生時代後期から古墳時代、土師器片を含む。	覆土は黒褐色粘質土で、炭化物、小礫を少量混入する。	SX06	E II 区	Fig. 5
7	円形	1.25×1.23×0.13	弥生式土器、器台、鉢。 古墳時代、土師器、高坏、中世、土師皿。	覆土は黒褐色粘質土に 黄褐色地土ブロック混入。	SX07	E II 区	Fig. 4
8	不整円形	(1.93)×1.73×0.15	弥生式土器。 古墳時代、土師器、須恵器の細片。	SX06と切り合う。 SB06に切られる。	SX08	E II 区	Fig. 5
9	不整隅丸長方形	2.9×2.35×0.17	土師器、鍋、壺の破片。	内に焼土、炭化物を多く混入する。 圃場整備地区にかかる。	SX09	E II 区	Fig. 5
10	円形	1.12×1.06×0.85	古墳時代、埴、小型丸底壺。 高坏、平行叩のカメ、細片が多い。	底面に転石が落ち込み	SX10	E I 区	Fig. 5
11	不整長方形	(3.65)×(2.06)×0.12		切り合いで形状は、はっきりしない。 圃場整備調査区	SX11		
12	欠番						
13	隅丸長方形	1.0×0.78×0.14	出土遺物はない。	床面にピットが2ケ見られる。	SX13	E I 区	Fig. 6
14	隅丸長方形	5.58×1.05×0.22	弥生式土器片土師器、甕、高坏 手捏土師、細片、滝式系土器、坏、白玉	SX17、22を切る。 炭化物、焼土を多量に混入する。	SX14	E II 区	Fig. 6
15	隅丸長方形	1.44×0.85×0.12	弥生式土器、古墳時代、土師器塊	SX28と切り合う。	SX15	E II 区	Fig. 6
16	不整楕円形	1.83×1.13×0.26	土師器の甕の底部、塊、鉢。 須恵器、細片。	黒色粘質土、灰、炭化物、焼土ブロックを混入。	SX16	E II 区	Fig. 6
17	不整楕円形	3.5×2.5×0.3	弥生式土器、壺、須恵器の 有蓋高坏、砥石。	SX21とSX05に切られる。	SX17	E II 区	Fig. 6
18	隅丸長方形	(3.3)×(2.73)×0.06	土師器の細片。	溝状遺構やPitと切り合い 床面はあれる。残りは悪い。	SX18	E II 区	Fig. 7
19	不整方形	2.42×1.95×0.07	弥生式土器片。 砥石、土師器、鍋、深鉢。	削平がひどく、遺構の残りは悪い。 SX14、18、SD07と切り合う。	SX19	E II 区	Fig. 7

土壙番号	平面形	規模(m) 長径×短径×深さ	出土遺物	備考 埋土、その他	旧土壙番号	地区	Fig.番号
20	隅丸三角形	4.23×2.9×0.77	弥生土器片，土師器，甕，壺，須恵器，坏身，坏蓋，耳環。	下層に植物の枝などを含む。	S X 20	E II 区	Fig. 7
21	隅丸長方形	2.1×1.6×0.28	弥生式土器片。 土師器の甕，高坏。	炭化物，焼土粒子を多く混入する。	S X 21	E II 区	Fig. 7
22	隅丸長方形	2.47×1.68×0.23	弥生式土器片，土師器の体型土器，把手，高坏，敲石。	SX21と切り合う。	S X 22	E II 区	Fig. 7
23	隅丸方形	1.2×1.1×0.13	土師器，甕，高坏。	南壁が削平により消滅する。	S X 23	E II 区	Fig. 8
24	隅丸長方形	1.55×0.59×0.28	弥生式土器，古墳時代，土師器細片。	SX20に切られる。 土壙墓か。	S X 24	E II 区	Fig. 8
25			滑石製臼玉。	明確に遺構として把握出来ない。	S X 25	E II 区	
26	隅丸方形	0.83×0.83×0.07	古墳時代，土師器の高坏。 模式系土器，壺	浅くかなり削平を受ける。	S X 26	E II 区	
27	隅丸方形	1.94×1.34×0.26		SX21と切り合う。 中に焼土，炭化物を混える。	S X 27	E II 区	Fig. 7
28	隅丸長方形	3.65×3.4×0. 1	弥生時代後期の甕。 土師器，把手，須恵器，高坏。	SX16，SX22と切り合う。 P2が切り込む。	S X 28	E II 区	Fig. 8
29	欠番					E II 区	
30	楕円形	2.06×1.38×0.38	弥生式土器甕。 須恵器，杯蓋	炭化物を多く混入する。 SB9，10と切り合う。	F I 区 S X 01	F I 区	Fig. 9
31	不整楕円形	1.87×1.4×1.38	砥石，土師器高坏，甕。 須恵器，坏身，坏蓋，有蓋高坏，壺	井戸SE31，。	F I 区 S X 02	F I 区	Fig. 12
32	不整円形	1.06×1.06×0.63	須恵器，坏身。	浅い井戸である可能性を残す。	F I 区 S X 03	F I 区	Fig. 9
33	隅丸長方形	0.9×0.75×0.24	古墳時代土師器，須恵器の細片を含む。	覆土は暗灰褐色粘質土。 底面隅に直径20cmのピットがある。	F I 区 S X 04	F I 区	
34	隅丸長方形	1.48×0.8×0.15	弥生式土器，土師器の細片を含む。	SB10と切り合う。	F II 区 S X 05	F II 区	Fig. 9
35	隅丸方形	2.5×2.2×1.55	弥生式土器。 土師器，甕，鉢の細片。	SX40を切る。 井戸SE35。	F II 区 S X 06	F II 区	Fig. 12
36	不整楕円形	3.0×2.33×0.2	土師器，小型丸底壺，高坏，甕，鉢，埦等多数を含む。	炭化物を含む。 土器溜か。	F II 区 S X 07	F II 区	Fig. 9
37	不整円形	1.44×1.30×0.1	弥生式土器の細片。 古墳時代土師器片。	削平がひどく東側壁面が消滅する。	F II 区 S X 08	F II 区	Fig. 9
38	隅丸長方形	2.3×0.95×0.16	土師器，高坏。	土壙墓か。	F II 区 S X 09	F II 区	Fig. 9
39	不整方形	(0.9)×(0.8)×0.03	土師器高坏。 須恵器，台付壺。	削平がひどく壁面の残りは非常に不良。	F II 区 S X 10	F II 区	
40	隅丸長方形	(1.8)×0.85×0.2	弥生時代後期の壺・甕。	床面は2段掘りになる。 SE35に切られる。	F II 区 S X 11	F II 区	Fig. 10
41	隅丸長方形	0.85×0.83×0.15	すべて土師器の細片か高坏など。	P2が切り込み，柱痕が残る。 植物の柱穴の可能性あり。	F II 区 S X 12	F I 区	
42	楕円形	2.13×1.83×0.62	工作台石などがある。	SD02B河川内で検出。 切合不明。	D I 区 S X 02	D II 区	Fig. 10
43	楕円形	1.37×1.1×0.1	古墳時代土師器の細片。 叩きの入ったものもあり。	SX49に切られる。	B II 区 S X 01	B I 区	Fig. 10
44	隅丸方形	0.98×0.86×0.27	土器の細片を少量含む。	中央が2段の掘り込み。	B II 区 S X 02	B I 区	
45	隅丸長方形	0.95×0.53×0.18	土器の細片を含む。	中央に直径12cm，深さ7cmのP2がある。	B II 区 S X 03	B I 区	Fig. 10
46	隅丸方形	6.14×3.65×0.25	弥生式土器片 土師器高坏甕など，須恵器細片	SX47に切られる。	B II 区 S X 04	B I 区	Fig. 11
47	不整楕円形	2.40×2.30×0.21	弥生式土器片，土師器，埦，壺，高坏器台，甕	SX46を切る。	B II 区 S X 05	B I 区	Fig. 11
48	楕円形	(2.1)×1.77×0.2	土師器，高坏，甕の細片	炭化物，地土ブロックを含む。 SX46，47に切られる。	B II 区 S X 06	B I 区	Fig. 11
49	楕円形	(1.44)×(0.97)×0.59	古墳時代土師器の細片	植物などを含む。 SX43を切る。	B II 区 S X 07	B I 区	Fig. 10
50	不整円形	(1.8)×1.46×0.18	弥生式土器。 土師器，把手，甕，須恵器細片	ピットが切り込み。 床面は凹凸がはげしい。	A I 区 S X 08	A I 区	Fig. 11

図　版
PLATES



E区　発掘作業風景

吉武地区周辺航空写真（昭和56年撮影）

(1) D～F調査区全景（東から）

(2) E，F調査区全景（西から）

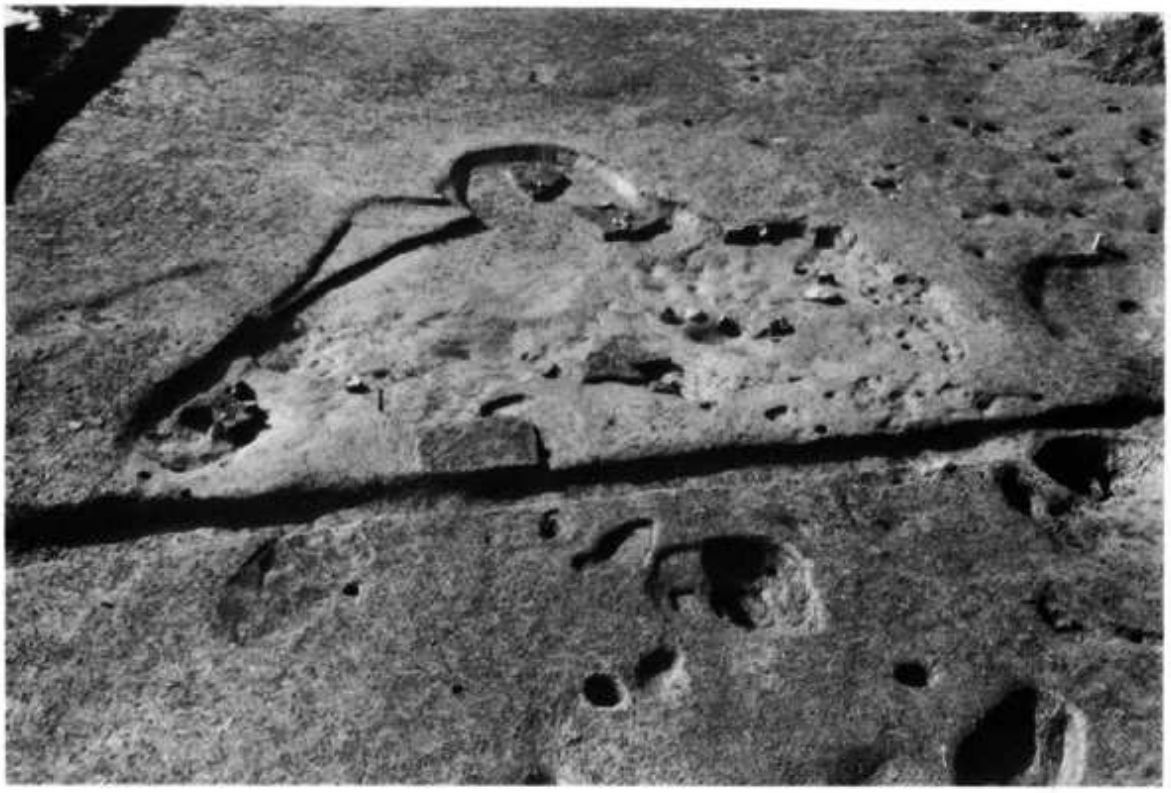
(1) BI区遺構検出状況（西から）

(2) BII区遺構検出状況（西から）

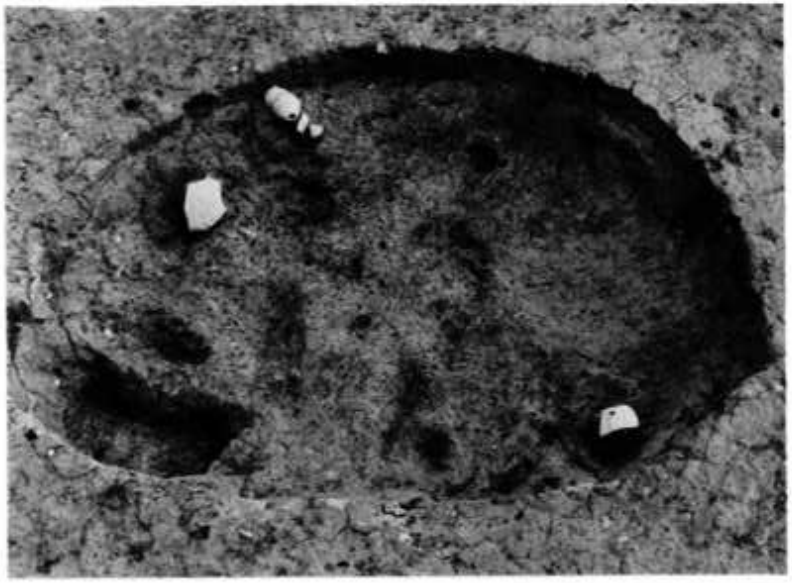
(1) SX18, 19土壙（南から）

(2) SX17, 20土壙（東から）

(1) SX14土壙（北から）



(2) SX46～48土壙（東から）



(3)

(1)

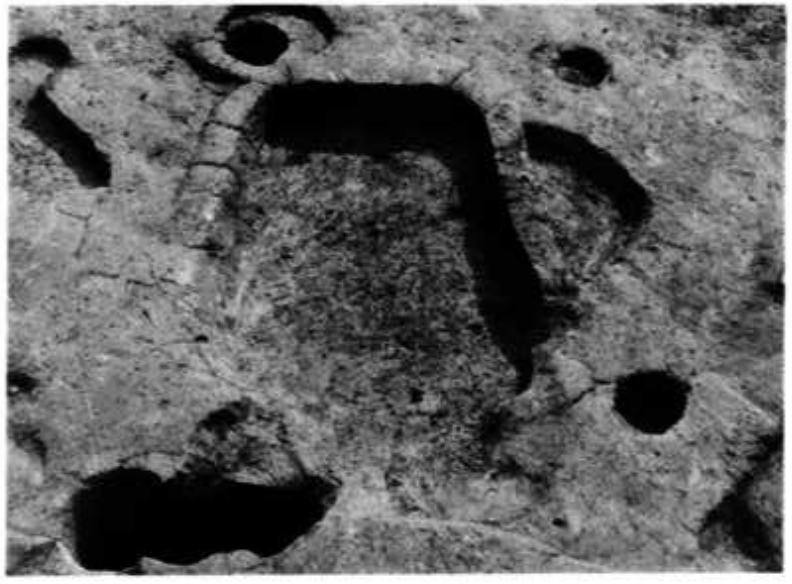
(4)

(2)

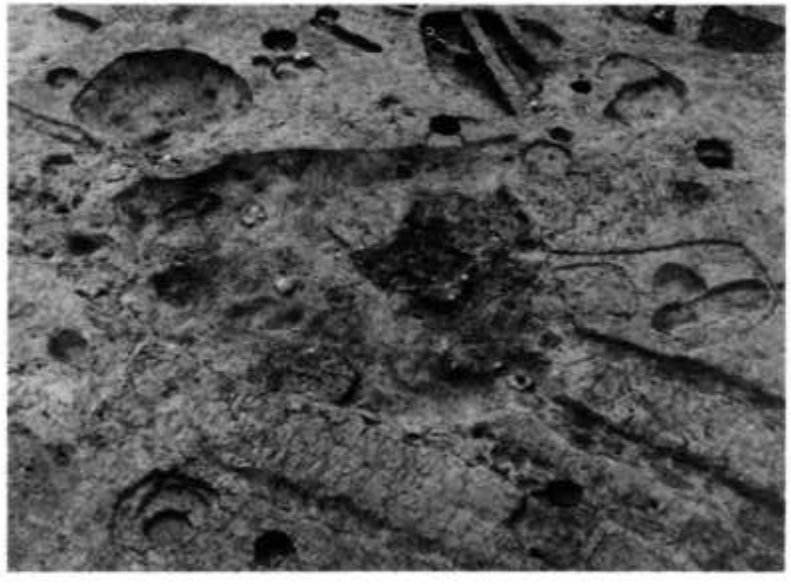
(1) SX01土壙（西から） (2) SX02土壙（北から） (3) SX05土壙（北から） (4) SX07土壙（南から）

(3)

(1)



(4)



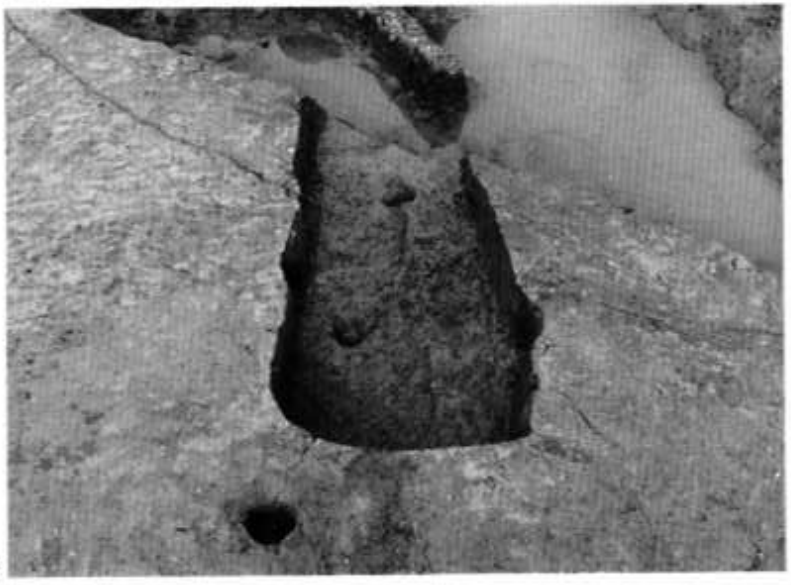
(2)

(1) SX08土壙（南から） (2) SX09土壙（北から） (3) SX10土壙（南から） (4) SX15土壙（北から）

(3)

(1)

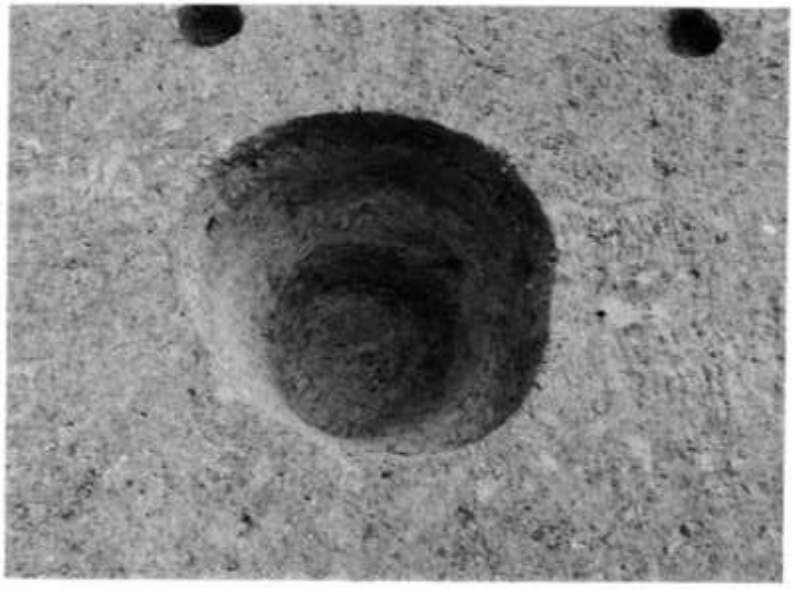
(4)



(2)

(1) SX21, 27土壙（北から） (2) SX24土壙（南から） (3) SX30土壙（南から） (4) SE31（南から）

(3)

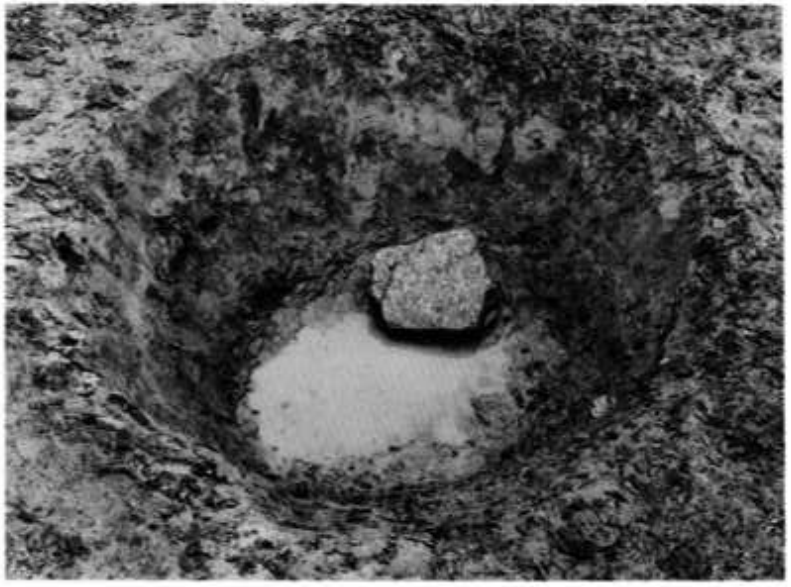


(1)

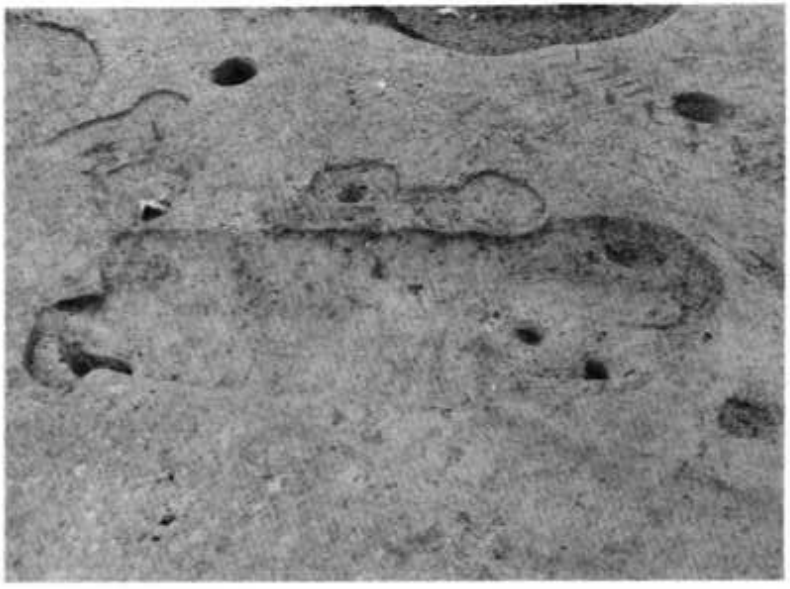
(4)

(2)

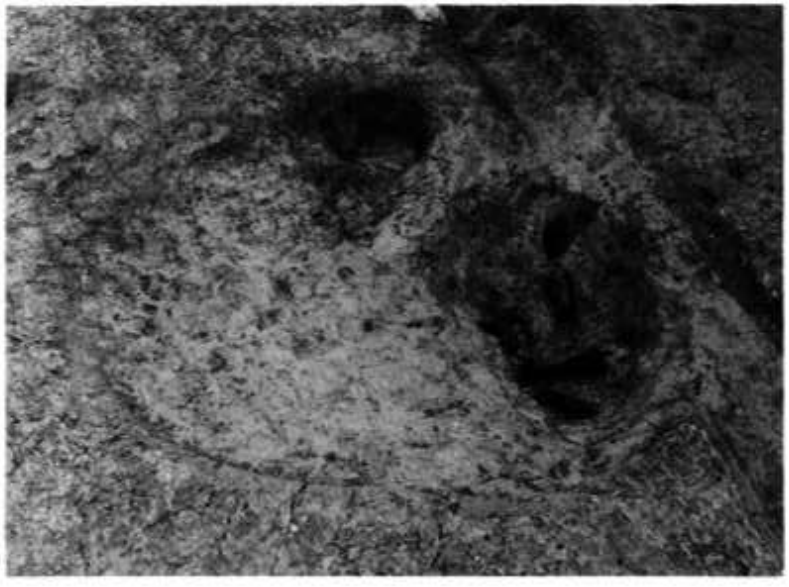
(1) SX32土壙（北から） (2) SX34土壙（東から） (3) SE35（東から） (4) SX36土壙（北から）



(3)



(1)



(4)

(2)

(1) SX37土壙（南から） (2) SX40土壙（北から） (3) SX42土壙（西から） (4) SX43, 49土壙（北から）

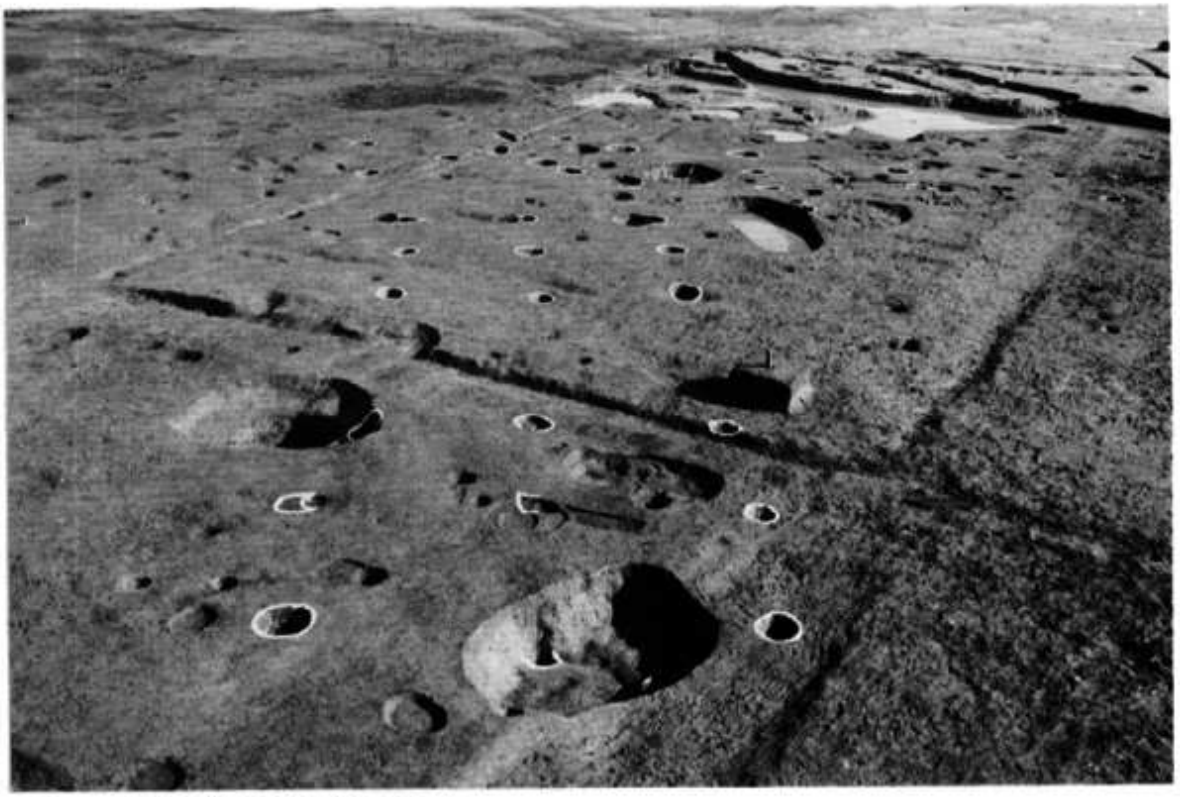
(3)

(1)

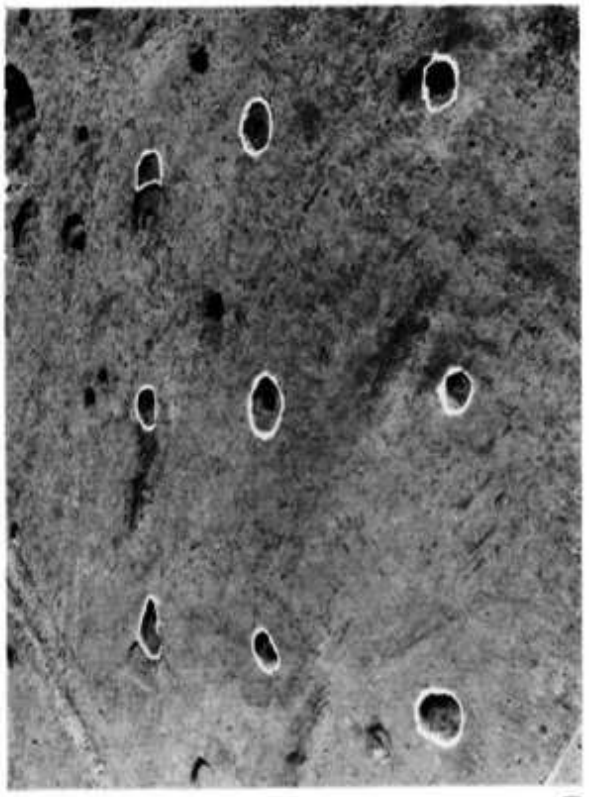
(4)

(2)

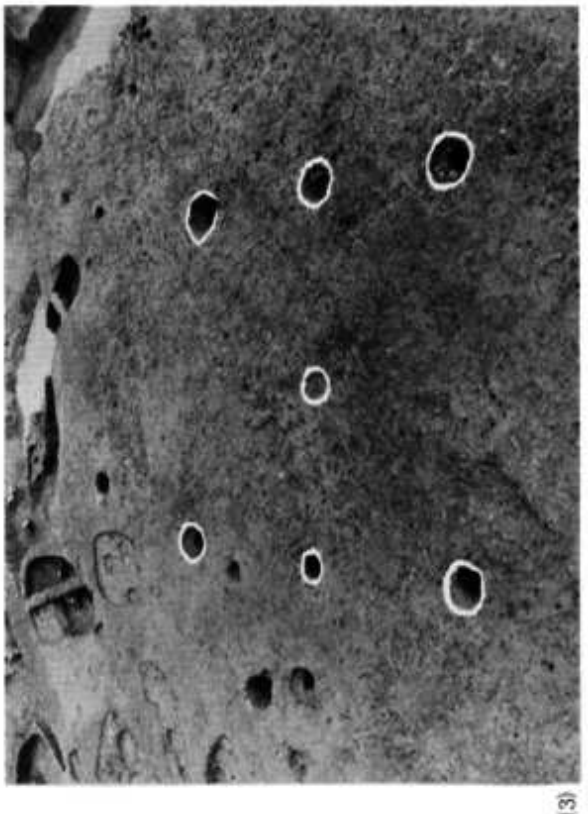
(1) SX14土壙遺物出土状況　(2) SX20土壙遺物出土状況　(3) SX39土壙遺物出土状況　(4) DII区pit3



(1) E, F区掘立柱建物検出状況（西から）

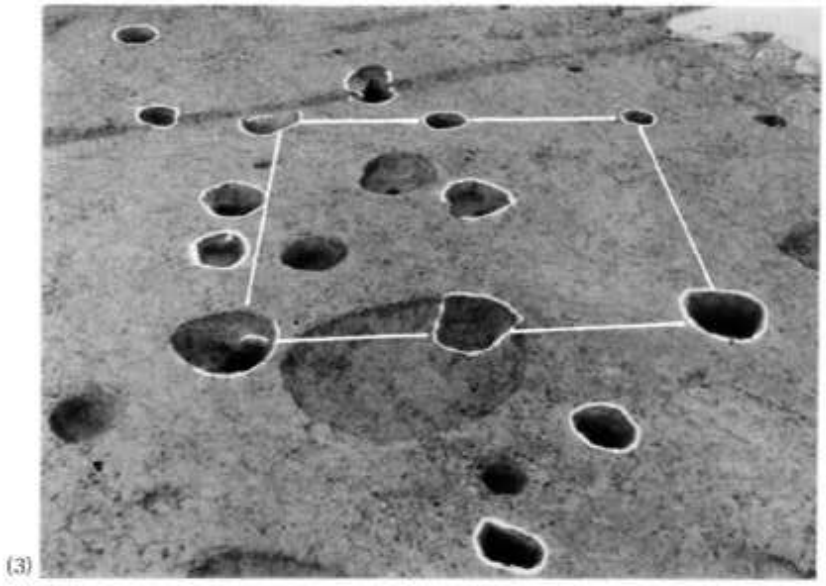


(2)



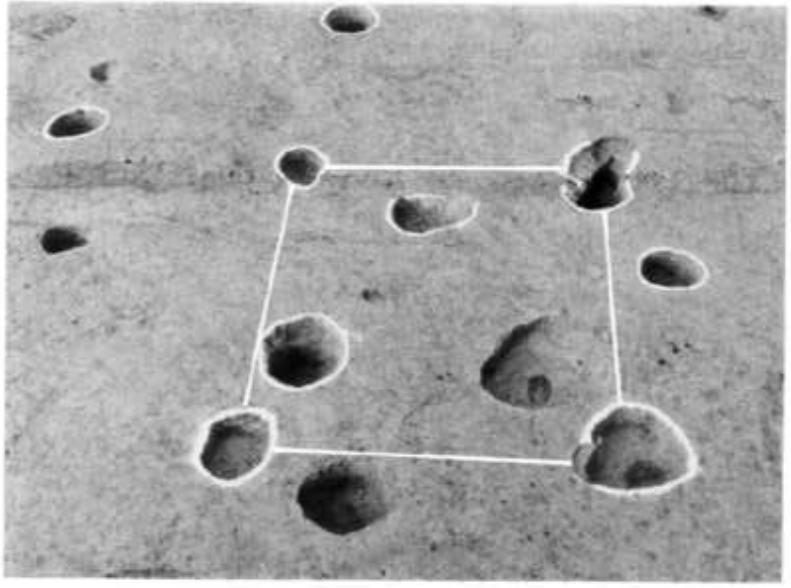
(3)

(2) SB01（南から） (3) SB02（西から）

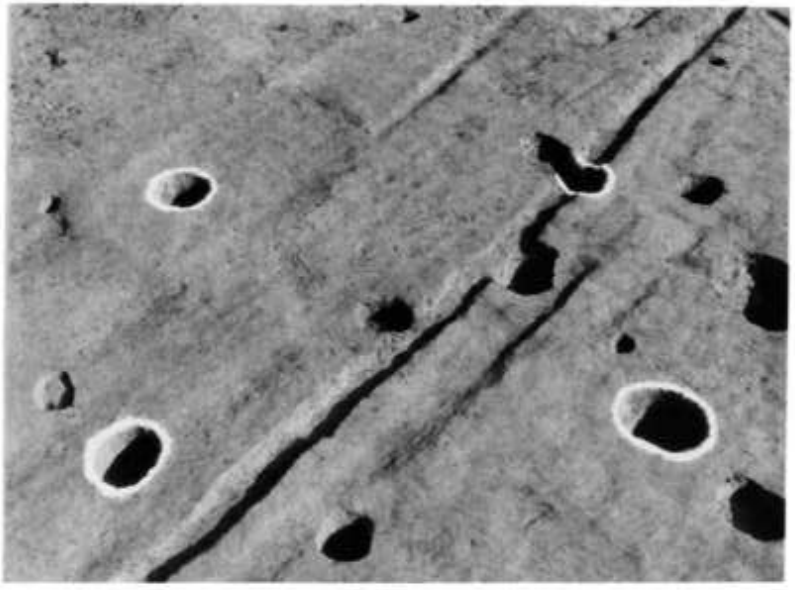


(3)

(1)



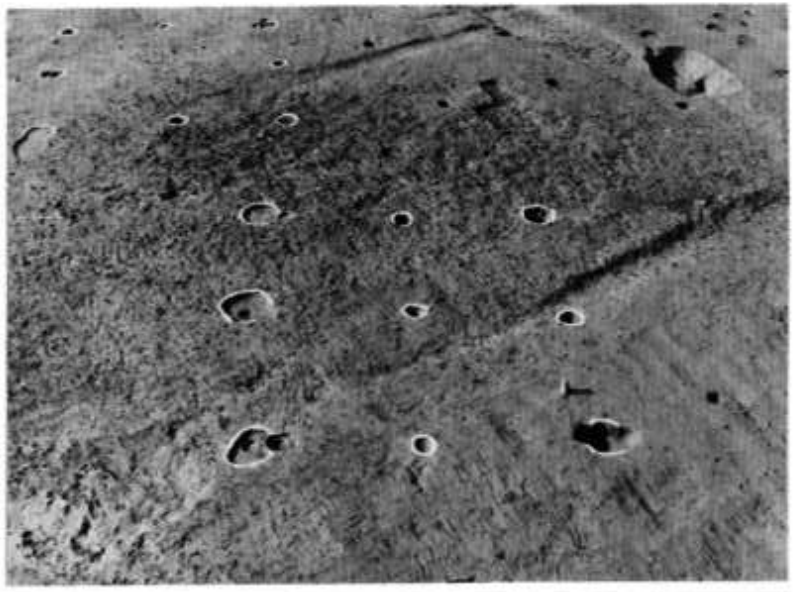
(4)



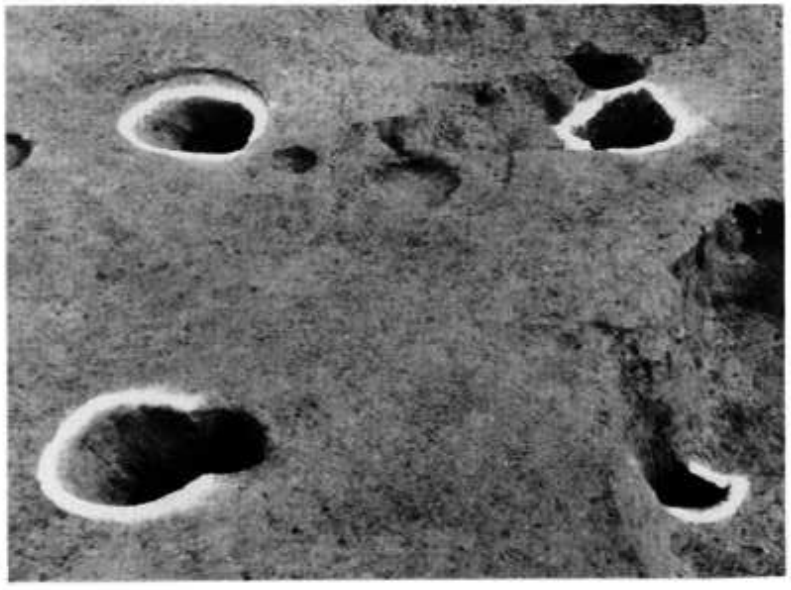
(2)

(1) SB03（南西から） (2) SB04（北東から） (3) SB05（南から） (4) SB06（南から）

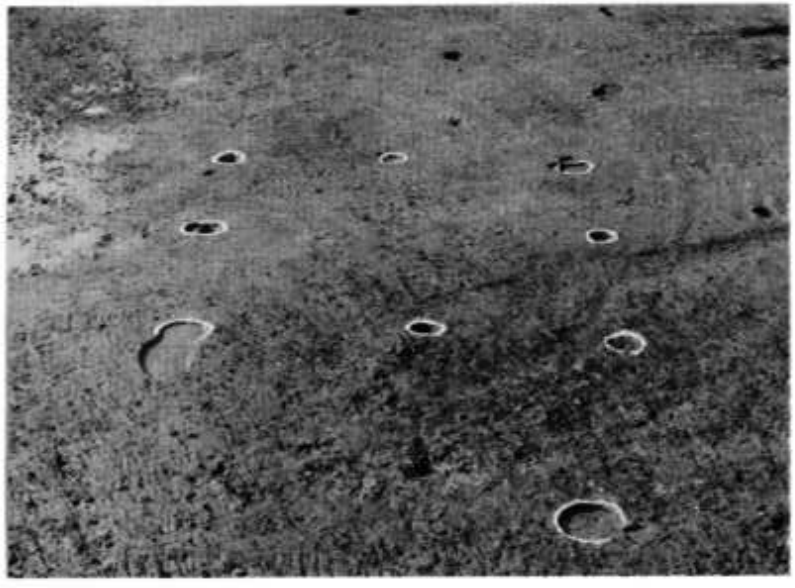
(3)



(1)



(4)



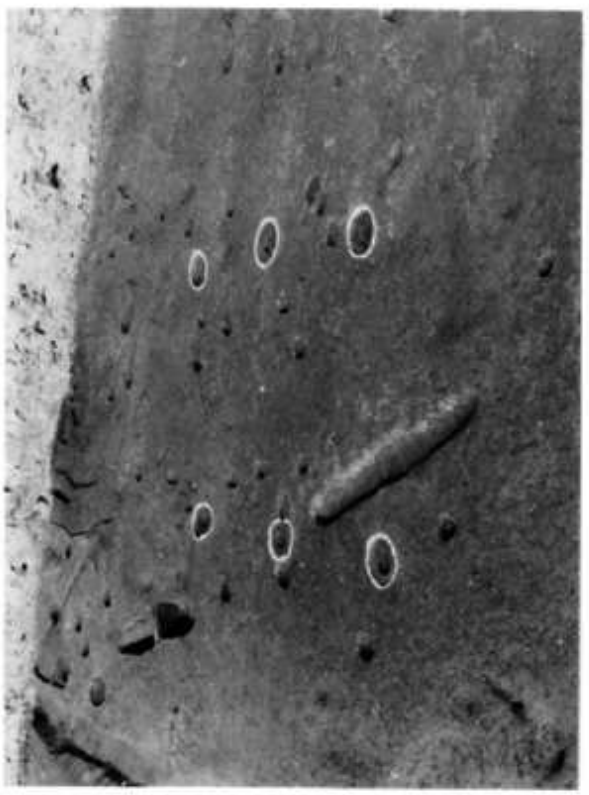
(2)

(1) SB07（東から） (2) SB08（東から） (3) SB09（東から） (4) SB10（西から）

PL. 15

(1) B区掘立柱建物検出状況

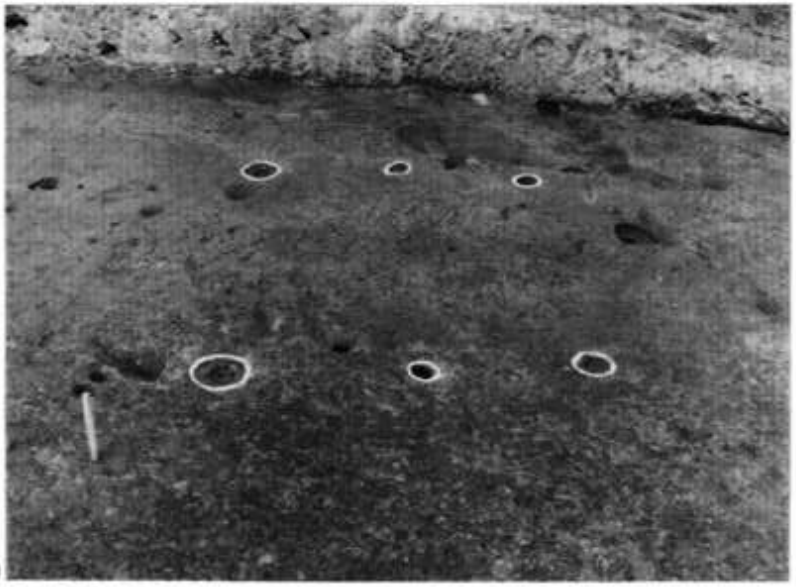
(2)



(3)

(2) SB12（東から） (3) SB13（南から）

(3)

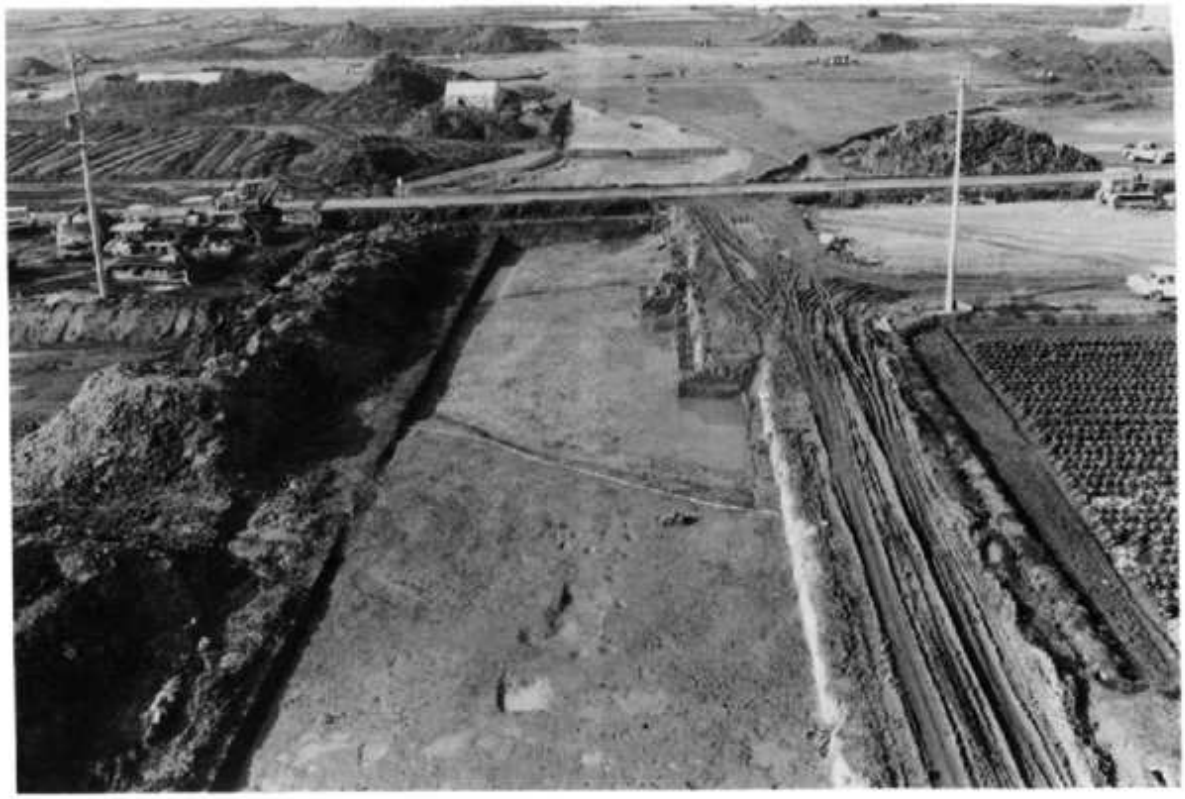


(1)

(4)

(2)

(1) SB14（南から） (2) SB15（南から） (3) SB03 Pit 3 柱根検出状況 (4) 同Pit 4 柱根検出状況



(1) SD02（東から）

(2)

(3)

(2) SD02内1号杭列（南から） (3) 同2号杭列（南から）

(1) SD03（東から）

(2) SD12（西から）

PL. 19

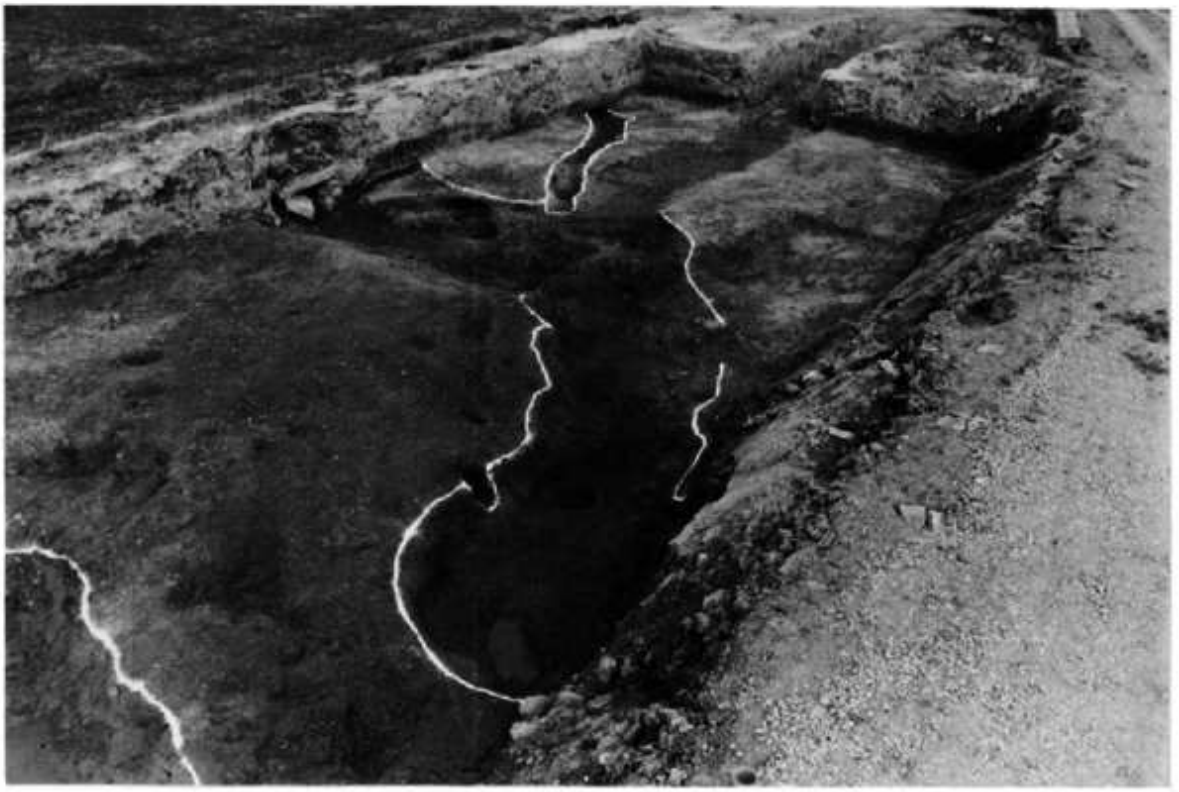
(1) SD05, 06, 07（南から）

(2)

(3)

(2) SD05遺物出土状況　(3) SD05遺物出土状況

(1) SD16, 17（北東から）



(2) SD18（南西から）

(3)

(1)

(4)

(2)

(1) SD04（南から） (2) SD08～11（南から） (3) SD14（南から） (4) SD15（南東から）

(1) SD02土層断面（東から）

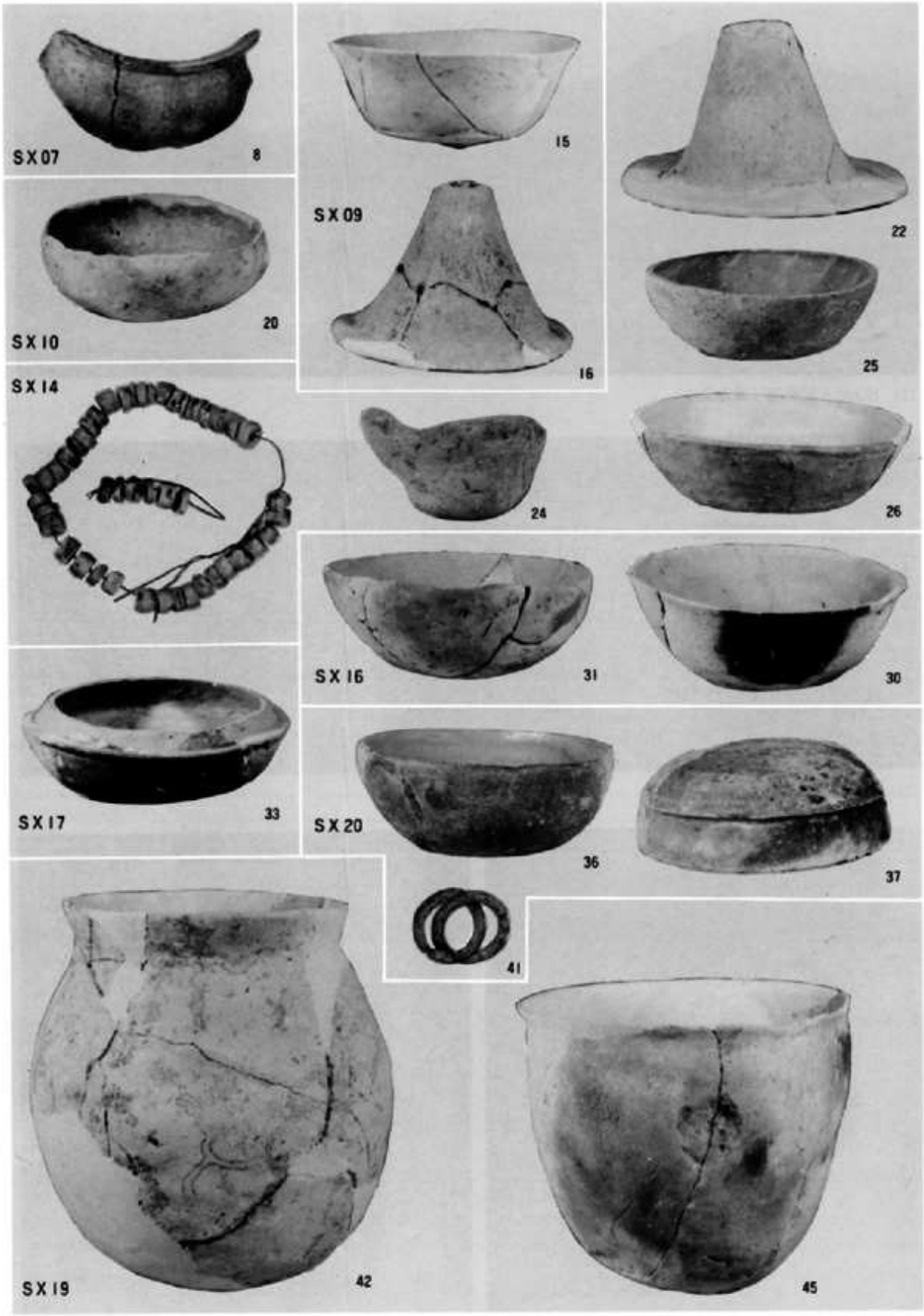
(2) SD16土層断面（北から）

(3)

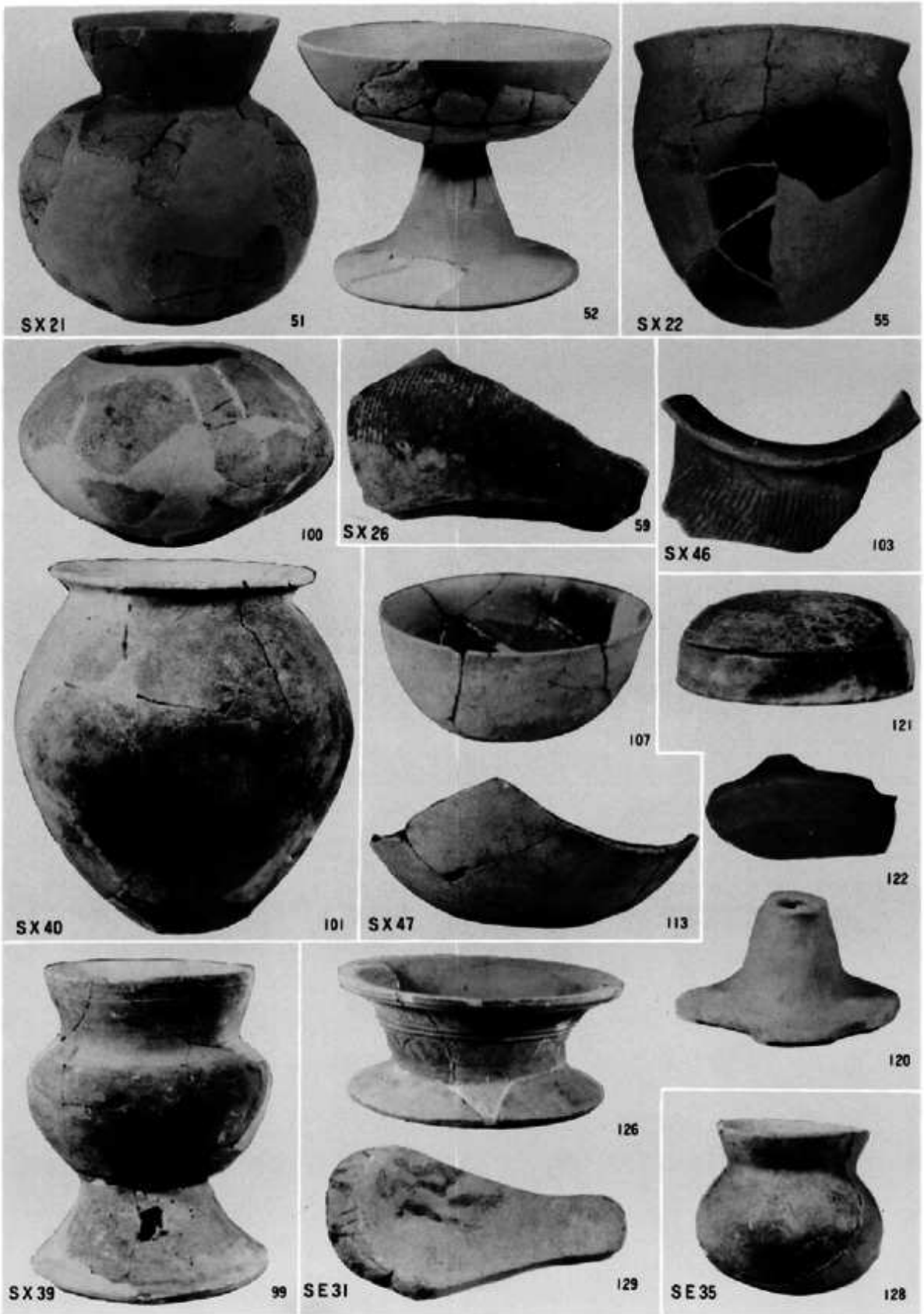
(4)

(3) SD02遺物出土状況　(4) SD07遺物出土状況

PL. 23



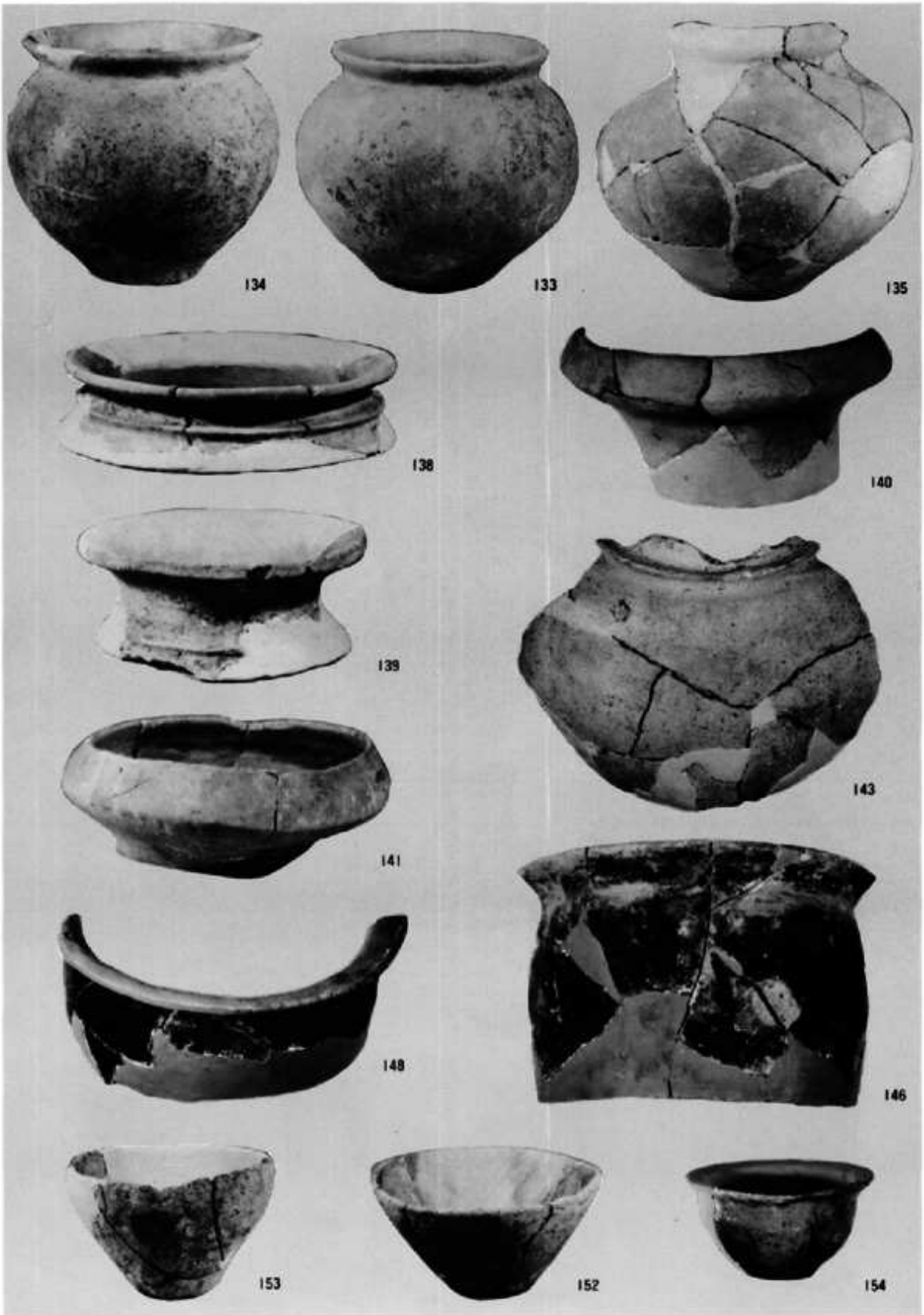
土壙出土遺物（約1/3）



土壙，井戸出土遺物（約1/3）

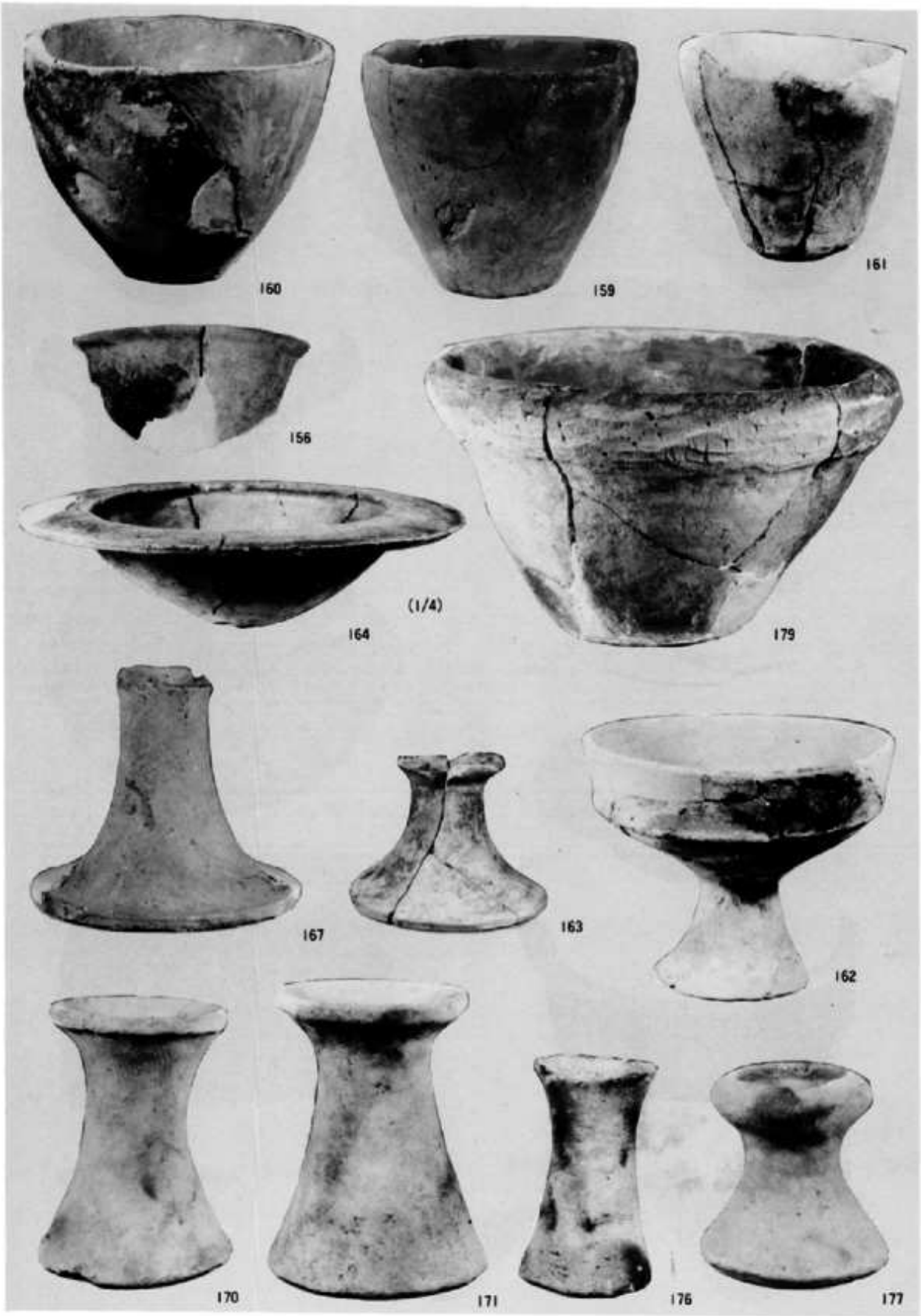
PL. 25

SX36　出土遺物（約1/3）

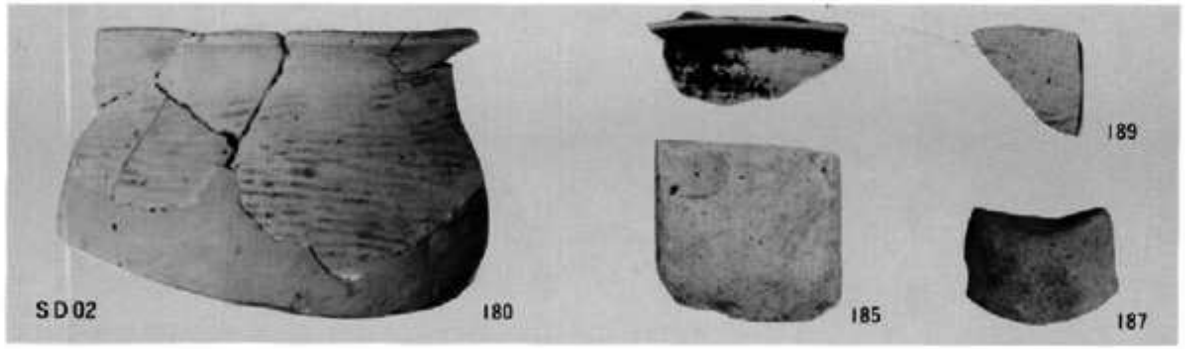


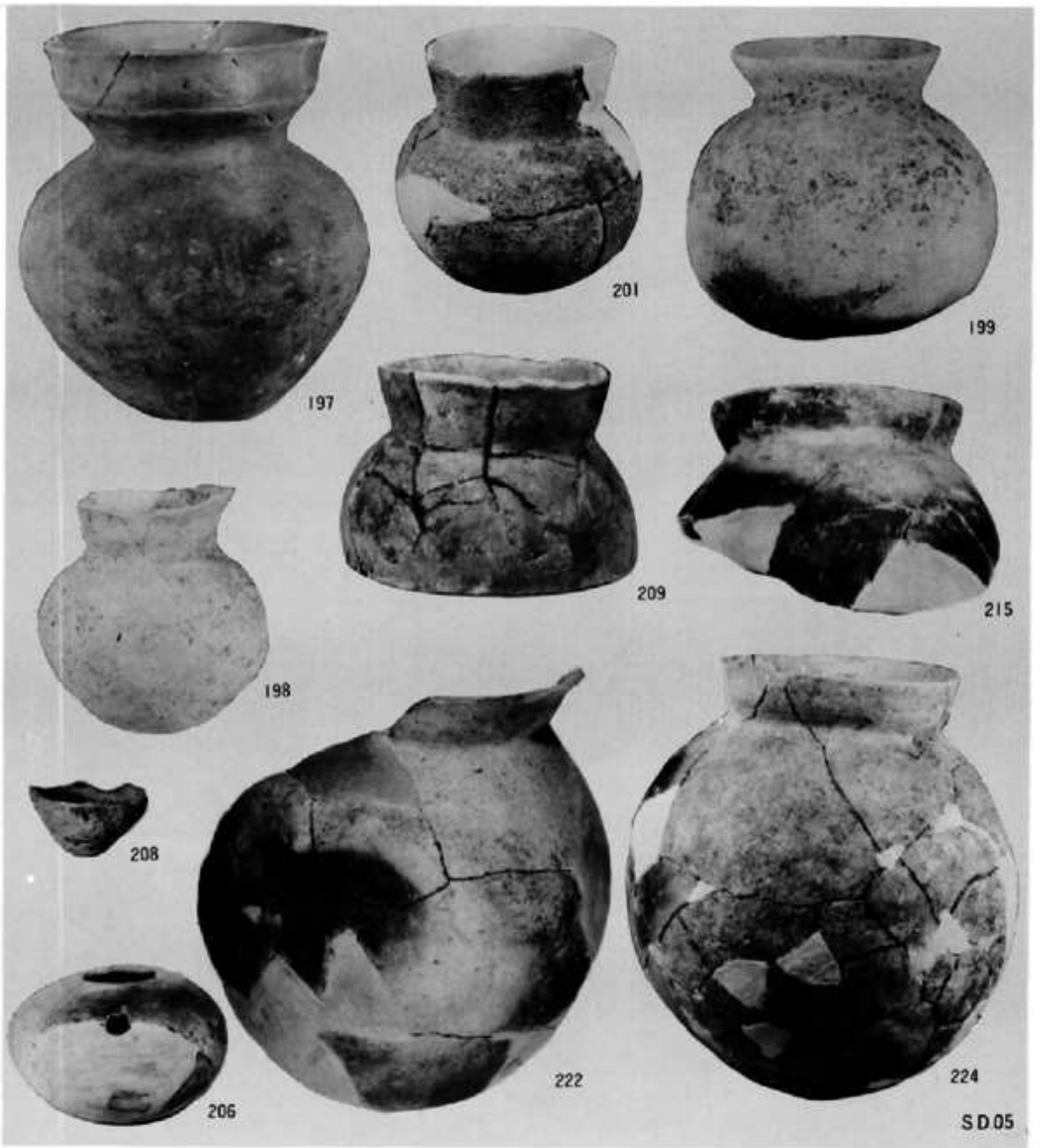
SD02　出土遺物 I（約1/3，1/4）

PL. 27



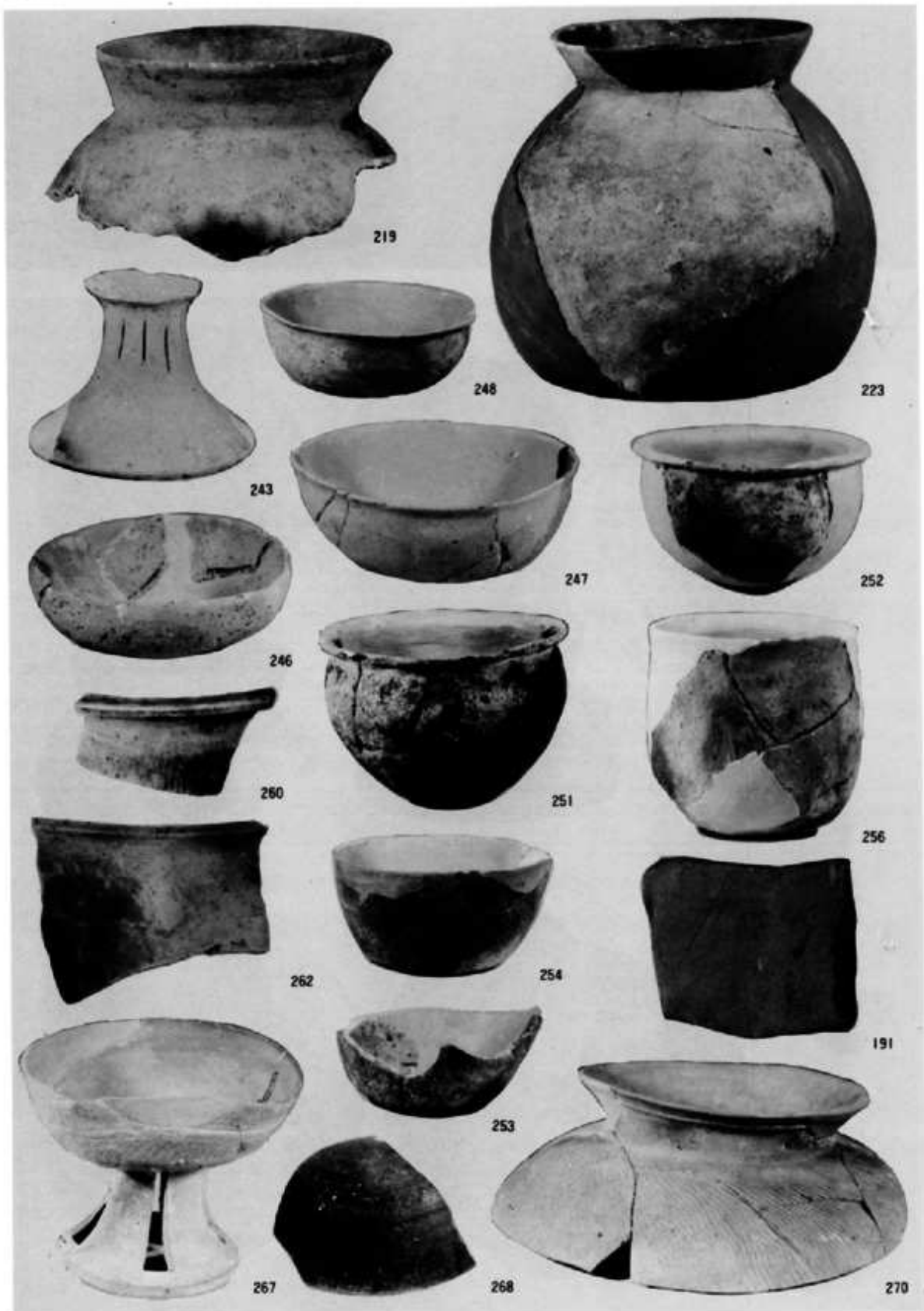
SD02出土遺物II（約1/3，1/4）



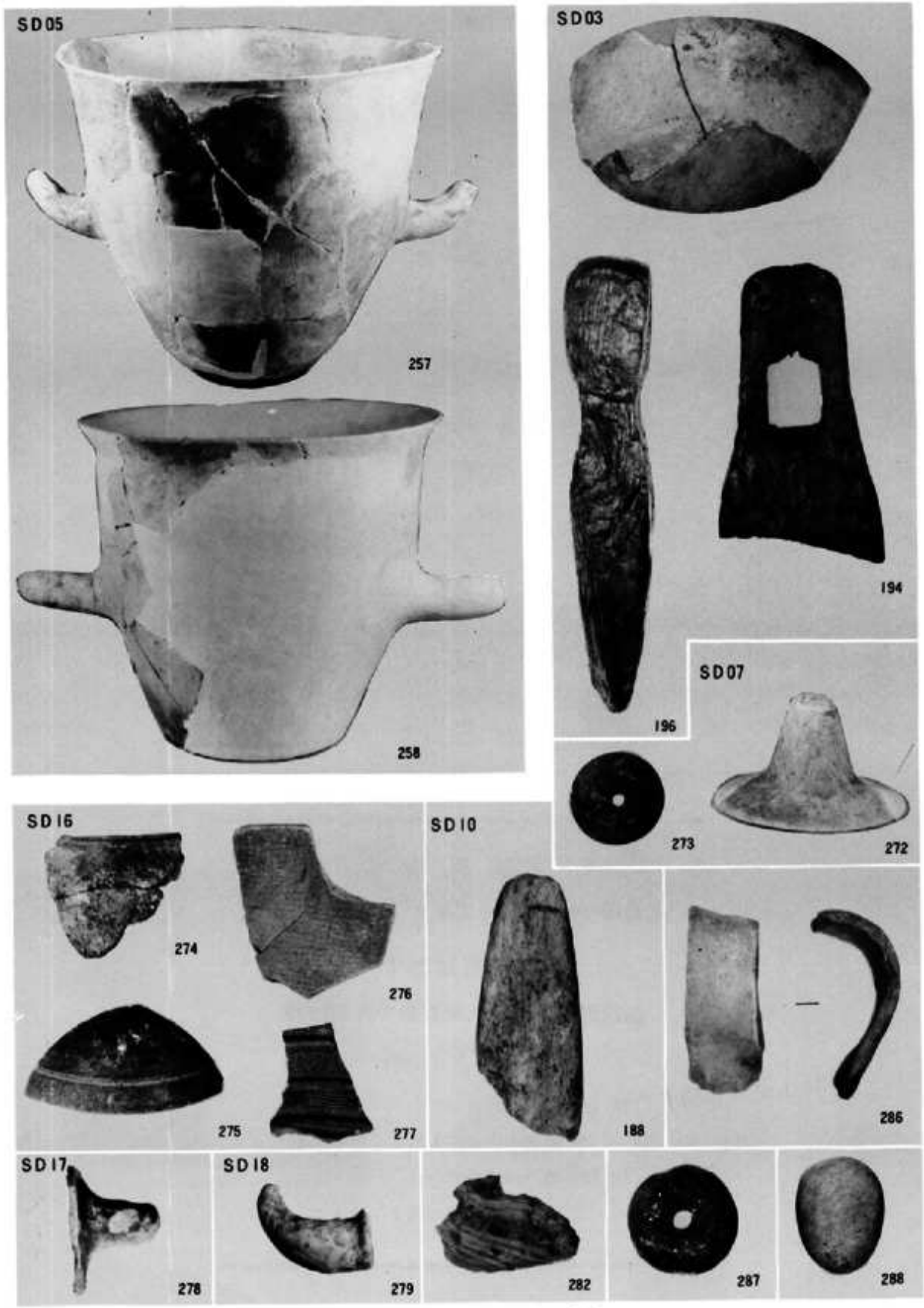


SD02, 05出土遺物 (約1/3, 1/4)

PL. 29



SD05 出土遺物 (約1/3, 1/4)



溝・包含層・表土出土遺物（約1/3, 1/5）

福　岡　市

市道田・飯盛線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ

吉武遺跡群Ⅰ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集

1986年3月31日発行

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区大神1丁目7－23

印刷　博巧印刷株式会社

福岡市南区那の川1丁目9の4